

---

**生徒は対象外です。**

東方博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生徒は対象外です。

### 【Nコード】

N5941I

### 【作者名】

東方博

### 【あらすじ】

教師である佐久間の女子生徒との禁断の恋……を不幸にも目撃してしまった渡辺涼。同僚として、そして教師として仕方なく黙認したが、それから間もなくして二人の関係が何者かに密告された。窮地に立たされた佐久間は二人の恋を守るために大嘘を吐く。私  
は渡辺先生と交際しています、と。

## S H R (その一) 寄り道はいけません

渡辺涼が二人を見たのは偶然以外の何物でもなかった。

生徒達が部活に勤しむ放課後。明日の授業プリントを作成しようとした折にふと、ピアノの鍵が気にかかったのだ。本日五限目の授業で使用したのは記憶に新しい。はてさてその後しっかりと鍵を掛けただろうか。

鑑賞室の鍵を閉めた以上、中にあるピアノを勝手に弾くことはできない。が、スタンウェイのピアノを放置する、というのは教師として いや、音楽を愛する者としては許し難いことだ。なんてっ たってスタンウェイ。数百万もする代物だ。

涼は鍵を片手に鑑賞室へと向かった。扉に鍵を差し込もうとして気付く。すでに開いている。

五限終了後に鍵はしっかりと閉めた。それは間違いない。今日ほどの部活も鑑賞室は使っていないはず。鑑賞室使用の届け出もなかった。

では、一体誰が。

涼が小首を傾げたその時だった。

「先生え……」

甘ったるい声。思わず扉の隙間から覗き込み、涼は我が目を疑った。

広い鑑賞室には二人がいた。ピアノの椅子に腰掛けるのは、世界史教師の佐久間秀夫。涼の二、三歳上の、まだ若い部類に入る教師だ。その膝の上に女子生徒が座り、佐久間の首に腕を伸ばしている。名前は知らないが、見覚えのある子だった。たぶん、二年生だろう。授業を受け持った気がする。

それにしてもこの甘ったるい雰囲気は何だ。ここは鑑賞室のはずだ。

「ねえ先生、何か弾いてよ」

薄い化粧をした女子生徒はピアノに触れた。

「勘弁してくれ」

佐久間は苦笑した。少年のように無防備な顔だった。

「リヨウ先生に弾いてもらいな」

「だって外国語の歌ばかり。つまらないだもん」

悪かったな。涼はこめかみをひくつかせた。残念ながら文部科学省の決めたことだ。文句ならばそちらへどうぞ。

「弾いてよ、あたしのために」

雰囲気に流される形で佐久間の手が、チヨークの粉が微かに残る指が鍵盤に伸びる。

そこまでだった。涼は扉を勢いよく開け放った。

「ちよつと待てあんたら」

女性とは思えない。ましてや教師の口調ではないのは重々承知。

しかし涼には耐えられなかった。

生徒と教師の禁断の恋。教室での逢い引き そんなものはどうでもよろしい。

「わ、渡辺リヨウ先生……」

鳩が豆鉄砲をくらったかのような二人の顔が、みるみるうちに青くなる。何かを言いかけた佐久間を涼は鋭く制した。

「二人とも離れなさい」

女子生徒の瞳が潤む。

「違うんです！ これは、その……っ」

「私は離れると言ったんですけど？」

「リヨウ先生、落ち着いてください。まずは話を」

立ち上がるうとした佐久間の手が鍵盤に触れる。もう限界だった。

「汚い手で」

涼は渾身の力とスピードを持って佐久間を突き飛ばした。女子生徒ごと。

「ピアノに触るなっ！」

椅子から転げ落ちた二人は、今度こそ目を丸くした。



## S H R (その二) 寄り道はいけません

とりあえず不届き者二人を床に正座させ、スタンウェイの無事を確認した。外傷はない。ただ、白い粉と手の脂で少々、汚されていた。清潔な布で丁寧に拭き取り、今度こそ鍵をしっかり閉める。ついでに椅子も拭いてから、涼は二人の前に立ちはだかった。

「どうということだか説明していただきましょうか、佐久間先生」

半眼で見下ろす。ちょうど佐久間の目の位置に涼の太ももがくるが、構いはしない。動きやすいスラックスを穿いている。

「先生は悪くありません！」

女子生徒 矢沢遙香が立ち上がった。

「私たち、真剣なんです。教師とか生徒とかなんて関係ないんです」

「あのね、矢沢さん。私が聞きたいのはそういう未成年の主張じゃなくて」

「だいたい、教師と生徒が恋愛して何がいけないんですか？ 誰にも迷惑かけてないじゃないですか」

思いつきり迷惑かけられているんですけど、私。

朱が差した頬をひっぱたきたい衝動を抑えて、涼は口を開いた。

「校長、理事長、PTA会長 私にどれを呼んでほしい？ 同じことをお三方の前で言いなさい」

突き放したように言えば、佐久間は血相を変えた。

「り……渡辺先生、このことはどうか内密に、していただけないでしょうか。矢沢はまだ高二ですし……」

その十六歳の女子高生と見境もなく恋愛した教師の言う台詞ではなかった。涼は深くため息をついた。身勝手カップルにも程がある。「お二人とも勘違いしているようだけど、私は教師が生徒と恋愛しようがこっさり煙草吸おうが個人の自由だと思ってる」

鑑賞室の床一面に敷かれた絨毯。毛足の長いそれを涼は軽く足で払った。

「ただね、世間様はそうは思っていない。未成年は煙草を吸ってはいけないし、教師と生徒の恋愛は望ましくないと考えている。それは、二人とも重々わかっているはずだ」

「でも好きなんです！」

遙香は眉をつり上げた。

「この恋を捨てることなんて出来ません」

好き。その二文字が全てを正当化する大義名分かのように振りかざす遙香に、涼は冷たい視線を送った。禁断の恋だの聞こえのいい言葉に酔っている女子高生に通じるとは思えなかったが。

「矢沢さん、君は佐久間先生との恋を大切にしたいわけだ」

「そうです。遊び半分じゃありません」

「愛を育むためにバレルる危険を冒してまで校内で二人きりになる必要があるのかな？ 私には矛盾しているように思えるよ。二人つきりになりたいのなら、地元を少し離れた駅で落ち合えばいい。相應しい場所が他にもあるだろう。少なくともここはカップルがいちやつく部屋でもなければ、このピアノは恋愛の小道具でもない」

押し黙った佐久間に厳しく言い放つ。

「佐久間先生、鑑賞室のスペアキーを勝手に使わないでください。

それは緊急用です。あなたたちの恋愛用ではありません」

「だって、どうしても会いたかったんです。教室で顔を合わせてもただの教師と生徒のふり……その辛さが先生にわかりますか？」

涙ぐみながら遙香は言う。悲壮感溢れさせているつもりなのだろうが全くお門違いの責めをしている。それを承知で二人は交際しているのではないのか。

「二人つきりになりたいからなる。スペアキーがあったから鑑賞室を使う。それは恋愛ごっこと言われても仕方ない。あなたたちがやっていることは、煙草が吸いたいから学校で吸って、バレたら『禁煙の苦しさがわかりますか』と訴えているようなものだ」

とうとう遙香は手で顔を覆った。これ見よがしに泣き出した教えずに、佐久間は戸惑いを隠せない模様。しかし涼を見る目には責め

の色がある。何もそこまで言わなくても。完全に自分のことを棚に上げた態度だ。

関わるのも阿呆らしくなった涼は鍵を上着のポケットに入れた。

「見なかったことにします。後はご自分で決めてください」

それなりに尊敬してたのになあ。落胆を振り切るように涼は鑑賞室を後にした。

学校では一番歳が近い先生だ。一年半前の新任時には何かと良くしてもらった。

(でもまあ、これで借りは返したってことで)

一人納得し、涼は忘れることにした。

## 一 限目(その一) 火のないところに煙はたちません

渡辺涼が音楽教師になったのは、音楽を通して生徒たちに自分を見つめ、自分を育ててほしかったから ではない。ましてや教師が天職だなんて思ったことなど一度もなかった。「自分が好きなもの」「職業」とできるのはよほど恵まれている人間だけだ。

しかし、やるからにはとことんやろう、と思うのも人情だ。世の中には音楽を通して少年少女の健やかな育成を促そうと熱意に溢れるものの、涙を吞んで諦めた人だっているかもしれない。

さすがに五時起きが毎日続くのは勘弁してほしいけど。

ほのかな煙草の匂いが鼻を掠めたのは、そんなことを考えながら涼が瞼をこすっていた時だった。振り向き遠ざかる背中に声をかける。

「煙草」

学ランが歩みを止めた。学生には不釣り合いな鋭い双眸がこちらを見据える。見覚えのある顔だ。二年生。この前も煙草の匂いをさせて堂々とやってきた。

「運動部かなんかで消臭剤借りなさい。校内は禁煙です」

むっつりと押し黙ったまま、男子学生は制服を鼻まで寄せた。愁眉をしかめる。どうやら自分ではわからないらしい。

「早めの証拠隠滅を推奨しておくよ」

ひらひら手を振って咎める意思はないことを涼は示した。

「渡辺先生」

やや低めの声が呼び止める。テノールだろうな、と涼は見当付けた。よく通る、悪くない声だ。

男子学生は躊躇いながらも口を開いた。

「おはようございます」

不機嫌ともとれるむっつり顔で挨拶。涼は内心首を捻った。

「……おはよう」

何故ここで挨拶？ 時間帯を考えれば間違つてはいないが、状況的には少々変だ。しかしそれを追及する間はなかった。

「リヨウ先生、校長が呼びびです」

英語教師の渡辺民子に呼ばれる。年は三十半ばだと聞いている。緩くカールのかかった髪。厚めにグロスを塗った唇には同性でさえ感じるほどの色気があった。同じ女性で同じ『渡辺』でこつも違つた。担当教科も学年も雰囲気も違う二人だが、苗字は全く同じ『渡辺』。紛らわしいのだ。

「ああ、はい。今行きます」

じゃ、と軽く片手を挙げて男子学生に別れを告げた。職員室へ向かう民子に早足で追い付く。朝の職員会議にはまだ早い。

「何かあつたんですか？」

「ゆゆしき事態です」

民子は声を潜めた。

「私も学年主任に聞いただけなのですが、佐久間先生が、二年三組の女子生徒と」

「早いな。一週間でバレたよ。」

もつとも、お互いしか見ていない二人だから例の一件のようなことを今まで何度もしていたのだらう。もはや同情の余地はない。完全に他人事だと思つて涼は欠伸を噛み殺した。

職員全員の前で事実関係の確認と説明が行われると思いきや、涼が通されたのは校長室だった。一年半前に採用された時以来かもしれない。革張りのソファも少ない賞状も相変わらずだ。違つのは机に座る校長の眉間に深い皺が寄っていることと、佐久間がいることだ。

「失礼いたします」

縋るような眼差しを送る佐久間を無視して、涼は校長に一礼した。

「何かご用で？」

白髪混じりの頭を困つたようにかいて、校長は紙を差し出してき

た。

『佐久間先生八、二年の女子と交際してイル』

脅迫状よろしく新聞の切り抜きを貼り合わせ、さらにコピーした手紙だ。差出人の名はない。

「これは、どこで」

「今朝机の上に置いてありました。教頭先生と学年主任の机にも同じものが置かれていたそうです」

「一体誰が、何のために」

「わかりません。それに今は犯人探しをする前に確かめなければならぬことがあります」

校長は深いため息をついた。

「渡辺リヨウ先生」

フルネームで呼ばれた時点で嫌な予感はしていた。校長は手紙を指差した。

「ここに書いてあることは本当ですか？」

ええ。真つ黒ですよ、校長。

頷く代わりに、違う言葉が口から飛び出した。

「何故私にそんなことを訊くのですか？」

「佐久間先生がおっしゃるには、あなたは彼と交際しているとか」  
数秒。涼はその意味を真剣に考えた。

交際：人と人が互いに付き合うこと。まじわり。

ちよつと待て。思わず隣に立つ佐久間に射抜かんばかりの視線をやったとて涼に何の非があるだろうか。こちらら彼氏イナイ歴が四年を迎えようとしている独身女だ。鑑賞室で密会したこともなければ、スタンウェイのピアノの前で抱きついたこともない。ましてや佐久間と交際した覚えなんか微塵もなかった。

（野郎……っ！）

齒軋りしたいのを涼はこらえた。よりもよって隠蔽のために他人を巻き込むなんて。身勝手恋愛にも限度がある。

こちらを見る佐久間の目は祈るようなもので、哀れみよりも情け

なさを誘った。

「お二人は交際しているんですね？」

確認する口調だ。ここで涼が洗いざらいぶちまけようものなら、佐久間だけでなく校長までもが卒倒しかねない。

涼は顔の筋力を総動員して表情を取り繕った。でなければ、激情に任せて喚きそうだった。

「……ええ、まあ……そう、ですね」

歯切れが悪いのは仕方ない。むしろ、ここまで理性的でいた自分を涼は誉めてやりたかった。

(その二) 嘔吐きは泥棒の始まりです

校長室から出るなり、佐久間は安堵の表情を浮かべた。

「ありがとうございます。リヨウセ……いっ！」

皆まででは言わせなかった。足の甲を思いつきり踏みつける。悲鳴こそ上げなかったものの佐久間の顔は盛大にひきつった。

感謝する前に詫びるべきだ。名誉毀損で訴えてやるうか。

声もなく痛みをこらえる佐久間を置いて職員室へ。既に教師達は校長から説明されていた。

すなわち、例の怪聞はデマである。何故ならば佐久間秀夫先生は渡辺涼先生と交際しているからだ。

「そうだったんですか？ 知りませんでした」

「意外ですね」

「まあ、歳近いですから」

「でも驚いたなあ」

(私もビツクリだよ)

涼は曖昧な笑みで野次馬教師達に対応する他なかった。職場に夢なんぞ抱いちゃいないが、さすがにこれはない。ありえなさ過ぎる。

「リヨウ先生」

不意に肩を叩かれた。民子だ。

「本当なんですか？」

冗談です、と言えたらどんなにいいだろう。涼は力無く頷いた。

「ええ、まあ……」

それでも授業はしつかりこなさなければならぬ。今となれば、佐久間と担当科目が違うのが幸いした。顔を見ようものならばっ倒したくなる。

あまりにも涼を馬鹿にした策だ。もし自分に彼氏がいたらどうしてくれるんだ。

(……いなくてよかった)

これから出来る可能性もゼロに等しくなったわけだが。あ、もと  
もとないうようなものか。考えてて虚しくなったので、涼は思考を停  
止した。

「せんせーい」

珍しく生徒が質問してきたのは二限目の時だった。授業中の質問  
は珍しい。涼は鍵盤に置いた手を離れた。

「何ですか？」

「佐久間先生と付き合っているってマジですか？」  
学校って、噂広がるの早いよね。

軽い鈍痛を頭に覚えつつも涼は答えた。

「ノーコメントです」

不満げな生徒の声。面白がっているのは明白だ。質問ラッシュに  
突入。

「どつちが告ったんですか？」

佐久間秀夫です。校長づてに聞きました。

「ぶっちゃけどころが好きなんですか？」

矢沢遙香に訊け。私もわかん。

言いたいのをこらえて涼はピアノを弾き始めた。

「じゃあ、ソプラノから」

演奏に入れば無駄口を叩く暇はない。渋々歌い出した女子生徒達  
に、涼は安堵した。が、それは甘かった。

涼の背筋に悪寒がはしった。恐る恐る不穏な視線を辿り、危うく  
伴奏を止めてしまいそうになった。

殺気に近い眼差しを注いでいたのは、矢沢遙香だった。よくよく  
考えてみれば、選択科目である音楽は三クラス合同だった。それは  
ともかく理不尽過ぎる。誰のせいでこんな目に逢っていると思っ  
ているんだ。

(私は被害者だあああっ！)

むしろ加害者は奴らだ。しかし訴えようにも、何もかもが遅かっ  
た。

(その三) 相互理解は大切です

拷問に近い授業を終えるなり、遙香は詰め寄ってきた。表面上は休み時間に質問をしようとする生徒を装っているが、目が笑っていない。涼は後ずさり、スタンウェイの反対側に回り込んだ。

最後の生徒が鑑賞室の扉を閉めるなり、辛うじて張り付いていた遙香の笑顔が消えた。

「どうということですか？」

「待て落ち着こう、話せばわかる」

諸手をあげて涼は無条件降伏した。恋に我を忘れた娘ほど恐ろしいものはない。控え目だが施された化粧がまた凄みを引き立てる。

「その様子だと、佐久間先生からの説明は無し、ってことですか」

「何がですか」

「バレそうになった」

遙香の目が大きく見開かれ なかった。不機嫌そうに「何が？」と訊ねてくる始末。涼は額に手を当てた。察してくれ、頼むから。

「校長含む一部の先生宛てに怪文書が送られてきた。佐久間先生と生徒が交際している、って」

ようやく理解したのか遙香の顔が強張った。

「でも……どうして？」

「どうしても、こうしても」

涼は深くため息をついた。所構わず愛を育んでいれば当然だ。

「担当科目の違う私でも知っていることを考えれば、誰かが気付いたとて不思議じゃない」

「だからって、どうして先生が付き合っていることになるんですか？」

「文句なら佐久間先生に言ってください。私だって迷惑しています。君との恋を隠すために私の名前を勝手に出したんだ」

苛立ちのままに言葉を重ねる。

「君がどうしても嫌なら、後で校長に『さっきのは嘘です』と言ってもいい。ただし、その時は何故そんな嘘をついたのかを説明しなくちゃいけない。うまい言い訳を考えてくれる？」

「嫌です。佐久間先生があなたと交際しているなんて」  
遙香は即答した。

「嫌に決まっているじゃないですか。一限でその話を聞いた時、私がどんな気持ちだったか、先生にわかりますか」

自分の心情を察しろと言うくせに、こちらの心情は察してくれない。面倒な娘だ。勝手に彼女にされた気持がお前にわかるか。

「でもうまい言い訳も思いつきません」

「二人で知恵を絞ってくれ。なるべく早く」

他人事のように涼は投げた。実際他人事だった。

「一応弁明しておくけど、私は佐久間先生が同僚で、君が私の教え子じゃなかったら、絶対にこんな面倒な役は引き受けなかった」

説得が功を奏したのか、遙香の目から剣呑さが薄れた。

「先生は、好きな人はいないんですか？」

「よくもそんな嘘が吐けますね。」

軽蔑混じりの眼差しを、涼は鼻で笑った。本当に、恩知らずな生徒だ。涼に嘘を吐かせる自分に非があるとは微塵も考えてはいない。

「好きな人はいるよ」

教え子に対抗する涼も涼で幼いのかもしれないが。

「プランドロドミンコ。三大テノールの一人だ。彼の歌を聴いて私は音楽を志した。今でも彼の声に首つたけ。今度生まれ変わるなら、テノールがいいな」

わけがわからない。眉をしかめる遙香に内心満足しながら、涼は笑って付け足した。

「でも残念ながら、彼はホモらしい」

**(その三) 相互理解は大切です(後書き)**

チャイコフスキーも同じく。

(その四) 人の名前はちゃんと覚えましょう

その後も好奇心に満ちた視線を注がれ続けて、長い長一日が終わった。安息の地である音楽科準備室の椅子に腰掛け、背もたれにぐったりとのけぞる。一週間もすれば興味も薄れるだろう。世の中には教師の恋愛事情なんかよりも大切なことはたくさんある。

(……一週間)

土曜日がいつになく遠く思えた。ともすれば落ちこむ気分をなんとかしようと専用ティーカップに紅茶を注ぐ。この学校に就任時、歓迎の意をこめて音楽科教師達からいただいたカップで、なんでも有名ブランドのウエツジウッドらしい。真偽は定かではない。調べようとも思わなかった。

アールグレイの香りを堪能している折に、控え目なノック。「どーぞ」と気のない返事をする、意外な人物が顔を出した。

「失礼します」

今朝の生徒だ。煙草の匂いはもうしない。

「フアブリーズしたようだね」

相も変わらずむっつり顔。年頃の男子高校生なんて皆そんなものだ。そう思えば硬く引き結んだ唇にも可愛げがある。彫りが深く、野性的な容貌だが、どこことなく少年の名残があった。一度も染めたことがないであろう黒髪が少々日に焼けた顔に映える。顔はよく知っている。忘れるにはもつたいないほど整っている。だが、肝心要の名前が思い出せなかった。

「鑑賞室に忘れ物をしたんですが、鍵を貸していただけませんか？」

「煙草？」

「違います」

「ややむきになって否定する男子生徒。」

「俺、煙草なんて吸いません」

「制服が燻製になるほど煙草の側にはいたわけだ。ゲーセンか、カ

ラオケか、それともヘビースモーカーのお友達か。可能性はいろいろあるけど、煙草の匂いをさせて学校に来たら教師が下す判断はたった一つ 『未成年らしからぬ行動を取った』」

涼はカップをソーサーに置いた。

「煙草が大好きで匂いを四六時中纏うことに生きがいを感じているのなら止めはしないが、誤解されるのは覚悟しておくべきだね」

「勝手に解釈する側に問題があるとは思わないんですか」

彼の眼差しは鋭く、それでいて真摯だった。

「なら、放課後人気のない教室で生徒と教師が二人つきりているのを、付き合っていると判断してもなんら不思議じゃない。悪いのは紛らわしいことをしている二人、ということになりますよね」

動悸が速くなる。たとえを持ち出すのならもう少し別のものにしてほしかった。そんなホットな話題はやめてくれ。風刺が効き過ぎだ。

「そうなり、ますね。たぶん」

つられて丁寧語で答えてしまう始末。探るようはこちらを見る彼の視線が痛かった。細身だが引き締まった身体が一步近づくと、準備室の扉が開くのはほぼ同時だった。

「おや珍しい。久しぶりだね、鬼島君」

音楽科主任が彼の顔を見るなり言った。彼も彼で、さきほどまでの不穏な気配を消し、わずかに目を見開いた。驚いたのは涼も同じだ。

「お知り合いですか？」

「ええ、選択科目で音楽の授業を。彼が一年の時です」

音楽科主任は抱えていた楽譜の山を専用机の上に置いた。

「今は渡辺先生の受け持ちでは？ 二年一組の鬼島天下君ですよ」

あ、なるほど。二限目にいたような気がする。矢沢遙香に気が取られていてそれどころではなかったが。

「彼がどうかしましたか？」

「いいえ、別に何も」

涼は鬼島天下に目をやり、硬直した。ただでさえ切れ長の目が、剣呑さと鋭さを増して恐ろしいまになっっている。

「……失礼しました」

底冷えするような声音で告げると天下は準備室から出て行った。

「普通科でも成績優秀生徒だそうです。いい声してますよね」

呑気な音楽科主任の言葉に、涼はぎこちなく相槌を打った。たしかに、若々しく張りのある声をしている。あと数年もすれば重みと深みを増して、さらに魅力的な声になるだろう。将来が楽しみな生徒ではある。

だが、その声が紡ぐのはアリアでもゴスペルでもなく、恐怖と不安を煽る言葉なのだ。

結局彼は何をしに来たのだろうか。涼は紅茶を一口飲んだ。忘れ物とか言っていたが、もういいのだろうか。

（忘れ物が目的ではなかったとしたら？）

カップを持った涼の脳裏に最悪な可能性がよぎる。

涼に会うことが目的だったとすれば、その理由として考えられるのは佐久間との件だ。校長らに怪文を送りつけた犯人は未だ判明していない。そして涼と佐久間の交際が真っ赤な嘘であることを知っているのもまた、犯人だ。

(その五) 完璧は、なるものではなく目指すものです

鬼島天下。

家族構成は父と母、弟が二人。

住所を確認すると自転車を通える距離だった。羨ましい。こつちは朝から満員電車で押しつぶされながらも通勤しているというのにそれはともかく、入学時からのデータを見て涼はため息をついた。未知の生物に遭遇した感動に似たようなものがこみ上げてくる。

鬼島天下は一年次の成績がオール五だったのだ。

芸術選択の音楽は勿論、五教科、保健体育、総合学習まで全部。コメントを読む限り教師の覚えも良いらしい。煙草については全く触れられていない。化け物か、こいつは。

品性良好、成績優秀、文武両道。おまけにあの容姿だ。神様、ちよつと臍肩じゃないですかと問いかけたくなる恵まれっぷりだ。優等生の鏡みたいな生徒と言えるだろう。その優等生が何故。

悪いのは紛らわしいことをしている二人、ということになりますよね。

とかなんとか恐ろしいことをのたまうのか。空耳か。優等生なりの冗談か。全く笑えない。センスの欄があればゼロと記入してやるものを。

「リョウ先生」

遠慮がちに佐久間が肩を叩いてきた。

「あまり長時間ご覧になるのは……個人情報ですし」

時間切れ。住所と電話番号だけ覚えて涼はパソコンから離れた。佐久間が普通科担当で良かったと心から思う。必要以上に顔を合わせることもないし、こうして情報も引き出せる。

「しかし、どうして鬼島を？」

まさか職員室で言うわけにはいかずに、涼は言葉を濁した。

「音楽で担当しております。少々取っつきにくい生徒なので、何かわかればと思ったのですが」

「彼が、ですか？」

心底驚いたように佐久間は訊き返した。

「信じられませんね。授業にも積極的に参加しますし、クラスでも中心的存在ですよ」

人望も厚いわけか。涼は眉をひそめた。

「欠点とか、苦手なものとかは無いのですか？」

佐久間は顎に手を当てて考える仕草をした。数拍後、眉間にしわを寄せて「ない、ですね」と呟く。

「一つも？」

「少なくとも僕は思いつきません」

「完全無欠な優等生？」

「ええ、完璧です」

驚きを通り越して呆れた。機械だってそこまで完璧にはなれない。ますます涼はわからなくなった。煙草の匂いをさせていたのは誰だ。音楽準備室に来て睨みつけてきたのは誰だ。双子の記述はなかったはず。

「それよりもリョウ先生」

心なしか大きな声で佐久間は言う。

「今日はもう仕事は終わりですか？」

周囲の視線が集まるのを涼はひしひしと感じた。何もそこまで印象付けなくとも。いささかうんざりしながらも肯定した。

「どうぞでしょう、久しぶりに二人で食事でも」

お前と一緒に食事するのは初めてだ。勝手に過去を捏造するな。罵倒の言葉が浮かんだが、涼としてもこれからのことを話す必要があった。

「だが、ここだけはハッキリ言っておかねばならない。  
先生の奢りなら」

涼は努めて笑顔で言っ  
てやった。

(その六) 食事は味より相手が肝心です。

てつきり居酒屋にでも行くのかと思いきや、佐久間が選んだのは表参道のレストランだった。メニューに料金が書かれていない時点で場所を間違えたのではないかと不安に駆られる。巡回するソムリエを見た瞬間には席を立てて逃げ出したくなった。

学生時代、小洒落たレストランでピアノ演奏のアルバイトをしたことがある。が、そこにはワインカーヴはなかったし、料金はしっかり書いてあった。焼きたてパンの食べ放題が売りの庶民派レストラン。それが涼の限界だった。

しかし、涼を一番悩ませたのは高級過ぎる店の雰囲気でも味でもなかった。隣に座る矢沢遙香の存在だ。

「なんで先生がここにいらっしゃるんですか？」

こっちの台詞です。反論の言葉はワインと一緒に喉の奥に流し込んだ。涼も場違いだと自覚しているが制服姿の女子高生はもったこの場にそぐわない。

「これからのことを相談に乗ってもらうためだよ」

向かいに座る佐久間が宥めた。遙香は唇を尖らせながらもそれ以上は言つてこなかった。態度は十分に不満の意を示していたが。この状況に関しては涼も同感だ。

佐久間に見れば、当事者を全員揃えて相談したいだけなのだろうが。涼にしてみれば二人のデートに付き合わされているようなものだ。

「それで、お二人はこれからどうするつもりなのかな」

「どうすると言われても……」

佐久間は途方に暮れた顔で口ごもった。

「リヨウ先生には申し訳ないですが、ほとぼりが冷めるまでは、その、僕と付き合っているふりをしていただけかないかと」

高級レストランでの食事は随分高かついたものだ。

「人前で濃厚な接吻でもすれば皆さん納得しますかね？」

「な……っ、嫌よ！ 冗談じゃない！」

血相を変えて遙香が席を立つ。周囲の視線に気づいた佐久間が慌てて座らせて、取り繕った。落ち着いたのを確認してから非難を多分に含んで囁いた。

「ふざけている場合じゃないですよ、先生」

「十分ふざけた真似をあなた達はしています。それに加担する私も同じくらい馬鹿げてますけどね」

テーブルの上に肘を置く。行儀の悪さはこの際気にしない。

「佐久間先生、一つ忘れてませんか？ いくら他の先生方を上手く騙せたとしても、絶対に騙せない人がいます」

間抜け面をする二人に涼は突きつけてやった。

「校長達にチクった奴です。そいつがどこの誰だか、心当たりは？」

「あるわけないじゃないですか」

「じゃあ、そいつが今後お二人の交際事実をバラしてまわろうとしても、止めようがないわけだ」

最初は容疑者の一人として鬼島天下の名を挙げようと思っていたが、やめておいた。確証がない。おまけにこの二人に話してもこじれるだけで無駄だ。

「付き合っているのか、と訊ねられたら否定はしません。しかし私にそれ以上を求めないでください。試練だと思ってお二人で乗り越えてください」

食事と会話の終わりを示すように、涼は立ち上がった。つられるように佐久間と遙香の二人も席を立つ。会計は勿論佐久間が支払った。伝票を確認せずカードを渡したところを見ると、金持ちなのだろう。涼の中にわずかながら残っていた同情心が失せた。

店を出るなり遙香は佐久間の腕に自分のそれを絡めた。

「送ってくれるんでしょう？」

甘くねだる。あっさりと佐久間は応じてタクシーを呼んだ。

「では先生、また明日」

窓から手を振る遙香。仕草は無邪気だが、その笑顔は優越感に満ちたものだった。女から交際の彼氏を奪い取った親友が、こんな表情を浮かべていたのを涼は思い出した。

一人表参道に取り残された涼は時間を確認した。午後の九時過ぎ。電車がなくなる前に帰ろう。帰って全てを忘れようと心に決めた。

高級レストランの味なんて、もう口には残っていないかった。

（その六）食事は味より相手が肝心です。（後書き）

これで一章は終了です。お付き合いくださり、ありがとうございます。

今更なのですが「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が欠片もなく、恋愛どころか殺伐とした展開になっております。

二章からは善処されるかと……たぶん。おそらく。きっと。

## 二限目(その一)人は見かけにはよりません

授業終了五分前。四十人近くいる生徒の中で意識を保っているのは半数。他は睡魔に負けて夢の中。舟を漕いでいるのはまだマシな方だ。机に突っ伏して熟睡している輩もいる。辛うじて画面を眺めている生徒達も一様につまらなさそうな顔をしていた。

(……やってしまった)

いきなり『魔笛』はまづかったようだ。涼は己の選択を呪った。かの天才音楽家モーツァルトが生涯最後に作ったオペラ。夜の女王のアリアが有名なので、クラシックにたいして興味のない生徒でも多少は楽しめると思ったのだが。

いかんせん、話が荒唐無稽だった。

おまけにドイツ語だ。音楽科の生徒でもあるまいし、何を歌っているのか理解できないのも当然。字幕の文字を読むのにだって集中力を要する。

「せめて『カルメン』にしとけばよかった」

いきなり自分の趣味に走るのはどうかと思っただけだが、それがいけなかったようだ。次は『カルメン』にしよう。わかりやすいあらすじも作成して配ろう。教科書二ページだけでは明らかに説明不足だ。

涼はプレイヤーを止めた。消していた部屋の電気も付ける。心持ち強めに鍵盤を叩いて、生徒たちを現実世界へ引き戻した。

「来週は新しい曲やります。試験で歌ってもらってもいいかもしれないので、そのつもりで」

何人かの生徒が返事をする。それで授業終了。まばらに退室しようとする生徒たちの中から目的の生徒を見つけ出して声をかけた。

「鬼島君」

小脇にノートをはさんだ背中が振り返る。次々と生徒が脱落していく中で一人、挑むように画面を睨みつけていた目が、今は怪訝の

色を濃くしていた。

「忘れ物の件でちよつといいですか？」

ちよいちよいと教卓まで手招きする。意外に素直なのか鬼島天下は口をつぐんだままやってきた。

「あれから探してみたらいくつか発掘できました。この中にありませんかね？」

一ヶ月前の日付が入った科学のプリント。鉛筆。万年筆のキャップ。紙袋から一つ一つを取り出して教卓の上に置く。能面に近い天下が目を見開くほど、次々と「忘れ物」は登場した。水色のハンカチ。「第十七回全国高等学校オーケストラフェスティバル」と印字された記念シャーペン。楽譜の二十九ページ目。埃を被っているものもあればゴミとしか思えないようなものもあった。

「どれ？」

山積みになつた忘れ物を前に天下は呆然。

「……本当に、忘れ物なんかしたと思つたんですか？」

「やっぱり口実だつたんだ」

真面目に探して損をした。涼は肩を竦めた。

「でもまあ、生徒の嘘に付き合うのも教師の仕事だ」

「嫌味ですか」

「別に君を責めてはいないよ。忘れ物があると聞いた身としては、一通り探さなきゃいけない。少なくとも、教師として格好がつく程度には努力をするべきだ」

実際は半分以上、意地だつたが。とことん付き合つてやって、天下がどこまで嘘をつき続けられるか喧嘩を売つたようなものだ。そして軍配は涼に上がった。

「で、ここまで頑張つたわけだし、努力賞ということで教えてくれないかな。私に何の用だつたんだ」

沈黙すること数秒。天下は一つ息を吐くと、鑑賞室の机に腰を下ろした。

「机の上に座るな」

「忘れ物をしたのは本当ですよ。一昨日ではなくて二週間ほど前で  
すけど」

「聞こえなかったのかな。私は、机の上に座るな、って……待った。  
二週間前？」

返答の代わりに天下は片頬を歪めて笑った。今までの優等生イメ  
ージが一変。それでいて、すらりと伸びた足を組む格好は非常に様  
になっていた。

「あんたが二人をど突き倒した時はせいせいした。よっぽどそのピ  
アノ気に入ってたんだな」

(その二) だから見かけで判断してはいけません

「当然だ。スタンウェイだぞ？ 洗ってもいない手で触るなんて」

「言いかけて涼は気付いた。認めているようなものではないか。」

「つまり、一部始終を見た、と」

「何を」

「誰かにそのことを言ったり喋ったり書いたり伝えたりはした？」

「だから、何をだよ」

わかっているくせに。意地悪く訊ねてくるその楽しげな顔に、拳を叩きこんでやりたいのを堪えて、涼は慎重に言葉を選んだ。

「だから……佐久間先生が、その……生徒と、二人きりでいたこととか」

「安心しろよ。佐久間と矢沢が付き合ってることなんて誰にも言っていない」

「やっぱり知っているじゃないか。」

「まあ、見たものは仕方がない。確かに目撃したのは不運だが、ここは黒猫に目の前を横切られたと思っただけのことをお勧めする。大丈夫。私も正直関わってしまったことを一日十回は後悔してるけど、君ならまだ傷は浅い」

涼の言葉を反復するように天下は数回首を捻った。

「何言ってるんだかよくわかんねえけど、要するに『忘れる』ってことか？」

「直訳するとそうなる」

「嫌だっけ言ったら？」

三白眼が細まる。面白がっているのは明白だ。

「あれを青春のページに入れるなんてお世辞にも趣味がいいとは言えない。せめて自分の恋愛体験を入れたらどうだ？」

文武両道。容姿端麗。彼なら引く手数多だ。優等生面に隠された

不良の一面も年頃の女子には魅力として映るだろう。

「そう言うあんたも趣味悪いよな。佐久間のどこがいいんだか」

「人聞きの悪いことを言うな。仮に奴が秋川雅史並の歌唱力を持って目の前で愛の賛歌を熱唱しようとも、私はCDに録音されたブラシド＝ドミンゴの美声を選ぶ」

我ながら意味不明な例え方だ。しかしどういわけか鬼島天下は目を輝かせた。

「つまり嫌いつてことか」

「嫌悪を抱くほど付き合っちゃいない。できれば今後に関わりたくない」

「でも、交際宣言はしたんだろ？」

「奴が校長にな。私も驚いたよ。まあ一応礼は受け取ったから、ほとぼりが冷めるまでは彼女のふりをしてやるさ」

涼はほんの少し憐れみを込めて告げた。

「だから君は脅す相手を間違えている」

天下の口元の笑みが消えた。凶星にせよ、そうでないにせよ、触れるべき話題ではなかったのだろう。が、涼は構わず続けた。

「二人の間がバラされようと私はたいして困らない。情報を盾に交渉したいんだつたら、校長でも教頭でも私でもなく、真つ先に佐久間先生の所に行くべきだ。それが一番効果的だし手間もない」

機嫌を著しく損ねてしまったらしい。天下の眉間に皺が寄った。

「あんたまさか、俺がそんなことのために準備室まで来たと思ってるのかよ」

「好意的に解釈しても応援してくれてるようには見えないね」

「当たり前だろ。俺は、」

言いかけて天下は口をつぐんだ。言葉の代わりに溜息を吐き出す。……もういい。面倒くせえ」

拗ねたようにそっぽを向いた横顔は年相応に幼かった。

(その三) 暴力はいけません

思春期の少年は扱い辛い。ところで十七は青年だろうか、それも少年だろうか。

少年と青年の狭間を彷徨う学生は、少しだけ首をこちらに曲げて、やけに真剣な顔で確認してきた。

「佐久間とは何でもないんだな？」

「あるように見せかけなきやいけないけどね」

「真面目に答える。彼女のふりだからってまさか、本当にやるわけじゃないんだろ？」

「何を」

「セツ」

涼は手にしていた教科書で天下の頭を叩いた。音楽の教科書の薄さを忌々しく思う。大したダメージを受けなかった天下は恨めしげな視線をよこしてきた。

「暴力教師」

「当然の措置だ。そもそも『付き合う』身体を重ねる』という考えに問題がある」

身体を重ねるって方がいやらしいよな、と天下は全く反省していない様子で呟いた。

「先生は手を繋ぐところから始めるタイプか」

「いや、まずは一緒に演奏会に行く。全てはそこからだ」

「でも結局は身体を重ねるところまで行きつくんだろ。コウノトリが運んでくるわけでもあるめえし、子孫繁栄のために必要なことだ」

「人類の未来を心配する暇があったら教室に戻れ。次の授業、もうすぐ始まるよ」

壁に設置された時計を指差す。五分の余裕があったはずの時間は既になくなっていった。天下は肩を竦めると机から立ち上がった。

「あんた、やつぱり面白い奴だよ」

「君は理解に苦しむ生徒だ」

天下は二、三回目を瞬いた。

「そうか？」

「成績オール五。教師の覚えも良く、顔もそれほど悪くはない優等生。かと思えば、口も態度も悪い。上手く化けているものだと感心してしまうよ」

「先生も意外と失礼なことを言うよな。どっちも俺だぜ？」

似非優等生は酷薄そうな笑みを浮かべた。

「また来ますね、先生」

口調が優等生モードに戻った。さっきまでの彼を知る涼にしてみれば胡散臭いだけだ。

「授業以外で来るな。そして今日話したことは忘れる」

「もちろん。教師と生徒が付き合っているなんて誰にも言いませんから」

「忘れる」

「では、また」

「まず人の話に耳を」

絶妙のタイミングで授業開始のチャイム。が、慌てる様子もなく天下は出て行った。

なんてこつたい。涼は天井を仰いだ。間接的とはいえ、弱みを握られた。よりにもよって外面だけはいい普通科きつての優等生に。怪文を送りつけた犯人すら特定できていないというのに。いっそもう何もかも洗いざらいぶちまけてしまった方が楽ではないか。そもそも、自分は無関係であつて、巻き込まれただけであつて、迷惑を被っている被害者なのであつて、なのになんか疲れる目に逢っているのだろう。

チャイムが鳴り終わっても涼は本気で悩み続けた。

#### (その四) 話し合いで解決しましょう

涼の危惧をよそに日々は穏やかに過ぎた。怪文が送られてくることがなければ、教師と生徒が付き合っている噂が流れることもない。そして、恋に盲目カップルが自分たちの立場をわきまえることもなかった。

が、多少なりとも変化はある。

一つは音楽科教師でも新任にあたる涼に新たなる雑用が押し付けられたことだ。器楽室で楽譜整理。千を超す膨大な楽譜を演奏形態と使用楽器で分別し、作曲家順に並べ直し、目録を作成するという気が遠くなるような作業だ。しかし、涼はクラスを受け持つていないので、これは致し方ないと自分を納得させた。

問題は別にあった。

「センサー、もう昼休みですよ」

涼は背中にかかる声に構わず楽譜の分別を続けた。ヨハン・パツヘルベル作曲弦楽四重奏『カノン』。いくらポピュラーな曲とはいえコピーし過ぎだ。全パート合わせて三十枚以上楽譜が存在している。ファイルに入れて「量産（大量コピー）禁止」と記入しておいた。

「まだそれやっているんですか？ 昨日も同じ曲発見してましたよね」

ああ、そうだよ。どこその整理能力に欠けた奴が『カノン』の楽譜ファイルを三つも作っていたおかげで。全部まとめ直した。

八つ当たりだとわかっているのに、涼は黙って『カノン』のファイルを一つにした。大して長い曲でもないのに随分と分厚くなったものだ。

「とろくせえな」

ぼそりと呟かれた言葉は、涼の耳にしっかり届いていた。明確な怒りを込めて来訪者を睨みつける。

「生徒の無断入室は禁止だと昨日も一昨日も言ったと思うんだけど」「じゃあ鍵締めておけよ、って俺は昨日も一昨日も言ったぜ？」

涼しい顔で鬼島天下は言っただけだ。

こいつが曲者だったのだ。本性を現してからというものの、天下はどういうわけか涼に構うようになった。廊下ですれ違う時でも授業中でも。性質が悪いのは、傍から見たら普通科きつての優等生が教師と談笑しているようにしか思えないことだ。鬼島天下の猫かぶり完璧だった。

そして、涼が空き時間に器楽室で一人楽譜整理に負われていることを知ってから、好都合とばかりに足繁く通ってくるようになった。

「……内鍵が壊れたんだよ」

「直せば？」

「外から鍵がかけられるのなら問題ないってさ」

大アリだ。この侵入者をどうにかしてくれ、とは言えなかった。あえなく涼の案は却下され、予算は新しいホルンの購入と弦楽器のメンテナンス費に充てられることになった。

「貧乏学科は辛いよな。ただでさえ音楽ってのはやたら金がかかるのに」

「そつだ。貧困が諸悪の根源だ。わかったら安定した収入が得られる職に就けるように教室に戻って勉強しろ」

「だから今は昼休みだつて」

断りもなくコントラバス用椅子に座る天下。完全に居座るつもりだ。

(その五) 話すだけで解決するとは限りません

「最近の高校生は暇なのか」

「後先考えずに教師と恋愛するくらいは暇なんじゃねえ？」

「困ったものだ」

「全くだな」

天下は腕を組み頷いた。その様子だと『困ったもの』の中に自分が含まれている事には気づいていないらしい。本当に困ったものだ。  
「先生」

思っていたより近くに低音の声。振り返れば天下が『カノン』の楽譜を手に持っていた。

「楽譜、落ちてますよ」

いきなり改まった口調に戸惑いながらも涼は差し出された楽譜を受け取る。反射的に礼を口にしようとしたその折、音楽準備室に通じる扉が開いた。

「渡辺先生、フォーレの楽譜まだありますか？」

声楽担当の百瀬恵理が顔を出す。涼の六つ上の先輩にあたる音楽教師だ。その差を感じさせないのは、気さくな恵理の性格と、小柄な身体と幼げな顔のせいだろう。

恵理は天下の姿を認めると小首をかしげた。

「通りかかったもので、少し手伝おうかと」

よくもまあ、そんな言い訳を臆面もなく言えるものだ。半ば感心しながらも涼は追隨するように小さく頷いた。

「あら、悪いわね」

「どうせ暇ですから、お気遣いなく」

笑みさえ浮かべつつ如才なく応じる。そんな天下に違和感を抱くこともなく、恵理は頬を緩めた。

「よかったですね、先生。優しい生徒に好かれて」

優しい？ 好かれてる？ 誰が？

どれ一つも訊き返せなかった。恐ろしい答えが返ってきてそう。

「フォーレのレクイエムですよ？ 先日お渡ししたので全部です」

「じゃあコピーするしかないか」

「必要以上にしないでくださいね」

恵理は了承のつもりかひらひらと手を振って準備室に引っ込む。

扉の前から気配が消えるのを確認してから、涼は皮肉を込めて呟いた。

「似非優等生お疲れ様」

「いえいえ。たやすいことですよ」

天下は悪びれることもなく口端をつり上げた。

「なんなら、先生にも教えて差し上げましょうか」

「役に立つかな」

「佐久間先生と付き合っているように見せかけたいんですよ。役に立つと思いますよ」

やたらと食い下がる天下を涼は改めて見た。自分より少し高い位置に彼の頭がある。

成績優秀生徒と聞くと眼鏡をかけたがり勉君を想像してしまうのだが、天下は健康そうだった。手足がバランスよく長くて、細くはあったがしっかり筋肉がついていた。ざんばらの黒髪といい、少し日に焼けた肌といい、いかにも運動部に向いている。

そんな生徒が、貴重な昼休みを用もない器楽室で過ごす意味を涼ははかりかねた。

(その六) ややくしくなることもあります

鬼島天下の行動の意味を涼なりに見出したのは、五限の授業が終わりに迫った頃だった。

ないと思われていたフォーレのレクイエム。その楽譜が新たに発掘されたのだ。しかも大量に。調べてみれば四年前の音楽祭で歌ったらしい。人数を考えずに大量コピーされ、結局使わなかったのだらう。鉛筆の入っていないものばかりだった。

パート別に分けて急ぎ鑑賞室へ。たしか合唱の授業は六限だったはず。涼が器楽室の扉を背中を押そうとしたら、通りすがりの佐久間が開けてくれた。

「これはどうも」

「先生っ！」

甲高い声が乱入。なんとというタイミング。体操着姿の遙香が外の渡り廊下からこちらを睨みつけていた。女子は今テニスをしているらしい。ラケットを持ったまま、ついでに靴も履いたまま廊下に入り込む。

「どうしたんだ、矢沢」

気圧され気味の佐久間。お前それでも教師か。

「どうしたもこうしたも、二人で何やっているんですか！」

「何って、僕はただ……」

助けを求めるようにこちらを見る。涼は溜息と共に言葉を吐き出した。

「付き合っているふり」

「誰に見せるためですか。二人つきりになる必要がどこにあるんです？」

「まずは靴を脱げ。土足で校舎に上がるな」

さすがに楽譜を抱えているのも辛くなった。一旦どこかに置こうと視線を走らせていたら、急に重みが消えた。佐久間が気を利かせ

て持ったのだ。しかし、この状況では賢い行動とは言えなかった。遙香の目がさらに険しくなった。

「先生、どういうことですか？」

「矢沢さん、外に戻って靴を脱ぎなさい」

「説明してください」

「四度目はないと思え。私は、土足で上がるなど言っている」

唇を噛みしめて遙香は渡り廊下に戻った。ラケットを置いて靴を脱いでいる。その隙に涼は佐久間の手から楽譜を奪還した。

「後はご自分でどうぞ」

「え、ちよ、待つてください。リョウ先生っ」

佐久間の悲鳴を背に角を曲がる。その際にふと渡り廊下を振り向けば、そこには再び校舎に上がり込む遙香の姿と、それを数歩離れた場所から見つめる天下の姿があった。普通科の三クラスは体育も合同だ。通りかかったとてなんら不思議ではない。

しかし天下は何故、途方に暮れたような、複雑な顔しているのだろうか。涼は首をかしげ、唐突に思い至った。

(あ……なるほど)

今時珍しくもないことだ。三角関係なんて。

天下が遙香と佐久間の関係に気づいたのも、元は彼女を見ていたからなのだろう。思えば彼は涼にやたらと佐久間のことを訊いていた。気になって当然だ。恋敵なのだから。

そう考えれば、情報収集のためにわざわざ器楽室に通う熱心さにも可愛げがある。恋愛に協力してやる義理はないが、邪険に扱うこともない。むしろ遙香が同学年の男子生徒に興味を持てば、問題は一気に解決するのではないだろうか。

ありとあらゆる打算の結果、放課後再び器楽室に訪れた天下を、涼はおざなりにだが歓迎した。

「よう、毎日毎日御苦労さん」

天下は軽く目を見開いた。

「あ、ああ……あんたも、お疲れ様」

よほど意外だったのか口調が素に戻っている。鞆を窓の傍に置いて、手元を覗き込んだ。

「何かあったんですか？」

涼の手には楽譜と目録しかないとを確認して天下は訊ねてきた。さすがにあからさま過ぎたか。涼はひとときわ分厚い交響曲の袋を取り出した。

「解決策を見出した」

オーケストラの楽譜は量が半端ではない。一つ一つパートを確認して記入していく。

「そもそも、教師と生徒の恋愛が諸悪の根源だ。この不毛な状態を乗り切るためには、そこを改善するのが一番である私は思う」

天下の眉間に皺が寄る。やけに深刻な顔で考え込んだかと思えば、重々しく口を開いた。

「まさか、先生が佐久間先生と本当に交際するんですか？」

(その七) それでも話すことをやめてはいけません

「何故そういう発想が生まれる。逆だ。矢沢が別の男に乗り換えればいい。幸いなことにここは学校だ。同年代の男子がよりどりみどりでだ。私から見ても優良物件なのもいる」

「例えば誰ですか？」

思わぬ質問に、涼は楽譜を整理する手を止めた。

「誰？」

「先生が、優良物件だと思う生徒」

涼は目を見張った。そう訊ねる天下の顔が五限目に見たようなものだったからだ。傲慢さは鳴りを潜め、不安を帯びている。

「例えば」

目の前にいるこいつとか。顔はいいし、誰もが認める優等生だ。

涼からしてみれば大人を小馬鹿にした生意気生徒だが、同年代から見れば頼りがいのある男の子だ。激しい二面性も魅力として映るだろう。

「例えば？」

「まあ、君も悪くないと思う」

「……俺？」

呆けたように天下は自身を指差した。みるみる内に頬が紅潮する。

「本当ですか？」

「君に世辞を言ってどうする」

「先生から見て、俺が？ 佐久間よりも？」

「仮にも教師を呼び捨てにするな。生徒に手を出す教師に比べれば誰でも少しはマシだ」

言いつつ、涼は己の失態を呪った。天下をたきつけて、もし遙香が彼を振ったりなどしたら、非常に後味が悪くなる。まさかこんなに喜ぶとは思わなかったのだ。

(青春だな)

若さゆえの特権だ。両肩を掴まれながら涼はそう思った。

「でも早まるなよ。世の中タイムリングが肝心だ。いきなりの告白はマズい。だから、まずは器楽室にいる時間を全て二年三組に行く時間に変えるのが得策だ。少しづつ、その、親しくしていけばいいじゃないのか？ そんなに焦ることはない」

精一杯のアドバイス。が、天下は肩を落とした。さっきまでの高揚はどこへやら、眉を寄せて不快を露わにする。

「あなた、なんか勘違いしてないか？」

「……矢沢が好きなんじゃないのか」

「なんでそうなるんだよ」

天下は心底呆れた顔をした。

「あいつは佐久間とデキてんだろ。どこがいいのか、全然理解できねえけどな。佐久間も矢沢も」

酷い言いようだ。照れ隠しとは思えないくらい。

「つーかあいつら隠す気あんのか？ 今日も五限の終わりに二人で会ってるしよ。外から丸見えだし、節操のねえ奴らだ」

思いの他天下の口は悪かった。これが普通科が誇る優等生か。涼は疲労感を覚え、しかしどこかで安心している自分に気づいた。

「じゃあ」

どうしてあんな顔をした。言いかけて涼は口をつぐんだ。

「こんな所で油を売っていないで、真実の恋でも愛でも探しに行け」  
「先生も一緒にどうですか？」

「楽譜整理があるんで遠慮します」

作業を再開。天下が訪れるようになってから、明らかにペースが落ちている。遅れを取り戻すように速度を上げた。

「センサー」

天下はコントラバス用の椅子に腰かける。既にそこは彼の指定席と化していた。

「センサーは、どうしていつもネクタイ締めているんですか？」

「就職祝いに大量にもらったからです」

「スカートは穿かないんですか？」

「正直に言おう。伝線する度にストッキングを買いより楽だと思っただ。歩きやすいし」

さすがにこういう作業中はネクタイが邪魔になる。涼は首元を緩めた。

「先生は」

打って変わってやや遠慮がちな声。

「教師と生徒の恋愛には反対なんですか？」

(その八) でないと、手遅れになります。

「賛成はできない」

涼は即答した。自分の中でその答えは変わらないと確信している。「恋愛は個人の自由だ。でも公私はわけるべきだと思う。その点、教師と生徒は最悪だ。試験の際、成績を付ける際、普段の授業の時間でさえ、可能な限り公平でなければならぬのが教師だ。教師は一人の生徒を特別扱いすることは許されないし、特別扱いしていると思われてもいけない。それができないのなら辞めるしかない」

変わるはずがなかった。教師になって一年経過しようとして

「犯罪じゃあるまいし、絶対に駄目ではないんだ。でも、ものすごく面倒なんだよ。本人も周囲も。その面倒さを全部背負って最後まで通し切れるのなら構わない。できない奴がほとんどなのに、絶対に駄目なことではないから火遊びに走る馬鹿は後を絶たないんだ」

「そんな軽い気持ちで好きになる奴ばかりじゃないと思いますけど」

「人の気持ちの重さや軽さなんて私にはわからない。どれだけ本人たちが真剣でも周囲は理解できないし、理解してやる筋合もない。個人的なことだからな」

そう、今でも涼は理解できなかった。佐久間も遙香も。そして、父も母も。

「でも私は思うよ。本当に好きなら、たかだか数年どうして待ってやれないんだってね」

そんなことが言えるのは、きっとまともに恋愛をしていないからだろう。矢沢遙香の言っていたことは正解だった。彼女のふりなんて馬鹿げた真似ができるのは、恋愛に対して冷めた感情を持っているからだ。

「卒業してしまえば後ろ指さされることはない。心おきなく会うことだってできる。今でなくてはならない必要なんかはないはずだ。どうしてわざわざ自分と、相手にリスクを負わせようとするのがが理

解できない」

「好きだからこそ、待ち切れないことだってあります」

「二、三年待ったら消えてしまうような想いなんて、そもそも恋と呼ぶに値しない」

天下は顔を強張らせて足を組んだ。

「要するに、生徒は対象外ですか」

「対象にするには相応以上の覚悟が必要だと言っている」

佐久間と遙香にその覚悟があるとは思えないが。

「……あなたは、立派な先生だよ」

褒め言葉にしては、天下は憮然としていた。その後「でも」が続くのだろう。後先を考え、体面を重んじ、危ない橋は絶対に渡らない。立派な先生。

でも、人間味には欠けている。

「そろそろ時間だな」

キリのいいところで涼は作業を中断した。

「もう？ まだ四時だぜ」

「用事があるんだよ」

「……佐久間先生とデートですか」

揶揄にしては苦々しさを帯びた、責めるような口調。涼はネクタイを締め直した。

「試験問題だったらサンカクだな。半分は合ってるけど、それじゃあマルはやれない」

「半分？」

「デートは正解。でも行くのは佐久間先生じゃなくて百瀬先生だ。

チケットが手に入ってね。これから管弦楽部の三役を引き連れてコンサートへ行くんだ」

「先生も行くんですか？」

「最初は、そのつもりだった」

涼は苦笑した。

「残念ながらチケットは四枚しかない。醜い争いが勃発する前に潔

く引いたよ。どうしても聴きたい演目でもなかったし、合唱部の指導も代行しなきゃならない」

後半はやせ我慢だ。聴きたかった。サンサーンスの『交響曲第三番』。しかし、三役の一人を除け者にするわけにもいかず、先輩である百瀬を差し置いて引率するわけにもいかなかった。泣く泣く留守番役を引き受けたのだ。

「ほれ、閉めるぞ」

「先生って嘔吐くの下手ですね」

何やら考え込んでいた天下は顔を上げた。仕方ない、と言わんばかりに少し困ったように微笑み、涼の胸元を指差した。

「似合ってますよ、そのネクタイ」

当然だ。今朝まで演奏会に行けると思っていたんだ。多少、服に気合が入っていたとて誰が責められよう。

言い訳がましい反論は喉の奥に消えた。涼を見つめる天下の眼差しが、かつてないほど優しく穏やかで、それでいて熱っぽかったからだ。微かに潤んだ黒目。例えるなら、埋み火が熾っているような涼は自分の手がじつとりと汗ばむのを感じた。何故だ。天下の顔が正視できない。何故だ。おまけに心拍数が跳ね上がっているような気がする。何故だ。一体なんだというのだ。

わからないことだらけだが、一つだけ確かなことがある。

彼の眼は間違っても、生徒が教師を見るものではない。

（その八）でない、手遅れになります。（後書き）

これで二章は終了です。恋愛要素の要素の要素がようやく入ってきたかと思えます。現在、当小説における恋愛偏差値は小学生レベルとなっております。十五禁はどこへ行ったのでしょうか。

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。執筆の糧です。

三章では教師と生徒の（お馬鹿な）攻防が繰り広げられる予定です。なんとか恋愛偏差値を中学生レベルにまで上げたい所存です。

### 三限目(その一) 性格はなかなか治りません

「あんななんか大っ嫌い」

頭上から声が降ってきて、涼は顔を上げた。晴天の昼下がり。食事をしてつつ会話に花を咲かせる大学生達とは少し離れたベンチで、焼きそばパンをかじっていた時だった。

目の前に仁王立ちする女性。育ちのいい猫のような顔をしていた。水色のワンピースをこれまた上品に着こなしている点から、お嬢様であることは間違いない。涼からすれば音大に通う学生は皆お嬢様だ。

「断ったんだってね？ カルメン。ありがとう。おかげで私が代役を引き受けることになったわ」

礼しては声に棘があった。納得がいかないのだろう。自分がおこばれに預かったという事実には。涼は咀嚼していたパンを嚥下した。

「どういたしまして」

大きな目を吊り上げる様にはそれなりの迫力がある。平手か、それとも引つ掻いてくるのか、涼は身構えた。内心では馬鹿正直に第二候補であることを本人に教えた教授を罵倒する。いかにもプライドの高そうな顔をしているじゃないか。少しは気を使え。

「本当、腹が立つ」

彼女は腕を組んだ。

「一人で何でもできますって顔ですまして、クールに格好つけて、あんな何が楽しくて音楽やってんの？ 自分の世界に閉じこもって悦に浸ってんじゃないわよ。気色悪い」

面と向かってそこまで言われたのは初めてだ。それも、初対面の人に。呆然としていたら、彼女は鞆からペットボトルを取り出し、蓋を外すと中身をぶっかけてきた。次に鞆から出たのは真白のタオル。それを涼に投げつける。

「ほら、少しは怒りなさいよ。片手間だなんて冗談じゃない。必死

こいてやりなさいよ」

言うだけ言って、彼女は背を向けた。そして二度と振り返らなかつた。

華奢な背中が図書館に消えるまで、涼はしばし呆気にとられていた。ふと我に返り、膝元に転がったそれをつまみあげる。スポーツタオル。これで拭けということか。わけがわからない。だいたい、大して濡れてはいない。おまけにミネラルウォーターだ。まさか涼にかけるためだけに買ってきたのだろうか。

ありがたくスポーツタオルで顔を拭う。ところでこれ、返すべきなのだろうか。また厄介なことになりそうだと予感しつつも、返さなくてはと心のどこかで思った。

向けられるものが負の感情であれ、何であれ、ぶつけられると応じてしまう。押されたら押し返す。引かれたら引き返す。単純だと自分でも思うが、性は変えられない。昔も今も、無視して流す、ということが涼にはできなかった。

だから、鬼島天下のように曖昧なものを向けられることが、一番対応に困るのだ。

(その二) 変わろうと努力することは大切です

授業はおおむね順調だった。

発声の練習もつつがなく終了。本日のメインであるオペラ鑑賞も涼の下準備が起きた。前回の失敗から学んで『カルメン』を導入。手作りの概要。そしてダイジェストよろしく説明を交えて主要シーンのみをピックアップして観せる。初心者向けの作戦が功を奏して生徒の気を引いた。食い付きがまるで違う。ありがとう、ビゼー。ありがとう、カルメン。おめでとう、私。

次は『タンホイザー』でもやろうか、と内心上機嫌で教室全体に目をやって、後悔した。窓際の後ろから二番目に座る学生と目が合ったからだ。鍵盤に置いた手が一瞬硬直。すぐさま視線をそらして涼はピアノを鳴らした。

「来週は器楽をやります。教科書とリコーダーを忘れないように」「忘れたらどうなりますか？」

笑い混じりの質問。涼は律儀にも答えてやった。

「皆の前でぴーぴー歌ってもらいます」

授業時間もすっかり守って解散。満足の出来だ。涼は余った資料を揃えた。つまり、油断していた。

「先生」

耳に心地よい低音。顔を上げれば、授業中に一人涼を睨み続けていた男子生徒がいた。鬼島天下だ。一度意識してしまえば、どうしても今まで気づかなかったのか、不思議にさえ思えてくる。天下の眼差しは始終涼に注がれていたのだ。鋭い双眸が、睨んでいるかのよくな錯覚を与えた。整い過ぎた顔というのも考えものである。

「何か用ですか、鬼島君」

「いや、別に、そうじゃなくて」

天下の歯切れが悪い。涼は平静を装ったつもりだったが、違和感を覚えてしまったようだ。戸惑っている。この隙を逃さず涼はたた

み掛けた。

「次の授業がありますから、質問ならまた今度にしてください」

天下はいつも通り仏頂面だ。が、 magari なりにも数日彼を観察してきた涼にはわかった。納得していないが、明確に何が変なのかも口にできない。そもそも、天下が自分の想いに気づいているのかすら怪しかった。

違和感なんて、極力目を合わせないようにしているのだから当然だ。天下の困惑を知りつつも、涼は話を振るような真似はしなかった。

天下が自覚していないのならそれでいい。自分の勘違いならなおいい。とにかく、これ以上変な方向に話が進む前に引き返せ。今ならまだ間に合う。健全な学校生活をエンジョイしてくれ。頼むから良心の痛みを堪えて、涼は天下を追い出した。思えば、ずいぶんと絆されてしまったものだ。自分の甘さを涼は自覚した。「他人にはとことん冷たいが、一度でも関わると情がわいて流される」と涼を評した友人の言葉を思い出す。

あれは確か、馬鹿正直にスポーツタオルを洗って返しに行った時だっただろうか。彼女はただでさえ大きな瞳を見開いて、次に腹を抱えて笑った。それはもう豪快に。しばらく経って落ち着いてから彼女は言った。

「あんたって、他人に流されないつもりで結局流されるタイプね」その言葉に反論するすべを、いまだに涼は持たなかった。佐久間や遙香のことを軽蔑しつつも結局手を差し伸べてしまうのも、己の性分が全く改善されていない証拠だ。

(だが、それも昨日までのこと)

四限目終了後、涼は器楽室に立てこもった。廊下に面した扉の前にイスを置き、さらに紐で縛って固定する。中庭に面した窓も全て鍵を閉める。これで難攻不落の牙城が完成。涼は胸を撫で下ろした。どんなに厳しく律しても、どれだけ他人を拒絶しても、流されてしまいそうになる。そんな自分が恐ろしかった。母親と同じ間違い

を犯しそうで、怖かった。

「自分の世界に閉じこもるな」と友人は言った。しかし無理な相談だ。自分で責任が取れる範囲でしか涼は動けない。

二十三年経っても、涼は自分の居場所から一歩も出られずにいた。

(その三)でも大概は失敗します

遠慮のないノック音が聞こえたのは、涼が楽譜整理に取り掛かろうとネクタイを緩めた瞬間だった。廊下に面した扉、その小窓越しに天下のむつつり顔が見えた。いつも通り入ろうとしたら開けられなくてノックしたらしい。

オイなんて閉めてんだよ、開けやがれ。目を見ただけで彼が何を訴えているのか、わかってしまう自分に涼は絶望しかけた。

いや、諦めるにはまだ早い。今ならまだ間に合うはずだ。決意を固めて黒の太ペンを手に取る。コピーし損じの裏紙に『作業中につき、立ち入り禁止』と書いて、セロテープで小窓に貼ってやった。やるからには徹底的にやる。甘ったるい情はバツサリと切り捨てて涼は楽譜整理に取り掛かった。

再びノック音。

乱暴ではないが、執拗に。何度も。しばし迷ったが、涼はついさつき貼ったばかりの紙を剥がした。

『何を今更』

ルーズリーフのノートに、やや癖があるものの綺麗な字でそう書いてあった。涼は再びペンを取った。『いいから帰りなさい』と掲げる。小窓の向こうで天下は口元をへの字にしてボールペンで何やら綴った。

『理由を二十文字以内で述べよ』

お前は教師か。これは試験問題か。呆れながらも涼はもっともらしい理由を書いた。

『君がいると作業がはかどらない』

『他人のせいにしてないください』

『だから検証します。これで作業がはかどったら、原因の所在が明確になる』

『邪魔した覚えがありません』

『気が散る』

『先生に集中力がなただけです』

『いいから帰れ』

『バラしますよ』

何を、だなんて訊くまでもない。恋に盲目バカップルの件だ。

『やれば？』

『あっさり見捨てましたね。それでも教師ですか』

脅している奴に言われたか 間違った、書かれたくはなかった。

反撃の言葉を書き連ねている間に、ふと涼は我に返った。足もとに散乱する裏紙。手には太ペン。

なんでガラス越しに天下と文通なんぞしているのだろうか。

(意味がない。全くもって意味がない……っ！)

結局、相手をしているではないか。

『ところで先生、作業しないのですか？』

拳句の果てには、本人にまで指摘されて涼は非常にいたたまれなくなつた。極太ペンのキャップを外して書き殴る。

『帰れ!!』

小窓に叩きつけて、今度こそ整理作業に取り掛かった。

#### (その四) 諦めが肝心です

すかさずノック音。涼は楽譜を少々乱暴に机の上に置くと、勢いよく扉を開け放つ。

「いい加減にし、ろ……?」

尻すぼみになる声。扉の前に立っていたのは矢沢遙香だった。気圧されたようにつぶらな瞳を見開いている。

「私、何かしました?」

「すまない。人違いだ」

謝ってから、涼は今が五限目の授業中であることを思い出した。しかも遙香の手には鞆。

「授業は?」

「今週は三者面談で、午前中までですよ」

それでも先生ですか。避難の眼差しを注ぐ遙香から目を逸らす。クラスを受け持っていないとはいえ、教師として把握しておくべきことだった。いや、ついさっきまでは覚えていたのだ。

「それで、どうしてここに?」

放課後が空いていたとしても、わざわざ器楽室にまで足を運ぶほど涼と遙香は親しくない。むしろ、二人の関係を隠すためとはいえ、佐久間と交際しているふりをする涼を、彼女は快く思っていない。理不尽だと思う。だが、恋とはそういうものだ。冷静さを失わせ、周囲に迷惑をまき散らす。

「もう三日も佐久間先生と会っていないんです」

その原因がさも涼にあるかのように遙香は唇を尖らせた。

「世界史で君のクラスを担当していなかったっけ?」

「二人きりでつてことです! 教室でいちゃつけるわけないじゃないですか」

鑑賞室では思いつきりいちゃついていたけどな。涼は周囲を見回した。幸いなことに人気はない。天下も諦めて部活に行ったのだから

う。仕方なく遥香を器楽室に招き入れる。

「言っておくが、ここで密会しようなどと考えないように。音楽科準備室と扉がつながっているから、いつ誰が入ってきてもおかしくない」

鬼島天下のように猫を被れるのならば話は別だが、遥香にそんな機転は利かないことは百も承知だ。求める方が間違っている。

「わかっています。だから先生に協力してほしいんです」

「先生だって誰も来ない教室なんて準備できません。学年主任に頼んでください」

「ふざけないでください。誰も学校で会おうなんて考えてません」  
強い口調で遥香は否定した。

「外で会いたいです。隣町の、ファミレスとかで」

「名案だ。最初からそうしてくれれば、私も彼女のふりなんてふざけた真似をせずに済んだのに」

「先生は、佐久間先生とは何でもないんですよね？」

探るようはこちらを見つめる遥香。いっばしに嫉妬しているらしい。微笑ましいことかもしれないが、的外れだ。

「何度も言わせないでくれ。私が好きなのはブラシド＝ドミンゴです」

「じゃあ協力してください。ムカつきますけど、先生が佐久間先生と二人で学校を出れば誰も疑わないと思います。お二人は付き合っているということになっていますから」

何故そうなる。極力関わりたくない涼は顔をしかめた。

「二人で別々に学校を出れば十分だと思っただけ？」

「先生の方から人前で佐久間先生を誘ってください。そうすれば効果は倍増です」

「理解に苦しむ」

涼は腕を組んだ。

「君は表面上とはいえ、私と佐久間先生が交際しているのは不満なはずだ。なのに仲良く振る舞えと言う。どういう心境の変化だ？」

「今でも嫌ですよ。でも背に腹は代えられません」

遥香は断りもなく机の上に鞆を置いた。要するに、涼と佐久間が付き合っているようにとはとても見えないのだそうだ。さすがに誰かの隠れ蓑であることまでは気付かれていないようだが、不思議には思われているらしい。

「話はわかった。でも私が協力する義理はない」

「外で会え、と言ったのは先生です」

遥香は薄くリップを塗った唇をつり上げた。

「大人なら自分の発言に責任を持ってください」

へ理屈だ。涼は一度だつて二人の恋愛を推奨したことなんかない。むしろ反対した。隠ぺいに加担しているのも半分以上教師としての義務だ。

涼は遥香の顔を眺めた。校則ギリギリに染めた茶髪に薄いメイクを施した可愛らしい顔立ち。長髪の手入れも大変だろう。それが何のためと問われれば、一概には答えられない。しかし、自分自身のためだけではないことは確かだ。

目の前の遥香は情熱で突っ走る生意気盛りの女子高生だ。ただの、女子高生だ。

涼はため息をついた。やっぱり自分の性分は変わっていない。

(その五) 安請け合いは控えましょう

職員室へ顔を出したが、佐久間の姿は見当たらなかった。三者面談だろう。そろそろ終わる時間のはずだ。涼は二年一組の教室へと向かった。

遙香は人目のつく場所で佐久間と約束を取り付けてほしいようだったが、涼にその気は全くなかった。何が悲しゅうてこれみよがしにデートの相談なんぞをしなければならぬのだ。

教室前の廊下に置かれたイス二つは空席。本日最後の生徒の三者面談が中で行われているのだろう。涼は壁に背中を預けた。

三者面談。授業参観。保護者会。体育祭。文化祭。親が子の通う学校に行く機会は多くもないが少なくもない。その度に不貞腐れた幼い自分を思い出し、涼は苦笑した。今思えば可愛げのない子供だった。

ほどなくして教室の前方の扉が開く。涼は無意識に背を壁から離し 息を呑んだ。

歳は四十を過ぎているだろうか。鋭い双眸に苦み走った顔といい、真一文字に引き締まった口元といい、鬼島天下がそのまま歳を重ねたようだった。その心象を裏付けるように天下本人が後から続く。

「失礼いたします」

親子二人揃って教室内の佐久間に向つて一礼。天下より低くて渋みのある声だ。扉を閉めて振り返る。そこでようやく天下は涼に気づいたようで、軽く目を見開いた。が、動揺はすぐさま打ち消された。代わりに優等生の笑みが浮かぶ。

「奇遇ですね、先生」

「本当に」

つられるように涼もまた口端をつり上げた。父親の前でさえ優等生の仮面を被る天下に対する皮肉を込めて。

「鬼島君のお父様でいらっしやいますか？ 似てますね」

軽く会釈して涼は教室に入った。天下の視線を遮るように扉を締め切る。資料を片づけていた佐久間が顔を上げた。

「どうなされたんですか？」

「今日の放課後、お時間ありますか？」

「職員会議が終われば、後は特に」

それは好都合。いや、涼にとつては不都合だ。

「ちよつとお茶でもいかがですか。学校関係者がいない隣町あたりで」

何もそこまで驚かなくてもと涼が思うくらいに、佐久間は面食らった。まるで信じられないものを見るような目だ。

涼は声を発さずに口だけで紡いだ。

や・ざ・わ。

意図を察した佐久間は慌てて何度も頷いた。

「はい、喜んで」

「用はそれだけです。では」

そそくさと涼は退室した。今度は器楽室へ。いつから自分は佐久間と遙香の伝書鳩になったのだろうか。釈然としない涼が中央廊下を曲がるうとしたその折、背後から張りのある声で「先生」と呼ばれた。

「お父上殿はどうした」

「帰った」

「一緒に帰ったらどうだ？ 貴重なコミュニケーションの機会じゃないか」

天下は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「必要ねえよ」

冷たい以前の態度だ。感情を切り捨てたように天下は素っ気なかった。

「そんなことよりも、あれは一体どういうことだ」

「あれって？」

「デートの約束を職場でするもんなのか、先生って」

(その六) 一般論は一般論でしかありません

不機嫌よりも侮蔑と呼ぶのが相応しい。六つも年下の高校生に蔑まれる自分って一体何だろう、と涼はため息を漏らしそうになった。

「普通はしないな」

天下の眉間の皺が深くなる。

「やっぱり好きなんじゃねえか」

「だから、どうしてそうなる。一緒なのは学校を出るまで。その後は二人で勝手にやるさ。私の知ったことじゃない」

ひらひらと手を振って会話の終了を示す。しかし 踵を返した涼の腕が掴まれた。さすが若者。力の加減を知らないようだ。

「おかしいじゃねえか。あんたは生徒と教師の恋愛には反対なんだろう？ なんて協力してんだよ。慣れねえことまでして」

天下の目には責める色があった。まるで詰問だ。質問の内容自体は至極もつともなので性質が悪い。

「私が教師だから じゃ、納得しないんだな？ わかった。睨むなって。ただでさえ君は目つきが悪いんだから」

天下は根本的に勘違いをしている。佐久間は正直言ってどうでもいいのだ。先輩だが恩はこの数日で十分以上返したつもりだ。生徒との恋愛が表沙汰になれば懲戒免職は免れない。それを知った上で遥香を受け入れたのだ。責任ぐらい自分で取れるはずだ。

しかし、矢沢遥香は違う。

「他人の恋愛を応援するほど、私は悪趣味じゃない。さっさと別れてくれればいいと思ってるよ。でも、表沙汰になるのはどうしても避けたい。佐久間先生のためではなく、矢沢さんのために」

「先生とあいつ、それほど仲が良かったか？」

「全然。名前だって覚えちゃいなかった」

「じゃあ、なんで」

知っているからだ。高校生の無知と脆さを。そうでなければ、涼

が母親に捨てられることはなかった。そもそも生まれなかった。

今となつては推し量るしかないが、母もまた、どうにかなると最初は思っていたのだろう。しかし、できなかった。その挫折の結果が身籠つた子供を養護施設に預けることだ。

「生徒はみんな可愛いものだ」

「見え透いた嘘吐くな。ンなわけがねえ」

おそらくそのことを一番よく理解しているであろう優等生が吐き捨てた。教師達の覚えがいい天下だからこそ、十分過ぎるほどにわかつていた。

好かれるためには条件がある。人によって程度の差はあつても満たすべき基準は必ず存在した。鬼島天下という生徒が慕われているのも単に、周囲の人間の持つ「良い生徒」もしくは「良い友人」の条件を満たしているからに過ぎない。

逆を言えば、条件を満たさなければ受け入れられない、ということだ。

「そつだよ。嘘だ。高校生だからってみんな無条件で愛せるはずがない。どうしても気に食わない生徒だっているし、どうしても可愛く思えてしまう生徒だっている。教師にできることはそれを公的な場には持ち込まないことだけだ。そして私の場合、矢沢遙香がえこ鼻屑したくなる生徒に当たる」

(その七) 応用次第です

「俺にはわかんねえ。優秀で愛想の良い生徒ならともかく、あんな可愛げのない女のどこがいいんだか」

「顔が整っていて、頭が良くて、スポーツ万能で、愛想も良くて、教師が押し付ける雑用にも嫌な顔一つしない生徒なら、きっと好かれるだろうね」

鬼島天下のように。暗に言えば本人はそれを察したらしく愁眉を寄せた。

「でも、それは生徒じゃない。不自然だ。苦手教科は多少手を抜いて、夜更かしして授業中に寝る。嫌いな教師はなるべく避けようとする。窮屈な校則はこっさり破って、服装検査の前に慌てて髪を黒染めする。多かれ少なかれ、そういう馬鹿な事を一生懸命やってこそその高校生だ」

天下言う通り、矢沢遙香は我儘で、傲慢で、気に入らないことがあればすぐキレるような可愛げのない女子高生だ。協力している涼にだって礼の一つも言わない恩知らずだ。

しかし、我儘で傲慢なのが高校生であり、そういう子供に分別を教えるために学校はあるのだと涼は思う。

おかしいのは天下の方だ。父親の前でも優等生の顔を崩さない。そのくせ「必要ない」の一言で父親を切り捨てる。それを反抗期と呼ぶには熱がなく、無関心のせいにするには優等生ぶりが徹底していた。

「我儘で、傲慢で、可愛げがない。そんな矢沢さんだからこそ、救われた気になるよ。私も頑固で可愛げのない子供だったから」

天下に感じていた違和感の正体に、涼はようやく気づいた。彼には、人形のような可愛げがあっても、子供らしさが欠片もなかった。自分とは真逆の存在だったのだ。

人形が熱を持つのは涼と二人きりである時だけだ。それが何を意

味しているのかわからないほど、涼は鈍感ではなかった。だが、その熱を受け入れることはできない。

「今もそうじゃねえか」

天下は掴んでいた涼の腕を放した。

「全然可愛くねえ。むしろ憎つたらしい」

「君とは対照的だ。昔から私はこうだったよ。変わるつもりもない」  
天下は口をつぐんだ。唇を引き結んで前を向く様は凜々しくもあり、どこか痛々しくもあつた。何故、と問いかけたくなる。

何が楽しくて学校に来ている。何のためにそこまで優等生であるうとする。家族の前でさえ優秀な息子でいるのか。ならばどうして今まで完璧に演じていた優等生面を涼の前ではしない。何故。どうして。

どうして、自分はこの青年に手を伸ばしたくなるのだろうか。

憐れみに似た感情が湧き上がるのを涼は感じた。思わず手を伸ばして抱きしめてやりたくなる。幾重もの包帯に巻かれたまま放置された彼の傷を曝け出して、触れてみたくなる。

それが母性なのか、それとも他のものなのかは涼にはわからない。ただ、鬼島天下が求めているのは同情や慰めではないことはわかった。そして涼は、自分が憐憫以上のものを与えてやれないことも悟っていた。

癒せない以上、天下の傷に触れることは許されなかった。そんな涼にできることは結局、一つでしかない。

「だから私は、優等生の考えていることなんて一生理解できないと思つ」

垣間見た傷から目をそむけて、突き放すだけ、だ。傷が深くなる前に。

天下の顔から感情が抜け落ちていくのを涼はただ見ていた。

「同感です。俺も先生の考えていることなんてわかりたくもありません」

平坦な口調で言う天下には、傷ついた少年の面影などどこにも見

当たらなかつた。行儀悪く机の上に座る姿も、人の悪い笑みを浮かべる唇も、慥然とした顔も、今の天下からは想像ができなかつた。今後、そんな彼を目にすることは二度とないのだろう。そう仕向けたのは涼自身だ。

つまるところ、鬼島天下はどうしようもないくらい優秀生徒で、そして渡辺涼はどうしようもないくらい教師だつた。それ以外にはなれなかつた。

(その八) あてはまらない人もいます。

宣言通り、校門を出たところで涼は佐久間と別れた。その際「くれぐれもご注意なさってください」と釘を刺しておくのを忘れない。佐久間は呑気な顔で首肯したが、おそらく涼の真意は悟っていないだろう。

周囲の目はもちろんだが、矢沢遙香に流されないことが重要なのだ。子供の我儘をたしなめるのも大人の恋人の役目のはず。でなければ本当にただの恋愛ごっこだ。バス停に向かう佐久間の背中を眺めつつ、涼は密かにため息をついた。

最寄駅まではバスで十分、徒歩で二十五分。佐久間はバス、涼は徒歩を選ぶ。生活スタイルがまるつきり違う二人が交際するふりをする。こと自体がそもそも間違っていた。

見覚えのある男性が目の前を横切ったのは、涼が何度目かわからない後悔をしていた時だった。見間違えるはずがない。鬼島天下の父親、だ。平均的なサラリーマンのスーツだというのに、彼だと垢抜けて見えた。どこことなく華があり、それでいて厳しさを孕んでいた。なるほど目つきの鋭さは父親譲りのようだ。

涼がひそかに尾行兼観察をしている間に、鬼島氏は閑静な住宅街に踏み込んだ。二階建ての一軒家の前で止まる。涼は慌てて電柱の陰に隠れた。

「あら、早いわね。おかえりなさい」

垣根から顔を出す女性。この家の住人のようだ。鬼島氏は表情を変えずに応じた。

「今日は仕事が早く終わったんだ」

「一言連絡してくれば良かったのに。晩御飯はまだかかるわよ」  
女性は泥のついた手袋を外して、鬼島氏を招き入れた。綺麗な人だった。鬼島氏と並ぶと絵になる。たとえ「草むしりをしています」と力説するような野暮ったい服を着ていようと、その魅力は損な

われることはなかった。

家の扉が閉まったのを確認してから、涼は表札を確認した。「鬼島」と彫ってある。学校のデータとも一致している。ここが鬼島宅なのだろう。

涼は二、三回頭を振った。

何もおかしな点はない。予定より早く帰ってきた旦那を奥さんが迎え入れた。急な帰宅なので準備がまだだと苦笑しながら。二人の会話も様子も自然そのものだった。装っている風は全くなかった。では 涼は眉根を寄せた。

鬼島天下はどこへ消えたのだろう。

三者面談に母の代わりに父が行くことは珍しいが、ないことではない。家事は夫婦共同が叫ばれている時代だ。別段不自然ではない。しかし、三者面談があったことすら知らないとはどういうことだ。そして鬼島氏は何故、仕事だと嘘を吐くのだろうか。

考えても納得のいく説明がつかなかった。迎え入れた鬼島夫人。帰宅した鬼島氏。その二人の様子が自然であればあるほど、違和感が際立つ。

それはまるで、鬼島天下など存在していないかのようにだった。

(その八) あてはまらない人もいます。(後書き)

これで三章は終了です。お付き合いくださいまして本当にありがとうございました。

二章で豪語したにもかかわらず、恋愛偏差値が一向に上昇しておりません。すみません。四章では似非優等生の逆襲を予定しております。遙か彼方に位置する十五禁を目指して進む所存です。これからもよろしく願います。

## 四限目(その一) 油断は禁物です

鬼島家の不審な点を目撃しても涼のすることには変わりはない。存在意義のわからない会議に参加し、音楽科の生徒に声楽を教え、普通科の生徒には音楽の触りを教え、そして空いた時間には器楽室の楽譜整理に明け暮れる。

変わった点といえば、鬼島天下の対応だ。無視、とまではいかないが、他の生徒と比べると変わりのない接し方。むしろ素っ気ない対応をした。間違っても二人きりにはならない。近づいて来ても半径三十センチメートルには入れない。そういったさり気ない変化にも敏い天下は涼の意思を汲み取った。時折、物言いたげな視線を送るものの、深くは追及してこなかった。涼がそうさせる隙を与えなかったのもあるが。

ともかく、天下と涼はただの生徒と教師に戻った。以前よりも関わりのない存在になったのだ。二週間が経過したところで何も起こらなかった。このまま薄れていくのだと涼は安心していった。

当初は永遠に続くと思えた楽譜整理もだいたい目処がついてきたのもあって、涼の関心は佐久間と遙香の二人に移行していた。これからどうするつもりなのだろうか。それだけが悩みの種だった。つまり、涼は完全に油断しきっていたのである。

「渡辺センサーイ、お呼びですよー」

音楽科準備室と通じる扉から恵理が声をかける。涼は手が塞がっていたので「どなたですか?」と大きめの声で訊いた。が、返事がない。聞こえなかったようだ。

「通しちゃいますねー」

と、恵理の声。涼は棚の一番上にある楽譜ファイルを引っ張り出した。音楽準備室からは背を向けたまま。後先考えずにぎゅちぎゅちと詰め込まれていた楽譜が、一斉に崩れ落ちるのを、片手で止める。とりあえず、全部出してしまうかと涼がもう片方の手を伸ばした

時だった。

横から落ちかけた楽譜を支えるように腕が伸びた。なんと親切な学生だろう。涼は「あ、悪い」と反射的に口にしようとして、止まった。

学生。

「大丈夫ですか、先生」

油の切れたブリキよろしくぎこちなく首を動かせば、真横には鬼島天下がいた。

「一度、全部出した方がいいですね」

涼の返事も待たずに楽譜を取り出し、傍にあつた机の上に山積みにする。あまりにも自然な動作に口を挟む間すらなかった。啞然とする涼に、天下はいつもの優等生面で言う。

「俺が出しますから、先生は整理をお願いします」

「あ、ああ……どうも」

涼は分別を始め かけて手を止めた。

「ちよつと待て」

(その二) 隙を見せてはいけません

「待ちません。早く終わらせましょう」

歯牙にもかけず天下は作業を続ける。事務的な対応で流されそうになるが、涼は首を横に振った。おかしい。絶対にこれはおかしい。さりげなく好意を示してきた天下を、さりげなく拒絶したのはつい二週間前。彼はすっかり悟って諦めたのではなかったのか。だから近づかなくなったのではないか。

「どういってもりだ」

手を止めて、天下は怪訝な顔をした。涼は中央廊下側の扉を指差した。

「張り紙が見えなかったのか」

「見ました。毎日貼ってありますから」

「じゃあ、どうして入って来る？」

「廊下側の扉には生徒入室禁止とありましたが、準備室側にはそんなことは一言も書かれていません」

涼しい顔でへ理屈をこねる。ふてぶてしい限りだ。

「だからって、無理に入ってくる必要がどこに」

「押し入ったつもりはありません。俺は渡辺先生に用があると言っただけです」

百瀬先生。あんた私に何の恨みがあるんだ。面倒くさい楽譜整理を引き受けてやった礼がこれか。

涼は壁一枚隔てた先にいる百瀬を睨んだ。残念ながら防音設備の整った部屋の壁は、視線などで貫けるほどやわではなかったが。

「作業は、はかどりましたか？」

唐突に天下が訊ねてくる。

「ものすごく順調だ。邪魔がないからな」

暗に出て行けと言っているのだが、天下は我が意を得たりとばかりに頷いた。

「じゃあ、なおさら手伝わなくてははいけませんね。数日とはいえ先生の作業の邪魔をしたわけですから」

背を向けて作業再開。涼は言葉もなかった。なんて食えない生徒だ。整理がはかどらないと追い出されて、いったんは引き下がっておき、今度はそれを逆手に取って攻めてくるとは。作業を手伝うのなら、楽譜整理の効率を理由に追い出した涼に断る理由はない。作業の邪魔をした詫び、という大義名分が成り立つのだ。

「部活はどうした」

「今日は自主練です。終わりました」

「別に手を貸してもらおうほどの」

「結構な量ですね。邪魔がなくても二週間以上かかっていますし、猫の手も借りたいとぼやいていたそうですね。百瀬先生が言っていました」

天下は口端をつり上げた。

「手伝ってくれるのならありがたい、とも言ってましたよ」

トドメの一撃だった。涼は自分の分が悪いことを悟った。

鬼島天下が優等生と呼ばれる所以がわかったような気がした。彼は周到に計画を練るのだ。あからさまに好意を示さないのも、涼に断らせないための策だ。善意の中に少しずつ好意を混ぜて懐柔する。傍目から見れば親切心にか受け取れないので、涼もおいそれと拒むことができない。

押せば引き、引けば押す。涼は流されやすい自分を知っていた。だからこそ、隙を見せないよう振舞っていた。面と向かって「好きです」と言われれば迷わず断る。微塵の容赦なく。躊躇うこともなく。それが流されやすい自分を守る手段だ。

そんな涼にとって、天下は一番厄介なタイプだった。なんとなくで、ずるずると関係が続き、気づいた時には情が移って後戻りができなくなる。

涼が、一番流されやすいタイプでもあったのだ。

(その三) つけ込まれます

毎日毎日欠かさず警戒したが、天下は拍子抜けするほど真面目に手伝った。まさか本当にこれまで邪魔をした詫びのつもりなのかと涼があやうく信じかけたくらいだ。

仮に今、誰かが器楽室に突然入ってきてても、涼は胸を張って何事も無いと言い切れる。触れてくるわけでもなく、好意を口にするわけでもない。実に微妙な状態だ。天下の思惑が読めない。

一週間が経つ頃には、天下が器楽室に入ってきてても咎める気さえ起きなくなっていた。それくらい天下は内心はどうであれ、好青年らしい行動を続けていた。他愛のない会話も、慣れれば心地よいものだ。

ともすればうつかり絆されそうになっている自身に気づき、涼が気を引き締め直した時だった。不意に、天下が訊ねてきた。

「先生ってオペラ好きですよね」

何を企んでいる。警戒モードに移行しつつ涼は教卓の上に置いた楽譜を手を取った。動揺を悟られてはならない。平静を装わねば。

「まあ、好きな方だね。どちらかと言えば」

「よく授業でも流しますし……『魔笛』とか『タンホイザー』とか」  
「音楽の授業ですから」

生徒たちが少しでもオペラに興味を持ってくれれば御の字だ。時間の都合上、全幕を観せるわけにはいかないが、有名な部分を抜粋して紹介している。オリジナルのあらすじプリントも作成して配っていることを考えれば、なるほどオペラに力を入れていることも否めない。

「授業のために、わざわざレーザーディスクまで買ったりするんですか？」

「……多少、趣味も兼ねていることは認めよう。でも全部私のポケットマネーです。そこを誤解しないように」

「別に責めているわけじゃないんです。実はここにオペラの招待券があるんですけど」

楽譜から顔を上げれば「優待券」と印字されたオペラのチケット。

「『カルメン』だそうですね」

涼しい顔で天下は言う。ビゼーの最高傑作ではないか。

「いつ？」

「明日。新国立劇場で七時開演です」

学校の最寄駅から新宿までは電車で一本。金曜とはいえ、早めに仕事を終えれば間に合う時間だ。

「もしかして、くれるの？」

「差し上げたいのは山々ですが、他人への譲渡は駄目だそうです」

こいつ最悪だ。涼の機嫌は急降下した。

「ほーう、わざわざ自慢しに来てくださったわけですか。どうもありがとうございます」

再び楽譜に視線を戻す。天下の評定を「一」にしたろうか、と職権乱用も甚だしい復讐が頭をよぎった。

「でも同伴者なら良いそうですねよ」

人の悪い笑みを浮かべて天下は指をずらした。チケットは二枚あったのだ。「優待」なだけあってS席だ。通常ならば二、三万はする。

(その四) 攻めてきます

S席。カルメン。ビゼー。オペラ。頭の中ですくすく回る単語たち。しかし 涼は天下の幼さの残る類と、大人びた顎から首筋のあたりを盗み見た。

生徒と二人でオペラ鑑賞。音楽科の生徒と教師ではよくあることとはいえ、普通科の、それも音楽に大して興味もなさそうな天下と一緒にというのは、非常に危険な気がする。

(ああ、でも)

涼は内心頭を抱えた。

(行きたい超観たい……っ！)

生のオペラなんて二回観た程度。友人の好意で譲ってもらった際だけだ。タダである代わりに演目なんて選ばやしない。チケットが高額な上に会員以外はなかなか手に入らないのだ。

「一緒に行きませんか？」

「……あー、一人でオペラ観てもつまらないだろうし……な。ここ

は一つ、先生が行ってあげてもいいかなあ、と思いますハイ」

「素直に行きたいって言えばよ」

天下がぼそりと呟く。

「何か言いましたか？ 鬼島君」

「いいえ、別に何も」

「ではそろそろ解散しよう。ここ、閉めます」

天下はチケットを封筒に戻して鞆を脇に抱えた。一緒に出ていく必要も見送る義理もない。涼は軽薄にも五線に浮かぶオタマジャクシを視線で追った。珍しく食い下がらないと思いきや、天下はドアノブに手をかけて振り返る。

「先生、明日の放課後ですからね」

「はい」

「行き違いにならないように、準備室まで迎えに行きますから」

「はいはい」

「……忘れて帰るなよ」

耳に心地よい低音。もしかしなくともこれが彼の地声なのだろう。「大丈夫だ。カルメンは忘れない。君もこんなところで油を売っていないで、早く家に帰って青春でも何でもエンジンジョイしなさい」

「今してるから、いいんだよ」

さらつと言うものだから、涼は虚を突かれた。

完全に油断していた。言葉が喉の手前でつつかえたように出てこない。

「……あ、そう」

と呟くのが精一杯だった。天下の顔を見ることなどできない。しがみつくように楽譜に意識を集中させた。

「先生」

「今度は何だ。早く帰りなさい」

「楽譜、逆さですよ」

笑みを含んだ声音で指摘し、天下は退室した。残された涼はとうと、恥ずかしいやら悔しいやらで上下逆の楽譜を握りしめた。

食えない生徒どころじゃない。

こっちが食われそうだ。

(その五) 計画はしっかり立てましよう

しかし同伴者がどうであれ、オペラを観に行く、というのは心が躍るものである。機械的に選ぶスーツもネクタイも今朝に限っては出かける直前まで悩んだ。普段は全くと言っていいほどしない化粧もちよっとしてみたりして 肌が荒れるのでクリームとリップ程度で終わったが。とにかく、涼は数年ぶりのオペラ鑑賞を楽しみにしていた。

「渡辺先生、今日は何かあったんですか？」

しかしよもや、音楽準備室で同僚に訊ねられるほど浮かれていたとは思わなかった。涼はとっさに誤魔化そうとして不意に思い至った。何を隠す必要がある。変に体裁を取り繕うとするから、邪推されるのだ。

「実は今日、放課後にオペラを観に行くんですよ」

口調が弾んでいるのはまあ仕方がない。予想通り、音楽教師達は食いついてきた。

「オペラですと……」

「『カルメン』です。お恥ずかしい話ですが、生で観るのは初めてのものです」

いいですねえ、と頷いたのは音楽科主任。その後もやれ誰がカルメン役なのか、指揮者は誰だ、などといかにも音楽教師らしい話題で盛り上がった。

「しかしよくチケットが手に入りましたね。誰と あ、愚問でしたか？」

「佐久間先生じゃありません」

涼は努めて事もなげに答えた。

「生徒ですよ。おこぼれに預かったんです」

音楽科の生徒と後学のために演奏会に行く教師は多い。担当科目上、その手のチケットが送られてくるからだ。別段不思議なことでは

はない。そう、相手が音楽科の生徒ならば。

都合よく解釈してくれた教師達はそれ以上突っ込んでほなかつた。助かったのは事実。しかし涼はこうも思う。もし、名前を訊ねられたら、自分は「鬼島天下」と答えたのだろうか。

六限目も無事に終了。充実しているせいか、それとも周囲の音楽科教師達が気を使ってくれているせいか、残業もすぐに片付いた。迎えに来る天下を待つ間に、涼は鑑賞ガイド本をぱらぱらめくった。「やっぱりアリアと言えば『セギディーリヤ』ですね。『ハバネラ』は言うまでもありませんが」

ガイドブックのページを指差したのは音楽科主任だった。

どちらも第一幕でカルメンが歌うアリアだ。男を次々と誘惑する魔性の女役だけあって、歌の正確さよりも色気が重要となってくる。「エスカミリーヨの『トレアドール』を忘れちゃいけませんよ、渡辺先生」

コピー機を使用していた百瀬恵理までもが参戦。それぞれお気に入りのアリアを挙げ出す。音楽科教師だけあって思い入れは人一倍あった。話し出すと止まらない。

「バリトンの響き……たまりませんねえ」

恍惚とした表情で語る恵理。気持ちはわかるが、仮にも職場で恋する乙女みたいに目を輝かせるのは遠慮してほしいところだ。

「バリトンのアリアでこんなに派手なのは『トレアドール』くらいですからね。いつもテノールが独占してますから」

「あ、渡辺先生はテノール派ですか？」

「どちらかと言えば、そうです」

「好きそうですね。三大テノールとか……ちなみに、お気に入りには？　パヴァロッティ？　それともカレーラスですか？」

同類の匂いを感じ取ったらしい。恵理は嬉しそうに質問してくる。仮にも音楽教師。涼もそういう話は嫌いではない。正直にプラシド・ドミンゴだと答えた。それを皮切りに『カルメン』から三大テノールの一番は誰かという話題に移行した。

「あの……リヨウ先生」

蚊の鳴くような小さな声が和気藹々とした空気に入り込んだのは、涼が陰鬱をたたえたドミンゴの美声について力説している真っ最中だった。

音楽科準備室に訪れるとは珍しい。世界史担当の佐久間だ。

「何か用ですか？」

「今日、これからお時間いただけませんか」

お食事でも、と控えめにだがその場にいた全員の耳に入るくらいの音量で言う。

(その六) 予期せぬ事態に陥ることもあります

迷うことなどなかった。

「すみません。今日は先約が」

「私が代わりに行きましようか？ カル・ル・メン」

余計な提案をしてきた惠理をひと睨みで黙らせる。「冗談ではない。カルメン？」

「生徒と観に行く約束をしまして。せつかくのお誘いですが、またの機会ということだ」

訳：矢沢遙香でも誘って行けよ。

丁重にお断りしたが、佐久間は傍目でもわかるくらいに困った表情になる。

「生徒と一緒に？ これからですか？ そんなことをして問題に」

「後学のためです」

さすがに見かねた主任がぴしやりと言い放つ。

「私も生徒とよく演奏会に行きます。招待されて、それを聴きたいと思う生徒がいる以上、同行するのは当然のことです。失礼なことを言わないでください」

一変して険悪な雰囲気。涼は佐久間の腕を取った。主任に軽く会釈して退室。渡り廊下の手前でようやく足を止めた。人気がないのを確認して口を開く。

「何のつもりかは聞きません。恋愛相談でしたら余所でお願ひします」

「いいえ、僕は、ただ……今後のことも含めて」

「今後も何もありません。ほとぼりが冷めたら適当な理由をつけて別れるだけです。それとも、矢沢遙香が卒業するまで私を隠れ蓑にするおつもりですか？」

半眼で見やれば、佐久間は狼狽した。

「リョウ先生にはご迷惑をかけして申し訳ないと思っています。で

すから、お詫びも兼ねて食事に」

「それで矢沢さんも呼べばさぞかし楽しい食事になるでしょうね、お二人にとって」

「ち、違います！ 僕はそんな……」

「いずれにせよ、結構です。茶番は学校だけで十分。私のプライベートにまで彼氏面して関知しないでください。それと音楽準備室にまで押し掛けるのもご遠慮ください」

話している時間さえ惜しくなった涼は切り上げた。

「約束がありますので失礼します。では、よい週末を」

馬鹿にしている。靴音も荒く涼は音楽準備室に戻った。

生徒に手を出したお前と一緒にするな。カルメンだ。初めての生鑑賞。それを、こちらの都合も察せずに妨害するとは一体何の嫌がらせだ。二言目には食事食事食事 自分をデートに誘いたければクラシック演奏会のS席チケットでも用意しやがれ。

怒り納まらぬまま準備室に入れば、好奇の視線が注がれる。

「修羅場でしたか？」

「百瀬先生、ノーコメントです」

自分の机に腰掛けて一息 と、そこで涼は机の上に置かれた音楽の教科書に気づいた。

「入れ違いでしたね。普通科の生徒が授業の忘れものだとかで届けに来たんですよ。渡辺先生に渡せばわかる、って言っていましたけど」

教科書からわずかに覗く白い封筒。見覚えがある。案の定、中は『カルメン』のS席招待券。それも二枚ある。どういうことだ。

まさか。

涼の額の汗が冷えた。

もしかして、もしかすると、さっきの見ちゃったりしてますかね？ 人気のないところで二人つきりで密談。頑張っつて解釈すれば仲が良く見えたりしますかね？

それでもって……変な気を回したりしちやったりして。

(まさか、そんなベタな)

首を横に振ったが、その考えは振り落とせなかった。  
「すみません。お先に失礼いたします」  
涼は鞆を引っさげて準備室を飛び出した。

(その七) 機転を利かせて対応しよう

昇降口まで早歩き。廊下を走れない教師の身分が恨めしかった。ようやく辿り着いた下駄箱で確認したら、天下の靴は既になかった。舌打ちして、教員用の玄関にまわり、今度は駐輪場へ。

二年一組の所で談笑していた男子生徒数名を呼びとめた。天下の行方を訊ねれば彼らは一様に不思議そうな顔をした。

「あいつ、チャリ乗ってませんよ」

「歩いて学校まで来てるってこと？」

「いや、そうじゃなくて」

顔を見合わせる男子生徒達。

「電車通学だよな？ 俺、雨の日に見たもん」

今度は涼が眉を顰める番だった。佐久間から引き出した天下の住所、そして先日目撃した鬼島宅は間違いなく一致していた。学校までは徒歩で十五分程度の距離。駅まで行けば遠回りだ。

つい最近、引越してもしたのだろうか。しかし彼らが言うには入学当初から電車通学をしていたらしい。ますますわけがわからない。

「天下がどうかしたんスか？」

「忘れ物をしたんだ。結構大事なものだから、渡そうと思って」

涼は肩を竦めた。

「あ、俺、あいつの番号知ってます」

思わぬ収穫だ。男子生徒達に礼を言つて涼は学校を後にした。道すがら教えてもらった番号にかけてみる。が、留守番電話が応対。こうなれば直接乗り込むしかない。涼が知っている方の鬼島宅へ向かった。

到着した頃には六時を回っていた。改めて表札を確認したが、やはり『鬼島』とある。そうそうある苗字でもないし、涼は天下の父がこの家に入るのを確かに見た。

玄関の前でもう一度電話をかける。願いは通じたのか、硬い声が  
『はい』と応じた。

「今どこにいる」

『は？ せ、先生、なんで』

「クラスメイトに聞いた。どこにいるんだ？」

『どこって……』

声には困惑の色が濃かった。

『自宅ですよ』

涼は目の前にそびえ立つ家を見上げた。二階の明かりは点いてい  
なかった。ポストには今日の夕刊が入っている。

『ですから、俺を気にせず、お二人でどうぞ』

あ、やっぱり見てたのね。タイミンクの悪い奴だ。

「違う。ガキのくせに変な気を回すな」

『どうだかな』

天下の口調ががらりと変わった。

『よくよく考えてみりゃあ、めんどくさがりやのあんたが好きでも  
ねえ野郎のために彼女のふりをするってのも、おかしな話だ』

嘲笑混じりの声はとことん意地が悪い。涼は言葉を失った。

『良かったじゃねーか、ふりとはいえ、彼女にしてみらえてよ』

思考が回復すると共に、何かがふつふつと湧き上がってきた。

良かった？ 誰が？

昨日から指折り数えていたオペラの邪魔をされ、職場の雰囲気  
ぶち壊され、拳句勝手に誤解して拗ねた生徒を探し回って自宅にま  
で押し掛ける羽目になっている。

「これの、どこが、良かった？」

「おい」

怒りを押し殺し たつもりだったが、低い声が口から出た。

「私が今、どこにいると思う？」

『知るかよ。切るぞ』

「お前の家の前だ」

電話口の向こうで、天下が息を呑んだのが聞こえた。

「もちろん、お前が今いる『自宅』じゃあないだろうが。表札には『鬼島』って書いてあるな」

「……おい、冗談だろ？」

「授業でも言わないのに、今言うと思うか？ 出来の悪い生徒にもわかるように懇切丁寧に教えてやりたいところだが、あいにく時間がない。インターホン押して証明してやる。誰か在宅しているみたいだし丁度いい。ついでにどういふ事情なのかも聞いておこう」

「馬鹿やめろっ！」

怒声というよりは、悲鳴に近かった。尋常でない様子に、インターホンに乗せた涼の指が止まった。こんなにも切羽詰まった天下の声を聞くのは初めてだ。

「電話越しとはいえ教師を馬鹿呼ばわりするとはいい度胸だ」

「悪い。謝る。だからやめてくれ」

珍しく殊勝だ。弱々しい声に責める気も失せていく。

「頼む」

反比例して好奇心だけが膨れ上がる。何を隠している。そこまでして何を守ろうとしている。しかし、追究するには時間も場所も最悪だ。

「新宿駅でいいか？　そこで待ってる」

しばし黙してから、天下は「一時間くらいかかるかもしんねえ」と了承した。

(その八) お酒は二十歳になってから飲みましょう

駅のホームで天下を見つけ、涼は目を瞬いた。彼は制服ではなく私服姿だった。灰色のカットソーに青系のジーンズ。それに薄手のミリタリージャケットを羽織っただけのカジュアルファッションだが、それもまた実に様になっていた。新鮮さもあって、つま先から頭までつい凝視してしまった。

「招待券、見なかったのかよ」

拗ねるように天下はポケットに手を突っ込んだ。

「譲渡禁止なんて書いてねえ」

知ってるよ、それくらい。

プレミアあつきのライブチケットじゃあるまいし、席が空くことの方が問題とされるオペラでは入場の際にいちいち本人確認なんてしていない。涼は無理に天下と行く必要なんかなかった。逆を言えば、天下もまた無理に涼と行く必要もなかったのだ。

「ああ、本当だ」

涼は封筒からチケットを取り出した。

「そういうことは早く言ってくれ。捜し回って損した」

苦笑すれば天下はつられたように顔をほころばせた。

「先生って、嘔吐きですね」

騙されたくもなる。

涼は内心、誰に対してでもなく言い訳をした。だってそうだろう？ 偶然手に入れた物とはいえ、涼がオペラを、中でも特に『カルメン』が好きであることを知って、誘ってきたのだ。嘔を吐いてまで。

今朝、服選びに迷った涼と同じように心待ちにしていた天下が、あの現場を目撃し一人落胆して帰ったことを思うと 流されてやりたくなるじゃないか。

昔から、涼はそういうものに弱かった。

当然ながら劇場に到着したのは七時半。開演時間はとつくに過ぎていた。おまけに途中入室は認められていない。第一部と第二部の間にある休憩まで外で待つ羽目になった。ちなみにかの有名なアリア、『ハバネラ』が歌われるのは第一幕。『セギデイーリヤ』も同じく。『トレアドール』は二幕。一部で有名どころはほとんど歌われてしまうのだ。涼は涙を飲んで諦めた。

「悪かったな」

天下が小さく呟いた。伏目姿には哀愁が漂う。涼でなければ、気にするなと水に流すところだろう。しかし、残念ながら涼にはそんな真似はできなかつた。

「まったくだ」

何しろ生まれて初めてのカルメンだ。逃したアリアは大き過ぎた。ますます気落ちした天下は恨めしげに反論した。

「やっぱり、佐久間と行けば良かったじゃねえか」

それで拗ねて帰ったのはどのどいつだ。涼は頭を掻き毟りそうになった手で、天下の腕を掴んだ。軽食やワイン等を販売するbuffetを通り過ぎて自販機へ。

「気分を味わえ。オペラの幕間に飲むワインは格別だ」

イタリアのオペラ座には必ずと言っていいほどワインを飲むための場所が用意されている。オペラが社交場とされていた時代の名残でもあるが、今も昔もオペラとワインは密接な関係にある。オペラ歌手の美声に酔い、そしてワインに酔う。何百年経っても人間と言うものは大して変わらないのだ。

「飲まないんですか？」

「未成年は茶で十分だ」

五百円玉を投入し、生茶を選んだ。天下にも買うよう促す。ほんの少し逡巡した後、天下は「御馳走になります」と折り目正しく礼を言つて、コーヒーを選んだ。生意気にもブラックだ。

中では『カルメン』。外のbuffetで教え子と二人、茶を飲んでいる。ずいぶんとおかしなことになったものだ。

「……デートはどうしたんですか？」

躊躇いがちに天下が訊ねる。

「断わったよ。今頃、二人で仲良くやっているだろうな」

「可愛くない生徒のためにわざわざ断るなんて、先生はご立派ですね」

皮肉混じりの言葉。三者面談の日のことをまだ引きずっているらしい。意外に根に持つタイプのように。

(その九) 脱線は教師の特権です

そもそも、矢沢遙香と鬼島天下を比べること自体、間違っている。「誰も可愛くないとは言っていない。よくわからない生徒だとは言ったけど」

「俺は先生がよくわかりません」

「わかりたいとも思わない、って言ったのは君だ。わからないままでいい。私もその方が気が楽だ」

「それは……あんたが、」

言いかけて天下は口を噤んだ。

「気にならないんですか？」

何が、と訊ね返す必要はなかった。学校に提出した住所とは違う場所に住む天下。それも、家族と離れて一人暮らし。三者面談には父親が出席し、母親はそのことを知らない模様。これで疑いを持たない人間は聖職者になるべきだ。

「家庭の事情に首を突っ込むほど面倒見はよくないよ、私は」

「でも、あんたは俺を探し回った。佐久間とのデートを断って。オペラだって、一人で行っても良かったはずだ。俺を探す必要なんてなかった。あんたにとって俺は、理解に苦しむ出来の悪い生徒で、面倒なガキなんだろ？　なんで電話なんかしてくるんだよ」

「可愛い教え子だから」

天下は狐につままれたような顔になり、次に頬を紅潮させた。

「生徒をからかって楽しいか？　冗談もたいがいにしる」

「何度も言わせるな。授業でも言わない冗談をどうして今言うんだ」  
普通科が誇る優等生は思いの外間が抜けているようだ。涼は腕時計を見た。休憩まで悲しくなるくらい時間があつた。

「特別授業をしてやる。ビゼー、ベルリオーズ、サン＝サーンス。音楽家であること以外でこの三人の共通点を述べよ」

「はぐらかすなよ」

「音楽科の生徒だと十個ぐらい挙げるよ」

観念したように天下は顔をしかめながらも考えた。

「フランス人」

「正解。三人の中でもシャルル・カミーユ・サン・サーンスは音楽家として活躍しただけでなく、数学や天文学、詩や絵画の分野においても才能を発揮させた。もちろん、本人の努力があつてこそ、できたことだろうがね。彼の作風は知的で穩健的。よく頭で考えて練つた感じの曲が多い。仮に、彼がうちの高校に入学したとすれば、どの学科に入つてもまず間違いなくオール五の最優秀生徒だ。特例で授業料免除にもなるかもしれない」

サン・サーンスには及ばないものの、鬼島天下もまたオール五の最優秀生徒だ。欠点の見当たらない完璧な生徒。

「そんなサン・サーンスが、だ。交響曲第三番を完成した時にテンションが最高潮になつて『我が楽曲には一点の過ちなし』と高らかに宣言したそうさ。すかさずベルリオーズが突っ込んだ」

涼は茶を一口飲んだ。

「確かに。しかし一点の過ちもないことが、君の作品の唯一の弱点だ」

一点の曇りもない。完璧。完全。ゆえに欠点となる。鬼島天下がまさにそれだつた。歩み寄る隙がないのだ。美しい絵画を見て感動を覚えても、親しみを覚ええないとの一緒だ。

「だから、君が机の上に腰かけた時、正直安心した。こつやつて悪いこともできる普通の生徒なんだつて。ほんの少し可愛く思えたよ」  
天下は複雑な表情になつた。年頃の男子学生は「可愛い」と言われると非常に戸惑うようだ。確かに、嬉しくはないかもしれない。しかしそれ以外に表現のしようがなかった。

しばらく無言で茶を飲んだりしていたら、劇場の扉が開いた。ようやく一部が終わつたらしい。休憩時間にbuffetは混雑する。涼は空き缶をゴミ箱に捨てた。

席の確認をしなくてはならない。いつまでも寄り掛かたままの

天下を促す。緩慢な動作で彼はコーヒーを飲み干し、壁から背を離れた。

「俺は、先生に可愛いなんて思われたくはありません」

どんなに小さくても天下の声は耳に通る。喧噪の中であってもだ。涼は聞こえないふりをして席を探した。

(その十) 人の名前を間違えてはいけません

主要な部分を逃したとはいえ、生のオペラは格別だった。閉ざされた空間を一瞬で支配下におさめる大音声。天井までも震わせる合唱。隣に天下がいることすら忘れて、涼は聴き入った。

カーテンコールには万雷の拍手。周囲の熱気に天下が気圧されているのに、涼の頬は緩んだ。オペラは初めてだったようだ。他の客が席を立つてもなお、放心したように天下は虚空を眺めていた。圧巻。そういえば初めての生オペラ鑑賞の時は、なかなか席を立つことができなかったな、と涼は大学生時代の自身を思い出した。

「……なんか、すげえ」

天下が零す。本場イタリアのオペラを見せたらこの青年はどれだけ驚くだろう。今後そんな機会に恵まれたとしても、彼の隣に座るのは自分ではないことに涼は少しだけ残念に思った。しかし、生徒を見送るのは教師の義務だ。

「ほら、帰るぞ」

天下の肩を叩いた時だった。

「スズ？」

振り向けば、女性が小首をかしげてこちらを見ていた。大きいがややつり気味の目は勝気な印象を与える。身にまとうグレーのスーツは小柄な彼女にぴったりだった。

「珍しいじゃない。あんたがオペラに来るなんて」

「君はオペラに来過ぎだ。少しは譲れ」

ひがんでしまうのも仕方がない。同じ音大の声楽科だったが、榊琴音は資産家の娘。渡辺涼は奨学生。『カルメン』の一件がなければ、おそらく関わることなく一生なかっただろう。

「あんたが私に主役を譲ってくれたみたい？」

意地悪く訊ね返してくる。やはり琴音も同じことを思い出していたらしい。

「その口の軽い教授は元気？」

「海外に出張中。今年もビゼーやるんですって。すずもエキストラで参加したら？」

半年振りということもあって大学のことに話を咲かせる。院に進んだ琴音は大学生の雰囲気そのまま残っていた。そのせいか、懐かしさがこみあげてくる。

「一人？」

「いや、今日は」

涼は言葉を濁した。除けものにされていた天下はパンフレットを読んでいた。視線に気づいて目礼。

「へえ……意外」

「何が？」

「すずって年上趣味だと思ってた」

涼は顔を強張らせた。教師と生徒には見えないのか。歳が離れすぎているだろうが。誤解を放置しておくわけにはいかなかった。が、涼が口を開く前に天下が訊ねた。

「スズ？」

まずい。涼は誤魔化そうとしたが遅かった。琴音が悪びれもなくこちらを指差した。

「渡辺涼。よく『リヨウ』って読み間違えられるけど あら？」

知らなかった？」

天下は頷いた。

「知りませんでした」

横目で涼を見やる。その視線は如実に「何で今まで教えなかったんだよ」と責めていた。

言えるわけがない。新任時に「これからよろしくお願いしますね、リヨウ先生」と教職員を代表した校長に笑顔で握手を求められて「すみません。リヨウじゃなくてスズです」なんて。歓迎ムードをぶち壊すような真似を。

「お付き合いしてるんじゃないの？」

「してない。するつもりもない」

キツパリ言って話を終わらせた。天下の前だからこそ手加減はできなかつた。

「今日はもう遅いから。またメールする」

「う、うん」

思い出したように琴音は付け足した。

「たまにはうちにも遊びに来てね」

涼は頷き、天下を引き連れて会場を後にした。これ以上深く関わらせるのは危険だ。何がどう危ないのかは涼にもわからなかつたが、脳内に鳴り響く警告音は無視できなかつた。

(その十一) 名前は大切です

「先生」

引きずられる天下の呼びかけは黙殺して駅まで直行。

「おい、先生」

券売機には数人の列ができていた。仕方なく足を止めて、天下の袖を離す。

「……すず」

「呼び捨てにするな」

「どうして言わないんですか？」

必要性を感じなかったからだ。こだわるほど気に入っている名前でもない。自分を捨てた母が付けた名だ。感慨すら覚えなかった。憎むには、母の記憶が少な過ぎた。

「深い意味はない。気づいたら定着していた」

「定着する前に訂正しませんか、普通」

涼は新宿までの切符を購入した。二人分買ったのは、行きの借りを返すためだ。遅刻の詫びと称されてもたとえ数百円であろうとも、年下の、それも生徒に奢られるわけにはいかなかった。

「君が訂正するのは勝手だけど、今更っていうのもある」

「言いませんよ」

やけにハッキリと天下は断言し、冷笑にも似た笑みを浮かべた。

「俺と先生だけの秘密ですな」

にやり。あえて擬音語を付けるなら、それだ。悪戯が成功した子供のような笑顔だ。月曜の職員会議で本名を明かすべきではないかと涼は本気で考えた。

「よし。どんどんクラスで広めてくれ」

「言いませんから、安心してください」

だから安心できないんだ。二人だけの秘密ってなんだ。たかが名前とはいえ、露骨に怪しいだろうが。

「学校で知ってるのは俺だけですよね？」

期待に満ちた眼差しで訊ねる天下に、答えることはできなかった。よくよく考えてみればそうだったのだ。大学時代の友人は皆知っているが、職場では皆無。だったのだ。今までは。

「どうだろう」

「聞いたことはありません」

「私の知ったことじゃない」

「重要な事です」

「どこが？ たかが名前だ」

天下は俯き、口を引き締めた。逡巡の色が見え隠れする様に、涼はえも知れない危機感が増していくのを察知した。これはマズい。とにかくマズい。

「帰るぞ」

切符を天下の手に押し付けた。その際、当然ながら指が彼の手に触れる。天下は弾かれたように顔を上げた。

「先生」

切符を持った手が握られる。力加減を知らないのか痛いくらいだ。

「なんだ。どうした」

「好きです」

(その十二)やるからには徹底的にやりましょう。

掠れていても通りの良い声が涼の耳に飛び込んだ。

「は？」

思わず天下の顔を凝視する。ぶしつけな視線に怯むことなく、それどころか逆に切り込んでくるかのような気迫があった。小細工なしの真つ向勝負。ゆえに危うかった。

「ずっと好きでした」

「ちょ……待て。どうしてそうなるんだ」

「先生だつて気づいていたんだろ？ だから俺を避けてた。でも好きなんだ。今日、探してくれたことが嬉しくつて、駅であんたを見つけた時は抱きしめたくなつたし、たかが名前でも俺だけが知ってるつてことが重要なんだ」

熱を孕んだ視線は存外真摯で、だからこそ涼は逃げ出したい衝動に駆られた。それを知つてか天下は両手で涼の右手を包み込んだ。

「……オペラに酔つたか？」

「酔つてません。俺は正気です」

「正気の沙汰とは思えないから言っているんだ。さつきから君はずいぶんナメた態度を取っているけど、私は、教師だぞ」

一語一語区切って言い聞かせたら、天下は真顔で頷いた。

「知ってます」

「そうか。もちろん自分が生徒であることもわかつているよな？」

どこの盲目バカツプルの一件でどれだけ私が迷惑を被っているのかも知っているはずだ。それらを踏まえてよく考えよう。何がどうしたんだつて？」

一縷の希望を込めて天下を見やる。

「俺が、先生のことを、好きなんです」

何の真似か一語一語区切って言い聞かせるように断言。涼は頭に鈍痛を覚えた。

「やっぱり酔ってるな。あ、いいから。何も言わなくていい。酔ってる奴に限って認めたがらないものなんだ。とりあえず今日のところは、大人しく家に帰ってだな。興奮を冷ましなさい」

天下の顔が曇る。眉根を寄せて焦ったように口を開いた。

「違います。俺は、本気で」

「良かったな。ここが学校じゃなくて。君の株が大暴落するところだった」

「そんなこと、」

言い募ろうとする天下を制して、その手をゆっくりと剥がさせる。「よくあることだ。私の大学でも、オペラ鑑賞に行った男女は高確率でその日のうちに交際を始めていた。恋愛したくなる雰囲気になるんだ。オペラって大概悲劇だけど」

「先生っ」

「今度は同年代の女子を誘って行きなさい。きっと同じ気分になる。でもあえて一つ忠告するなら交際を申し込む場所は選んだ方がいい。劇場前の噴水なんかはオススメだ。とにかく地下鉄の券売機前はやめておけ。情緒がなさ過ぎる」

「他の女なんて、」

「電車がなくなる。その前に帰りなさい」

天下は明らかに傷ついた顔をしていた。だが、受け入れるわけにはいかなかった。自分のためにも、彼自身のためにも。一時的な感情ならまだいい。本気だから困るんだ。取り返しのつかないことになる前に、止めなくては。

「それとも君は私にこう言わせたいのか？ 生徒は対象外だって」

（その十二）やるからには徹底的にやりましょう。（後書き）

こんなんで四章は終了です。なんといいですか、発展速度が非常に遅いことに罪悪感を覚える今日この頃です。お付き合いしてくださる方々には感謝にたえません。

五章では無節操にばら撒いた優等生君のフラグを回収したいと思います。恋愛？ 何それ美味しいんですか？ な展開です。

## 五限目(その一) 振り振られは恋愛の常です

自分が不幸だと思ったことはなかった。

そもそも何が幸福なのがわからない。親に捨てられる子供なんてよくいるし、親の記憶どころか顔すら覚えていないのは、むしろ幸せな部類に入るのではないかと思う。絶対的な信頼を寄せる者に裏切られる痛みを味わわずに済んだ。信頼も何も最初から何もないのだから失いようもなかった。

不幸なのは中途半端に愛情を知ってしまった方だ。朝起きて「おはよう」と言ってくれる肉親。自分だけを見てくれる存在。失った時の絶望は想像を絶するものだろう。光満ちた世界からいきなり真っ暗闇に放り投げだされるようなものだ。なまじ明るさを知っているだけに闇の深さに耐えられなくなる。

そういった哀れな子供が施設に仲間入りする様を涼は何人も見てきた。自分の境遇を恨んだことはない。他の子が何故悲んでいるのか理解できなかったぐらいだ。

だから、小学校の授業参観に誰も来なくても、運動会で応援してくれる人がいなくても、当然だと受け止めていた。要するに、長いこと闇の中にいたので慣れてしまったのだ。

しかし、すぐ隣にいるクラスメイトが親の悪口に花を咲かせている時、手作り弁当を当然のように食べている時、どうしても胸がぽっかりと空いたような気になってしまう。

どうして。

失ったものなど何一つとしてないはずなのに、喪失感が込み上げてくる。

どうして、自分には親がないのだろうか。

結局、傷つけてしまった。

恋愛の常だとはいえ、涼の気分は重かった。天下の好意に気づいていたから、それとなく拒んでいた。彼も自分の想いが受け入れられないことを察していた。だから、諦めてくれるだろうと高を括っていたのだ。有耶無耶にできると。

だが、天下は予想以上に思い詰めていた。結果、優秀な彼にしては余裕も策略もなく直球勝負に出て、涼はバットで打ち返してホームラン。試合終了だ。

悄然と去って行った天下の後ろ姿が忘れられない。

オペラの礼すら言えなかった。

恋愛に限らず、懸けていた想いが大きければ大きいほど、失った際の傷は深くなる。しかし、拒絶する側にだって 捨てる側にだって痛みはある。

そうでなければ、不公平だ。

(その二) だからめげてはいけません

とかなんとか思っていた自分の甘さを、涼がこれ以上ないくらい後悔したのは、月曜の朝になってからだだった。

観賞室を貸し切りにして、本日の授業内容の最終確認。軽くピアノの練習。発声訓練も忘れない。何度やっても授業は緊張する。何が起こるのかもわからない。万全の準備を持って取り組まなければならなかった。

本日のメニューを一通り終えたところで職員会議の時間が迫ってきた。涼はスタンウェイを拭いて鍵盤をしっかりとかけた。緩みかけていたネクタイを締め直して、鑑賞室の扉を開けて 即座に閉めようとした扉の隙間に片手片足が割り込んだ。

「お早うございます、涼先生」

至極真面目な顔で挨拶されても凄んでいるようにしか見えなかった。この状況だと、特に。涼は引きつった笑顔を浮かべた。

「音楽は二限目じゃなかったか？ 気が早いぞ」

仏頂面の鬼島天下は切れ長の目をさらに細めた。

「あんたに用がある」

「私にはない」

「俺にはあるんだよ」

「しかし私にはない」

ドアノブを引っ張るがびくともしない。男子高校生の力、恐るべし。体勢はこちらの方が有利のはずなのに、戦局は拮抗状態だった。

「チケット代なら給料日まで待ってくれ」

「んなケチくせえことじゃねえ」

三万（推定）のチケットは十分高価だと思うが。

「……いろいろ考えた」

何をとは訊くまでもなかった。一昨日の告白がどれほど常軌を逸していたのかをようやく理解したらしい。

「あんたは教師で俺は生徒だ。世間一般では教師と生徒の恋愛は」  
法度。好きだから、じゃ周りは納得しない」

よしよし。涼はドアノブを持つ手をゆるめた。さすがは優等生。  
ちゃんと冷静に考え、反省している。どこぞのバカカップルの二の舞  
にはならず済みそうだ。

「歳の差だつてあるしな」

「うん。こればかりはどうしようもない」

「好きだから仕方ねーだろ、なんて無責任なことは言えねえ。立場  
なんて関係ねえ、とも言えねえな。どうあがいても俺は十七の高校  
生だし、あんたは二十過ぎの教師だ。それ以外にはなれねえ」

「正確には二十三だがな。まあ、わかればいいんだ。わかれば」

「六年差か」

噛みしめるように天下は呟いた。眉間にしわが寄っている。

「面倒だな」

その通り。涼は大きく頷いた。情熱だけで突っ走るには問題が多  
過ぎる。

「先生、悪イ」

「気にすることはない。思春期にありがちな一時的感情だ」

「やっぱりあんたのことが好きだ」

「そうかそうか。それは良かった」

言いかけて涼は言葉を止めた。非常に不適切な発言が耳を通り過  
ぎたような気がした。

### (その三) 根競べです

「なんだって？」

「先生が好きです」

顔色一つ変えずに天下は言った。いつそ清々しいまでの潔さだった。あまりの堂々っぷりに涼は眩暈を覚えた。

「君は二日間何を考えていたんだ」

「先生のこと」

「それはどうも。ついでに自分が生徒であることも、歳の差も、教師と生徒の恋愛がマズいことも考えたわけだ。で、それがどう化学反応を起こしたら結論が一昨日とまるつきり同じものになるんだ？」

「一昨日とは違う。教師と生徒の恋愛がどれだけ大変なのかを考えたら。払うリスクがどれだけデカいのかも考えた。考えて考えて、それでも先生が好きだなあ、って結論に達した」

だから諦めてください、と天下は諭すように涼の肩に手を置いた。危うく頷きかけて涼は首を横に振った。おかしい。絶対におかしい。何でこちらが改めなければならないのだ。

「馬鹿か君は」

「学年首席ですから、それはないと思います」

「天才と馬鹿は紙一重とも言っけどな」

肩に置かれた手をどかす。時計を見れば職員会議の始まる時間だ。

「教室に戻りなさい。そして頭を冷やせ」

「俺は冷静です。二日も経っていますから」

余計悪い。涼は深くため息をついた。

「君はもう少し賢い生徒だと思っていた」

天下は不機嫌そうに鼻を鳴らした。拗ねているようにも見えるその様子に、似非優等生の面影はどこにもない。

「いくら良い成績取っても、いくら親切にして良い奴ぶっても、ご多忙な先生は俺なんか気にも留めませんからね」

その点を突かれては涼としても心苦しい。事実だ。同じ音楽科ならばともかく、普通科の、それも週に二回教えるだけの生徒を全て把握することはできなかった。音楽科主任が言うまで自分が受け持っていた生徒であることにすら気付かなかったのだ。

顔は覚えていた。普通科の生徒であるということも。が、それだけだった。普通科切つての優等生であることまでは知りもしなかった。それくらい、渡辺涼にとって鬼島天下という生徒は遠い存在だったのだ。

「……ようやく近づけたと思ったら、全然進展しねえし」

進むわけないだろ。一生このままだ、と力の限りに思ったが、涼はあえて口にはしなかった。刺激してはいけないような気がした。

「リヨウ先生」

天の助けか、そこで佐久間が現れた。わざわざ迎えに来てくれたらしい。この時ばかりは涼は佐久間に感謝した。たまにはいいことをする。

「鬼島？　なんでここに」

「いや、なに。授業のことでちょっと相談がありました」

涼はそそくさと鑑賞室の鍵を締めて天下から離れた。

「そういうわけで鬼島君、君もそろそろ教室に戻った方がいい」

「先生」

背中に不快感丸出しの声がかかる。案の定、笑顔を装う天下の頬はひきつっていた。

「二限目の授業、よろしくお願いします」

直訳すれば『後で覚えてるよためえ』だ。怖くて目を合わせられない。涼はなんだか泣きたくなかった。どうして自分の周りにはまともな人間が一人もいないのだろう。神様、私は何かしましたっけ？と問いかけたくなる。

しかし、いくら問いかけても誰も答えてはくれなかった。

(その四) 粘り強くいきましよう

何やら物言いたげにしていた佐久間が口を開いたのは、二階の渡り廊下に差し掛かった頃だった。静かな特別棟とは打って変わった喧騒が近づいてくる。

「先日は失礼しました」

何が、と訊ねかけて涼は口を閉ざした。先日とは金曜日のことだろうか。

よりもよって一日の終わりに告白されるとは思わなかった。オペラの最中は大人しかかったので油断しきっていた。その前に、だよもや改札口前で告白されるなんて誰が予想しえよう。

(変なところで抜けてるよな、あいつ)

文武両道の優等生のくせに。

「リヨウ先生？」

怪訝そうな顔で覗き込む佐久間に、涼の意識は現実に戻された。

「あ……何でしたっけ？」

「先日の件です。不快な思いをさせてしまったようで、本当にすみませんでした」

そこまで言われてようやく涼は思い出した。ああ、オペラに行く前にひと悶着あったっけ。誤解した天下が拗ねて帰った一件。大人ぶっていても結局子供なのだ。

「お気になさらないください。私も少々大人げなかったです」

その子供に振り回される自分って一体何だろう。

「それにしても意外です」

職員室が見えてきたところで佐久間が呟いた。

「鬼島と何かあったんですか。前にもお気になさってましたよね」

涼はひきつった笑みを浮かべて誤魔化した。元はと言えば、佐久間と逢香の逢引現場を天下に目撃されたことが原因だ。そうでなければ、もっと強気の態度に出られるというのに。

「まあいろいろありまして。なんとか仲良くといいますが、それなりの関係を築けたわけでして」

向こうはさらに関係を進めたいようですけどね。後半は呑み込んでおく。応じられるはずがなかった。相手は六歳も年下の生徒で、自分は教師だ。天下はそれでも構わないと言っていたが、戯言にしか聞こえなかった。彼は世の中というものをまだ知らないのだ。

世間は冷酷なのではない。ただ、無情なのだ。どれだけ当人が本気だろうと、どれだけ心を砕いても、世間の目にそんなものは映らない。重要なのは生徒と教師が恋愛してはならないという公然の決まりだ。

ふと、涼は我に返った。

何故自分はさっきから鬼島天下のことばかり考えているのだろう。

「……鬼島とは親しいんですか？」

交際申し込まれました。断りました。でも諦めないそうです。

「いいえ、それほどでも。顔を合わせたら雑談をする程度です」

「珍しいですよ。彼は愛想がないわけではありませんが、これと違って親しい教師もいませんし。なんと言いましょうか……どうも一線ひいている節があります」

やはり佐久間も教師だった。天下の似非優等生に気付くまでには至っていないが、かすかな違和感は抱いているらしい。

「できればリョウ先生のお力を拝借したいのですが」

遠慮がちだったが断れる雰囲気ではなかった。逆に怪しまれる。

「そんなに親しいわけでもありませんよ」

念を押したがどこまで聞いているのか。佐久間は頷きつつも結局は「お願いします」と頭を下げた。

(その五) 話は簡潔にしましょう

全ての授業が好き、という人間は滅多にいないだろう。

涼の場合、数学はそれなりに好きだったが、科学は正直苦手だった。原子記号は呪文にしか聞こえなかったし、化学式に至っては理解しようとする気力すら湧いてこなかった。授業中もひたすら時間が過ぎることを待っていた。高校生までは。

音大に入ってしまったえば科学からは解放された。必修科目でなければ嫌いな講義を取る必要もなくなり、ずいぶんと自由にやってきた。つまり

大学を卒業し、教師になってから再び同じ気分を味わう羽目になるとは夢にも思っていなかったのだ。

それも、涼が一番好きな科目で。

(……帰りたい)

伴奏をしつつ、涼は心底願った。チャイムは。授業はまだ終わらないのか。

試験で歌うかもしれないと言っておいただけあって、生徒たちは真面目に歌っている。もともと音楽が好きで選択した生徒達だ。授業にも積極的に参加してくれるし、やりやすかった。ただ、一人を除いては。

唯一の例外、鬼島天下は始終鋭い視線をこちらに投げかけている。その威力たるや、蛇を遙かに凌ぐ。肉食獣だ。隙があるうがなかるうが、とにかく獲物を喰らうつもりだ。

致死量に近い殺気を受けつつも、涼は平静を装い授業を続けなければならなかった。これを拷問以外になんと呼ぶ。

チャイムが鳴った瞬間に、涼は安堵のため息を漏らしそうになった。が、すぐさま危機が去っていないことを悟った。皆、足早に鑑賞室を出ていく。当然だ。彼らの教室は向こうの棟、それも三階だ。早く戻らなければ授業に遅刻する。

にもかかわらず、悠然と着席している生徒が約一名。

(あれ？ 事態が悪化してないか？)

天下は頼杖をついてじつとこちらを見ている。ただでさえ切れ長の目はさらに細まり、凶眼と化していた。最後の生徒が扉を閉める音が、死刑執行の合図に聞こえた。

「……授業のことで相談、ですか」

底冷えするほどドスの利いた声。丁寧語なのがまた恐ろしい。

「拳句、あんな野郎にホイホイついていきやがって」

「仮にも教師だ。言葉には注意しなさい」

「見境もなく鑑賞室で生徒相手に盛った佐久間先生が、よほどお好きなようで」

嫉妬深い。彼と付き合う女性は苦勞するだろう。涼は顔も知らない未来の交際相手に同情した。ため息が出る。

「生徒に告白されました。私は断りましたが懲りもせずにもまた告白してきやがりました。今度は私に『諦める』とまで言ってきました、って馬鹿正直に言った方が良かったか？」

言葉に棘があるのは自覚していた。しかし躊躇するわけにはいかない。天下の片眉が跳ね上がった。

「そう言われた方がまだマシだったな。少なくとも野郎が邪魔してくることはなくなる」

「だから先生と呼びなさいと何度言っ」

「教師扱いしてほしかったら、教師らしい振る舞いをしやがれ」

吐き捨てるように天下が言い放つ。

「どうせまた頼み事でもしに来たんだろ？ 矢沢とのデートでアリバイ作りにも協力しろだのなんだの、他人を何だと思ってんだ」

涼は少々意外だった。想像以上に天下は聡い。佐久間を嫌うのも子供染みた嫉妬だけではなく、彼の卑怯な点を見抜いていたからだ。いや、卑怯というほど酷くはない。少々ずるいだけだ。大人はそれを『世渡りが上手い』と言う。そんな些細な処世術も許せないところは、いかにも青年らしい潔癖さだが。

前置きをいくらしても無意味であることを涼は悟った。直球でい  
くしかない。

「半分正解だ。佐久間先生に頼まれごとはされた」

ほれ見ろ、と言わんばかりに天下は鼻を鳴らした。涼はファイル  
からプリントを取り出した。佐久間から預かったものだ。

「それでも彼は教師だ。そして君の担任でもある」

天下の眼前、机の上にそれを叩きつけた。

(その六) 詮索にも限度があります

いろいろ小難しいことが書かれているが、内容は単純だ。ご息女のご息女の修学旅行参加の承諾。保護者のサインを貰えばいい。形式的な書類だった。

「二年一組では君だけだそうだ」

天下は憮然とした顔で承諾書を一瞥した。

「明日持つてくる、って俺は言った。んなことをあんたに頼んだのかよ」

口調には呆れの色が濃い。確かにそれだけだったら大したことではない。形式的なものだし立場上推奨するわけにはいかないが、誰かに代筆してもらおうことだってできる。担任でも普通科教師でもない涼の出る幕はなかった。

「誰からサインを貰つてくるつもりだ」

「保護者なら誰でもいいんだろ？ 適当に」

「電話したってさ、君の家に」

承諾書に片手を置いたままの状態で、天下が硬まった。

「掛けた先は鬼島なのに、君のことを聞いてもわからなかったそう  
だ」

名前すら知らなかった。始終「どなたですか」の一点張り。嘘をついているようにも聞こえず、しかし間違いなく『鬼島』家なのだ。佐久間が頭を抱えても無理はない。おいそれと本人に訊けることもなかった。

三者面談の日が思い起こされた。天下のことを一切匂わせずに帰宅した父親。聞こうともしない母。自然であればあるほど違和感は大きくなった。

鬼島天下はどこにいる。

「佐久間先生も驚いたってさ。事情を聴くにも、君はどうも家庭に  
関しては口を閉ざしがちになる。それとなく聞いてみてほしいと頼

まれた」

「それとなく？」

天下は薄く笑った。

「直球じゃねえか」

「あいにく変化球は得意じゃないんだ」

自分ほど説得や交渉事に向いていない人間はいないと涼は思う。変な理屈をこねまわすし熱意がないし、何よりも短気だ。佐久間の人選ミス。同じ渡辺でも英語教師の渡辺民子に頼めばもっと上手くやっただろうに。

「先日、君の自宅前まで行った時も様子がおかしかったな」

天下は顔を上げた。高校生とは思えないほど伶俐な美貌に酷薄な笑みが張り付いていた。

「だから？」

紡ぐ言葉は突き放すかのように冷たい。が、もつともだ。鬼島天下の家庭事情なんぞ渡辺涼には関係がない。仮に天下が修学旅行に行けなくなったとしても涼には何の関わりもない。ただの教師と生徒とは、そういうことだ。

「このままだと皆で楽しく修学旅行じゃなくなる。少なくとも佐久間先生の気は晴れないだろう。どうして君の家に電話したのに、相手は君の存在すら知らないのか。正直に話すか、佐久間先生の掛け間違いで通すか、もしくは」

涼は天井を仰いだ。

「佐久間先生の納得する言い訳を適当に考えるかのどれかだ。好きに選べばいい」

言うてから、もっと踏み込むべきなのだろうかと考えた。涼自身詮索されるのは好きじゃない。だから他人の詮索もしない。どんなに疑惑が頭をもたげても、だ。それが自分で決めたスタンスだといえ、教師としてはお節介の方がいいのかもしれない。

「実は母親が違っんです」

唐突に天下が言った。

「父には愛人がいまして俺はその子供なんです。だから暮らしている場所も違いますし、三者面談にも母は来ません。父は俺のことを必死に隠して四大家族の平和な暮らしを守っているんです」

恐ろしいほどに淡々とした口調だった。他人のことを話す時でさえ、ここまで平坦にはならないだろう。

(その七) 無関心過ぎるのも問題です

「 というので、どうでしょうか? 」

澄ました顔で天下が訊ねてくる。涼は肩の力が抜けた。

「 昼ドラならありえる展開だな 」

「 現実味には欠けるか 」

「 私が家族に内緒で隠し子を育てるんだったら、学校側に提出する電話番号も住所も隠し子が現在住んでいる場所にするね。間が抜けている 」

天下は口元に手を当てた。しばし思案に暮れて、指を鳴らした。

「 じゃあ、こういうのは? 母親は俺を忌み嫌っていて、憎しみが募るあまり存在そのものを抹消してしまった 」

「 逆に覚えていそうなものだがな。それに、憎むには相応の理由が必要だ 」

「 興味がないだけだ 」

「 他人のふりをするのも結構大変じゃないのか? どんなに仲が悪くても興味が欠片もなくとも学校側には何事もないように振舞うのが普通だ。大人には体面つてもものがあるし現に、君とお父さんはそうしている。でも君の、 」

「 行かないっていう選択肢もあるよな 」

涼の言葉を遮り、天下は承諾書突き返した。

「 そうすりゃ保護者のサインも必要なくなる 」

「 一人登校して課題プリントをひたすらこなすだけだぞ。もちろん、今まで積み立てた分の返金はない 」

「 別に構わねえよ。あんたが監督ならな 」

二年生を担当する教師はほぼ全員修学旅行に駆り出される。逆を言えば担当以外はほとんど残る羽目になるということだ。どちらにしても面倒だ。

「 残念でした。先生は一緒に行きます。君の監督はできません 」

虚を突かれたのか天下の顔が間の抜けたものになる。一瞬の出来事にしかし、涼は少なからず優越感を抱いた。喰えない生徒に一矢報いたような気分になる。

「サイン一つのために断念するなんて、もったいないとは思わないのか。私としては君が何食わぬ顔で修学旅行に参加してくれれば文句はない。佐久間先生には私から言っておく。とにかく、サインを貰ってくるなり偽造するなり上手くやれ。得意だろ？　そういうの」

どうしても言いたくないのならそれもいい。適当に誤魔化してサインを貰って承諾書を提出すれば済む話だ。天下が何を隠しているのかはわからないが、はぐらかそうとしていることだけは理解できた。なら、これ以上詮索する必要はない。教師といえど複雑な家庭事情に首を突っ込む権利も義務もありはしないのだ。

天下は承諾書の一点を凝視し、やがておもむろに口を開いた。

「先生が抱かせてくれるならいいですよ」

三限の授業開始を告げるチャイムが鳴った。間延びした、いささか力の抜ける音は相変わらず。これで五十分間真面目に勉強しろというのだから、学校も無茶を言う。せめて曲でも流せばモチベーションも変わるだろうに。

つらつらと取りとめのないことを一通り考えてから、涼は改めて訊ねた。

「何だって？」

「抱かせてください。そしたら承諾書のサインもちやんと貰って来ますし、なんならどうしてそんな奇妙なことになるのか、説明してもらい」

(その八) 可愛げのある冗談にしましょう(前書き)

【警告】

今回、教育上不適切な発言がございます。人によりけりですが、苦手な方は戻ることをお勧めいたします。程度で言えば「電車の中で耳にしたら吹き出す」レベルです。間違っても以下のようなことを公共の場で口にしないでください。モテなくなります。

(その八) 可愛げのある冗談にしましょう

抱く　ああ、そうか。天下があまりにも真面目な顔で言うものだから、涼は自分の発想が飛躍しているのだと解釈した。

「ウチになら肉球クッションがあるけど、今はない。明日でよければ持ってくる」

「先生を、だよ。直接的表現を使うなら『やらせてください』」  
眉一つ動かさずに平然と天下は言う。

「別の言い方をすれば、情交、密事、セックス、契る、まぐわう、手折る　まあ、どう言葉を繕っても結局は一緒だけだな。要するに『突っ込ませてください』ということですよ」

涼は果てしない眩暈に襲われた。悪夢だ。早く醒める。醒めてくださいお願いします今すぐに。いや、むしろ意識を飛ばして無かったことにしたい。

本能的に危険を察知した身体は天下から大きく離れた。  
「落ち着け。とにかく待つ、ちよっ……れ、冷静になろう」

自分でも何を言っているのかわからなくなってきた。額に片手を当て、もう片方の手で天下を宥めた。本当に目の前にいる生徒は普通科が誇る優等生か。至極真面目な顔をしておきながら口からは教育上不適切な単語が飛び出してくる。

一概に端整といっても、天下は硬派な顔立ちをしていた。鴉の濡れ羽のような黒髪に映える白皙の肌。少々日に焼けてはいるもの、なめらかな頬を持つ彼は色男である反面、ストイックさを持っている。交際相手と仕事を秤にかけるとすれば、間違いなく仕事に傾く。そして「冷たい」と非難されて別れる羽目になるようなタイプでもあった。

そんな彼の印象を遙かに裏切る発言。これで冷静になれと言う方に無理がある。

「早まるな。まだ若いんだからやり直しはいくらでも」

途端、天下が大きく吹き出した。肩を震わせ笑いを洩らす。切れ長の目尻には薄らと涙が浮かんでいた。

「本気にしました？」

涼の頭は一瞬にして沸騰した。怒りのあまり耳鳴りがするなんて初めてだ。握り締めた拳が小刻みに震えた。少しでも本気にした自分の愚かさを露呈されたようで、いたたまれなかった。

「……授業時間はもうとつくに過ぎてる。早く帰れ」

押し殺したつもりでも怒気は漏れていたのだろう。天下は笑みを引っ込めた。

「何だ。怒っているんですか？」

「怒ってない。だから出ていけ」

「先生が言っただろ。生徒は対象外だって」

その通りだ。だからこの怒りは天下に対するものではない。彼を責めるのはお門違いだ。わかつている。そんなことは。

「何度も言わせるな。教室に戻りなさい」

半ば強引に天下を追い出して、涼は鑑賞室の鍵を閉めた。息をするのも苦しい。崩れ落ちるように絨毯の上にへたり込んだ。止まらない。手の震えも嗚咽も。

恥ずかしい。情けない。いたたまれない。涼の胸を占めるのはそんなものではなかった。ただただ怖かった。母と同じ轍は踏まないと自ら厳しく律してきたつもりだった。だが、現にこうして揺らいでいる。どうして、何故、流されればどうなるか骨身に染みて理解しているはずなのに。

自分自身が恐ろしかった。身体の中に流れる血は、涼にとって恐怖以外の何物でもなかった。自分を捨てた母と同じ血。つまりそれは。

すなわち、同じ過ちを犯す可能性を秘めていることだった。

(その九) お節介は教師の性です

「落ちましたよ」

優しげな声。ハンカチを拾い上げる仕草は優雅でさえあった。くつきりとした一重の瞼。影を落とす長い睫毛。品のよいバランスで保たれている唇と鼻。しみ一つない肌。やはり親子だ。どこことなく繊細な所が天下に似ていた。

涼は可能な限り友好的な笑顔を取り繕って、ハンカチを受け取った。

「ありがとうございます」

天下の母 鬼島美加子は如才なく応じた。人見知りするタイプではなさそうだ。これ幸いに涼は買物カゴを覗き込んだ。

「ずいぶん買われるんですね」

「育ち盛りが二人いるもので」

二人。鬼島家は三兄弟のはずだ。

「へえ……高校生ですか？ それとも中学生？」

「上の子は来年高校です。今は受験で大騒ぎ。希望のところに入ればいいんだけど」

難しいものですね、と微笑む。嘘をついている様子はなかった。ますますわからない。天下愛人の子説が涼の脳裏をよぎった。それとも本当にすつとぼけているだけなのだろうか。

天下の父 鬼島弘之が現れたのはスーパーを出た後、涼がこの近くの高校で教師をやっていることを明かした時だった。

「あら、あなた、早いわね」

呑気なのは美加子一人だ。弘之は相も変わらず険しい顔をしていたが、その目は如実に涼の存在を望んでいないことを示していた。負けじと涼も睨み返す。眼光の鋭さでは及ばないかもしれないが、状況的には涼の方が優位に立っていた。

弘之には、他人に知られては困ることがある。その秘密の近くに

涼は寄つてきたのだ。スーパーで美加子と会つたのは偶然などではない。そして、弘之が現れるのも計算の内だ。さらに「先生っ」

どこからともなく天下が駆け付け、涼の腕を取った。これも予想の範囲内。

「やあ鬼島君、奇遇だな」

「冗談はやめろ」

腕を掴んだまま、天下は力づくで涼をその場から離れさせた。その際、ほんの一瞬だが弘之と目で会話したのを涼は見逃さなかった。心配するな。あとで連絡する。言葉にすればそうだろう。涼は抵抗もせず天下に引きずられてやることにした。

「連れが現れたので、この辺で失礼いたします。ご主人とご子息によろしくお伝えくださいませ」

一人蚊帳の外に置かれた美加子は戸惑いながらも「え、ええ……」と返答した。天下の姿を見て動揺、なんて様子はなかった。

(その十) 毒を食らわば皿まで、です

スーパーから離れ、商店街の外れにある公園まで来てようやく天下は足を止めた。

「あんた、何してんだよ!？」

怒気に満ちた形相で詰め寄ってきた。しかし、胸倉掴んで問い詰めたのはこちらの方だ。涼は悪びれもなく答えた。

「夕飯の買い物。さっきの女性とは偶然会った。話が弾んでない。いろいろ聞いた。来年高考受験を控えた長男と、サッカーに燃える二男の四大家族だそうだ」

天下は盛大に舌打ちした。

「嫌がらせかよ。手の込んだことしやがって……っ!」

「何度も言わせるな。変化球は苦手なんだ。君に聞いたけどまともに答えてくれなかった。なら本人に聞くしかないだろ」

「だから、どうして、他人の家庭事情に首突っ込んでくるんだ。ただのお節介じゃねーか。迷惑なんだよ」

心外だ。涼は腕を組んだ。

「私には首突っ込んでほしそうに見えた」

あんな出来事があつても、六限が終わる頃には涼は冷静さを取り戻していた。ついでに考える時間も十分にあつた。結局、鬼島家が何を隠しているのかはいくら考えてもわからなかったが、一つだけ気付いたことがある。天下のことだ。

彼には、他人の心を試したがる癖がある。

それが意識的になのか無意識なのかはわからない。が、天下は少なくとも涼に対しては恋慕と同時に疑念を抱いている。だから試みるのだ。

例えば先日のおペラの一件。あれは佐久間と涼が二人で会っているのを見て気を利かせたというよりは、涼がどちらを選ぶのかを確かめた、と取れる。今朝の一件にしてもそうだ。挑発的なことを言

って涼の神経を故意に逆撫でした。まるで、どこまでなら赦されるのかを量るかのよう。

鬼島天下は普通科が誇る優秀生徒だ。故に教師たちの覚えも良く、生徒らの人望も厚い。だから思ってしまう。もしも、優秀生徒でなかったら。自由奔放に、我儘に生きていたら、果たして自分は認められるのだろうか、と。

好かれないと願っているながら涼にさえ試みてしまうほどに、彼は猜疑心を抱いている。

裏を返せば、天下は今まで無条件に愛されたことがほとんどない、ということだ。

「まだるっこしいのは嫌いなんだ。ほれ、さつさと吐いてしまえ」  
眉間に皺を寄せる天下に低く耳打ちしてやる。

「戻ってお母様とお父様に訊いてこようか？」

彼の急所だ。それを知っているながら突く自分の鬼畜ぶりに自分で呆れた。

「てめえ……それでも教師か」

天下が目を眇めた。高校生とは思えない凄みがある。気圧されそうになる己を叱咤して涼は不敵に微笑んだ。睨み合うことしばし、先に折れたのは天下の方だった。

「お袋に訊いたって、わかりやしねえよ」

「じゃあ、父上殿ならわかるのか」

「お袋以外ならな。親父も統も一も知ってる。お袋だけなんだ」

「何をだ」

天下は短く息を吐いた。

「俺が中学の時にお袋が交通事故に逢ってな。まあ、見ての通りちやんと回復したんだが、一つだけ戻らなかったものがあった」

何だと思う？

視線で問われても涼は答えることができなかった。美加子が何かを失っているようには見えなかった。良い家族に囲まれて充実した生活を送っているようにさえ思えた。

「俺の記憶。どついつわけか俺のことだけ覚えていなかった。旦那は鬼島弘之。長男は統で、その下は一。そう思い込んだ」

(その十一) 毒だけで十分な場合もあります

天下は薄く笑った。何かが抜け落ちた笑みだった。

「病院行つた時はさすがに驚いた。お袋さ、俺を見て『お見舞いで  
すか?』とか笑顔で聞いてくるんだ。同室の誰かの親類だと思ひ込  
んで疑つてもいなかった。最初は、事故のショックで記憶が混乱し  
てんだろ、とか軽く考えてたけど、全然変わんねーんだ。何度会つ  
ても俺は余所の子で、自分は四人家族だと思つてる」

「カウンセラーは? 専門医に診せたのか」

「退院する前に二、三回。原因は事故で間違いはないらしい。一種  
の記憶喪失だつてよ。明日戻るかもしれないし、一生戻らないかも  
しれない。でも、俺のこと以外はいつも通りなんだ。普通に起きて  
うるさく勉強のこととかに口を挟んで、入院してる自分のことより  
も家族の飯のことを心配して 何も変わつてなかった」

そう語る天下の口調は淡々としていた。相反するように目は遠く  
を見ている。涼はその眼差しに既視感を抱いた。養護施設にいた皆  
が時折、こんな目をしていた。仕方ない。どうしようもない。遙か  
遠くを望み見ながらも諦めてしまった眼差しだ。

涼は胸が焦がれるような痛みを覚えた。

「それで、家を出たのか?」

「家に他人が上がり込んでたらマズいだろ。ちよつど受験も終わつ  
た頃だったし、お袋が落ち着くまで一人暮らしすることにした。親  
父は反対したけど、結局は」

そこで天下のケータイが鳴った。「悪い」と一言断つてから耳に  
当てる。

「こつちは大丈夫だ。お袋は?」

察するに父親殿だろう。天下は落ちついた様子で通話していた。

「……そうか。悪かった。仕事あるのに」

おいおい。何を謝っている。涼は自分の不快指数が増していくの

を感じた。どんな会話が繰り広げられているのかが察せるだけに、その上昇率は半端ない。

「俺は平気だよ」

どこがだ。

「心配すんな」

ちよつと待て。なんで強がっているんだ。

「必要ねえよ。こつちでなんとかする」

(これが、高校生が親とする会話か?)

涼は頭痛に近い憤りを覚えた。「冗談じゃない。全然平気でも大丈夫でもないだろうが。」

天下からケータイを奪い取り、相手に罵声の一つでも浴びせてやりたかった。が、当人が納得している以上、涼に口出しできることではなかった。自分は、天下の担任でもない。ただの音楽教師だ。

「……わかった」

苦々しい顔で天下は頷くと、通話を切った。

「親父が、あんたと話がしたいとき」

「私は話すことがない」

涼は素っ気なく言い放つと踵を返した。所詮、自分は天下とは何のかかわりのない教師だ。口止めなどする必要はない。

「悪かったな。余計なお節介をして」

捨て台詞を残して公園を後にする。明日、佐久間には無理だったことを伝えよう。佐久間が引き下がるのならそれでいい。納得せず自ら調べ出しても別に構わない。勝手にすればいい。

離れば離れるほど焼けつくような焦燥感はむしろ激しさを増していた。だが、どうでもよかった。関係ない。鬼島家の事情など。天下など、涼の知ったことではなかった。

(その十二) 無責任と無関心は同罪です

女性誌は何故こんなにも分厚いのか。「キunksンキunksン」の表紙をめくると涼が生まれ変わったってなれないような美女が新作のジャケットを着てポーズを決めていた。信じられない。これで歳下か。そして日本人か。

「やっぱりピンクよね」

遙香が「ネネ」のページを指差す。必要以上に開いた胸元とりボンが特徴のワンピースをこれまた高校生とは思えない女性が完璧に着こなしていた。

「……まさかとは思うが、修学旅行に着てくるんじゃないだろうな」京都を闊歩するワンピース姿の遙香を思い浮かべ、涼は恐ろしくなった。場違いにも程がある。古の都を一体何だと思っているのだろうか。

「これくらい普通ですよ」

「君達と教師陣の価値観には相違がある。別にこっちに合わせるとまでは言わないが、服装指導をされることは覚悟しといた方がいい」

「着るものにまで口出すんですか？」

「京都行つてまで」

「外に出るからこそ、周囲の目に気を配るんだ。学校のイメージに関わる。修学旅行だからって羽目を外されるわけにはいかない」

涼は「キunksンキunksン」を閉じた。音楽科準備室には現在、他の教師はいない。皆部活の指導やら出張やらで席を外している。それを幸いに遙香は恵理の机に雑誌を広げ、本人曰く「勝負服」を選んでいる。

服選びなら教室で同級生達と盛り上がればいい、と涼は思つのだが、遙香にはそれができない理由があつた。

「佐久間先生はどんなのが好きだと思います？」

意見を求められても涼はファッションに明るくない。佐久間の好みを知るほど親しくもない。が、わざわざ訪ねてきた遙香の手に少しでも報いてやろうと、無い知恵を絞った。

「可愛い系、だと思う」

高校生と交際するくらいだ。少なくとも知的美人ではないだろう。

「じゃあピンクね」

遙香は機嫌良く雑誌をめくった。ころころと変わる表情は見えて飽きない。我儘な妹を持った気分させた。

一応、佐久間との関係は秘めているため、遙香は涼の前でしか佐久間の話ができない。音楽科準備室にまで押し掛ける理由がここにあった。涼の都合など構いなしの所は自分勝手でもあるが、同時に健気でもあった。それでも彼女は佐久間との関係を投げ出さずにいる。

比べて自分はどうかだろう、と涼は思った。

危ない橋は渡らない。必要以上に首を突っ込もうとしない。拒まれたら身を引く。何かが間違っていると気づいていても。途中で投げ出すような無責任にはなりたくはないから。

しかしそれは無関心だ。

天下が傷ついているのも見ないふり。鬼島家が歪んでいるのも見ないふり。無責任にならないかわりに、涼は非常に無関心になった。傷口を目の当たりにしながら医者ではないことを理由に逃げ出すのと同じだ。それは、途中で放り投げることよりも冷酷な仕打ちではないか。

「今日は佐久間先生とデートじゃないのか？」

「なんか修学旅行のことで打ち合わせがあるらしいですよ」

時計を見る。午後五時。会議なんて聞いていないとすれば、心当たりは一つしかない。鬼島天下だ。佐久間は彼の扱いに困っていた。承諾書のサインもまだなのだろう。個別に呼び出して、事情を問いただしているのだろう。必死に平静を装い、はぐらかす天下の姿が脳裏に浮かんだ。

(またあいつ一人が責められるのか)

ああ畜生。涼は胸の内誰にともなく罵倒した。どうして消えてくれない。どうして彼は自分の前で傷を曝け出した。どうして

涼は席を立った。

どうして放っておけないのだろう。

(その十三) 突き進むしかありません

担任から天下の父親のケータイ番号を聞き出した。当然佐久間は怪訝な顔をしたが、遙香の件を持ち出せば逆らうことなどできない。それを見越して涼は佐久間に訊いたのだ。

仕事からしく鬼島氏のケータイは留守番電話に切り替わった。怯むことなく涼はメッセージを残す。自棄に近い勢いが涼にはあった。一度我に返れば立ち止まって、進めなくなる。ならば迷う暇もないくらい突き進めばいい。

鞆を取り、ネクタイを締め直し、学校を後にし、そして涼は駅前の喫茶店にいる。運ばれてきた紅茶には手もつけずに、店内を流れる旋律にひたすら意識を集中させた。二つのヴァイオリンで編み込むように作りだされる厳格なバッハのドッペル・コンチエルト織細で、そして荘厳でありながらどこか物悲しかった。

レパトリーを一周して二度目のバッハを聴いている時に、待ち人は現れた。

「お待たせしました」

スーツ姿。会社から直接来たのだろう。さしずめ飲んで帰ってくるだの言い訳して。鬼島氏がウエイトレスに注文を終え、コーヒーが運ばれてくるまで涼は一言も喋らなかつた。

「驚かれたことでしょう」

鬼島氏は言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「息子から説明があつたかもしれませんが、家内は記憶を失つておりまして。事故以来ずっとあの調子なのです」

「二年前、ですよ。記憶が戻る兆しもないと伺っておりますが」「綺麗さっぱり抜け落ちているんです。本人の前ではとても言えませんが、こちらまで四大家族だったのでとふとした瞬間に思つてしまうほど、自然なんです」

沈痛な面持ちで鬼島氏のため息をついた。

「息子が家を出るのも当然です。耐えられないでしょう」

涼の中で悪魔が囁いた。本当にそうか？ 逃げ出したのは本当に天下なのだろうか。

鬼島氏は嘘をついてはいない。鬼島美加子は事故で記憶を失った。天下の存在だけを。記憶が戻る気配もないので仕方なく天下は一人暮らしをしている。鬼島氏は細君の記憶が戻ることを願って日々を過ごしている。間違いはないだろう。そう、偽っているわけではないのだ。

ただ、一番重要な部分を隠している。目を逸らしているだけだ。

涼は冷め切った紅茶を一口飲んだ。

「どなたにも喋るつもりはありません。ご心配なく」

「ありがとうございます」

別に、あなたのためではありません。

深々と頭を下げる鬼島氏に言っただろうかと思っただが、涼は口を閉ざした。鬼島氏のためではないのならば、一体誰のためだろう。佐久間と遙香の時とは全く事情が異なっている。天下のため、とは言い難かった。

仮に秘密を守り続けたとして、それが天下にとって良いことなのかかわからない。

「どうするおつもりですか」

鬼島氏が眉をしかめた。

「これからもずっと奥様の勘違いに家族全員が付き合っんですか？」

(その十四) 限度は守りましょう

背後で人が座る気配がした。声を忍ばせるべきだろうかと涼は一瞬考え、結局やめた。聞かれても困るのは鬼島氏だ。落ち着かせる意味も込めて涼はティーカップに触れた。ひんやりとした感触は苛立った気持ちを幾分静めた。が、怒りが収まったわけではない。

「記憶を失った奥様に非はない。貴方のせいでもない。誰も悪くはない。では、どうして彼一人が全部負っているんですか。おかしいですよ。昨日あなたがタイミング良くスーパーに現れたのも、天下君から連絡があったからでしょう？ 学校の教師に疑いを持たれたから注意しろとか。そんな連絡をどうして高校生にさせるんですか」  
最初に一人暮らしをすると言い出したのは天下だ。鬼島氏は一応反対した。反対を押し切って貫いた以上、それは天下自身が選んだことであり、彼が責任を負うべきことである。はずがなかった。  
本当に天下の父親でありたいのならば、鬼島氏は何があっても天下一人を追い出すような真似をしてはいけなかった。最後まで向き合うべきだったのだ。天下自身が諦めても、鬼島氏だけは諦めてはならなかった。

陰険だと思いつつも涼は目を細めた。

「鬼島さん、卑怯ですよ。あなたは天下一人を切り捨てて、自分の周りを完璧に囲ってから白々しく『すまない』と形だけ謝ってる。実際は悪いなんて思ってますよ」

「息子には、申し訳ないことをしていると思ってます」

「コーヒーを持ったウェイトレスが両者の傍を通る。『お待たせいたしました』という愛想の良い声を背中できき、足音が離れてから涼は口を開いた。

「嘘です」

「本当です。私は彼の父親です」

「あなたの息子だという理由だけで、天下は抱えなくてもいい秘密

を抱えて生きています。自分を犠牲にしても、あなた方の生活を壊さないために、必死に何の問題もない優等生を演じているんです。そんな彼に、あなたは今まで何をしましたか？」

「どうにかしようとは思っています。今のままで良いはずがありません」

今が最善ではないことは確かだ。しかし、最善である必要もない。それなりに折り合いをつけて生活を送ることはできる。そして鬼島家は無理に折り合いをつけてしまった。そのひずみが全て天下に押し寄せてきたのだ。

鬼島氏の言っていることは詭弁に過ぎなかった。

「心にもない事を口にしなさい。あなたは本気で奥様の記憶を戻そうとは思っていない。今の生活を捨ててまでどうにかしようとは思っていない。ただ、天下の前では格好がつく程度に努力しているふりをしているだけです。転倒を避けて近くにあったものを踏みつけて『ごめんなさい。でも転ぶところだったんだ』と言い訳してるのと同じです。故意であろうとなかろうと、踏みつけられた側が痛みを負うことに変わりはありません。踏みつけた側の事情なんて関係ないんですよ」

故意ではない。だから仕方ない、で済む域を超えていた。悪意がなくても人は傷つけられる。そこに加害者の意思が関与する余地は僅かではない。

今となつてはもうわからないが、母も手放したくて涼を手放したのではないのかもしれない。しかし、そうであろうとなかろうと涼が親に捨てられた事実に変わりはなかった。

鬼島氏はもう否定しなかった。

「何事もないかのように平穩無事に過ごしたい。でも天下には恨まれたくはない。それはズルいですよ、鬼島さん。天下に苦渋を飲ませてでも今の生活を守るのなら、彼に恨まれる覚悟を決めるべきです」

閉ざした口の代わりに目は雄弁に物語っていた。たかが教師だと

いうだけで、何故そこまで責めるのか。関係のないことでしょう。まさにその通りだ。涼は薄く笑った。一体何がたくて説教じみたことを言ったのだろう。やはり自分は説得には向いていないと再認識する。相手を懐柔し軌道修正させるのではなく、弱い点を衝いて徹底的に叩き潰してしまふ。再起不能なまでに。

「適当に詫びて席を立ちあがろうとした時に、背後の気配が動いた。先生」

低いが通りのいい声。反射的に涼は振り向いて言葉を失った。

(その十五) 勢いに乗るのもたまにはいいでしょう

いつからいたのか。学生服のまま、天下は混迷の色を濃くした目で涼を見つめていた。引き結んだ唇がかすかに震えている。開けば溢れだしてしまうのを恐れているかのように、天下はひたすら口を閉ざしていた。触れれば壊れてしまうのではと錯覚するほど、目の前の少年は脆く、危うかった。

「よくわかったな」

「準備室に行ったら矢沢が」

彼女の前で電話したんだ。迂闊だった。雑誌に夢中だったから大丈夫だろうと思っていたがすっかり聞いていたのか。

「首突っ込むなって、言ったじゃねえか」

責める口調は弱々しかった。いつもの覇気がない。涼は周囲に気を配らなかつたことを悔やんだ。天下に聞かせるような話ではなかつた。

「天下」

鬼島氏が呼ぶ声は無視。天下は二百円をテーブルに置いて背を向けた。出入り口まで来たところで立ち止まり、首だけをこちらに向けた。

「みんなによろしくな」

皮肉ともつかない言葉だが、それを告げる天下はひきつったような、ぎこちない笑みをしていた。子供が親を安心させるようと浮かべる微笑み。涼は胸が苦しくなった。

五百円玉を一枚置いて鬼島氏に一礼した。店を出て、帰宅を急ぐサラリーマンや学生の間をぬうように進む。時折見失いそうになる背中にひやりとしながらもなんとか後をついていく。いつぞやの公園にまで差し掛かったところで涼は声をかけた。

「鬼島」

背中が止まった。

「……やけに積極的ですね」

優等生スイッチが入ってしまったようだ。これ以上干渉するなという警告を理解していながら、涼はあえて踏み込むことにした。

「今日だけだ。もともと私はお節介するのもしられるのも好きじゃない」

好き嫌いの問題ではなかった。怖いのだ。相手の領域に上がり込んで傷つけてしまうことも、逆に上がり込まれて自分が傷つくのもだからこんな「お節介」ができるのは勢いに乗っている時だけだ。止まってしまえば、また動けなくなる。

「だから、言うなら今だぞ。全部聞いてやる。君が嫌だというなら忘れる。でも私から動くのは今だけだ」

「今までの鬱憤を、ですか？」

「言って何かが解決するわけじゃない。けど折り合いはなんとかつけられる。少なくとも、気分は晴れるはずだ」

天下は観念したように肩を竦めた。大木の陰に隠れているベンチに座り、その隣に手を置く。座れということらしい。いつもの涼なら応じなかっただろうが、乗りかかった船だ。鞆を間に置いて座った。

「ガキじゃねえんだ。一人暮らしが寂しいなんて思ったことは一度もない。毎日好き勝手にできるから、むしろ親父には感謝してる。俺の我儘に文句も言わず、すまなそうに毎月金払ってくれてるし、必要な時だけ親父面して現れてくれるし」

不満なんかねえよ、と天下は呟いた。涼から見れば恵まれている方でさえあった。しかし、それはあくまでも今の状況が、だ。

「悪い事だとは言っていない。君自身が納得しているなら、他人の私がとやかく口出しするべきじゃない。世界は広いんだ。そういう家族の形があってもいい。でも、」

そう、どんなに合理的で物質的に恵まれているとしても『でも』が付いてしまう。

「でも変だよな。おかしいよな」

涼の言葉に天下は小さく頷いた。

(その十六) それでも責任はしっかりとりましょう

「どうして『俺』なんだろうな。親父でも統でも一でもなくて、どうして俺だけをお袋は忘れちまったんだろう」

一人離れて住む。天下の孤独はそういう物理的なものからくるものではなかった。もっと奥深く、彼の存在そのものからくる孤独だったのだ。

「前に言ったこと、あれ半分本気だった。俺はお袋に嫌われていたんじゃないか。余所のガキなんじゃないか　いろいろ考えて、戸籍まで調べたんだぜ？」

自嘲気味に弧を描く天下の口元。しかし涼は何も言えなかった。出生など関係ない、というのは恵まれた側の言い分に過ぎない。

人は誰しも自ら望んで生まれただけではない。有無を言わずこの世界に産み落とされた。だからこそ願うのだ。せめて望まれて生まれるたい、自分の親にだけは。涼の場合、その願いは叶わなかった。

天下は空を仰いだ。

「でも何にも出てこなかった。俺は鬼島弘之と鬼島美加子の長男、鬼島天下以外の何者でもなかった」

思考は巡り巡って結局、元に戻ってしまう。どうして自分なのだろう、と。

好きで記憶を失ったわけではない。だからこそ、天下は余計に傷ついた。意味もなく、理由もなく天下という存在は母親の中から抹殺された。悪意がないのがより一層残酷だった。彼には責めることすら許されなかった。誰も悪くないのなら。誰にも非がないのなら、何故、どうして

どうして、自分は忘れ去られたのだろう。

天下は悲壮めいた顔をしているわけではなかった。憎悪も怨嗟も軽蔑すらなかった。ただ、冷めていた。見慣れた表情に涼はたまたまなくなつた。胸に占める空虚感の名は知っている。これは、絶望だ。

つい伸ばしかけた腕を、涼はかろうじて押し止めた。

駄目だよめろ。手を差し出すな。頭の中で警鐘が鳴り響く。情に流されればどうなるか、誰よりも涼が知っている。育てられないのなら、どうして生んだ。無責任じゃないか。放り出すくらいなら最初から関わらなければいい。顔も見ない母に向かって何度そう罵倒したか。

だから天下を突き放した。彼の想いを受け入れたら、その先はどうなる？ 涼にはとても責任が持てるとは思えなかった。後先考えずに行動した結果、振り回される周囲の迷惑を涼は十分過ぎるほど理解している。

だから、傷つき途方に暮れた天下に手を差し出すことはできない。満たされるのは涼の自己満足だけだ。わかっている。そんなことくらい。だが、だが

もう限界だった。涼は天下の頭を抱え込んで、きつく目を閉じた。顔なんか見れやしない。抱きしめられる格好になった天下の身体が強張ったのを腕に感じた。

「先生？」

「うるさい」

「誰かに見られたらどうすんだよ。最悪、クビだぞ」

小さく身じろぐ。涼は抱きしめる腕に力を込めた。

「私の知ったことじゃない」

宥める意味を込めて艶やかな黒髪を梳く。やがて天下は観念したように肩の力を抜いた。自嘲混じりに呟く。

「同情か？」

「そつだよ。憐れんでやっているんだ。感謝しろ」

天下の境遇に同情した。それだけだ。そうでなければこんな真似はできない。だって自分は教師で、彼は生徒だ。

「私の教師生命を懸けて同情してる」

天下を抱擁することなどできやしない。憐憫だと思わなければ。

無責任によって何がもたらされるのかはわかっている。しかし、そ

れと同じくらい涼は孤独を知っていた。

躊躇いがちに涼の背中に手が回った。より密着できるよう、天下が腕に力を入れる。その仕草は抱き寄せるといふよりも縋っているようだった。

長く、感嘆にも似た吐息を皮切りに、肩が小刻みに震える。押し殺すような嗚咽。その一つさえも取りこぼすことのないように、涼は殊更丁寧に天下を抱きしめた。

せんせい。

低く掠れた声が空気を震わせた。頭の中で鳴り響いていた警鐘はもう聞こえない。

(その十六) それでも責任はしっかりとりましょう(後書き)

恋愛と分類すること自体間違っている拙作をお読みいただきまして、まことにありがとうございます。今年度は明日の更新を持って終わりとさせていただきまます。再開は1月10日を予定しております(予定は未定)。

本編は上記の通りなのですが、31日に番外編なるものを期間限定で公開しようかと画策しております。あまりにも本編に甘みがないのでその救済策になれば幸いです。が、今更ながら私め、小説はそれなりに書いて参りましたがこと恋愛になると完全なる若葉マークですので、恋愛要素入りの小説を書いた日にはいたたまれなくなること間違いありません。ですので、10日までの限定公開とさせていただきます。だったら最初から書くなと言いたいところなのですが、いつまでも恋愛から逃げていたら何一つ成せないのここは一つ恥をかき捨てて挑む所存です。

長々と失礼いたしました。

(その十七) 万全を期しましょう。(前書き)

【警告】冒頭からとんでもない展開になっております。十五禁の意  
味をよく噛みしめて、冷静になつてから視線を下ろしてください。  
不快な思いをなされても残念ながら当方は一切責任をとることはで  
きません。

(その十七) 万全を期しましょう。

その後はもう急転直下だ。どちらともなく見つめ合い、接吻を一つ。唇に触れるだけのキスはやがて深くなり、互いの舌を絡め合うほどの濃厚なものになる。

二人手をつないだまま、天下の自宅へ行き、雪崩れ込むようにベッドに倒れ込んだ。理性も倫理も吹っ飛ばしてただ快樂に身を委ね、互いの体温だけを感じる。文明が発達しても変わらない原始的で野蛮な行為、だからこそ気持ち良かった。余計なものが何一つついていないのが、たまらなく心地よかった。しがらみからの解放感。後に残るのは愛しさだけだ。

とまあ、ここまでは三流フランス映画ならありうる展開だ。

しかし残念ながらここはフランスではなく日本で、これは映画ではなく小説だった。

実際は天下が落ち着いたところで離れた。駅まで言葉を交わすことなくただ並んで歩いて、同じ電車に乗って、涼は先に降りた。その際に何か声をかけてやるべきかと考えたが、気の利いたセリフが

浮かんでこなかったので結局無言で別れることと相成った。アパートに着く頃には、先ほどまでの自分の行いが脳裏でエンドレスでリピート再生され、様々な意味で涼はぶっ倒れそうになった。

天下の母が奇跡的に記憶を取り戻すこともなかったし、鬼島氏が心を入れ替えて天下を追いかけにくることもなかった。涼一人が動いただけで劇的に変わるくらいなら、最初からそうしている。涼が本腰を入れて向き合っても、天下を取り巻く状況は大して変わらなかった。

しかし、変わったものはあった。

翌々日に天下が修学旅行の承諾書を提出した旨を涼は佐久間から聞いた。鬼島氏のサイン入り。修学旅行にもちゃんと参加すること。一体どういう心境の変化か、涼が興味に駆られて訊いてみれば、天下はいつもの優等生顔で答えた。

「約束しましたから」

意味をはかりかねて涼は眉を寄せる。天下は人の悪い笑みを浮かべた。

「抱かせてくれましたよね？」

十秒ほど。涼の思考は停止状態に陥った。機能回復と同時に頬が紅潮していくのが自分でもわかる。あれは冗談にもならない戯言だったはず。

「いや、違うだろ」

「確かに俺が期待してたものではありませんでしたが、今回は譲歩します」

「次なんてない。進展もありえないからな。だいたい、忘れると言っただじゃないか」

「先生が忘れるのは自由です。でも俺は忘れませんよ」

忘れる今すぐ。涼は一昨日の自分をぶん殴りたくなった。安易な同情は身を滅ぼすということを失念し、うっかり天下を衝動のままに抱きしめてしまった。これでは佐久間達と同レベルではないか。

「三泊四日ですよね」

「あ、ああ」

「しおりによれば、自由時間がたくさんあるそうですね」

「羨ましいよ。教師に自由な時間なんてない」

「でも就寝時間後は空いてますよね？ 夜は長いんですし」

不穏な気配を感じ取った涼がドアノブをひねる前に、天下は扉に手を置いた。逃がすつもりはないらしい。恐る恐る顔を上げて涼は激しく後悔した。

凄みを帯びる笑顔で天下は低く告げた。

「逃げんなよ」

肉食獣に睨まれた獲物の気持ちが良くわかる。わかりたくもないが。

恐怖に駆られた涼が手にしていた教本で天下を張り倒し、音楽準備室に逃げ込んだとて一体誰が責められようか。

(く、喰われる……っ！)

机の引き出しから取り出したしおりを開く。赤ペンでマークし、何度も確認した事項だ。修学旅行当日まで絶対に、天下にだけは知られてはならない。バレたら最後。どんな暴拳に出るか涼には想像もできなかった。

普通科と音楽科は宿泊する場所が完全に違うのだ。見学場所も違う。同じなのは往復の新幹線の中。そして

三日目に泊まるホテルだけだ。

「百瀬先生」

涼はコピー機を使用している恵理の肩に手を置いた。

「後生ですから相部屋でお願いします」

（その十七）万全を期しましょう。（後書き）

これで長い長い五章は終了です。お付き合いいただきまして、本当にありがとうございます。できれば次の六章で一区切りをつけたいと思っております。

予告通り明日は番外編……を公開できますよう、全力を尽くします。

【番外編】恋せよ少年、ほどほどに（前編）

朝練終了。手早く着替えて道場を後にする。呼び止める同級生には手を軽く振って「お疲れ。放課後な」とあしらい、教室の方へ。SHRの時刻が迫っているからではない。

足は最短ルートを外れ、中庭に向かった。一階奥の鑑賞室。日差しを遮るカーテンの隙間から窓を覗き込む。天下は小さくガッツポーズを決めた。

ビンゴ。

鑑賞室では演奏会が開かれている。

校舎の最南端に普通科六クラス。最北端に音楽科一クラス。つまり、普通科と音楽科は一番接点の少ない科だった。合同授業でも一緒にはならない。聞けば、修学旅行も別行動を取るらしい。音楽を極めようとするだけあって、集まる生徒も一癖も二癖もありそうな連中だ。黒塗りの高級車で送迎される生徒などというドラマのような光景を、天下は高校生になって初めて見た。

世界が違う。言われるまでもなく、誰もが感じ取っていた。

こちらが七百円の教科書片手に授業を受けている間、連中は何十万円もの楽器を片手に非常勤講師のレッスンを受けている。比べる方が間違っていた。芸術科目で音楽を選択しても、その考えは変わらなかった。普通科はあくまでも教養として音楽を学ぶだけだ。

つまり、天下の入学と同時に鑑賞室にピアノブランドの最高峰と呼ばれるスタンウェイがやってこようと、彼には全く関係のないことだったのだ。一ヶ月前までは。

天下が演奏会の存在を知ったのは偶然だった。夏の到来を誇示するかのように蒸し暑い六月の下旬。朝練を終えて教室に戻る途中で、不意に足を止めた。いつもは締め切っているはずの鑑賞室のカーテ

ンがほんの少し、開いていたのだ。

東に位置する特別教室は音楽科の領域だ。中でも鑑賞室はスタンウェイのピアノを始めとする高級な音楽設備が整えられているため、常に鍵がかけられ、教師の許可なく入室することは禁じられていた。防音もばっちり。中庭に面した窓からの日差しを遮るためにカーテンで閉ざされた部屋。年頃の生徒達の間で噂が飛び交うには十分過ぎるほど怪しい部屋だった。

真偽はどうであれ、天下もその手の噂はいくつか耳にしていた。

曰わく、絶好の逢い引きスポットで、毎日のように教師達が使用している。

曰わく、音楽科の連中もまた、そこで盛っている。

曰わく、作曲家志望の教師が人目を阻んではそこで聴くに耐えない作曲活動に勤しんでいる。

どれも信憑性に欠けていたし、よくある噂だった。しかし、積極的に調べようとは思わないが、興味がないと言えば嘘になる。これ見よがしに隙間が開いていたら覗いてみたくもなる。

何の気なしに天下は中を伺った。

最初に目に付いたのは黒塗りのグランドピアノ。蓋を全開にする と迫力も桁違いだった。人の背丈程もある楽器というのも、鍵盤楽器ぐらいだ。

その、強大な楽器に挑むかのように向かって座る背広。体の線が細い。女性だ。演奏を終えたところで時間が来たのだろう。立ち上がった背は高かった。少なくとも、自分よりも高い。

楽譜を閉まってピアノの手入れをし、しっかりと鍵を閉めた。その間一度も後ろを振り返ることはなかった。背中を見せたまま、鑑賞室を出て行った。

顔、見てえな。

それが最初に思ったことだった。

天下の願いはすぐに叶えられた。翌日も覗いて見れば、彼女は腹筋をしていたのだ。発声練習の一環だろう。

おかげで顔を拝むことができた。全体的に色素が薄い。ともすれば儂げな印象を受けるが、真っ直ぐ前を向く目には意思の強さを感じた。眉を寄せながらも黙々と腹筋運動を続ける姿は、試合前のアスリートのようでもあった。心は遙か先を見据えているが、足元を疎かにしない。確実に一歩一歩進もうとしている。

腹筋を終えるとすぐに発声を始めた。残念ながら防音が施されていた部屋では何を言っているのかはわからなかった。が、背筋を伸ばし、何者かに立ち向かうかのように真っ直ぐ前を見据える横顔には凜とした美しさがあった。

以来、朝練の後に鑑賞室を覗くのが天下の日課になった。毎日会えるわけではない。だいたい週に一、二回、それも不定期だ。会えた日はラッキー程度のゲン担ぎに近かった。

しかし、ゆっくりではあったが胸の内では確実に育っていくものがあった。

蕾が僅かに開きかけたのは夏も過ぎた秋頃だった。

声を聞きたい。名前を知りたい。

湧き上がる好奇心は止めようがなかった。

担当は音楽に間違いない。それも声楽だろう。ピアノ以外の楽器を演奏しているのを見たことがない。

ある程度情報は持っているのに、未だに名前すらわからなかった。音楽科は外部から講師を雇っている。専任ならともかく、非常勤講師となれば普通科との共通は皆無だ。朝礼や学校行事の際には注意深く音楽科の方を見たが、姿を現さない。

やはり講師か。天下は肩を落とした。直接訊くしかない。しかし、どの面下げて？ 向こうは天下の存在にすら気づいていない。

音楽科の入学案内も確認したが、それらしき人物は見かけなかつ

た。主だった講師は写真付きで紹介されているのに。

悶々としたまま日々を過ごし、ついに三学期にまで持ち越した。相変わらず声どころか名前すらわからない。転機が訪れたのは、話しかけるしかない、と天下が腹を括った時だった。

英語の課題プリントを集める役を押し付けられた。大した量ではない、が四階の教室から二階の職員室まで行くことには変わらない。渡辺民子も面倒な仕事をさせるものだ。手早く回収し、職員室へ急ぐ。次の授業は家庭科 移動教室だ。幸運なことに職員室前で民子を発見。佐久間と何やら談笑していた。

「渡辺先生」

民子がこちらを向いた。

「はい」

一瞬、全身が強張った。張りのある声。職員室から無防備に顔を出したのは、あのスタンウェイ先生だった。周囲を見回し、小首を傾げる。

「お呼びになりました？」

佐久間と民子は顔を見合わせた。

「あ」

民子が声を漏らした。

「違いますよ。リヨウ先生、彼は私に……」

皆まで聞く前に、リヨウ先生と呼ばれた彼女は頭を下げた。

「失礼しました」

「同じですからね」

佐久間が苦笑混じりに言う。そこでようやく天下は我に返った。

「あの、渡辺先生……？」

「気にしないで。同じ苗字なの」

課題プリントを受け取り、民子はリヨウ先生を示す。

「声楽の渡辺リヨウ先生。普通科の方にはあんまり顔を出さないけど、あなた達と一緒にこの学校に来たの。もうすぐ一年になるわね」  
新任。それは盲点だった。今年のパンフレットに載っているはず

がない。作成した時にはいなかったのだ。

軽く会釈する渡辺リヨウを天下はまじまじと眺めた。思えば、ガラス越しで見ただけだった。生で、ましてや面と向き合うのも初めて。

ネクタイにスーツ。間近に見ると中性的な雰囲気は強くなった。

やはり長身だ。が、天下の方がわずかばかり高い。おそらくこの半年の間に抜いたのだろう。そんな些細なことが嬉しかった。

「渡辺先生、ちょっとよろしいですか？」

天下が口を開くよりも先に職員室から声。リヨウは肩を竦めて「どちらの渡辺ですか」と聞き返した。で、話す間もなく職員室に戻ってしまった。取り残される格好になった天下は思わず職員室を覗き込む。

「鬼島、授業始まるぞ」

うるせえ。何の権利があつて生徒の恋路の邪魔すんだ。

佐久間に向かって吠えたかったが、残念ながら天下は優等生で通っていた。佐久間に追隨するかのようにチャイムが鳴る。後ろ髪を引かれる思いで、天下は職員室を後にした。

【番外編】恋せよ少年、ほどほどに（前編）（後書き）

後編に続く、かもしれません。

……すみません。予定枚数を遙かに超えてしまい、とりあえず前編のみを公開させていただきます。今日中になんとか後編も完成させます。書かねば。書く時。書けば。書こう！

宣言通り、来年最初の本編更新と同時に消します。

【番外編】恋せよ少年、ほどほどに（後編）

名前が判明したのは大きな収穫だった。渡辺涼。男みたいな名前も、キツチリと着込んだスーツも、惚れてしまえばあばたもえくぼだ。むしろ惜しげもなく太ももを晒すクラスの女子よりも、ガードの堅い先生の方がなんとというか色気がある。隠されたものを見たい、という欲求がわいてくるのだ。

普段は音楽科準備室にこもっているらしい。外へ出るのは合唱の授業の時か個人レッスンの時くらい。受け持ちのクラスもないので、職員室にいてこと自体少ない。運がないから見かけなかったのではなく、会えたことが幸運だったのだ。

意識して見れば、渡辺涼の軌跡は至る所にあつた。合唱部の副顧問。担当の学生がどこぞのコンクールで入賞。掲示板の隅で名前を見つける度に天下の胸は高鳴った。

そして迎えた四月。天下は入学当初の選択を心から感謝した。芸術選択の音楽、担当者に渡辺涼とあつたのだ。クラスメイトでも彼女を知っている人はいなかった。皆一様に「渡辺って英語じゃなかったっけ。女だったよな」と首を傾げていた。

「また男かよ。かつたりい」  
肩を落とす級友にやや呆れつつも天下は何も言わなかった。いずれわかることだし、しばらくは自分の胸の中に留めておきたかったのだ。

一年次と変わらず授業は鑑賞室にて行われた。面子も同じ。違うのは教師だけだ。

『渡辺涼』とホワイトボードに書き、涼は生徒一同を見回した。

「渡辺です。一年間よろしくお願ひします」

折り目正しく一礼。ホワイトボードに書いたばかりの名前を消し

た。

「では、発声練習から始めます」

なんとという事務的挨拶。生徒一同呆気にとられる。天下も例外ではなかった。自動販売機にだって彼女よりはまだ愛想がある。授業の進め方とか予定とか、その前にちゃんと自己紹介しろよ、せめて専攻くらい教えてくれ。天下の願いも虚しく、音楽の授業は粛々と進化した。

「あれで一年やるのかよ」

鑑賞室を出るなり、誰からともなく不満が飛び出た。

決して教えるのが下手なわけではなかった。むしろ新任であることが信じられないくらい要領よく進めていた。とにかく耳がいい。合唱中も一人一人の声を聞き分け、的確な指示を出す。担当している学生がコンクール入賞するのも頷ける。が、いかんせん相手は音楽科ではなく普通科の生徒だ。上達よりも楽しむことを優先する連中なのだ。

受験に音楽が必要な学生は極一部だ。普通科に至っては皆無と言ってもいい。適当に楽しめばいいんじゃない？ などといい加減な態度で臨む生徒にいくら素晴らしいレッスンをしても、温度差が違うのだからどうしようもない。

唯一の救いは涼が始終淡々としていた点だ。熱意を持ってやった日にはいたたまれないだろう。彼女も自分たちも。

所詮、涼は音楽科で、自分は普通科なのだ。スタンウェイの価値すらわからない。それで当然だと、劣等感を抱いたことなど一度だつてなかった。が、今は釈然としなかった。情熱を持って教えるに値しない生徒。そう思われているようで。

二回目以降も涼の態度は変わらなかった。冷淡で事務的。しかし妙な威圧感があり、授業中に談笑する生徒はいなかった。慣れれば

悪くはない。不満を口にする生徒はやがていなくなった。違和感も不快感も時の経過と共に薄れていくことを天下は知っていた。人はそれを諦めと言う。

「巻き舌を無理に習得する必要はありません」

普通科の生徒だから。言葉に含まれた意味を邪推し、天下は眉を寄せた。音楽科の生徒ならば、何が何でも習得させただろう。

涼はホワイトボードに何やら書き込んだ。

『札幌ラーメン』

飲食禁止の部屋にそぐわない単語。ざわめきが起きる。涼は動じることなく『札幌ラーメン』の下に二重線を引いた。

「毎日毎日繰り返し唱えることが重要です」

いや、真面目くさった顔で札幌ラーメンを推奨されても。虚を突かれた生徒達の中、天下は首をひねった。既視感。どこかで見たような気がした。

「札幌ラーメン？」

読み上げた生徒に、涼は一つ頷いた。

「札幌ラーメンです」

おもむろに何度も何度も札幌ラーメンを唱え続け　確かに巻き舌になっていた。しかし天下の興味は別にあつた。

ホワイトボードの前に立ち、線を引く。その仕草。どこかで。

「あ」

今朝だ。

月曜日、朝練終了後に天下は中庭へとすっ飛んだ。鑑賞室を覗き込む。やはりそうだ。

涼はまた一人演奏会を繰り返していった。いや、演奏会ではない。最初はそうだったかもしれないが、今は違う。

教卓の前に立ち、部屋全体を見回す。ピアノを演奏している時も、視線は生徒の席。ホワイトボードに何やら書き込み、消す。ノート

を見ながら一つ一つ動作を確認していた。

授業の練習だったのだ。それも普通科の。涼が鑑賞室で担当する授業はそれしかない。

案の定、二限目に行われた授業で涼は全く同じ動作をしていた。

「最後のツェー……じゃなくて、ドは少し強めに」

え、まさか。マジ？

天下はリコーダーを構えたまま固まった。

あれだけすました顔して「普通科の凡人に興味はありません」と言わんばかりの厳しい授業しておいて、内心冷や汗？ ガツチガチに緊張して。だから表情も強張って事務的対応？

(……マズい)

勘弁してくれ。天下はもうなんだか堪らなくなった。授業中でなければ机を叩いていたところだ。

そこまでやる必要はねえだろうが。たかが普通科の音楽だぞ、とは思うものの、同時に嬉しくてわくわくした。ああ可愛いな畜生っ！身も蓋もないことを言えば、涼は天下の好みのド真ん中を突いていたのだ。

努力を惜しまない人間には好感が持てる。隠しているのなら、なおさらいじらしい。人知れず、匂わせず、しかしそれを自分は知っている。自分だけは。

健気な努力に報いてやろうと授業にも積極的に参加してやった。

そのせいもあって一学期の音楽の評価は五だった。

思えば、渡辺涼は非常に律儀なのだ。だからピアノ一つにも敬意を払う。スタンウェイだろうと中古の安物ピアノだろうと手を洗ってから丁寧に使う。普通科の生徒相手だろうと全力で授業をする。どこまでも真っ直ぐで不器用。だからこそ惹かれるのだ。

二学期に入っても涼のリハーサルは続いた。それに伴い、授業にも柔らかさが生まれた。皆は「ようやく普通科レベルに妥協した」と解釈したが、天下には余裕が生まれたのだとわかった。涼を慕う生徒も出てきて、確実に良い方へと向かっていた。相変わらず、真

つ直ぐ前を見過ぎていて生徒の顔を見ていなかったが、天下としてはそれでも構わなかった。ぴんと張った背中と横顔に惚れたのだ。いつまでも真つ直ぐ前を向いていたらしい。

そんな穏やかな気持ちで見守っていた。少なくとも天下はそのつもりだった。

劇的に変わったのはとある金曜の放課後だった。シャーペンが一本ないことに気がついた。最後に使った記憶は 五限目の音楽の授業。おそらく鑑賞室に忘れたのだろう。

百円のシャーペン。次の音楽は月曜の二限。わざわざ音楽準備室に足を運んで、鍵を開けてもらってシャーペンを取りに行く。面倒ではあったが、天下は準備室へ向かった。あわよくば涼に開けてもらおうと思つてのことだ。

渡り廊下を歩いていて、ふと鑑賞室の方を見ればいつも通りカーテンが少しだけ空いていた。覗いたのは習慣だ。そして、天下は目を見開いた。

鑑賞室にいたのは涼ではなかった。世界史の教師の佐久間と矢沢だ。睦まじげに見つめ合っている。鑑賞室の噂は本当だったのか。しかし、次の瞬間にはそんな噂など天下の頭からは消し飛んだ。

イスに腰掛ける佐久間の膝に座る矢沢。仲がよろしいのは結構なことだが、どうしてよりもよって鑑賞室でいちゃつくのだ。佐久間の手が、おそらく大して洗っていないであろう手がスタンウェイに伸びた時は、思わず天下は叫び出しそうになった。

やめる触るな。それは先生の

が、突如涼が乱入。完全に瞳孔が開いた目で二人をど突き倒し、まずはスタンウェイの無事を確認し、手入れを開始した。それが終わると二人を正座させて、その前に仁王立ちになった。その間、天下は一步も動けなかった。涼の剣幕に気圧されていたのだ。

そして迎えた月曜、佐久間と涼が付き合っているという話を聞いた時、天下は椅子から転げ落ちそうになった。矢沢は一体どうなったんだ。その前になんで、佐久間なんかと。

天下にはそれが納得できなかつた。汚い手でスタンウェイに触ろうとした男だ。天下含む普通科の生徒にはスタンウェイの価値はわからない。しかし、知識はなくとも敬意は払える。美しいと感じることはできる。尊敬に値する音楽科教師達が大切にしているものだからこそ、天下達もまたあのピアノを重んじた。そんな最低限の礼儀ですら、あの男は踏み躪つたのだ。

どうして、と思うことは今まで何度もあつた。が、これは母の時とは違う。鎮めようと、押し止めようとすればするほど、より一層激しさを増した。

矢沢の様子を見ていておおよその事情は察したが、それでも熱は燻ったままだった。何よりも気に食わないのは授業中、涼がちらちらと矢沢の方ばかり見ていたことだ。動きもぎこちない。矢沢を意識していることは明白だった。

ふざけんな。

嫉妬だとわかっていても抑えようがなかつた。一年前からずっとそうだった。涼は天下のことなど見てやしない。真摯な眼に映るのはいつも音楽のことばかり。

それならまだ許せた。

だがどうして、ぽつと出のバカップルの方にはあつさり目を向けるんだ。不公平じゃないか。自分はもうずっと前から見ていたというのに。

こっち見るよ。少しでいい、俺のことを見るよ。

母の時は仕方ないと無理やり納得させたが、こればかりは譲れなかつた。教師と生徒。音楽科と普通科。歳の差。知ったことが。

邪魔者のいない放課後に迷わず音楽準備室へ。戦略も何もあつたものではない。ただ、こちらに目を向けさせるだけだ。

天下は意を決して扉をノックした。

【番外編】恋せよ少年、ほどほどに（後編）（後書き）

1000ポイント御礼アンケート三位「復活せよ」恋せよ少年、  
ほどほどに（後編）『』

番外編を更新するまでの限定公開ですが、こんな若い時期もあつたのだから程度の生温かい目で見てくださいれば幸いです。

## 冬休み(その一) 帰るまでが遠足です

修学旅行から帰ってすぐ、荷物整理よりも先に涼は琴音へ電話をかけた。

『あ、留守電聞いてくれたんだ』

「四件も入れられたらね。とりあえず応じてやるうとは思っよ」

こちらの皮肉にも怯むことなく琴音は『だって涼が冷たいんだもん』と甘ったるい声で責任転嫁。手強い奴だ。こいつも、そして

不意に頭に浮かんだ人物を、涼は即座に追い払った。

待て。どうして奴がそこに出てくる。

『京都だよな？ いいなあ』

「代わってやりたかったよ」

どこがいいものか。一日中生徒の面倒を見なければならなかった。こっちは五十分の授業ですら精一杯だというのに。京都の観光どころではなかった。その上、三日目の晩ときたら、もう……待て。落ち着け。

再び脳裏をよぎった生徒を即座に打ち消す。

『で、どう？』

琴音の声に涼は我に返った。

「え？」

『年末年始は涼も暇でしょ。良かったら二人で年越ししない？』

それで涼はおおよその事情を察した。琴音は実家に帰りたくないのだ。

「愛しのお兄様は？」

意地悪く訊いてみれば案の定、琴音は電話越しでもわかるくらい不機嫌そうに。

『演奏旅行。二人つきりで』

「いい加減兄離れしろよ」

『別に、お義姉様が気に入らないわけじゃないの。むしろ好きよ。』

でもね……いえ、だからこそお正月くらいは帰ってきてくれてもいいと思わない？ 六年近く会ってないのよ？」

このブラコンぶりには涼も苦笑する他なかった。琴音には八年歳の離れた兄がいる。世界的に有名なピアニストで、最近では多忙にかまけて実家にはほとんど顔を出さない。そのことを寂しがる可愛い妹　　と言えは聞こえはいい。が、結婚して家庭を築いている兄に仕事も何もかも放り出して傍にいてほしいと願う二十歳過ぎの妹というのはあまりにも大人げがない。

『とにかく、予定は空けておいてね』

「善処はするよ」

『オペラで年越ししましょう』

不覚にも涼の胸は高鳴った。琴音は金持ちだけあって、貴重なCDや絶版になったレーザースクをいくつも持っている。

「マリア」カラスの『トウーランドット』用意しといて」

『妙なのが好きね、涼ちゃんって』

やや呆れた口調。

『普通マリア」カラスと言えば「カルメン」とかじゃない？』

彼女の当たり役だ。故に大量に世に出回っている。涼でさえ持っている程だ。

「普通じゃつまらない。あとおせち。餅はこっちで用意する」

『はいはい。もれなくドミンゴ様も揃えておくわよ』

涼は十二月のカレンダーに「オールナイト・オペラ」と書き込んだ。終業式以外何一つ予定が入ってなかった月に、とんだ楽しみが生まれた。一人大晦日に一人正月。毎年のことなので当然と受け止めていたが

（あいつはどうするんだろうな）

家に彼の居場所はない。親しい友人がいるとはいえ高校生が大晦日を家族以外の人間と一緒に過ごすとは考えにくい。親が許さないだろう。やはり一人なのだろうか。クリスマスも、大晦日も、お正月も　　って。

待て。だから、どうしてそこで奴が出てくるんだ。

涼は頭を振った。修学旅行の間にずいぶんと毒されてしまったよ  
うだ。これはゆゆしき事態だ。

『ところで涼ちゃん』

電話口からは呑気な琴音の声。

『修学旅行、どうだった？』

「聞くな」

**冬休み(その一) 帰るまでが遠足です(後書き)**

本編が進まないので修学旅行をすっ飛ばしました。

何があつたのかは、本編(一部)完結後に気が向いたら書く予定です(予定は未定)。こんなしょうもない作者ですが、今年もよろしくお願いいたします。

(その二) いつまでも遠足気分ではいけません

今学期最後の授業は終了。長つたらしい終業式も先ほど終わった。残るは要綱を見ただけでもつまらなそうな研修会が二日。それが終われば晴れて自由の身だ。ともすれば鼻歌混じりで机整理をしそうになる自分に涼は苦笑した。

同じ『お泊り』でも修学旅行の時とはえらい違いだ。それも当然。自由奔放に動き回る生徒の面倒を見る必要もないし、後先考えずに生徒と盛る教師の存在を誤魔化す必要もないし、ましてや相部屋にされることもない。それに、鬼島天下も

(だ、か、ら、待てって)

思わず手中の領収書を握り潰す。これは病かそれとも故障か。ヴァイオリンの弓と一緒にメンテナンスしてもらいたいものだ。誰か診断してくれ。

帰り支度をしている涼の手元を恵理が覗き込む。

「渡辺先生はご実家に帰るんですか？」

ない実家にどう帰ればいいのかだろう。想像さえしていない恵理にわざわざ訂正してやる必要性を涼は感じなかった。こういう性格だからいまだに「リョウ先生」と呼ばれているのだろう。学校で涼の本名を知ってるのは現時点でただ一人

「どうしたんですか……わ、渡辺先生」

机に勢いよく突っ伏し、涼は沈黙した。肩を揺する恵理の声も耳に入らない。駄目だ。ありとあらゆる意味で末期だ。

「渡辺先生？」

(いや、そんなはずはない)

涼は起き上がって頭を振った。

ありえない。プラスチックドミノゴならばまだしも、何故アリアの一つも歌えない六歳下の生徒なんぞに心奪われねばならぬのだ。自分はどうやら何か不足しているようだ。そう、リリコ・スピント

とか。テノールにしては太く強靱な美声とか。

つまり圧倒的にプラシド・ドミンゴが不足しているのだ。間違いない。

「修学旅行から帰ってからなんか変ですよ」

「心配には及びません。原因は判明しました」

すつくと立ち上がり、涼は帰り支度を終えた。何も大晦日まで待つことはない。一人上映会をしよう。ドミンゴを補給せねば。

「それでは、良いお年を」

足早に退散。すれ違う音楽科の生徒と挨拶を交わしつつ職員用の玄関へ向かう。頭の中では既に選目に入っていた。『トス力』もいが、やはりここは『オテロ』だ。陰鬱を湛えた重厚な美声が際限なく発揮されるのはオテロを演じている時だ。

早くも心躍らせていた涼だが、角を曲がるなりテンションは下落した。

「これは佐久間先生、奇遇ですな。それでは良いお年を」

「あ、はい、良いお年を……って待って下さい、リヨウ先生」

仕方なく涼は振り返る。この学校で二番目に逢いたくない人物だ。一か月前、京都での恨みはまだ根強く残っている。

「今度は高級ホテルで二泊三日ですか？ 止めませんが協力もしませんよ」

「そのことに関しては、あの、本当に、すみません……」

委縮した佐久間の謝罪にも涼の気は晴れなかった。むしろ苛立ちが募る。思えば佐久間はいつもこうだった。謝りながら涼を彼女に仕立て上げ、謝りながら禁断の恋愛とやらの片棒を担がせ、謝りながら面倒事を押しつけてきた。今までも、これからもきっとそうなのだろう。

「初めに言っておきますが、冬休みは予定が一杯でお二人のために割ける時間はありませんよ」

佐久間が口を開く前に釘を刺す。途端、佐久間の顔が気まずそうに曇るのを涼は見逃さなかった。ほれ見る。全く反省していないじ

やないか。本当に悪いと思っているのなら二度と頼み事などしないはずだ。

「今度こそ良いお年を」

トドメとばかりに台詞を吐いて、涼は靴を履いた。さすがに佐久間も追ってはこなかった。自分の危機には敏感な男だ。涼の怒気もしっかり感知したのだろう。

(その三) 切り替えましょう

学校で一番会いたくなかった奴が現れたのは、涼が佐久間に対する罵詈雑言を一通り胸中で言い終えた頃だった。

「今度は君か」

言葉の意味を察した鬼島天下は片頬を歪めて笑った。

「また佐久間に何か押しつけられたんですか？」

「その敬語口調、腹が立つからやめてくれないか」

いつになく機嫌が悪い涼に天下は神妙な顔になる。

「どうかしたのか、先生。授業でも弾き間違いが多いし、終業式の時も上の空だったし、なんつーか……最近変だよな？ 何かあったのか」

原因に心配されたくはなかった。元はと言えば、お前が 激情に任せて口を開きかけ、涼は我に返った。これでは八つあたりだ。

「別に、何も」

天下の追究が入る前に涼は話題を変えた。

「校門前で待ち伏せして、何のつもりだ」

天下は意外そうに目を見開いた。

「へえ、先生のことを待ち伏せしてたって思ってくれんのか」

「……どういう意味だ」

「あんた、俺があんたのこと好きだって認めようとしなかったじゃねえか。やれ思春期によくある一時的な迷いだの、大人に対する憧れだの、まともに取りあっちゃくれなかった」

「君が本気かどうかについては疑問を差し挟む余地が多々ある。でも重要なはその点じゃない。どっちにしても私は応えられない、ということだ」

「でもその様子だと、少しは意識してくれてんだろ？」

少しどころか、授業に支障をきたす程だ。しかしそれを認めるわけにはいかなかった。特に本人の前では。

「話がそれだけなら私は帰るぞ」

「先生は実家に帰るんですか？」

帰る実家がない。言い放つてやるうとして、天下も大して変わらない状況にあることを思い出した。

「いや、友人と二人で過ごす」

「男ですか」

「残念ながら女だ。国立劇場で会っただろ？ 琴音とオペラで年越し」

天下は「そうですか」と小さく呟いた。落胆しているわけでもましてや不満を抱いているわけでもなかった。寂しげだが穏やかな笑み 彼が父親に見せたのと同じものだった。

俺のことは気にすんな。大丈夫。あんたが悪いわけじゃない。

軽く突き放すことで赦そうとしている顔だ。罪悪感に囚われることがないように。

そこまでしてやる義理があるだろうか、涼は不思議に思った。恨み事は踏みつけられた者にのみ許される特権だ。涼が自分を捨てた母をなじる権利があるように、天下もまた自分を忘れた母とそれに追隨する家族を責める権利がある。恨み事の一つぐらいいは言ってもいいはずだ。でなければ不公平だ。

そんな風に考えるのは、涼と母親との距離があまりにも遠いせい。それとも天下の心が非常に広いせい。どちらだろう。

(仮に母が目の前にいて、家族と幸せに暮らしていたとしたら 母を赦せるだろうか。故意に自分を切り捨てて得た幸せに浸る母を。

「部活はいつまでだ？」

不毛な考えを振り払うように涼は訊ねた。

「二十八日までです。新年は四日から」

それまで鬼島天下は一人で過ごすことになる。今さらだ。もう一年以上以上、彼は一人で暮らしている。さすがに慣れているだろう。寂しがるなんて、天下らしくもない。

(……阿呆らしい)

他人の正月を気にしている場合か。そう思うものの、涼はついに「良いお年を」と天下に言うことができなかつた。

#### (その四) 相手の陣地です

「で、結局何があったの？」

予想はしていたが、琴音の興味は始終修学旅行にあった。都内有数のマンションに涼を招き入れ、茶をすすって一息。明日に向けておせちの準備を始めてもしつこく追究してきた。涼としては触れたくない話題。しかし三日間世話になる以上、譲歩はするべきだ。適当に琴音の興味を満たすことにした。

「まあ、なんとというか、喰われそうになったんだ」

「肉食獣？」

「とびきり獰猛な」

頷いてから、涼は小首を傾げた。時折見せる眼差しは明らかに獲物を狩る肉食獣のものだ。しかし六歳上の、それも教師を相手となると、守備範囲の広さを考えさせられる。

「雑食、かもしれない」

重箱に黒豆を詰めていた琴音の手が止まった。

「所構わず？」

「いや、本人の面がいいからな。毎日眺めてる自分の顔を基準にしたらかなりの面食いになると思う。文武両道だし、その気になれば美女がよりどりみどりだろうな」

「その面食いさんに食べられそうになったんだ。よかったね。お眼鏡に適ったってことじゃない」

作業を再開。あくまでも琴音は呑気だ。

「だから雑食なんだって」

冷静に考えれば単純なことなのだ。

「毎日豪華料理食べていたらさすがに飽きるだろ？　なんか粗末なもの食べたいな」とか考えていたら、ふと目についたカップラーメンだって美味しそうに思えるものさ」

「私、カップラーメン好きよ」

「奇遇だね。私もだ。しかしカップラーメンと高級フカヒレスープが並んでいたら、やっぱりフカヒレスープに手を伸ばすわけだ、結局は」

琴音は複雑な顔で冷蔵庫からカマボコを取り出した。

「でもその雑食さんはカップラーメンがいいんでしょう？」

「興味本位で喰われかけたこっちは、堪ったものじゃない」

ふーん、と気のない返事をして琴音は再び冷蔵庫を開ける。

「で、逃げてきたんだ」

「当然だ。相手にできるか」

「それなら大丈夫よ」

他人事だと思っっているのか琴音は軽く言う。

「まあ、喰われたいと思っちゃったら諦めるしかないけどね」

涼は昆布巻きを詰める手を止めた。

「……『喰われたい』と思わなければ大丈夫？」

「嫌なんですよ。じゃあ、食べられる心配はないよ。相手は生徒。

あなたは教師。明らかに有利じゃない。こっちは成績握ってんのよ？」

なるほど。全ては自分次第なのだ。涼は目から鱗が落ちるようだった。天下の動向ばかり気にしていたが、こちらが山のように揺るがない態度で毅然と応じれば、雑食獣の二頭や二頭、どうということはない。流されないことが肝心だ。安易な同情、余計な世話焼きは極力控えよう。

時が経てば情熱も冷める。カップラーメンよりもフカヒレスープの方が断然良いことに天下も気づくだろう。

来年の目標『風林火山』。書き初めよろしく方針を固めたところで、コタツの上に放置していたケータイが鳴った。ディスプレイを見たら知らない番号。警戒しつつも通話ボタンを押す。

『……先生？』

(その五)どこであれ、鴨は鴨以外にはなれません

其の疾きことは風のごとく。涼はすぐさま戦術的撤退に努めた。

「間違いです」

「いや、思いつきりあんたじゃねえか」

「おかけになった電話は現在電波の届かない場所にいるか、電源が入っていないため、かかりません」

「んな愛想のねえオペレーターがいるか」

愛想をふりまく必要性を感じないのだから当然だ。むしろふりまいたら危険だ。鴨がネギを持って人前で踊るようなものではないか。間違いなくステップを踏むことなく鍋行きだ。そしてご馳走様。鴨さん、さようなら　なんて展開はご免こうむる。

「機械ですから事務的に」

「ずいぶん応用が利くメツセージだな」

電話越しに天下の低い笑い声が聞こえた。プラシド・ドミンゴとは全く違う声音にしかし、涼は抵抗する気力が削がれていくのを感じた。

「どこで番号を入手した。佐久間先生か、百瀬先生か」

「最初にかけてきたのは先生の方ですよ」

記憶を辿る。思い出すのに時間はかからなかった。「カルメン」の時だ。失踪した天下を捜すべくクラスメイトから番号を聞いてかけたのだ。

「消しておけ」

「冗談だろ。あんたの番号だぜ？」

なおさら消せ。今すぐ。こっちが番号を変えてやるうかと涼が密かに画策していたら、天下が言った。

「変えんなよ、番号。そんなに嫌ならもうかけねえから」

見透かされた屈辱よりも、天下の物わかりの良さに情けなくなつた。これでは自分が我儘を言っているみたいではないか。

「で、何の用だ」

沈黙。

「鬼島？」

『良いお年を』

次の言葉を待ったが、それきり天下は何も言わなかった。まさか、それだけのために電話してきたのだろうか。ともすれば無下にすることもできず、涼はケータイを持ったまま立ち尽くした。

「涼う……」

背後から情けない声。振り向けば琴音が悲痛な表情でうなだれていた。

「ごめん」

「何が？」

「初めに私は謝ったからね？ だから怒らないでね。ねちねち嫌味を言うのもナシ。冷静に。誰だって失敗というものはあるものよ」

『先生？ どうしたんですか』

涼は耳からケータイを離した。

「本題に入れ。何がどうしたんだ」

「端的に言えば」

琴音は重箱の空いた一角を重々しく指で示した。

「……伊達巻、忘れちゃった」

(その六) だから鴨であることを忘れてはいけません

「ごーん。除夜よろしく重厚な鐘の音が一つ、涼の頭の中で響いた。昨日、デパートで必ず買っておくように厳命しておいたのに。」

「買えばすむ話だ」

「九時過ぎよ？ デパートなんて閉まってるし……」

「コンビニ」

「飯にあったとして涼、あなた市販の甘ったるい伊達巻で満足できる？」

「う……っ」

涼は小さく呻いた。無理だ。でなければ、口を酸っぱくしてデパートで買っておくように言ったりしない。

『伊達巻？』

いくら貧乏教師とはいえ、年始早々コンビニの伊達巻なんて悲し過ぎる。この状況を打破すべく涼は思考を巡らした。考えて考えて考えて 導き出された結論はただ一つ。

「……忘れるか普通？」

「だから最初に謝ったじゃない」

琴音は口をとがらせる。涼は額に手を当てた。

「なんたることだ。我々に新年の夜明けはないというのか」

『いや自分で作れよ、伊達巻ぐらい』

そういえば、まだ繋がっていたのだ。涼はため息をついた。

「重大な問題が発生した。切るぞ。良いお年を」

『なあ』

電源ボタンにのせた涼の指が止まった。

『俺、作ってやろうか？』

(私は反対した)

誰に言うともなく涼はコタツの中で主張した。

（たかが伊達巻……いや、伊達巻は重要だ。正月を迎えるにあたって欠かせないキーアイテムであることは私も認めよう。だが、しかし）

涼は台所へ目をやった。黒エプロンに青のバンダナ。格好も、そして簾を扱う仕草も非常に様になっている。実に結構なことだ。

彼が鬼島天下でなければ。

「呼びつけるか？ 九時過ぎに」

「だって来てくれるって言ったんだもん」

ねー、と隣に立つ琴音に同意を求められ、天下は如才のない笑顔で応じた。

「押し掛けてきてすみません」

「まっただ」

「涼、なんてことを言うの！」

「気になさらないでください。いつものことですから」

人の良いフォローを入れる天下。琴音の中で鰻登りの如く天下への好感度が上昇していくのが、リビングからでもわかった。反比例して涼の株が下落していくのも。

(その七) 狼を招くなんてもつてのほかです

「少しは見習いなさいよ」

冗談ではない。涼はミカンに手を伸ばした。台所の二人は伊達巻に没頭していて、涼のことなど放置状態だ。鼻を鳴らしたところで、天下と目が合う。

反射的に身構える涼に対し、天下は小首を傾げた。そしてにやりと。琴音の前で見せた好青年の笑顔とはまるで違う、不敵な笑みを浮かべたのであった。皮を剥いていた涼の手が止まった。

おい、ちよつと待て。オーブンの卵に夢中の琴音に涼は内心呼びかける。気付け。そいつは似非優等生だ。獰猛な雑食獣だ。無害な山羊のふりをしているが実は狼で牙を剥いているんだ。

「ちよつと焦げましたね」

「わあ、いい匂い……」

とか平和な会話を交わしつつ、伊達巻作り続行。ほのかに甘い匂いがこちらにまで漂ってくる。天下は手際良く巻き簾で形を整え、輪ゴムで固定した。

「冷まして切れば出来上がりです」

子供のように琴音は目を輝かした。

「涼も見なよ。凄いよ、本物よ！」

「はいはい良かったな」

涼はミカン一切れを口の中に放り込んだ。コタツの上は消費したミカンの皮で山が出来上がっている。ふと手を見れば指先は黄色く変色。

そのことに気を取られていると、傍らに天下。いそいそとエプロンを外してスポーツバッグにしまい込む。バンドナを外した髪はところどころ癖がついてはねていた。

「用が済んだらさっさと帰れ。電車がなくなるぞ」

涼としては精一杯の優しさを込めた台詞。が、琴音は我が耳を疑

うとばかりに非難に満ちた視線を投げかけるてる。

「あなたそれでも人間？ 作ってもらって『ハイさようなら』はな  
いでしょ？」

打って変わって愛想良く。

「狭いけど我が家だと思ってくつろいでね」

今度は涼が耳を疑う番だった。天下も天下で「すみません」とか  
口では言いながらコタツの中に根を張る始末。遠慮しろ。

「いや、でも電車が」

「泊まればいいじゃない」

事もなげに言ってから琴音は「あ、でも着替えとかはどうしよう  
と今さらなことを口にした。問題にすべき点はそこではなかったが、  
これ幸いに涼は便乗することにした。

「さすがに、服を貸すわけにはいかないよな。やっぱり」

「でもお兄様のが何着かあったと思うわ」

なんで妹が兄の服を一人暮らしの自宅に置いておくんだ。絶対お  
前実家から持ってきただろう。何着か失敬してきただろう！ とか、  
そついう突っ込みはさておき。愛しの愛しのお兄様の服をあっさり  
貸すほど、天下に懐柔された琴音が信じられなかった。伊達巻を作  
っている間に一体何があった。

「お、おかまいなく」

さすがの天下も琴音の勢いに気圧され気味。良い傾向だ。

「そつだ。借りる側の気持ちも汲んでやれ。無理に押し付けるのは  
よくない」

「合宿用の着替え一式持ってきてますから。大丈夫です」

涼は積み上げてきたミカン皮の山に突っ伏した。

「……着替え？」

「合宿セットです」

澄ました顔で天下はスポーツバッグを脇に置く。簾を持ってくる  
にしては大きい荷物だとは思っていたが、まさか。

（最初から泊まり込むつもりだったのか……っ！）

天下の用意周到さに涼は戦慄した。

(その八) 他人の失敗は末代まで語り伝えましょう

「じゃあ問題ナシね」

大アリだ。

「二人とも一体何を考えているんだ。仮にも一人暮らしの女性の家に」

「出たよ化石思考。教師の鑑というか、相変わらずというか……あんたさあ、世の中の男は全部危険だと思つてない？」

呆れの混じった眼差しを注ぐ琴音。涼は口を噤んだ。別に、全人類の半分を警戒しているわけではない。そんなことをしていたら気が滅入る。天下だから危険なんだ。いつの間にか隣に陣取った似非優等生を涼は指差した。

「私は教師、こいつは生徒っ！」

「あんたは客人、私はこの家の主。決定権は私にあるわ」

一切の反論を許さず琴音は背を向けた。足取りも軽く寝室の方へ。予備の布団を出すつもりだ。涼は空いた口が塞がらなかつた。

「先生がやり込められているところ、初めて見ました」

「そうか良かったな。じゃあ帰れ。ここは私の憩いの場だ」

「ミカン食べ過ぎです。伊達巻の分は空けておいてくださいよ」

全くかみ合わない会話。一年が終わろうとしているこの時も、天下と涼は大して変わらなかつた。

「言つておくが、ここで紅白が観れると思つなよ」

「観ねえよ」

「第九も駄目だからな」

「興味ねえって」

「オペラで年越し。プラシド＝ドミンゴ万歳だからな」

「お好きにどうぞ」

横顔からも天下が上機嫌なのはわかつた。いきなり呼び出されて伊達巻を作らされて、何故そこまで喜ぶのか理解し難い。

「観ないんですか？」

天下に指摘されて涼はレーザーディスクを再生した。琴音お秘蔵のオペラコレクション。全てはピアニストの兄から引き継いだものだ。単調とも言えるアリアを独特の声で歌い上げるマリア「カラス。その声はまさに魔性だ。」

「はい、お待たせ」

別に待っていたわけでもないが。琴音がコタツに入ったのは、マリア「カラス演じるカルメンが衛兵を誘惑しているシーンだった。余裕かつ大胆なアプローチ。艶然と微笑む姿は粗忽な衛兵の十人や二十人くらいならば簡単に虜できるほど魅惑的だった。」

「懐かしいね、カルメン」

琴音は赤ワインを注いだグラスを涼の前に置いた。さらに天下の前にも同じものを置こうとするのを涼は阻止した。未成年飲酒を見過ごすわけにはいかない。

「お二人は大学の同期ですよね？」

「同じ声楽科でおまけに同じソプラノ」

「腐れ縁だよ」

その始まりがこの『カルメン』だ。

「最初は涼がカルメンやるはずだったのに降りたのよ。その代役がめでたく私にまわってきて」

「感謝の気持ちとしてミネラルウォーターをぶっかけてくれたわけだ」

「まだそれを言うのね」

琴音は不貞腐れたようにワインを一気に飲み干した。

「理由もなく降りられたら屈辱と感じて当然よ」

「何度も言わせるな。私の声音はカルメンに向かなかつたんだ。アルトにすればいいものを『ソプラノから出したい』とか意地を張る教授が悪い」

「声音というより、性格が向かなかつたんじゃないの？」

琴音は意地悪く七十インチの大画面で歌うカルメンもといマリア

「カラスを指差した。お色気でまんまと衛兵を骨抜きにし、脱走を果たした悪女。」

十秒ずつ、テレビのカルメンと涼を交互に見た後に天下が咳く。

「……先生が演じる姿が想像できません」

そんなこと、言われなくても自分が一番良くわかっている。だから降りたんじゃないか。涼は赤ワインを二杯立て続けに飲んだ。

(その九) 自分の失敗は笑ってごまかしましょう

「もともと私は『トウーランドット』をやりたいかったんだ」

負け惜しみにしかならなかった。自分は途中で投げ出したのだ。違う。投げ出す以前に、手を伸ばさずともしなかった。定期公演の主演。誰もが憧れる晴れ舞台の中心。届く場所にいながら諦めたのだ。

「どーせプラシド＝ドミンゴを観て相手役がしなくなっただけでしょ」

「そんなに凄い人なんですか？」

無知は時に罪となりうる。今の天下がまさにそれだ。

「世界三大テノールの一人。元バリトンの声質を生かした厚みのある歌唱をする。音域も広いからレパートリーも豊富。オールマイティな歌手だ」

「そんでもって顔もスタイルいいのよ。オペラ歌手にしては」

琴音が断りもなく上映途中の『カルメン』を消してDVDを挿入『トウーランドット』だ。もちろんカラフ王子役はかの三大テノール、プラシド＝ドミンゴ。

「だからこの子、昔から面食いで年上趣味だったってわけ」

天下は平然を装っていたが、涼にはわかった。少なからず動揺している。しかしまさか、涼が今まで色恋には目もくれずにひたすら音楽街道まっしぐらだと思っていたのだろうか。失礼な話だ。ブラウン管越しとはいえ、人並みに恋心だって抱く。

聞き逃してしまうほど小さな声で天下が呟いたのが聞こえた。

「……年上趣味」

そこかよ。突っ込もうとして涼は舌が回らないことに気がついた。飲み過ぎたようだ。中和したいところだが、こたつからは離れ難かった。天下と目がかち合う。不安の入り混じった表情はまるで子犬のようで、なんだか可愛らしかった。ふてぶてしい似非優等生の面

影などどこにもない。

涼は天下に手を伸ばした。跳ねている髪を直すつもりで撫でる。指の隙間から零れ落ちる艶やかな黒髪。感触が気持ちいい。何度か梳くと天下が大きく目を見開いた。

「せ、先生？」

ああ、瞼が重い。重力には逆らえず、涼は突っ伏した。

「そういえば、意外にお酒弱いよね」

「これだけ飲めば普通、酔いつぶれると思いますけど」

肩に柔らかくて温かいものがかかった。毛布か何かをかけてくれたらしい。どちらだか知らないが、どうもありがとう。つんと鼻にくる煙草の香りが珠に傷だけど。

「本当はね」

遠巻きに琴音の声。

「周囲に反対されたの」

「どうして？ 誰に？」

「あんまり練習にも顔を出さなかったし、二年生のくせに先輩を差し置いて主役でしょう？ やっかみよ、要するに。おまけに涼は昔からこういう性格だから」

「わかります。可愛い後輩っていうタイプじゃないですよね」

大きなお世話だ。

「しおらしく涙の一つでも見せればいいのに意地張るし……生徒にもあんまり好かれてないでしょ」

「そうですね」

あつさり言いやがったな。嘘でもいいからそこは否定しておけ。顔を上げる気力もわかかなかった。耳元にはトゥーランドットの美しさに心奪われたカラフ王子の情熱的な歌声が響いていたが、それもやがて遠のいていく。

「でも嫌われてもいませんよ。生徒だって馬鹿じゃありませんから、一生懸命やっつてることぐらいわかります」

末期だと涼は思った。ブラシドッドミンゴの声よりも天下の声が

心地よく感じるなんて。

(その十)ごまかせないこともあります

トウーランドットが駄々をこねる声で涼は目が覚めた。時計を見れば既に年は明けている。

馬鹿デカイテレビではちょうど、カラフ王子もといプランドッドミンゴが見事トウーランドットの個人的極まりない謎かけを解き明かし、民から賛歌を浴びていた。約束では、トウーランドット姫は謎を解いた者の妻になるはずだった。が、彼女はいざカラフ王子が全ての謎に答えると「私は誰のものにもならぬ」と我儘を言い出すのだ。

なら最初からそんな条件出すなよ、と涼はトウーランドットの必要以上に長い髪を掴んで説教をかましてやりたかった。謎に答えられなかった求婚者は次々と斬首しておきながら自分は破るんかい。

「ん？」

そこでようやく、涼は自身の肩にジャケットが掛けられていることに気がついた。ほのかな煙草の匂い 未成年喫煙だ。

「まだ帰ってなかったのか」

「泊まっていけと言われましたから」

悪びれもなく天下は涼の隣に腰掛ける。その手には缶コーヒーと緑茶。近所のコンビニで買ってきたのだろう。

「喉渴いてんだろ？」

妙に気の利く奴だ。コタツに放置しておいたワイングラスも山積みだったミカンの皮も跡形もなく片付けてある。一人暮らしのせいだ、それとも長男気質と言うべきか。

涼は財布から百二十円を取り出して天下に渡した。

「別にこれくらい」

「生徒に奢られてたまるか」

天下は愁眉を顰めた。

「学校じゃあるまいし」

「残念ながら教師は二十四時間年中無休なんだよ」

「渴いた喉に冷たい緑茶が沁みる。天下もプルタブを開けてコーヒ  
ーを一口。約束は守るべき、と周囲に諭されるトウーランドットに、  
カラフ王子が優しく手を差し伸べる様をぼんやりと観ていた。

「琴音は？」

「ついさつき寝室に」

「客を放置して、さっさと寢床に入ったのか」

「薄情な奴め。風邪をひいたらどうしてくれる。」

「俺がこのままでいいって言ったからな」

「まあ、なんと心の広いこと。天下の下心を知っていながらも涼は  
半ば感心した。男に限らず、人間というものは結構単純にできてい  
る。相手の気を惹きたいと思ったら大抵の無茶は平気でするものだ。」

『私は何としても拒む』

「我を通そうとするトウーランドット。反対する周囲の中で唯一彼  
女の味方になったのは当の本人であるカラフ王子だった。」

『あなたは三つの謎を出し、私はそれを解いた。私は一つだけ謎を  
出そう。あなたは私の名前を知らない。その名を当てていただくこ  
う』

「おいおいプラシド」ドミンゴよ、いくら惚れているとはいえ、そ  
こまでやるか。無茶にも程があるだろう。命を賭けた誓いがある以  
上大義名分はカラフ王子にあるというのに。彼が譲歩する必要も義  
理もない。」

『私の名を夜明けまでに。そしたら私の命を差し上げよう』

「優しく包み込むようなテノール。私がトウーランドットならば、  
と涼は不意に思った。まず間違いなく惚れている。たとえそれが舞  
台にいる間の夢だと知っていても。」

「先生」

「今いいところなんだ。黙って観てろ」

「明けましておめでとございます」

「涼は思わず天下の顔を見た。ふざけている様子はない。プラシド  
「ドミンゴの張りのある歌声。『トウーランドット』で一番の聞か

せどころのアリアが涼の耳を通り過ぎた。

「……あ、明けましておめでと〜ございます」

「今年もよろしく願います」

折り目正しく一礼。何がどうよろしくなのかは突っ込めなかった。

プラシド『ドミンゴが歌う』誰も寝てはならぬ』。テレビではカ

ラフ王子が高らかに勝利を宣言していた。

(その十一) 先手必勝です

琴音が起きてきたところで、お雑煮を作った。贅沢にも鶏肉でだしを取ったものだ。費用と手間を考えれば正月でなければできなかっただろう。おせちには伊達巻が収まり、人並みの新年を迎えた。

「で」

涼は弾力のある伊達巻を嚙下した。

「どうして君はさも当然のようにここにいるんだ」

「食べていけと誘われましたから」

遠慮なく天下はお雑煮をすすする。おせちにも箸を伸ばしカマボコを一口。箸の持ち方に妙な癖があった。

「社交辞令って言葉を知っているか」

「涼、新年早々生徒を苛めないの。だから嫌われるのよ」

「いつそ憎まれた方がマシだ。涼は新年早々ため息をついた。

「生徒と年越しすることは問題だと思わないのか」

「不可抗力よ。それに二人つきりじゃないんだから大丈夫」

年が明けても琴音は呑気だ。たった一晩で何かが劇的に変わるとは期待していない。が、もう少し一般常識を身につけるべきだ。これだから温室育ちは　ため息二つ目。

「だいたい、なんでタイミング良く電話なんかしてくるんだ」

天下は端正な外見を裏切ってかなりの健啖家だった。餅三個をあつという間に平らげて、おせちから具を少しずつ自身の皿に移す。

「一応遠慮はしているらしい。

「聞いているのか」

数の子を頬張りながら天下はちらりと涼に目を向けた。

「ンなもん、あんたの声が聞きたかったらに決まってるじゃねーか」  
嚙下して今度は伊達巻をよそう。あつさりと告げられた言葉を涼が理解するのに数秒の時を要した。

「……はい？」

「あー今年も終わっちゃうんだなあ、って思ったら最後に声聞きたくなつて、そしたらなんか伊達巻作れなくて困ってるようだし、この時間帯に押し掛けたらきつとなし崩しに一緒に年越せんだろーな、って思つたんだよ。幸い榊さんは先生とは違つて親切にしてくれたしな。飯まで誘われて退けるかよ。願つたり叶つたりじゃねえか」

天下の視線はあくまでも豪華盛り合わせのおせちにある。

「俺はガキですから、利用できるもんは何でも利用します」

それが何か？　と言わんばかりに天下は堂々と言つてのけた。完全に開き直つた態度だ。涼は新年早々卒倒しそうになつた。

いやいやいや気づいていたとも。天下の下心くらい。ここまであからさまにやられて気づかない方がおかしい。しかし　涼は向かいに座る教え子をまじまじと見た。

天下は何事も無かつたかのようにお雑煮を食べている。

「涼、顔赤いよ」

「飲み過ぎました」

「……なんで敬語なの？」

動揺しているからです。涼は内心頭を抱えた。

(さらりと小つ恥ずかしいことを……っ！)

しかも(琴音とはいえ)人前で。最近の高校生はみんなこうなのか。恥知らずなのか。オペラ並に直接的な台詞。舞台の上ならばともかく、何故日常生活で平然と言えるのだ。

案の定、琴音は「もう諦めなよ」と言わんばかりの視線をよこしてくる。面白がつているのは明白だ。なんと薄情な友人だろう。もしくはこの状況に対する危機察知能力が欠如していると思えない。これはゆゆしき事態なのだ。鬼島天下は生徒で六歳下で、自分は六歳上の教師なのだ。

新年早々、涼は先行きに不安を覚えた。

(その十二) 年中無休なのです

何はともあれ、おせちを平らげ正月の特番を目的もなくしたらと観て　そこまでは良かったのだ。今年もこんな感じに平穩無事に過ぎればいいなあ、と涼が呑気に思った時にケータイが鳴った。メールならば後回しにするとところだが、あいにく電話だった。

「佐久間先生？」

液晶画面に表示された名前に涼は目を見開いた。天下もまた過敏に反応。怪訝な顔をする。

「何の用だよ」

「私を知るわけないだろ」

とりあえず通話ボタンを押す。

「明けましておめでとうございます。何か御用ですか」

『あの、今……どこにいるんですか？』

間違いなく佐久間の声。が、涼は違和感を覚えた。いつになく声が堅い。

「どうかなさったんですか？」

佐久間は言葉を選ぶように控え目に言った。

『今、たまたま矢沢さんと渡辺先生に逢いました……』

すぐさま涼は状況を察した。佐久間の言う『渡辺先生』とは英語の渡辺民子。そして、一人ならばともかく学校関係者二人と偶然会うことはまずありえない。

「矢沢さんと会っている現場を渡辺先生に捉えられた、ということですか」

『……はい』

「そんでもって咄嗟に私と一緒に来ていることにした、とか？」

『その通りです』

「今もそこに渡辺先生がいらっしゃる、と」

蚊の鳴くような声で肯定する佐久間。涼は頬がひきつるのを感じ

た。新年早々とんでもない事態を引き起こしやがったよ、この迷惑カップル。

『大変申し訳ないのですが……』

駅構内にあるファミレスの名を挙げる。十五分もあれば行ける場所だ。涼は目を閉じた。行きたくない。面倒に巻き込まれる。誤魔化せる自信もない。

しかし、投げ出したくはなかった。関わりと最終的に決めたのは自分自身なのだから。

「二十分時間を稼いでください」

これから為すべきことが次々に浮かぶ。涼は一息ついて目を開けた。

「いい大人がはぐれた、というのも信憑性がありませんから、私が待ち合わせに遅刻したことにしましょう。そこをたまたま教え子の矢沢さんが見かけて、待ちぼうけを食っている先生の暇つぶしに付き合っただけです。まあ、立ち話もなんですから、とりあえずこのファミレスに入って　それで矛盾しませんね？」

『はい。大丈夫です』

「では、それで話を合わせます。ぶっつけ本番ですがやれるだけやりましょう」

一つだけ意地悪く付け足しておく。

「あと、失敗した時のために辞表を出す覚悟を決めておいてください」

『え、先生……待つ』

皆まで言わせず通話を切った。ハンガーに掛けておいたコートを手に取り、床に置いた鞆を持つ。財布を始めとする最低限の支度はもうできている。

「琴音ごめん」

「いつてらっしゃーい」

物わかりのいい琴音は苦笑しつつも承諾した。

「でも私に謝るより、彼に謝った方がいいんじゃないの？」



(その十三) 教師とはそういうものです

電車一本とはいえ、年末年始の特別ダイヤ。思いのほかホームで待たされ、目的地についたのは三十分が過ぎた頃だった。駅構内に店舗を構えているチェーン店。見慣れた看板を目にしたところで立ち止まり、深呼吸を一つ。涼は腹を括って乗り込んだ。

「遅くなってすみません」

禁煙席に座っていた佐久間が振り返る。地獄で仏を見たような顔に涼は情けなさを覚えた。芝居とはいえこんな男と付き合う自分の感性を疑う。

「明けましておめでとうございます。新年早々奇遇ですね、渡辺先生」

佐久間と向かい合うように座っていた渡辺民子は眉を神経質そうに顰める。涼が現れても疑惑は拭えないらしい。

「お二人は、お付き合いをなっていると伺いましたが」

懐疑的な眼差しで隣に座る遙香と佐久間の両名を見る。遙香にいつもの勝気な様子はない。当然だ。高校生が受け止めるには重すぎる現実だ。こういう時にこそ、大人である教師が責任を持つべきだというのが、

職を賭けるくらい好きなら盾になってやれ。それぐらいできなくてどうする。

「明けましておめでとう、矢沢さん」

民子の言葉は受け流して、思っていたよりも小さな肩に手を置く。遙香は微かに震えていた。見上げる瞳に不安と怯えの混じるのを涼は見逃さなかった。事の重大さをようやく理解したのだろう。最悪な状況に追い込まれて。

「なんか大事になって悪いね。せつかくの正月だというのが」

遙香は唇を噛んでいた。強がりでも必死に覆った弱さは抱きしめてやりたくなるほど愛しいものだ。守らねばと思う。こんなだから、

自分は余計なお節介が止められないのだろう。

途中で買っておいたチョコレートの詰め合わせを遙香の手に握らせる。

「おっさんの相手をありがとう。これから友達と遊ぶんだろ？ 時間は大丈夫か？」

無言で頷く。口を開けば溢れてしまうものを押し止めるように。

「渡辺先生」

咎めるように民子が呼ぶ。が、涼は無視して遙香を立たせた。

「まだ終わっていません。事情を」

「説明なら私が入ります。年明け早々、生徒を理不尽に拘束するわけにはいきません」

背中を控え目に押す。「先生」と縋るような呟きを耳にしたのは、おそらく涼だけだ。努めて明るく微笑んでやる。

「大丈夫だ。それよりも君は音楽の心配をするべきだ。遊ぶのも結構だが、リコーダーの練習を忘れないように」

遙香の顔が歪んだ。言葉にならないが、何を言いたいのかはわかる。

「ごめんなさい。こんなつもりじゃなかった。

泣くことを堪えている姿は、まともに顔を合わせたことのない母を彷彿とさせた。きつと彼女もそうだったのだろう。誰だって、破局を知りながら突き進んだりはしない。無知で愚かで、盲目的だった。しかし無知で愚かなりに本気だったのだ。

気にしなくていい。大丈夫だから。

そう言ってやれば良かった。迷惑をかけてきた遙香を救せたように、母も救せれば良かったのに。解放してやれば良かった。

(その十四) 一年の計は元旦にあります

「じゃあ、始業式に」

遙香が店を出るのを見送り、涼は佐久間の隣に腰掛けた。真正面から民子と向かい合う。

「どういうことですか」

少しも追及の手を緩めることなく、民子は問いただす。

「お二人は交際していると、私だけではなく教員皆が思っております。だから例の怪文もデマだと……しかし、現に生徒と二人きりで会っている」

「偶然会っただけだと私は伺っておりますが？」

ここは苦しかろうが白を切り通すしかない。民子にだって確たる証拠があるわけではないのだ。わざとらしく民子は紅茶を一口すった。

「失礼ながら、以前からお二人はどうも、お付き合いなさるほど親しいようには傍から見て思えません」

だろうな、と涼は内心苦笑する。生徒一人庇えない教師なんぞこちらから願ひ下げだ。守れなんて無理は言わない。しかし隠し通せないのなら、せめて自分一人で責任を被る度量を見せてもいいだろう。

「オペラならば愛の賛歌の一つでも熱唱しますが、生憎私はそれほど歌唱力に自信はありません」

「渡辺先生、ふざけている場合ではありませんよ」

「人の気持ちを言葉で説明して納得させる、とおっしゃる方が無茶だと私は思います。渡辺先生が私と佐久間先生のことをどうご覧になるかと自由です。しかし『交際しているように見えないからそれらしくしろ』というのはいささか横暴ではありませんか？」

民子に見えない位置で佐久間を肘で小突く。すぐさま意図を察した佐久間はとりなすように頭を下げた。

「たしかに、今回は私が軽率でした。その点は謝ります。私の至らないせいで誤解を招き、矢沢さんにも嫌な思いをさせてしまいました」

彼女には後日、改めて詫びます、と佐久間は付け足した。

「ですから、渡辺先生も矢沢さんに謝ってください」

民子は目を見開いた。何故自分が詫びるのかを理解していない表情だ。正義は自分にあると信じて疑っていない。そのことに涼は呆れた。仮にも教師ならば、自分の体面だけではなく生徒の分も考えるべきだ。

「人前であらぬ疑いを掛けられて、さぞかし辛い思いをしたと思います。新学期になったら結構です。一言謝っておいてください」  
不本意であることを露わにしながらも民子は頷いた。

「話がそれだけならば失礼いたします」

千円札を置いて席を立つ。自分の瞳孔が開いているのを自覚しつつ、佐久間の方を向いた。

「これからデートなもので」

佐久間の頬が盛大に引きつった。蛇に睨まれた蛙だってまだマシな顔をするだろう。

(その十五) 最初が肝心ということです

民子を置いて店を出る。その場で怒鳴りつけてやりたいのを堪えて、改札口へ向かった。人気がないところは生憎見当たらない。いつそこそこの喫茶店にでも行つて根性を入れたらうか、と自棄になつたところで呼び止められた。

低くて、少し掠れた声。このややこしい時に 涼は苛立った。

「まあ奇遇だな、鬼島君」

後をつけてきたのなら、大したものだ。ストーカーの才能があるかもしれない。佐久間の前でもなんのその。天下は優等生をとりつくろつこともなく現れた。

「あれで誤魔化せたと本気で思つてんのかよ」

天下の薄い唇に嘲笑混じりの笑みが浮かぶ。が、それも一瞬で打ち消して真剣な表情で佐久間を見据える。

「あんた、いつまでこんなくだらねえ小芝居続ける気なんだ」

「鬼島」

たしなめるように呼べば、天下は鼻を鳴らした。

「佐久間先生はいつまで渡辺先生に頼られるおつもりなんでしょうか」

言葉遣いこそ丁寧だが、その口調は皮肉以外の何でもない。完全に気圧された佐久間は目を丸くした。

「どうして……」

「あれだけ派手にいちゃついたらバレるに決まってるだろ？ 俺でさえ気づいたんだ。英語の渡辺だって納得しているかどうか怪しいもんだ」

いや、むしろあれは全く納得していない様子だ。涼は確信していたが、口にはしなかった。嫌疑がかけられようと佐久間と遙香の関係がバレようと、天下には関係のないことなのだ。

「君が心配することじゃない」

途端、鋭い眼光がこちらへ向けられる。

「あんたもあんただ。先輩への義理だが教師としての義務だかなんだか知らねえが、大概にしるよ。あんたが甘やかすから、こいつらは増長すんじゃないか」

「否定はしないよ。でも私が誰に手を貸そうと私の自由だ。それと言葉遣いに気をつけなさい」

言ってから涼は後悔した。思いつき地雷を踏んだ。天下の前で（涼にそのつもりがなくても）佐久間の味方をすれば何を引き起すか、火を見るより明らかだ。

「そうやって迷惑面しながら結局流されてんじゃないか。反対なら協力すんじゃない。中途半端なんだよ、あんた」

不覚にも涼は言葉を失った。天下は的を射ていた。後先考えない佐久間を軽蔑しながらも彼女のふりを承諾した。それが全ての始まりだ。今もこうして助けてしまった。これから先のことは面倒見られない、と丸投げして。それこそ中途半端で無責任だ。

「そんなに教師面したいのか？ 生徒の味方の、良い教師でいたいのかよ」

違う。そんなんじゃない。良い教師でいようと思ったことなんて一度だってない。全ては自分のためだ。周りがどう思おうと関係ない。ただ、

（ただ、赦したかったんだ）

(その十六) だから間違えると取り返しがつきません。

矢沢遙香を助けることで、同じ過ちを犯した母を助けたつもりになつていたので。

母への贖罪とは違う。むしろ被害者は涼の方だ。望まないのに生み出されて、捨てられた。母の無責任さのせいで、今までどれだけ惨めな思いをしてきたことか。どれだけ憎んだことか。

でも、一番惨めなのは捨てられたという事実じゃない。母の行為が赦せない事だ。母の行いが過ちだと断じることがつまり、涼の誕生もまた過ちだということになる。一生、母を責め、自分の存在を呪いながら生きていけるほど涼は強くはない。自分で自分の存在を否定しながら生きるなんて苦痛以外の何でもない。だから推奨はできなくてもせめて認めたい。自分の生誕は失敗でも間違いでもなかったと。

結局は、自己満足以外の何物でもなかったのだ。

(でも無理だ)

ふとした瞬間に怒りが込み上げてくる。どうして、と責めてしまふ。心の奥深くに根付いた恨みはそう簡単に消せるものではなかった。

後先考えない無責任さを責めずにはいられなかった。

「私に言わせれば、お前も佐久間も一緒だよ」

言葉が口を衝いて出た。

「勝手に一人で盛り上がって周囲に迷惑まき散らして、いざ問題になつたら『仕方ない』の一言で済まそうとしている」

「俺はそんな……っ！」

「自分は悪くない。仕方なかった。どうしようもなかった。そんな言い訳なんか聞き飽きたよ。巻き込まれた側にとって『仕方ない』で済ませられる事なんて何一つとしてないんだ」

明らかに傷ついた表情を見せる天下。しかし涼の胸は全く痛まな

かった。痛まなかったことに涼は完膚なきまでに傷ついた。

二十年以上も経っているのに、どうして赦せないのだろう。責めずにはいられないのだろう。

「……そうかよ」

嘲りにも似た歪んだ笑み。天下は突き放すように言い捨てた。

「じゃあ勝手にしろ」

天下は踵を返す。涼は一步も動けなかった。見送るのはこれが初めてだな、と場違いなこともぼんやりと思った。

いつだって離れるのは涼の方だ。引き止めようとするのは彼。歩み寄るのも彼だ。自分は何もしていない。

勝手な話だ。涼はなんだか可笑しくなった。今まで散々帰れだの天下を冷たく突き放していたのに、いざ背を向けられると言いつれない寂しさに襲われる。見放されたとさえ思う。そのくせ足は縫い止められたように動かない。

追うことも、呼び止めることもできなかった。人はそれを未練と呼ぶのだろう。

「リヨウ先生……？ 鬼島がどうして、私には何が何だか」

「忘れてください。終わったことですから」

始まってすらいなかった。最初から終わりは見えていたから。

（その十六）だから間違えると取り返しがつきません。（後書き）

前哨戦終了です。予想外に長引いてしまい申し訳ないです。

しかしこれでようやく六章（一部の最終章）に突入できます。これ一応恋愛小説ですからね、なんとか一区切りつきたい……っ！

ここまで読んでくださり本当にありがとうございます。六章では「公衆の面前でキスシーン！」を予定しております（予定は未定）。今度はマジです。五章のようにフランス映画で逃げたりしないことをここに誓います。

## 六限目(その一) 偽善でもやらないよりはマシです

三学期が始まってから涼は慈善活動に勤しむようになった。

具体的にはこうだ。朝は最寄駅で佐久間と合流。二人で校門をくぐり、職員室まで向かう。これを週に二回。時間的余裕があれば人目のつく学生食堂などで一緒に昼食を取ったりもする。無論、佐久間の奢りである。

深く考え過ぎたのだ。涼は自身に言い聞かせた。彼女のふりなど大したことではない。オペラだと思えばいい。舞台は学校、観客は噂好きの教師達と生徒諸君。上演時間は午前七時から午後の六時まで。途中休憩あり。

しかし肝心の上演期間は決まっていない。次の演目に移るのはいつなのか、いまだに目処が立っていなかった。

「睨まれるんです」

と、放課後廊下でばったり出くわした佐久間は泣きついてきた。

「蛇にですか？」

「私は蛙ですか。違いますよ」

同じようなものだろ。お前が動けなくなる度に誰が助けてやっていると思っっているのだ。いつそひと思いに呑み込まれてしまえ。涼は佐久間から手渡されたプリントを眺めた。

話の発端は一月下旬に行われる全国模試にあった。来年の受験生である高校二年生を対象としたもので、全学科の生徒が強制的に受験させられることになっている。全国平均等も当然ながら出てくるわけで、学校としては一つでも高い順位、得点が欲しい。

で、そうなると必然的に名前が挙がるのが、去年の模試での成績優秀生徒達。その中に鬼島天下はいた。学内トップ。全国でも五百位以内。やはり奴は化け物だ。担任の佐久間もさぞかし鼻が高いだろう、と思いきやそうでもなかったらしい。

「今年に入ってから射殺さんばかりに睨んでくるんです」

「授業中ですか？」

「さすがに、ずっとというわけではありませんが……」  
佐久間は言葉を濁した。

「黒板に文字を書いてある時に悪寒が走るんです。思わず振り返ると鬼島が私を親の仇とばかりに睨んでいるわけですね」

仇は仇でも恋仇だな。天下本人に言わせるなら。

「授業妨害をするわけでもボイコットするわけでもないのでしょうか？」

「まあ、そうですが」

「もともと眉間に皺寄せる癖がありますからね。寝不足とかで目つきが悪くなっているだけではありませんか？」

佐久間は得心がいかないようだ。訝しげに首をかしげる。

「リヨウ先生は、鬼島と親しいんですね」

ようやく涼は佐久間が何故こんな話題を持ち出してきたのかを悟った。正月での天下の豹変ぶり。優等生面をかなぐり捨てた態度を怪しむなと言う方に無理がある。

「ご自分と一緒にしないでください」

一段階低い声音で制しておく。

「そんなことよりも、どうするおつもりですか？ 渡辺先生はまだ疑ってますよ」

強気な渡辺民子の姿勢を思い出し、涼は気が滅入った。知らないの一点張りで窮地は脱したものの、根本的な解決にはなっていないかった。

「疑いを差し挟む余地のない証拠を突きつけられればいいのですが……」

思案にふける佐久間の横顔。涼はきっかり三秒眺めて無理だと断じた。絶対無理嫌だ。だいたい、そんなことをしようものなら遙香に抹殺される。

(その二) 逃げてはいけません

不意に涼は足を止めた。なるほど、これが殺気というものか。思わず振り向いてしまう気持ちもわからなくもない。しかし涼は全く逆の衝動に駆られた。

(……嗚呼逃げ出したい)

どうしてこうもタイムリングが悪いのだ。注意深く避けていたというのに。

「リヨウ先生？」

鈍感な佐久間は呑気なものだ。

「どうかなさ、」

「いいえ何でもありません」

涼は競歩に近い速さで職員室へ向かった。逃げ込んだと言った方が的確だ。卑怯だと言いたければ言うがいい。これは正当防衛だ。色々な意味で涼は身の危険を感じたのだ。教師の領域に逃げ込んで何が悪い。

安堵のため息をついたところで佐久間に肩を叩かれた。

「あの、呼んでますよ」

「いないと言って下さい」

「こつちを見てますから、さすがにそれは」

職員室の入り口に立つ生徒を盗み見て、涼は絶望的な気分陥った。教師達の手前、頭をかきむしりたいのを堪えて、入口へ出頭する。

「何か御用で」

「お時間よろしいですか？ 相談したいことがあるんです」

事務的口調。だが、油断は欠片もできなかった。優等生面をしているが相手は鬼島天下だ。

「勉強の相談だったら、担任の先生の方がいいと思うけど」

「佐久間先生は忙しそうですし、俺としては先生の方が都合がいい

んです」

微笑さえ浮かべて天下は言つてのける。この似非優等生め。職員室でも不審に思つるのは彼の本性を垣間見た佐久間だけだ。その佐久間も触らぬ神に祟りなし対応で見つて見ぬふり。涼は完全に孤立無援だった。

「ここじゃできない話か？」

せめてもの悪あがき。が、天下は爽やかな笑顔で退路を断つた。

「場所を変えた方が、お互いのためだと思います」

### (その三) 反抗期です

いつから自分はお悩み相談員になったのだろう。進路指導室の椅子に腰かけながら涼はそんなことを思った。

会議があるとかで進路相談室は貸し切り状態だ。給湯室を挟んで隣は職員室。場所が吉と出るかどうかはわからない。が、さすがの天下もすぐそばに教師がたむろしている職員室があるのに無茶はないだろうと見越しての選択だった。

「それで、相談というのは何だ」

涼はそんざいに口火を切った。

「受験に音楽が必要になったのなら忠告しておくよ。無理だ。せめて一年延ばしな」

「あんたって結構、裏表激しいよな」

「君にだけは言われたくない」

人目がないのは涼にとっても都合だ。生徒だろうが遠慮なく叩き潰せる。気概を感じ取ったのか、天下は薄い笑みを消した。

「つまるところは勉強の相談です」

「いくら担当科目でも『六』にはできないからな。評価制度への抗議なら、もつと偉い奴にやってくれ」

「成績じゃねえ。勉強だって言ってるんだろ」

違いがよくわからない。全てとまではいかないが、大方、勉強の度合いは試験に反映され、試験の点数は成績に反映される。残る授業態度の要素も天下は十分以上に満たしていたはずだ。何を相談する必要がある。

天下がスポーツバッグから取り出したプリントを突きつけた。涼は腕組みしたまま一瞥する。

「何だこれ。自分がいかに優秀かというアピール？」

思わず皮肉が口を衝いて出るほど、天下の成績は抜群だった。二学期末試験も中間も、そして一学期も学年一位。一年次となんら変

わらない優等生ぶりだった。

しかし本人は渋い顔をした。

「落ちているんですよ」

「どこが。ずっと一位じゃないか」

「偏差値」

天下が指差す先には偏差値グラフがあった。相も変わらず高水準を維持しているものの、かすかに下降の傾向がある。

「あのなあ……」

涼は額を片手で押さえた。

「君は変わらず九十点台を維持している。皆はその下の方で頑張っている。で、頑張った結果、学年の平均点が上がる。しかし君が取れる点数の上限はあくまでも一教科百点。それ以上は無理。よって上がった平均点の分、君の偏差値は多少下がらざるを得ない。つまり ものすごく当たり前のことじゃないか」

理路整然と言ってやれば天下は口をへの字にした。

「今度、模試があるのは知ってますよね。さつき佐久間と話してきましたから」

「佐久間先生、です」

「その佐久間に次の模試では前回以上の結果を出すように言われたんです」

「だから『先生』をつけなさい」

蛇に怯えながらも蛙は蛙なりに職務を果たしたらしい。

「それで？」

「いくら教師としても男としても、それ以前に人間としても尊敬できないし、むしろいいところを探す方が難しい野郎でも、教育委員会が教師と認めた以上、教師だ。だから俺も優等生らしく、先生の言うことに従って善処はしようと思います。思いますが、俺自身問題を抱えていますので解決するまでは、無理です」

「へえ」

天下の成績表を手に取り、涼は気のない返事をした。音楽科教師

には縁のない試験結果表。平均から前回との差まであらゆる分析がなされている。

「と、言ったんです」  
「なるほど」

よくもまあここまで点数が取れるものだ。どんな勉強法なのだろう。ノウハウを教えていただきたいものだ。そこまできてようやく、涼は成績表から顔を上げた。

「……誰に？」

(その四) 広い心で受け止めましょう

「佐久間」

『先生』をつける、と押し問答を繰り返している場合ではなかった。「まさか、さっきの全部？」

「あいつ間抜け面さらして固まってるだけ」

涼は開いた口が塞がらなかった。どんなに天下の事を取り繕っても煮え切らない態度だった佐久間を思う。てつきり元旦の件を引きずっていたのかと思いきや、とんでもない。佐久間が立ち直るよりも早く天下は追撃のストリートを食らわしていたのだ。

「どうしてまた事をややこしくするんだ」

周囲には優等生と信じられ疑われていない。そんな天下の暴言を相談できるのは涼しかいなかったのだろう。ほんの少し佐久間が哀れに思えた。

「ややこしくしているのは先生です」

持っていた成績表を取り上げられる。目の前には思い詰めた顔の天下。

「好きです」

彼から告白されたのは一度や二度じゃない。が、今回は特に真情を吐露しているかのように真剣そのもので、誤魔化すのは不可能のように思えた。

「私、断ったよな？」

「でも好きなんです。このままじゃ勉強も手につきません」  
それは大問題だ。

しかし残酷なことを言えば、好きになってくれと頼んだ覚えはない。恋に現を抜かすのは自由だが責任は自分で取ってもらわなくては。

「君は私に自分の職を賭けて、恋心とやらに応じると要求している。少し、身勝手過ぎやしないか？」

天下は反論しなかった。佐久間と遙香の件を間近で見えてきたのでリスクは十分理解している。

「確かに、君は本気かもしれない。真剣に考えているかもしれない。でもそんなことは周囲の人間には見えないんだ。ただの高校生と教師の火遊びにしか思われない」

「他の奴らなんか」

「周囲を顧みない言動。それでは佐久間先生と一緒にじゃないか」

もともと、聡い生徒だ。もし天下が大人だったら自分の想いに折り合いをつけることもできただろう。そして子供だったなら、もっと駄々をこねることもできた。佐久間と遙香の関係を盾に交渉することだつてできたし、優等生であることを利用して白紙答案を出すなどリスクは高いが効果的に迫ることだつてできた。

そのどれもできないのは、天下が大人と子供の狭間にいるからだろう。彼は卑怯な手を使うには若過ぎて、なりふり構わず動くには大人になり過ぎていた。情熱だけで解決できると信じられるほど、天下は子供ではなかったのだ。

「……不公平だ」

押し殺すような呻き声が漏れた。

「なんで、あんななんだよ。彼女のふりなんて生徒じゃなきゃ誰でもいいじゃねえか。俺は、あんだだけだと思ってるのに、どうして」

苦しげな表情で天下は吐露した。お門違いだと知りつつも責めずにはいられない。

「あんたが佐久間と付き合ってたんなら、俺もここまでではしなかった。でもな、自分にとって一番だと思ってる奴を代用品扱いされて黙ってられるかよ！」

唐突に、涼は既視感を抱いた。幼い頃の苦い記憶が蘇る。

両親なんてウザいだけ、と公言してはばからなかったクラスメイト。悪口を黙って聞いているだけの自分。口を開かなかつたのは、気を緩めたらすぐにも言葉が出てきそうだったからだ。そんなに

嫌なら。

そんなにいららないのなら、私にちょうだい。

自分が一生かかっても手に入らないものを手にしていながら粗雑に扱う級友。当然と受け止める周囲。一番忌々しいのは「そんな事をいちいち気にする卑屈な自分だ。親がないから何だ。級友の言葉尻を捉えて八つ当たりするなんて。それでも、思わずにはいられなかった。どうして、と。

それだけに、涼は天下を無下にすることはできなかった。

「……わかった」

ため息と一緒に言葉は出た。

(その五) 盗み聞きはいけません

限界なのだろう。天下だけではなく、この状況も。半年前に後先考えずに始めてしまった嘘は、色々なものを巻き込んでしまった。学年の節目を迎えようとしている今が、潮時なのかもしれない。

すなわち、嘘を吐き続けるか、それとも終わりにするか。

「前回の全国模試、何位だった」

うつむきがちだった天下が探るように見てきた。質問の意図をはかりかねているようだ。

「去年の五月にやったんだろ？ 学内ではトップだったそうじゃないか」

「全国相手じゃそうもいかなえよ。確か、四百五十……六十くらいだったか？ あんま覚えてねえ」

意外に素っ気ない反応だった。多少なりとも胸を張れば、可愛げがあったものを。全国で四百位台とくれば国立大だって十分合格圏内だ。しかも天下は成績を維持している。当然、学力も上がっている。天下が模試当日に急病で倒れるか、突然変異とかで天才が異常発生しない限り五百位以内は確実と見て間違いない。

「百位以内」

それを考慮して条件を設定する。実際には不可能だが、そうは思えない。手が届くように錯覚してしまうような順位を。

「今度の全国模試で百位以内に入ったら、君の言う『ふざけた小芝居』をやめてもいい」

途端、天下の目が輝いた。

「本当ですか？」

「これでも教師だ。生徒に嘘は言わないよ」

「別れるんですよね？」

あまりの天下の喜び様に涼の良心が痛んだ。仕組んだこととはいえ、ここまで期待させてしまうと後の落胆が怖い。

「百位以内だからな。百一位じゃ駄目だからな。それと付き合うふりをやめるだけで、君と……どうこうなるつもりはない。勘違いしないように」

念を押しても天下の笑顔が曇ることはなかった。

「わかつてます」

結果を楽しみにしてください、とまで断言する始末。話が終わるが否や鞆を背負って指導室を後にする。この変わり身の早さ。涼は茫然と見ている他なかった。

「百位以内になったら、先生も信じてくれますよね」

「何を？」

扉の取っ手に手を掛けた状態で、天下は振り返った。

「俺が本気だつてこと」

喰えない優等生スマイルで付け足す。

「あと、別れるついでにもう一度よく考えてくださいね。俺、結構いい物件だと思うけど？」

その自信の根拠はなんだ。問う間も与えず天下は退室した。まるで勝利が決まっているかのような態度に、涼の不安は掻き立てられた。まさか。いや、いくら学年トップでも全国百位以内は無茶だ。この学校始まって以来の快拳だぞ。無理無理……とは思うものの、懸念は消えなかった。

しかし、賽は投げられたのだ。後戻りはできない。

（それに付き合うと約束したわけではないんだし）

万が一、もしも奇跡が起きて天下が百位以内に入ったら、自分も潔く手を引こう。結論付けたところで涼は給湯室へ繋がっている方へと向かった。可能な限り足を忍ばせて、だ。扉にはガラスの小窓がついており、中を覗けるようになっていた。無論、こちら側からも。

涼は慎重に扉に足を引く掛け、一気に蹴り開いた。見下ろし、艶然と微笑む。

「奇遇ですね、渡辺先生」

中途半端に屈んだ状態で渡辺民子は目を剥いていた。

(その六) 開き直ります

同じ苗字。同じ高校の教師。同じ性別。共通点をいくら挙げても所詮、涼と民子は他人だ。双子のように相手の考えが手に取るようにわかることもなければ、同じ痛みを分かち合うこともできない。しかし、目の前の女性が何を思い、ここで盗み聞きをしていたのかは察することができた。

「どういふことですか？」

民子は悪びれも無く立ち上がった。質問というよりは詰問だ。

「渡辺先生は、佐久間先生とお付き合いなさっているのでは？」

口ぶりはあくまでも教師に相応しからぬ涼の言動を咎めている。が、その目は優越感に満ちていた。決定的証拠を掴んだことに。

「どうして鬼島君と二人つきりで指導室に？」

民子は執拗に食い下がる。蛇を彷彿とさせる執念に、涼はなんだか面倒になった。

「お聞きの通りです」

「では、生徒と」

「今の会話で私が鬼島と交際していると断じるのなら、渡辺先生の見識を疑わざるをえませんか」

涼は大げさに肩を竦めてみせた。

「彼が私に好意を寄せているんです。毎回毎回しつかり断っているんですけどね。最近の高校生はずいぶん粘り強いようです」

「では、あなたの方にその気はない、と言つのですね？」

民子は陰湿に笑みを浮かべた。

「校長先生の前でも、同じことが言えますか」

どうしてそこで校長が出てくる。いちいち上の権威を借りなきや同僚の教師一人さえも咎めることができないのか。

「わざわざ自分からは言えませんか」

認めれば民子の笑みが深くなる。それで涼は確信した。民子を突

き動かしているのは教師としての義務感でも何でも無い。

「ですから、渡辺先生の方から口添えしていただけると嬉しいですよ」  
一転して民子は呆けたような顔になる。涼の言った意味を理解し  
かねるようだ。

「一般常識に欠けているとはいえ、普通科の優等生です。学科の違  
う私が咎めるわけにも、かと言って応じるわけには勿論いきません  
正直、どうしたものかと扱いに困っていたんです。渡辺先生の方か  
らそれとなく諭していただけると助かります。ついでに校長先生に  
も説明して下さるともっと嬉しいです。ありがとうございます」

勝手に協力者にされた民子は、しばし呆然としていた。が、やが  
て盛大に眉をしかめる。

「何を言っているんです？」

「私に後ろめたい事は何一つとしてない、と申し上げているんです」  
経験上、民子のような相手には強気な姿勢が一番効果的だと涼は  
知っていた。

「ですから、どうぞご自由になさってください」

そして突き放すように言ってしまうえば、民子はどうすることもで  
きなくなることも。そもそも彼女の目的は涼と天下の関係を公にす  
ることではないのだ。

(その七) 盗人は猛々しいのです

案の定、民子は唇を強く引き結んだ。涼の強情さを不快に思っているのを隠そうともしない。世の中自分と同じ考えを持つ人間が多数で、少数派の人間は異常だと断じて疑ってすらいらない表情だった。「佐久間先生とのご関係は、どう説明なさるつもりですか？」

強引な話題転換。本人は急所を突いたつもりなのだろう。

「リヨウ先生のおっしゃる通りだとしても、実際は交際していない二人がさも付き合っているかのようにふるまう。何か理由があると考えるのが普通ではありませんか？ 人には言えない理由があるのではないかと」

勝ち誇るように他人のプライバシーに踏み込んでくる。民子の無神経さに涼はげんなりした。他人の色恋に首突っ込もうなど物好きがいたものだ。

「知つての通りですよ」

誤魔化そうと考えなかつたわけではない。例えば、天下があまりにもしつこく交際を申し込んでくるから、口実として佐久間に協力してもらった、とか。それが今になってバレてややこしくなった、だの。自分でも呆れるくらい嘘の言葉は浮かんだ。

しかし、疑っている相手ならまだしも、確証を得ている相手にどう言葉を取り繕っても無駄だ。

「佐久間先生に関しては、渡辺先生がご覧になった通りです」

涼が含めた意味を民子は察しなかった。言葉面をそのまま呑み込んで、注視しなければそれとわからないくらい微かな笑みを漏らした。が、気の緩みも一瞬で引き締め、冷静を取り繕う。

「では、校長に報告しなければなりません」

白々しい義務口調。さらに民子は咎めるように目を眇めた。

「しかしリヨウ先生までもがどうしてそんな軽率な真似を？ 教師と生徒ですよ。常識的に考えれば止めるのが普通ではありませんか」

何故、協力なんかしたんです？」

土足で踏み込んできた拳句、説明を要求する。この身勝手さによって涼のただでさえ長くない気が限界を迎えた。

「もういい加減にしてくださいませんか」

鈍痛がする頭を抑えて、半ば自棄気味に言い放つ。

「何故私がこんな馬鹿げた隠ぺい工作に付き合っただか。お知りになりたいですか？ 端的に理由を申し上げれば、あなたのような方がいらっしやるからですよ」

民子は鼻白んだ。

「どっという意味です？」

「教師と生徒の恋愛なんて正気の沙汰じゃない。そんなこと、わざわざ言われなくてもわかっています。そのわかりきったことを、配慮もなく人目のつく場所で責め立てるような無神経な方がいらっしやるから、私は内々に事を収めようとしたんです」

涼の苛立ちの原因は民子の言動にあった。

生徒と教師の密会現場を捉えたのなら、まず周囲の目の届かない場所に移動し、事情を問い質すのが普通だ。駅構内のあんな大勢の人前で、晒しものにする必要はなかった。そこに涼は民子の悪意を感じ取ったのだ。

吊るし上げになった側がどれほど傷つくか。そこまで思い至らないくせに干渉してくる民子が涼には赦せなかった。

「馬鹿の一つ覚えみたいに正論を何度も振りかざさないでください。おっしやる通り、生徒と教師の恋愛は大問題です。分別すれば『悪い事』になるのでしょうか。しかし、佐久間先生が間違っているから、あなたが正しい、ということにはならないんですよ」

佐久間と遙香は軽率だった。しかし、その非を責め立てる権利は民子にはないのだ。それを、まるで鬼の首でも取ったかのように、これ見よがしにかざし、いやしく貶め踏み躪る。涼に言わせれば民子の心ない言動にもまた、非があった。

「渡辺先生」

色を失うほど唇を噛みしめる民子に、涼は剣呑な視線を向けた。  
「大義名分が自分にあるからといって、他人のデートの後をつけた  
り、ましてや職場に脅迫文紛いのものを送りつけるのは、いかがな  
ものでしょうかね」

(その八) 居直ると恐ろしいことになります

「一体何の……」

民子を取り繕うように笑う。

「どうして矢沢さんと佐久間先生が交際していると知っているんです？」

笑顔は無視して涼はたたみかけた。

「二人で会っているところを見た。おまけに親しげでただならぬ雰囲気だった。たしかに、怪しいと思える状況であることは認めます。しかし確信がないのなら、平然を装って話しかけるか、後日事情を聞いてみるのが普通でしょう。怪文騒ぎがあつたのならなおさら慎重に行動するものです。いきなり喧嘩腰で当人に問い詰めたりなどしません。もし誤解なら赤っ恥ではありませんか」

「見ればわかります。だいたい、新年早々二人きりで会っているなんて不自然ではありませんか」

「不自然な状況ではありませんが、決定打には欠けます。あなたは二人の様子を見て疑惑を抱いたんじゃない。最初から疑っていたんです。状況がその疑惑を裏付けただけです。いや、確信していたと言った方が的確ですね。でなければ、いくら匿名とはいえ、お三方に告発文を送りつけるような大胆な真似はできないはずですよ」

民子は一瞬、虚を突かれたかのように涼を見つめ、それから唇を震わせた。

「それではまるで、私が二人を陥れようとしたみたいではありませんか」

「みたい、ではなく明確な悪意を持ってなさつたと私は推察いたします」

他人の色恋を職場で暴露。正気の沙汰ではない。我を失っていないわけばできないことだ。

「一体、何の証拠があつてそんなことを……っ！ 無礼にも程があ

ります。私を侮辱なさるおつもりですか」

顔面蒼白で民子がわなないた。

「では、矢沢さんが佐久間先生と会っているのを見かけただけで、例の怪文と結びつけたのですか？」

「当然皆そう思うでしょう？ 匿名とはいえ、怪文の通り矢沢遙香は二年三組の女子生徒です。ここまで重なっていたら疑うなど言う方に無理があります」

民子は濃い目の口紅を施した唇を挑発的につり上げた。

「誰が見ても二人は怪しいです。なんでしたら、他の先生方のご意見を伺ってもかまいませんよ」

どこまでも強気な姿勢。それは過信に近かった。

他の先生方も味方してくれるはず。だから自信を持って言える。

逆を言えば、誰かの後ろ盾がなければ動けないということだ。その証拠が、先ほどからやたらと民子の口から出てくる『校長』だの『皆』だの、直接関わりのない第三者の名だ。『皆』の支持がなければ自分の考え一つ言えやしないのだ。

「その必要はありません。もう十分です」

涼はため息を吐きたいのを堪えて言った。

「渡辺先生、あなたは何故あの怪文にあつた佐久間先生の交際相手が矢沢遙香を指していると知っているんですか？」

「前にも言いました。学年主任から聞いたんです」

質問の意図を探るように民子は睨みつけてきた。だからというわけではないが、涼は早々に結論を言った。

「怪文には『二年の女子』とありましたが『二年三組』とは一言も記されていません」

民子は二の句が継げなかった。目を見開き、驚愕とも憤怒ともつかない歪んだ表情のまま硬直する。それは、言葉よりも雄弁な返答だった。

(その八) 居直ると恐ろしいことになります(後書き)

かなり昔の話を出してすみません。

『一限目(その一)火のないところに煙はたちません』では一応、  
そうなっていました。

(その九) 責任転嫁は見苦しいだけです

「……私の言い間違いです」

「言い間違いで済ませるのはどうでしょう。校長の使いで私を呼びに来た時すでにあなたは『二年三組の女子』だと言っていました。あの時点で佐久間先生の交際相手が『二年三組の女子』だと知っているのは、当事者でなければ怪文を送りつけてきた人だけです」

決定打。確かな手ごたえを涼は感じた。民子の視線が行き場を求めて彷徨う。やがて逃げ場のないことを悟ったのか、真っ直ぐに涼を見据える。見ているこつちが危うくなるほど直情的な眼差しだった。

「私は嘘など書いていません」

堰を切ったように民子は饒舌に語り出した。

「全て本当の事です。リヨウ先生だつてご存知でしょう。あの人は教師でありながら、よりもよつて生徒と関係を持ったのです。十も歳下の小娘にですよ？ 相手は火遊び程度にしか思っていないのに、恥も外聞もなく女子高校生の気まぐれに付き合つて……っ！」

佐久間達を貶めれば自らの正当性が証明されるかのようにまくし立てる。しかし、そんなことはなかった。生徒と教師の恋愛がいかに常識外れだろうと、騙しうちのように怪文を送りつけるのは卑怯な行為であつて、それ以外の何物でもないのだ。

「私は、間違つてはいません」

民子は断言した。が、根拠がなかった。

「そのお言葉、あなたの好きなお三方の前で言つたらどうです？」  
容赦なく涼が突けば、民子は脆くも崩れ落ちた。言えるはずがない。でなければ校長、教頭、学年主任のお三方に匿名で怪文を送りつけ、騒ぎを引き起こしたりなどしない。

生徒と教師の恋愛はご法度。しかし不用意な行動で騒ぎを起こした事とはまた別問題だ。涼に指摘されてようやく民子はそれを悟つ

たらしい。事が公になれば佐久間と遙香はもちろん糾弾されるが、民子もまたただでは済まないことを。

(まだるっこしいことなんてせずに、学年主任にでも相談すれば良かったのに)

そうすれば、生徒と教師の恋愛問題で話は済んだ。一方的に責めることだってできたのに。民子の行動は理解に苦しむ。

民子は力無く顔を上げた。

「佐久間先生に言うんですか？」

どうあっても他人の目が気になるらしい。涼は心底呆れた。

「私は生徒が平穩無事に卒業できれば満足です。それ以上は望みません。波風さえ起らなければ何も申し上げる必要もないでしょう」

暗にこっちも目を瞑るから、あんたも黙っていると云ったのだが、民子は縋るような目をした。この変わり身の早さ。呆れを通り越して感心さえしてしまう。

「私は、どうすれば……」

「ご自分で考えてください」

佐久間といい民子といい、先輩教師の不甲斐なさに涼は軽い眩暈を覚えた。他人依存にも程がある。これがいい歳した大人か。

しかし涼も他人のことを言えた義理ではなかった。清算はしなくてはならない。模試の結果を待つまでもなかった。涼の中で結論はもう出ていたのだ。

(その十) 八つ当たりも同じくらい醜いです

小芝居から降りる旨を伝えると、佐久間は呆けた顔になり、数拍後にようやく意味を理解して狼狽した。

「ちよつと待つて下さい、リョウ先生」

「ええ、待ちますよ。あと何日ですか？ 別れる理由も考えなくてはなりませんね」

適当にあしらって、涼はスタンウェイの鍵を開けた。昼休み。次の五限は普通科の音楽の授業。鑑賞室は涼の貸し切り状態だ。密談を行うには丁度いい。

「それは、鬼島のせいですか？」

涼とて佐久間が素直に引き下がるとは思っではいなかった。が、食い下がる部分が予想と違った。何故いちいち天下が出てくるのだ。

「彼は関係ありません」

「失礼ながら彼とあなたは、ただの生徒と教師には見えませんよ。

元旦の時だつてそうですし、先日職員室で呼び出されましたよね？」

「佐久間先生には関係のないことです」

「それでは納得できません。おかしいではありませんか。どうしてそんな急に……」

急ではない。限界は来ると最初からわかっていたことだ。きつかけは元旦の一件だが、前々から感じていたことだ。小芝居がいつまで続くはずがない、と。

「鬼島が言ったんですか？ だから止めるんですね？」

佐久間は決めつける。原因が自分にあるとは微塵も思っていない口ぶりだ。勝手に三文芝居の舞台上に引きずり出しておいて、降りることすら許さない。なんともいい御身分だ。

「何度も言わせないでください。鬼島君は関係ありません」

「しかし、彼はあなたに好意を寄せていますよ？」

そんなこと、お前に言われなくてもわかつてる。涼は怒鳴りそう

になった。他人の色恋を案じる暇があったら自分の事をどうにかしろ。

「ご安心ください。私はどこその後先考えない教師とは違って、生徒に応じたりはしません」

怒鳴りこそはしなかったものの、口調は完全に喧嘩腰。苛立ちのままに涼は言葉を紡いだ。何もかもが厭わしかった。

「まだわからないんですか？ 迷惑なんですよ。頼んでもいないのに踏み込んできて、振り回して、どうにもならなくなったら私に押しつける。鬼島も勝手ですが、あなたはそれ以上に勝手です」

「私は……」

「『私は』『私は』って自分のことしか考えてらっしゃらない。隠すのには一生懸命なようですけど、万が一バレた時のことを考えているんですか。最終責任は教師が取るしかないですよ？ なのに渡辺先生に問い詰められた時だって、黙ってらっしゃるだけで自分からは何一つしようとしません。隣で矢沢さんが責められていても助け舟すら出してやらない。本気で生徒と恋愛するんだったら 同僚を巻き込んで恋愛するくらいなら、自分の職を懸けて庇ったらどうなんですか」

半分以上八つ当たりだ。わかつてはいたが止められなかった。弁明をするなら、これまでの鬱憤が募っていたのだ。天下といい、佐久間といい、自分の想いを貫くと言えば聞こえはいいが、結局は周囲を全く顧みてないだけだ。

「覚悟もなくて他人を巻き込まないでください」

仮に、天下とそういう関係になったとしても、発覚した際に咎められるのは教師である涼の方だ。間違いなく免職。それだけならまだいい。無責任な教師を雇った学校はどうなる。学校を信頼して預けた天下の父は？ 何よりも、教師とデキていたと一生後ろ指差される天下は一体どうなる。彼がこれから歩むであろう未来は。

考えて、考えて、堪らなくなるのだ。どうしようもなく惨めになる。

(……どうして、私ばかり)

逢香も佐久間も天下も、涼には理解できなかった。涼があればほど望んでも、願っても手に入らなかったものを掴んでおきながら、どうして簡単に投げ出そうとする。

必死に護ろうとしている自分が馬鹿みたいではないか。

(その十一) 教師たるもの、嘘はつきません

「話はそれだけです」

絶句した佐久間を余所に涼は鍵盤へ手を伸ばした。いつもなら授業の伴奏を練習するのだが精神的にそんな状態ではなかった。

薄氷を割ったような一打目。そのまま叩きつけるようにエチュードを描いた。繊細とは程遠い荒々しい旋律。左手の激しいアルペツジオに乗せて和音を奏でる。

観念して佐久間が立ち去っても涼は弾き続けた。

さすがはピアノブランド最高峰スタンウェイ。指先の意思が鍵盤に、弦を叩くハンマーに、そして空気へと伝わり響く。ひたすらに指を滑らせることだけに集中した。

重要なのは情熱ではなく冷静さであることを知ったのはいつだろう。無論、情熱が不要というわけではない。毎日毎日ひたすらに練習を続けるには情熱が必要不可欠。が、演奏面においては情熱的である必要はあっても、情熱は必要ない。むしろ邪魔だ。

では何が音楽家たらしめるのかというと、情熱をコントロールする技術と冷静さだ。情熱的に弾いていながらも、心の一部は冷めていなければならぬ。人はそれを余裕とも言おう。

だから駄目なのだろうな。涼は自嘲した。余裕を残せない。自分のことで精一杯で。それは音楽でも日常生活でも言えることだ。

「先生」

演奏終了の余韻を低めの声が打ち砕いた。金曜の五限目は普通科の音楽だ。天下なら早めに来るだろう。教科書を携えた状態で、ゆっくりと口を開いた。

「俺は迷惑ですか」

聞いていたのか。いつもいつもタイミングの悪い奴だ。笑おうとしたができなかった。こちらを見つめる天下の眼差しは壊れそうなほど儚くて、必死だった。見ている方の息が詰まる。

不意に涼の中でこれまでのことが思い起こされた。

やめる。目を覚ませ。諭すように拒んではいたが、迷惑だとは言っていないかった。寄ってくるのは自由だ。でも自分は応じられない。傍にることだけは許していた。

「迷惑だよ」

本心だった。このところ、天下に振り回されてばかりだ。おかげで自分にまで疑いがかかっている。これを迷惑と言わずして何と云う。

「君は情熱だけで突っ走れるからいい。でも私はどうなる？ 君の将来とか、世間体とか、自分の職とかを考えなきゃならない私はどうなるんだ」

庇わなくてはならない。護らなければならぬ。天下が蔑ろにするものを、本人の代わりに。でも、そんなのは惨めだ。

「大変なんだよ、君が傍にいますと」

「そんなもん」

「私にとっては、そんなものじゃない。今まで積み重ねてきたものが崩れてしまいかもしれないんだ。同じだけのものを君は懸けられるのか？ 大人に護られているだけの高校生に、そんな真似はできない。してはいけないんだ」

激昂するかと思いきや、天下は冷静だった。表面上は。込み上げてくる何かを堪えるように「そうですか」とだけ呟いて席に着いた。「ご迷惑かけて、すみませんでした」

学生の席から深々と頭を下げる。机に置いた教科書。その上に模試の参考書が重ねられているのを発見し、涼は目ざとい自分を恨んだ。知らなければ良かった。高校生なりに努力していることなんて知りたくはなかった。

大変だと言った言葉に嘘はない。天下が傍にいますと辛い。輝かしい将来とか、夢とか、あつさりと捨ててしまふ天下が憎らしくさえ思えてくる。傍にいますと苦しいのだ。

でも、離れてしまふと寂しいのもまた、事実だった。

(その十二) 説教は親と教師だけの特権ではありません

「あんたが悲しいのはよくわかったわ」

とりあえず最初の一時間は黙っていた琴音だが、ついに堪忍袋の緒が切れたらしい。音楽雑誌を閉じて、半眼でこちらを見る。

「だからって私の家に来ないで」

涼は指先に力が入らないことに気が付いた。普段あまりピアノを弾かないせいだ。授業での伴奏はともかく激しいタッチの曲を弾き続けられるほど鍛えられてはいない。

「疲れただけだ。悲しくはない。むしろ安堵しているね。これで私の平穩が戻ってくる」

「じゃあウチに上がり込んで延々ピアノ弾き続けないでよ。しかも何？ さつきから『革命』ばかり。シヨパンになんか恨みでもあるの？」

「今、エチュードでまともに弾けるのこれだけなんだよ」

専攻はあくまでも声楽。ピアノは副科だ。自宅にピアノを置けるほど裕福でもなければ必要性も感じなかった。が、衝動的に演奏をしたくなると不便だ。琴音の家へ行くしかない。兄から受け継いだスタンウェイのグランドピアノは絶対に触らせない琴音だが、隣に置いてある電子ピアノは自由に弾かせてくれる。今のようになん少乱暴に扱っても、目を瞑っていてくれる。

「面倒な子ね、涼ちゃんって」

琴音は深々とため息を吐いた。

「自分で振っておいて傷ついていちゃ世話ないわよ」

「少しセンチメンタルになっているのは認める。けど、決して傷ついているわけじゃない」

「それを世間では傷心って言うの」

涼は鼻を鳴らし、鍵盤を軽く拭いた。電子ピアノとはいえ立派な楽器だ。扱いが変わるわけではない。スタンウェイだろうと中古の

ピアノだろうと楽器だという一点で尊重すべきものになる。それは琴音も一緒だ。

しかし、彼女にとってスタンウェイだけは別だった。高級ブランドであるのも理由の一つだが、一番は兄が愛用しているものだからだ。帰国の際は必ず弾いているという。敬愛する兄が使うピアノ。それだけでグランドピアノは琴音にとって特別な価値を持つ。

「成長ないわよね。『カルメン』の時だってそう。自分が犠牲になればいいとか、格好いいこと考えて勝手に諦めるの。そのくせ、いちいち傷ついて」

黒光りするグランドピアノが視界に入る。どうしてだろう、と涼は思った。同じピアノなのにどうして差が出てしまうのだろう。

「価値がわからないんだ」

涼は呟いた。選ばれた理由がわからない、と。

「きつかけはたしかに先輩に反対されたことだけど、理由は別だ。私がカルメンをやることで波紋を呼んでいる。それでもなお私がカルメンをやることに意味を見い出せなかった。私がやろうと他の誰かがやろうと変わらないと思った。私じゃなければいけない理由が見当たらなかった。だから降りた。それだけ」

偽善でもなんでもない。いつも最善の方法を考えてきただけだ。

『カルメン』だって琴音が主役を全うしてくれたおかげで成功を収めた。間違っただけはなかった。誰も傷ついていない。

「でも本当はやりたかったんでしょ？ カルメン。一生懸命練習してたじゃない」

口調は責めるものだったが、それを言う琴音は苦しげだった。

「鬼島君は別にあんたが嘘を吐き続けているから責めているわけじゃないのよ？ 自分を蔑ろにしているから怒ってるの。正直、私も呆れてる。クビになるからだか何だか知らないけどね、普通同僚に『僕はあなたのことは好きでも何でもないですが、僕らの都合上彼女のふりをしてください。好き合っているふりをしていてください』なんて頼まないわ。どんだけ他人のこと馬鹿にしてんのよ」

愛しのお兄様が表紙を飾る音楽雑誌。それの上に琴音は音が出るほど乱暴に手を置いた。

「でね、普通は頼まれてもそんな馬鹿げた頼みは引き受けないの。プライドってもんがあるじゃない。たとえ生徒の一生に関わることも断るの。身勝手極まりない小芝居に休日返上で付き合ったりはしないの、普通は」

一気に言っつて肩を落とす。琴音は興奮と息を落ち着かせた。が、苛立ちは消えていない。兄に似て整った眉は寄せられたままだった。「そうじゃなきゃ惨めじゃない。涼は一体何なのよ？ 散々利用されて、悩まされて、好きでも何でもない男のために苦労する涼は一体何なの？」

(その十三) 価値観の押し売りは控えましょう

その程度の人間だということですよ、榊琴音さん。

口にしたら最後、烈火のごとく怒り狂うのは目に見えていたので、涼は黙りこくった。人類皆平等なんて嘘だ。琴音のように理解ある両親と兄弟、何不自由ない生活を生まれながらに持っている人もいれば、生まれて息をただけで不必要と捨てられた人だっている。

無価値な人間などいない。しかし人それぞれの価値に差はあるのだ。誰が否定しようとして厳然と存在する差が。

「人には分つてもものがあるんだよ」

「あなたが勝手に作った分がね。自分を卑下するのも大概にしなさいよ。傍から見えてて苛々する。涼は昔つからそうだった」

変わる要素がないのだから当然だ。何年経とうと涼の生まれが変わるわけでもない。

「勝手に分を決めて、そこから出ようとしない。欲しいものがあっても指をくわえて見ているだけ。手を伸ばす前に諦めている。それも全部、自分の分のせいにして」

誰も決めてくれなかったから、自分で身の程を決めただけだ。

生まれて最初に覚えたのは、諦めるということだった。自分が力を尽くしても決して手に入らないものがある。それを涼は幼い時から知っていた。同時に、そんな努力をしなくても手に入れられる人もいることも。世の中は、そんな人が大半を占めることも。

「欲しいものがあるなら力を振り絞って掴んでみなさいよ。努力している人に失礼だと思わないの？」

正論だ。しかし涼には詭弁にしか聞こえなかった。努力さえすれば手に入るものしか欲しかったことのない琴音だからこそ言えることだ。最初から用意されていた側の言い分に過ぎない。

「じゃあ、どんな努力をしたら」

琴音の言う通りだ。自分は昔から何一つ変わっていない。二十年

以上経つのに自分の決めた分から一步も踏み出せずにいる。涼は悪意を込めて琴音に訊ねた。

「どんな努力をしていたら、私は捨てられなかったんだろうね？」

自分の失言に気がついたのか、琴音は気まずげな顔をした。

「ごめん。言い過ぎた」

「私も、急に押し掛けてきて悪かったよ」

会話の終了を示すつもりで涼は立ち上がった。ここにいっても琴音も自分も不愉快になるだけだ。鞆を手に取り、コートを羽織った。

「涼」

途方に暮れたように琴音が名を呼ぶ。

「本当にごめん。私、そういうつもりじゃ」

「知ってるよ」

「でもね、今のままがいいとは思えないの。もっと自信を持ってほしいの。やっぱりおかしいよ」

「わかってる」

涙を湛えた琴音の瞳は潤んでいて、涼は綺麗だと思った。

見目の美しさだけじゃない。他人を思いやることのできる心が、だ。

残念ながらそのどちらも自分にはなかった。泣くことすら虚しくくてできない。見ているのも苦しくなつて涼は玄関へ向かった。

(なあ、どうしたら君みたいになれる?)

つい訊ねてみたくなる。榊家に生まれていたら、せめて親に不要もの扱いされなかったら、琴音のようになれたのだろうか。

「大丈夫だよ。君が悪いわけじゃない」

むしろ原因は自分にある。何でもかんでも生まれのせいにしてしまう卑屈さが涼の全てだった。

「でもな、わからないんだ」

ドアノブに手を掛けた中途半端な状態で、涼は振り返った。

琴音は怒って当然だと言う。彼女のふりだなんて、同僚を馬鹿にした行為だと。二年生だという理由だけで主役を降ろされるなんて不当な扱いだと。しかし、当の涼自身は怒りを覚えなかった。

代用品扱いに天下は激怒した。全国模試百位以内という無謀な試みに挑んでも、自分の将来をふいにしても構わない、とさえ言った。しかし涼はそうは思えなかったのだ。天下が寸暇を惜しんでまでしなくてもいい勉強に励み、待ち構えているであろう輝かしい未来を捨てる。そんなことをする理由が見当たらない。

「自分にそれだけの価値があるとはどうしても思えないんだ」

スタンウェイのピアノが最高級のものであると価値付けられるのは、生み出した『スタインウェイ&サンズ』が最高の価値を付け、世の音楽家達はその評価を支持したからだ。人間ならば親がそれに相当する。どんな人間であろうと、親にとっては無条件で愛すべき存在であり、最高の価値を付けられる。

ではその親に不要なものと 無価値であると断じられた自分の価値は、一体誰が決めるのだろうか

(その十四) 口論をする際は周囲に気を配りましょう

積み上げたものを崩すのは簡単だ。たった一週間の間に民子とは半ば敵対関係になり、佐久間とは絶交し、琴音とは気まづくなり、天下に至っては目すら合わせないようになった。自分がいかに脆い関係で繋がっていたかを涼は改めて実感した。

周囲は相変わらず涼と佐久間が交際していると思ひ込んでいる。涼もあえて否定はしなかった。佐久間にはああ言っただが、遙香が三年になるまでは小芝居を続けてやるつもりだ。

表向きは職場恋愛だ。浮ついていると先輩教師から嫌味を言われることもある。生徒にからかわれることもある。天下には軽蔑されただろう。しかし全て、涼が我慢すればそれで済むことだった。

大したことではなかった。もつと酷い扱いだつて受けてきた。悔しくて眠れなかった時だつてあつた。でも涼はしぶとく生きている。ピアノだつて弾くし、授業だつてできた。心労で倒れることもない。だから、大したことではない。

そうして折り合いをつけて数週間。模試も終わった月曜日の朝、涼が寝ぼけ眼を擦り職員室へ向かつている際に、その匂いは鼻を掠めた。学校にはそぐわない微かな香り。

「煙草」

反射的に口に出すと、見覚えのある背中が振り返つた。高校生にしては鋭い双眸。授業以外でまともに顔を合わせるのは久しぶりだ。「匂い、また残ってる」

内心の動揺を悟られる前に涼は踵を返した。職員室とは反対方向。それでもこの場から逃げ出すことの方が重要だった。

背後で舌打ち。

「相変わらず細けえ」

「学校は禁煙ですから」

「煙草も駄目。恋愛も駄目。だから不登校が増えるんじゃないの？」

窮屈過ぎんだよ」

何故ついてくる。意地でも振り向くまい、止まるまいと涼は足を速めた。

「望ましくないんだ。やるならバレないようにこつそりと。バレた際はペナルティを甘んじて受けましょう、自己責任で」

「じゃあ俺が責任取るから付き合って下さい」

「再就職先の斡旋でもしてくれるわけだ。どうもありがとう」

「待って」

中央廊下に差し掛かったところで天下が痺れを切らした。肩を掴まれて、涼は仕方なく立ち止まった。

「頭は冷えたのかよ？」

神妙な顔でそんなことを訊ねてくる。

「冷やすのは君の頭の方だ」

いつそ氷水にでも頭を突っ込んでくれ。そうすれば教師に交際を申し込むなどという馬鹿げた考えも吹っ飛ぶだろう。そうだと全力で期待したい。

「一人で勝手に盛り上がって。迷惑だって何回言えば理解するんだ」  
感情を乗せずに、静かに、取り付く島を与えない。涼は極めて冷静に対処した。目論見通り天下の神経を逆撫でることに成功。眉間に皺が生まれる。

「責任なんか取れるわけじゃないか。自分の面倒すら自分でみれない高校生が偉そうに口を利くな」

「伊達巻一つ作れない先生に言われたくはありません」

「卵焼き作れる程度で調子に乗るんじゃない。料理ができようと全国模試で百位だろうとあくまで君は高校生で、生徒で、子供なんだ」  
天下は眉根を寄せた。

「……またそれがよ」

(その十五) 大人には大人の事情があります

「二言目には教師だ生徒だ。ていのいい言葉並べて逃げやがって、結局あんたはどうなんだよ」

不貞腐れているような、不機嫌そうな、なんとも表現しがたい険しい面持ちで訊ねた。

「俺が、嫌か？」

「対象外なんだよ。好きも嫌いもない。興味がないんだから」  
「嫌かどうか聞いてんだ」

返答に窮していたら、やたらと得意げに天下が顔を覗き込んできた。期待に満ちた眼差しが気に障る。

「じゃあ好きか？」

「いや、それはない」

即答。しかし天下は怒るわけでもなく鼻を鳴らした。

「好きでもない、興味もない生徒を自宅に上げたりするのかよ。だとしたら、とんだ悪女だぜ？ あれだけ思わせぶりな事しておいて期待させて、カルメンだつてそこまでしねえよ」

「気を遣っているんだ。これでも教師だからな。繊細な少年少女の心を傷つけないように、何事も穏便に済ませようと思っていたんだ」  
「にしては、上手くいってねえのな」

何の事を指しているのかは明白だ。佐久間達の件も破綻寸前。どんなに上手く取り繕ってもどこか綻びはある。民子には半ば脅迫まがいの手段で口止めをしたが、いつまで続くかはわからない。それに危機感のないバカツプルのことだ。二人の軽率な行動を気に留めている者が他にいないとは限らない。

「先生、またあの二人のことを考えてますね」

天下の口調は怒りを通り越して呆れていた。

「君に責められる筋合いはない」

「責めてませんよ。でも、約束は守ってくださいね」

実際に模試を受けてもまだ自信を喪失していない。その図太さに涼は開いた口が塞がらなかった。百なんて生ぬるい。五十位以内にしておくべきだったか。

「わかつてる」

「俺のことですよ」

「何回考えても答えは一緒だけだな。迷惑で面倒なだけだ。お互いに」

「またそうやって立場を持ち出す。卑怯ですよ、先生」

卑怯とは心外だ。こっちはどう事を収めようかといつも考えているというのに。苦勞も知らないで好き勝手やりやがって。天下も、佐久間も、遙香も、みんな勝手だ。

「立場をわきまえずに動ける君がうらやましいよ」

「あんたが教師の職にしがみついているだけだろ」

元旦にも同じことを言われた。教師面するな。そんなに良い教師でいたいのか。耳の痛い言葉だ。生徒と教師の交際に反対していながらも手を貸している中途半端さを、天下は軽蔑している。

生徒に嫌われても間違いを正すのが教師の役目だ。その点、涼がやっていることはただ佐久間と遙香を甘やかしているだけなのかもしれない。

では、どうしたらいい。引き離すこともできず、かといって校長に報告することもできない。仮にも生徒だ。見捨てられない。

「仕方がないだろ。私から教職を取ったら、何も残らない」

「なんでそんなにネガティブになるんだよ」

天下が苛立たしげに頭を掻きむしったその折だった。

「渡辺先生」

酷く慌てた様子で恵理が呼ぶ。

「こんなところにいたんですか」

涼は努めてさり気なく天下から離れた。天下が不快に思うのも知つての上だ。誤解を招く行動はできるだけ控えたかった。

「何かあったんですか？」

「至急、職員室まで来て下さい」

それだけで何の説明もない。つまり生徒の前では言えないことなのだろう。涼の胸に嫌な予感がひしめいた。

「わかりました。すぐ参ります」

しかし逃げる選択肢などあるはずがない。涼はどうしようもなく教師だった。それ以外にはなれなかった。

(その十六) 後には引けません

朝の会議等で職員室には毎日訪れるが、音楽科準備室に机があるため、長居はしない。ゆつくり紅茶を飲むのも、授業の準備するのも全て準備室でだ。改めて入室すると、意外に職員室は広く感じた。教師の数が少ないせいかもしれない。その十数名の視線が一斉に向けられ、涼は面食らった。場所を間違えたのかと一瞬思う。が、その考えはすぐさま消えた。

教師に囲まれている女子生徒がこちらを振り返った。途方に暮れたような眼差し。いつもの小生意気さは鳴りを潜めていた。その隣に立ち尽くしているのは佐久間。それだけで涼が全てを察するには十分だった。

ついに破綻したのだ。

「何事ですか」

白々しいと思いつつも涼は何食わぬ顔で近寄った。

対峙する形で立つ学年主任は無言で写真を突きつけてきた。画像が荒い点からしてケータイで撮ったものだろう。それをわざわざ現像する辺りに悪意が伺えた。しかし、重要なのは誰がどう撮ったかではなく、何が映っているかだ。

どこぞの教室内(空き教室だろう)で抱き合う二人。

もはや言い訳のしようもない。状況が許すなら涼は笑い出すところだ。よりにもよって学校で。電車の中なら「よろけたのを咄嗟に支えました」で誤魔化したものを。

人気のない校内で制服姿の教え子を抱きしめる教師 適切な説明などできるわけがなかった。

(終わったな)

幕引きだ。古今東西、秘密事が明るみにならないケースは極僅かだ。『ローエングリン』の白鳥の騎士の名だって明らかにするし、トウーランドットに挑んだカラフ王子だって最終的には自分の名を

自ら明かす。オペラの役者たるもの、潔く幕を引くべきだ。涼の小芝居は終わった。

しかし、これはオペラでも小芝居でもない現実だった。『悲劇』の一言で幕が下りるわけじゃない。どれほど悲劇的で苦痛に満ちたものであってもその先を続けなければならぬのだ。ならば精一杯足掻くしかない。

「何ですか、これは」

「私が聞きたいくらいです。佐久間先生と矢沢さんが抱き合っているように見えますが、一体どういうことですか？」

見ての通りです、学年主任。

ぶちまけたいのを涼は堪えた。許されるものなら逃げ出したかった。遠慮なく注がれる軽蔑と胡乱の眼差し。耐えがたい屈辱だ。それでも涼は折れるわけにはいかなかった。

「お二人は何と？」

学年主任は無言で顎をしゃくった。本人から弁明しろと言わんばかりの態度だ。佐久間は唇を引き結んだまま、何も言おうとはしない。その隣にいる遙香が逡巡の後に口を開いた。

「……先生は、悪くありません」

と、一言。それ以上は何も言おうとしない。本人は佐久間を庇っているつもりなのだろうが、逆効果だ。意味深な態度にますます疑惑は深まる。

「渡辺リヨウ先生、あなたはこのことをご存知だったんですか？」

ここで何も知らなかった、と言えば、涼が咎められることはない。交際相手に浮気されたという大恥はかくことになるが、責任を問われることはない。半年近くも隠ぺいに協力した教師も共犯だ。教師ではいられなくなる。

涼から教職を取って後に残るのは、幼いままの渡辺涼だ。母親が秤にかけて捨て去った。その程度の価値しかないものだ。

遙香が切羽詰まった声で弁明した。

「渡辺先生は、関係……」

「存じ上げていました」

涼がそれを遮った。呆れかえる学年主任を正面から見据える。

「九月頃でしたか、彼女から相談されました」

(その十七) 覚悟と諦めは全く違います

慎重に言葉を選ぶ。決定的な発言は避け、突破口を探った。何か、適当な言い訳はないか。もっともらしい正当な事情を言おうと涼は頭を捻った。

教室内で熱い抱擁を交わす生徒と教師の事情　どんな事情だ。

再就職先を探した方が有益のような気がする。そつだ。そつしよう。「何を相談されたんですか？」

「元旦にも、お二人は会ってましたよね？」

追随するように民子が訊ねる。質問よりも確認に近かった。わざわざ声に出して訊くことでこちらに認めさせたいのだろう。周囲の教師達の困惑がますます深くなるのを涼は肌で感じ取った。

「どういふことですか？」

「ご説明いたします」

涼は学年主任に頭を下げた。

「しかしここは人が多過ぎます。別室でお願いいたします」

「これだけ騒ぎが大きくなっているのです。今更、」

外野は黙っている。騒がしい民子は無視して訴えた。

「騒ぎが大きくなってからこそ、配慮していただきたい。その後の処遇をどうなさるか主任の判断にお任せいたします。ですから、まずはこれ以上話がややこしくならないよう、別室で話をさせてください」

この時点で涼は腹を括っていた。佐久間の免職は間違いない。関与を認めた以上、自分も罪に問われるだろう。かくなる上は、できるだけ内々に事を収め、これからも学校生活を送らねばならない遙香の立場を少しでも回復させておく。

覚悟なんて格好いいものじゃない。これは諦めた。それでも涼は間違っているとは思えなかった。巻き込まれたとはいえ、最初に関わると決めたのは自分。諦めたのも自分だ。非難されようと職を追

われようと全て自己責任の範疇に入る。琴音に叱られる筋合いはなかった。

（所詮、私はその程度の人間だってことだ）

渡辺涼という人間が浅はかだったのだ。だから報いを受ける。それだけのことだった。

（それでも努力はしたんだよ）

この場にはない琴音に胸中で言い訳する。処分を受けたと知れば彼女はさぞかし怒り狂うだろう。言わんこっちゃない。自分のことのように憤慨し、そしてあっさり諦めた涼を叱るのだ。

（私にしては上出来じゃないか）

生徒は護る。教師としての最低限の義務だ。だから怒るな。琴音が思うほど渡辺涼は大層な人間じゃない。頼むから怒らないでくれ。自分はこれでいいと思ってるんだ。誰かを巻き込んだわけでも迷惑をかけてもない。それでいいじゃないか。

学年主任は悩む素振りを見せた後、涼の提案を呑んだ。

「では、会議室の方で」

「もういいですよ、渡辺先生」

涼は顔を上げた。まさかの乱入。不用意にも開けっ放しの扉から現れたのは、先ほど中央廊下に放置したはずの天下だった。

(その十七) 覚悟と諦めは全く違います(後書き)

拙作をお読みくださりありがとうございます。

今後について『活動報告』で報告とせていただいております。お時間がよろしければご覧くださいます。

(その十八) どうでもいい、なんて嘘です

「十分です。もう、嘘なんか吐かなくていいんです」

断りも無く職員室に入り、天下は涼の隣で足を止めた。これは一体どういうことだ。何故天下が現れる。涼は喉でつかえる言葉を無理やり押しだした。

「鬼島、どうして」

天下は少し困ったように目を細めた。酷く優しげで、それでいて寂しさが混じった微笑だった。諦めとは違う。自らの手で突き放すことで終わりにする静謐な決意。それはいつぞや、鬼島氏に見せたものと酷似していた。

「鬼島君、どういうことですか？」

硬い声で訊ねる学年主任。天下は向き直った。

「渡辺先生は庇っているだけです。さすがに校内で色恋沙汰はマズいと思われたんでしょう。だから必死になって隠そうとしたんです」  
何を言っている。

涼は握り締めた自分の手がじつとりと汗ばむのを感じた。まさか、この場で全てをぶちまけようというのか。振られた腹いせに佐久間達の件を暴露しよう。

口を塞がねば。涼は咄嗟にそう思ったが、どうしようもできなかった。混乱しているためだ。目の前にいる青年が理解できない。彼は今、民子と同じように佐久間達を吊るし上げようとしている。涼の中では卑怯と分類されることだ。

なのにどうして、天下から目が離せないのだろう。

前を見据える天下の横顔には凜々しさがあった。何ものかに挑もうとする強さがあった。

「それは、一体」

「こういうことです」

天下は腕を取るとおもむろに唇を重ねた。反射的に引こうとした

顎に手を当て、これ見よがしにキスを深くする。

当人は勿論、周囲をも「茫然」の一色で染め上げてようやく天下は唇を解放した。悪びれる様子は全くない。

「な……っ」

学年主任の顔がみるみる内に紅潮する。

「何をしているんです!？」

涼は言葉も無かった。打ちひしがれる思いだった。天下の意図を察したからだ。同時に自分の矮小さが思い知らされる。覚悟と口にしておきながら、結局自分は何も懸けてはいなかったのだ。

「見ての通りです」

賢い方法とは言えなかった。天下の取った手段は最善とは程遠い。優等生が出した結論にはお粗末なものだ。愚かで。本当に愚かで、でも間違いなく必死だった。彼は文字通り捨て身で護ろうとしている。涼自身でさえ捨て去ろうとしたものを、だ。

「俺が、彼女と付き合っているんです」

教職員の前で天下は宣言した。微塵の迷いもない。嘘を吐いているようにはとても見えなかった。とんだ似非優等生だ。涼は泣きたいような笑いたいような自分でもわからない衝動に駆られた。

やめる。そこまでしてもらう理由がない。そんな価値は自分にはない。

叫び出したいのに声にならなかった。生徒に庇ってもらう自分が情けなくて、苦しくて、恥ずかしくて、いたたまれなくて、でも嬉しいのだ。天下に申し訳ないと思う一方で、見捨てられなかったことを例えようもなく喜ぶ自分がいる。

（あー、でも……）

憐れみを込めて涼は遙香を見た。自業自得とはいえ可哀想に、顔を真っ赤にしながらも必死で涙を堪えている。

（セクハラだよな、これ）

教師陣数名の前で天下にキスされた遙香は、ある意味被害者とも言えなくもなかった。

(その十九) 後始末はしっかりしましょう

とりあえず、天下は嚴重注意で済んだ。日ごろの行いの賜物である。

騒然となった職員室から場所を移し、会議室へ。天下も加えた四人で口裏を合わせて言うにはこうだ。

天下と交際している遙香が涼に恋愛相談。涼と交際中である佐久間の耳にも入り、相談に乗っていると感極まって泣き出した遙香を佐久間が宥めていた図(写真参照)。

「彼、悪い人じゃないんですけど……その、ちょっと強引な所があるって、だから、私……」

涙ぐみながら嘘八百を並べたてる遙香に涼は戦慄した。五教科も音楽の成績も冴えない遙香だが、意外な才能があるものだ。

「ついさつき目の前で繰り広げられた天下の『強引な所』も幸いし、学年主任は無理のある説明にもなんとか納得した。

「それならそうと早く言ってくればいいものを」

大袈裟に騒いだ手前、学年主任も気まずげだった。

「あまりにも騒ぎが大きくなってしまったもので、今さら『生徒の色恋沙汰です』とはどうも申し上げにくくて……」

佐久間が弁明。及第点だ。補うように天下が頭を下げる。

「元はと言えば俺のせいです。すみませんでした」

普通科きつての優等生にそこまでされてしまえば、学年主任として強くは出られない。

「くれぐれも行動は慎重になさってください。そのつもりがなくても、今回のように誤解を招いてしまうこともありますから」

申し訳ございませんでした。四人仲良く頭を下げてその場は収まった。

帰りは当然、天下と遙香、佐久間と涼の二組に分かれる。

演技派の生徒二人は自然な高校生カップルの雰囲気そのままに教

室へ戻った。

対する教師二人は形容しがたい重苦しさを纏い、無言でひた歩く。不愉快の塊と一緒に歩く自分を褒めてやりたかった。教室付近で周囲に人がいないことを確認してから、涼は拳を握った。

「え、あの……リヨウせん、」

「歯は食いしばらなくていいですから。遠慮なく舌でも唇でも思いっきり噛んでください」

と言ったにもかかわらず、佐久間は食いしばりやがった。

それでも拳には確かな手応えがあった。よろめく佐久間を放置して涼は中央廊下を渡った。慣れないことをしたせいで手が痛い。

音楽科準備室に戻ると緊張感が解けて崩れ落ちそうになった。鞆からケータイを取り出し、電話しようかと考える。しかし、理由が思い浮かばなかった。助けてもらった礼、迷惑を掛けた謝罪。どれも天下は求めていないような気がする。そうして理由を探している自分に気が付いて涼はため息を吐いた。

これはマズい。

(その二十) タダほど高いものではありません

見覚えのある背中と遭遇したのは昼休みだった。購買のパンを無造作に持ち、行く先はおそらく教室だろう。人気のない渡り廊下を歩いていた。

「鬼島君」

咄嗟に涼が声を掛けると、天下は足を止めた。

「今朝は……え？」

涼は言葉を失った。

振り向いた天下の白皙の頬。その片側には腫れがあった。定番の手形ではなかったが、その赤さは衝撃を物語るには十分な色合いを持っていた。

「振られたのか」

「こつちから願ひ下げだ」

殴られてやったんだ、と天下は顔を顰めた。

「矢沢だって佐久間との関係がバレるのは困る。利害が一致してたんだよ。あいつもそれを理解した。だから、一発殴るだけで水に流すってさ」

それはまた、なんとも遙香らしい言い草だ。容赦なく引つ叩いた遙香を思い、甘んじて受けた天下を思い、涼の口元には自然と笑みが浮かんだ。

「君が汚れ役を引き受けることはなかった。あの二人の関係がバレたら加担してた私も多少叱責は受けるだろうが、それだけだ。下手に処罰すると騒ぎが大きくなってしまふ。学校側としても内々に終わらすつもりだったろうに」

「でも、確実に佐久間と矢沢は引き離される。それだけなら別に構わねえが、噂は確実に広まるだろうな。好奇の視線にさらされて

二人だけの問題じゃなくなる」

それこそ、涼が一番懸念していたことだった。矢沢遙香の両親は

どうなる。娘が教師とデキてたなんて知ったら。大人には世間体というものがある。何よりも、これからも学校に通い続けなければならぬ。遙香本人は。彼女がこれから送るであろう学校生活は一体どうなる。

「同情したのか？」

「まさか」

天下は薄く笑った。

「俺は連中が周囲から白い目で見られようが、二人で思いあまつて掛け落ちでも心中でもしようが、どうでもいい。自業自得じゃねえか。それを承知で付き合ってたんだろ？ なら、リスクも負うべきだ」

淡々と言う天下の口調に迷いはなかった。

「でも、あんたは違う。どうしようもねえ奴らだが護ろうと必死になつてた。だから俺も陥れるような真似だけは絶対にしたくはなかった。あの程度の汚れ役だってやるさ」

馬鹿だな。今まで優等生として教師達の信頼を築き上げていたじゃないか。こんなことのために捨てることはなかった。口を開きかけて涼はすぐさま閉ざした。

こちらを見る天下の目がいつになく穏やかなものだったからだ。

「あんたが大切にしてたもんじゃねえか。護りたいと思つて何が悪い」

涼は目を逸らした。いたたまれない。必死で護つてなんかいない。逢引現場を目撃したから叱つた。巻き込まれたから手を貸した。その場しのぎの言い訳を繰り返し、破綻しそうになったら一番最初に投げ出した。天下の言う通り、涼は中途半端なのだ。

でも天下は違った。無関係なはずのこの青年だけが、最後まで諦めなかったのだ。

「私は、結局君のために何一つできなかった。家庭の事情に首を突っ込んで、かき回しただけだ。手を差し出しておきながら、いざ危うくなつたら無責任に放り出した」

「でも勝手に帰った俺を探してくれた。俺の話聞いてくれた。一緒に年越ししてくれた」

「君の事を迷惑だと言った。それも一回じゃない。関係を聞かれる度に、何度も、何度も」

「俺だって、あんたがお袋のことで首を突っ込んできた時、迷惑だつて言った。本当は、すごく嬉しかったんだぜ？ でも、あんたは公園まで追いかけてくれた。自分の職懸けて抱きしめてくれた。拳げれば沢山ある」

もういいじゃねえか。天下は肩を竦めた。

「キリがねえよ。俺は借りとか考えてやったわけじゃねえ。あんただから、勝手にやったただけだ。迷惑で面倒だつて？ 上等じゃねえか。それでもあんたがいいんだよ」

自惚れてもいいのだろうか。自分にそれだけの価値があると。涼が口を開こうとした丁度その時に「きじまあ」と間延びした声が降ってきた。見上げると、三階から手を振る男子生徒数人。

「早くしろよ。もう食ってんぞ」

天下は肩を落とし「うるせえ。今行く」と怒鳴り返した。

「先生、俺」

「さつさと行け。君はもう少し歳の近い子と仲良くした方がいい」  
ひらひらと軽く手を振って涼は送り出した。天下は不満げに眉を寄せ、それでも教室の方へと足を進めた。が、校舎内にかかるからがないかの場所で振り返った。唇を引き結んでいるものの、目は物言いたげで。溢れてくる何かを必死に押し止めているようだった。様々なものが織り混じった焦燥感。見ているこっちの息が詰まる。

「天下？」

「本気なんだ」

天下は少し顔を横に逸らした。

「……本気で、好きなんだ」

(その二十一) 好きになるのに理由はいいりません

来年度から校内で教師の『渡辺』が一人になると涼が知ったのは、例の騒ぎが収まって間もない頃だった。情報源は当然、同じ普通科担当教師の佐久間だ。

「東京の有名私立高校です。ヘッドハンティングですね」などと呑気な発言をする佐久間は、自分が原因であるとは微塵も、想像さえしていないようだ。ここにきて涼はようやく悟った。どうして佐久間と遙香の恋愛が成り立つのか。二人とも自分の都合の良い方にしか解釈しないからだ。普段は遙香の我儘ぶりばかりが目立つが、佐久間も負けず劣らずマイペースだ。

ここまで我を通されてしまえばいつそ小気味いいくらいだった。とにかく涼はこれ以上関わりにならないように可能な限り音楽準備室へ籠ることにした。

なので、突然押し掛けられてきても答えようがなかった。  
「聞かないんですか？」

音楽準備室に入るなり、民子は前置きもなく訊ねてきた。放課後、明日の準備も終えてそろそろ帰ろうかと涼が思っていた矢先にだ。他の教師が出払っているので話しやすいのはわかる。が、いつもこいつも他人の事情というものを考えていない。

「何をですか」  
涼は半眼で訊ね返した。早々の帰宅は諦めてコートを椅子に掛ける。

「考えなしで優柔不断で面倒なことになったら他人に押し付ける情けない教師がどうして好きかなんて、それこそ余計なお世話というものでしょう」

「随分はつきり言いますね」

民子は気を悪くする様子もなく俯いた。

「自分でもわかりません。歳下で、頼りにならないからでしょうか。」

私がいなきや駄目だと思っておりますの」

一方的に、だ。佐久間の方は気付いてすらいなかっただろう。

「いつお気付きに？ 私、そんなにあからさまでしたか？」

「残念ながら私は色恋に関しては疎いと友人のお墨付きでして。正直、お二人の普段の様子ではただの友人程度にしか見えませんでしたね」

「実際、ただの先輩と後輩ですから」

自嘲混じりに民子は呟く。沈みかけた空気を振り払うように涼は話題を変えた。

「いくらあの二人がずばらだとしても、逢引現場を二回も三回も偶然目撃させるのは至難の業です。どちらかが故意でない限りは」

最初の一回はおそらく偶然だろう。しかしその後も民子は二人の交際現場を何度も目撃している。二人の関係を知って注視するようになったからだ。そしてストーカー紛いな行動もした。同僚の教師と教え子のスキャンダルであることを差し引いても、その情熱は明らかに歪んでいた。

「で、普通は一回そんな現場を目撃したらすぐに咎めるなり上司に報告するなりします。脅迫文を送るとしても当人に送りますよ。お三方に怪文を送りつけるからには、それだけの理由があつて然るべきです。学校に送りつけたのは騒ぎを大きくして二人を引き離したかったから。匿名なのは追い込んだのが自分だとバレてほしくなかったから」

身勝手とも言つべき願いは、民子が佐久間に慕情を抱いていたと仮定すれば成り立つのだ。あんな男のどこがいいのかは未だに理解しかねるが。

民子には純然たる悪意があつた。とにかく傷つけ、打ちのめしたいという昏い衝動があつた。ただ、それが向けられていたのは佐久間ではなく、もっぱら遙香の方だったのだ。

「しかしそう考えると、先日の件は少々腑に落ちません。写真を送りつけたのは渡辺先生であるとすぐにバレます。怪文の件を私が言

つてしまえば疑いの目は向けられたでしょう。それでも強硬にあな  
たは写真を送りつけた。二人を引き離すためとはいえ、捨て身過ぎ  
やしませんか？」

民子は微笑んだ。これまで見た中で一番不気味な笑みだった。

「心中ですよ」

(その二十二) 嫌いになるには理由がいろいろあります。

唇から発せられた不穏な言葉に涼は眉を寄せた。

「心中？」

「死なば諸共、道連れにしてやろうと思っただけです」

その意味を咀嚼する。涼が民子を告発するとも思っていたのだろうか。だとすれば杞憂だ。怪文の件を涼が言おうものなら、民子だって佐久間と遙香の件を黙っているとは思えない。お互いに弱みを握り合っていて拮抗状態だったはずだ。

「私は、誰にも言うつもりはありませんでしたよ？」

「違います。職を追われることはありません」

「ややむきになって民子は言い返した。」

「愛の反対は何だと思いですか？」

突然そんな哲学的な質問をされても答えようがない。そもそも愛の解釈は人それぞれであって、何世紀もの間数多の哲学者が研究に研究を重ねたが未だ明確な答えを導き出せていない。そんなものを音楽教師が論じる方がどうかしている。

「無関心ですよ」

最初から涼の答えは期待していなかったのか、民子はあっさりと言った。

「憎まれた方がまだマシです。私は気にかけてすらもらえませんでしたが。彼にとつて私は、路傍の石同然です。食事に誘っても、こっそりチョコレートを机の上に置いても、彼は全く相手にしてくださいませんでした。いつも困ったように苦笑するだけ。はっきりと断つてもくださいませんでした。無視に等しいですよ」

そんな軽薄な無神経野郎を好きになったのは民子本人だ。たしかに、佐久間の曖昧な態度は褒められたものではないが、それを咎める権利はないはずだ。民子だって正々堂々としていなかったのだから。

「だから、いつそ憎まれてやろうと？ 社会的心中を圖つたわけですか」

「彼が最初に私を踏み躪つたのですよ」

燃えるような瞳で民子は断言した。

「私だつて苦しかつたのです。よりにもよつて教え子と交際するなんて……眠れない夜が何度続いたことか。校長に報告するべきか、佐久間先生に忠告するべきか、別れるよう諭すべきか、考えて、悩んで その間も彼は教え子と一緒にいると思つたら気が狂いそうになりました。どうして、私ばかり……」

嫉妬だ。それが歪んで逆恨みに発展した。涼は冷めた目で自分の正当性を訴える民子を見た。全く同情できなかつた。

「佐久間先生を好きになつたのは渡辺先生。二人の關係を知つて氣にしたのも渡辺先生。全てあなたが勝手に思い描いただけですよ。頭の中で何を考えようと咎めはしませんが、他人に押し付けるのは間違つています」

その前に恨みがあるなら本人に言え。他人を巻き込むな。涼の心を悟つたのかどうかはわからないが、民子は目を眇めた。

「私、やっぱりあなたの事を好きにはなれませんか。澄ました顔で他人の急所を掴んで握り潰す方なんてごめんです」

「奇遇ですね。私もです」

「でもあなたがどうして、他人を見抜くことに長けているのかは、想像つきますよ」

民子は満足そうな笑みを浮かべた。

「自分が秘密を抱いているからですよ。だから暴かれる前に他人のを暴こうとするんです」

可哀想に、と民子は呟いた。

「自分を守るために他人を攻撃せずにはいられない。これから先、あなたはずつとそうやって生きていくんですね」

可哀想に。静かに発せられたその一言は粘質の毒の如く涼の中に染み込み、いつまで経つても薄れる気配を見せなかつた。

（その二十二）嫌いになるには理由がいろいろあります。（後書き）

お読みいただきありがとうございます。これで六章も終了。終章へ突入いたします。

で、似非優等生の試験結果も出てくるわけですが……活動報告の通りにいたしますので、とんでもない順位になります。これはフィクションですので。実在の人物、団体とは関係ありませんので、その点はどうかご容赦ください。

## 放課後（その一）何事も諦めが肝心です

考えてみれば大したことではない。

断つても断つてもしつこくしつこく粘りに粘ってくる将来有望な優等生くんは、ちよつくら世の中の厳しさでも教授してやるうと無理難題を出した。全国模試百位以内。我ながら名案だと（その時は）思った。

優等生くんの高い鼻を折ることができない。何でもかんでも思い通りにならないことを若い内に知っておくのも、彼のためである。言わば親切心だ。いくらなんでもこれで諦めるだろう平和な学校生活が戻るだろうわっはっはおめでとう私 などというやましい思いなんて、抱いていかなかった。少ししか。

しかし結果は涼の予想を斜め四十五度超えていたのだ。これは大問題である。描いていたプロセスは一瞬で吹き飛び、ついでに自分も崖っぷちへと追いやられた。残された時間はあとわずか。それまでに涼は選択をしなければならぬ。

崖から飛び降りるか、それとも別の方法を模索するか。

「 というわけで、どうすればいいと思う？ 」

『 諦めればいいと思うよ 』

電話の向こうにいる琴音は辛辣だった。喧嘩に近い別れをしておきながらも数日経てば何事もなかったかのように接してくれる。このあっさりとした琴音の性格は涼も好きだ。だが、こういう非常事態にもいつも通りでいるのは遠慮していただきたいものだ。ふりでもいいから焦ってくれ、頼むから。

「 諦めるというのは…… 」

『 交際してあげれば？ って言ってるの 』

「 冗談じゃない。相手は六歳下の生徒だぞ。その前に交際してやるなんて約束を交わした覚えはない 」

『 じゃあ本人にそう言えばいいじゃない 』

それができれば苦勞はしない。

二ヶ月前に天下とかわした約束は『百位以内ならば佐久間と付き合うふりを止める』だ。それだけならば涼とて悩まない。佐久間とはもう切れていた。向こうも渋々だが承知している。問題は、その後につけたオプシヨンだ。

天下の事も真面目に考える。

一体何をどう考えるというのか。何回考えても天下は生徒であつて、涼は教師だった。交際なんて論外だ。しかし約束を果たした天下に対し、涼のすることと言えば、

- 一、佐久間と別れる（もう別れている）
- 一、天下との交際の件（考えたけどやっぱり無理）

（どう納得させると？）

あきらかに不釣り合いだった。涼でさえそう思うのだ。天下が黙っているわけがない。

『でも凄いな。全国で百位以内なんて、愛の力以外の何物でもないわね』

いいえ、陰謀です。陰謀以外の何物でもありません。涼は拳を震わせた。

「前回四百位とか言ったのは誰だ……っ！」

『往生際が悪いわよ、涼ちゃん。幕引きは美しくなきゃ』

涼は力なく呻いた。他人事だからそこまで軽く言えるのだ。

「これが戯曲なら書いた奴に文句を言いたい」

『最初に話を出したのは涼ちゃん。条件を決めたのも涼ちゃん。文句なら鏡の前で好きなだけ言いなさい』

完全に突き放したもの言い。涼は肩の力が抜けていくのを感じた。味方はどこにもいなかった。自分自身でどうにかせねば。

『涼ちゃん』

思考を遮ったのは、一段低い琴音の声。

『間違ってもどこぞの姫君みたいに自分で出した条件を翻すような真似はしないでね。みっともないから』

味方どころじゃない 涼は戦慄した。こいつも敵だ。

(その二) 足掻くだけ無駄です

涼は机に突っ伏した。気分は死刑執行を待つ囚人。いつそのことトドメをさしてくれ。苦しむ自分を見て嘲笑っているのか。他人を弄んでそんなに楽しいかチクシヨウ。

不意に顔を上げると、一ヶ月近く放置されたままの消毒液が目の前にあった。

インフルエンザ対策で支給されたものだ。何故かラベルにはアライグマがプリントされている。手を洗ってから使えと言いたいらしい。

アライグマの円らな瞳と睨み合うことしばし。涼は忠告を無視して一押しした。やや粘着性のある消毒液を手にすりこんでみる。冷たいが手に馴染んでいく感触が何とも言えない。意外に楽しいではないか。

「先生もこれ使ってますね」

横から伸びた手が消毒液を持ちあげる。涼は手を止めた。

「準備室に入る際はノックをしなさい」

物音どころか気配一つ悟らせずに侵入を果たした天下は、悪びれもなく言い返した。

「何度叩いても返事がありませんでした」

「じゃあ出直せ」

「でも先生いるみたいだし」

「それでも出直せ。見てわからないのか取り込み中だ」

天下は半眼で消毒液を見た。

「ネチャネチャ消毒液をすり込むのが？」

「インフルエンザ対策です」

最初は似非優等生対策を考えていたのだ。が、いつの間にかインフルエンザ対策に移行し、気づいたら何の打開策も見い出せぬまま本人と対峙する羽目に陥っている。おのれアライグマ。涼は恨みが

ましくラベルのアライグマを睨みつけた。可愛い顔をしてなんと狡猾な！

「各教室にも配られていなかったっけ？」

「そーいや、置いてあったな」

「少しは使いなさい」

二年生故の呑気さか、受験生ほどは意識していないようだ。

「この前使いました」

天下は消毒液を机の上に戻した。

「矢沢とキスした後」

名目し難い沈黙。涼は内心頭を抱えた。さらりとんでもない事を言うこの癖は、どうにかならないものか。好きでもない女子生徒と公衆前でキス。天下自身も嫌な思いをしただろう。彼自身が選んだこととはいえ、涼の至らないせいでもあった。

「その件に関しましては……」

「悪かったな」

謝るつもりが逆に謝られ、涼は拍子抜けた。

「アレ以外思いつかなかったんだ。口と口をくっつけるだけの行為じゃねえか。人工呼吸だと思えば大したことじゃねえ。それに、その……消毒もしたし、問題はないはずだ」

「は？」

「浮気じゃねえからな」

深刻な顔で念を押されても、涼としては硬直する他なかった。

(その二) 足掻くだけ無駄です(後書き)

次回、似非優等生の試験結果が出ます。

(その三) 疲れるだけです

「ちよつと待て。なんでそこで浮気だの」

「俺は先生一筋ですから」

大真面目な顔で断言しないでほしい。後生だから。涼はとにかく全国の真面目な高校生諸君に頭を下げたい気分だった。

こんなのが我が校きつての優等生でごめんなさい。文武両道の眉目秀麗ですみません。全国模試三十五位以下の皆さん、三十四位は常識というものを兼ね揃えていなんですよごめんなさい。

「そんなことを言いわざわざ準備室まで？」

「いや、模試の結果を報告しに」

天下は折りたたんだ紙を机の上に広げた。学内では一位。県内では二位。そして肝心の全国では、三十四位だ。カンニングしたってこんな成績は出せない。

「約束通り、彼女のふりはやめてくださいね」

涼は頷くしかなかった。もう別れてます、とは口が裂けても言えない。

「君との事も考えた」

「でも駄目なんだろう？」

察しがいい。涼は思わず「ごめん」と呟いた。天下と自分のためとはいえ、断るには罪悪感を伴う。天下の右手が肩に置かれた、

「気にすんなよ。あと一年あるし」

涼は顔を上げた。一瞬、本気で空耳かと思つた。とてつもなく不吉な一言が耳を通り過ぎたような気がする。期待を裏切るように天下は不敵な笑みを浮かべた。

「俺の事、嫌いじゃねえんだろ？」

「いや、それは」

「じゃあ諦めねえ」

「なんでそうポジティブに」

「一年間、全力で口説いてやるよ。返事は卒業した後で聞く」

歳にそぐわない悪そうな顔をして、天下は確認した。

「生徒は対象外なんだろう？」

「確かにそうだけど、だからといって生徒じゃなきゃいいってわけ、じゃ……」

ぎらり、と音が聞こえるほど、天下の眼光は鋭かった。完全に何かのスイッチが入った目だった。

「一年待ちますから、ゆっくり考えてくださいよ」

直訳すれば「一年猶予やるから腹括れ」だ。涼は呆気に取られて口を開けていることしかできなかった。小さく笑って天下は涼の顎に手を掛けた。

「口、閉じとけ。キスしたくなるじゃねえか」

いやいやいや、早速口説き出さないでください。まだ承諾した覚えはない。口を閉じさせられた状態でまた涼は固まった。

「じゃあ、五限目もよろしく願います」

嵐が、去った。

それでも涼は動けずにいた。

(その四) お得な優良物件です

だがしかし、涼の苦悩はこれだけでは終わらなかった。

全国模試で三十四位。学校始まって以来の快挙に職員室の話題はもちきりだ。おまけに生徒も自分の事のように触れまわる。科が違かろうとそんなことは関係ない。

つまり、涼の担当する音楽の授業でもその話が浮上したのだ。

「全国三十四位ですよ」

もう既に本人から見せられましたとは言えずに、涼は生徒が掲げる結果を眺めた。何度見ても順位が変わることなく、天下は全国で三十四位だった。

自身の模試の結果をクラスメイトに奪われた天下はというと、鑑賞室の一番後ろの机で気のない素振りをしていた。おそらく五限以前もずっとこんな調子だったのだろう。周囲とは反比例して盛り下がっていた。

とりあえず、涼は社交辞令を述べた。

「おめでとう」

「どうもありがとうございます」

頬杖をついた状態でおざなりな返事。天下の醒めた態度に不満の声を上げたのは同級生達だった。

「ノリ悪いよなあ、もつと喜べよー」

「賞金でもくれんだったら、もつとテンション高くなるんだがな」

「ひっでえセリフ。これで優等生かよ」

涼はため息をついて授業を始めた。先週観た『トウーランドット』の感想を集めて、発表と解説。それで今学期の授業は終了。あとは実技試験を行うだけだった。

「『なんでイタリア人はやたらとキスをするのでしょうか?』という質問ですが、それは先生にもわかりません。イタリア人に聞いてください。それに『トウーランドット』の舞台はイタリアじゃなく

て中国です」

「でもみんなイタリア語で歌ってます」

「作ったのがプッチーニだからです」

投げやりに答えてから、涼は『トゥーランドット』に思いを巡らした。それほど接吻をするシーンはなかったような気がした。

「そんなにしてましたか？」

「人と会う度にしてました。頬とか、手とか、いろいろ」

大人しめな女子生徒が答えた。イタリアでは挨拶程度のものだが、日本人からすれば刺激的だったのか。

「キスする場所によって意味は違います。手の甲は尊敬。頬は厚意。額は友情。イタリアでは別れる時には普通に互いの頬にキスをします」

そういう国の文化も作品に影響するのだ。いくら『トゥーランドット』の舞台が中国に設定されていても、風習が出てしまう。そこがまたオペラの面白みだった。

そこでチャイムが鳴ったので、涼は試験内容の説明だけして授業を終了した。まばらに退室する生徒達。試験の細かい確認を求める生徒にに応じて、一段落したところで、まだ鑑賞室に残る生徒に気付いた。天下だ。

「閉めるぞ」

暗に出ると促したのだが、天下はスタンウェイのピアノに近づいてきた。つまりは涼の元へ。

「どうした？」

**(その四) お得な優良物件です(後書き)**

お読みくださってありがとうございます。拙作はあと四話で第一部が終了する予定です(予定は未定)。

その後、とある脇役の番外編を載せる予定です(予定は未定)。最後までお付き合いいただけたら幸いと存じます。

(その五) 今が旬です

「三年になったらまた担当変わりますよね？ 先生の授業、これで終わりだな、って」

余韻を味わっていたらしい。なんとも趣深い奴だ。天下はカーテンで閉ざされた窓に目をやった。

「日差しを遮るためだよな、あれ」

「正解。日に焼けないようにずっと閉ざしたままだ」

黒カーテンの向こうには中庭がある。その中庭を挟んで教室棟

天下達が通常授業を受ける棟が見えるはずだ。涼は一度もこの鑑賞室から見たことはなかった。

完璧に整備され、視界も音も隔絶された部屋。それが涼のいる鑑賞室だった。

「隙間があるの、知ってたか？」

天下が指差した先には微かに光が差し込んでいた。楽器に当たるほどではないので、大した隙間ではなかったが涼は初めて知った。

「気付かなかった」

「だろうな。あんた、いつもピアノの方ばかり向いてたから」

「……何のことだ？」

さあ、と天下はわざとらしく肩を竦めた。生意気なガキだ。涼が胡乱な眼差しを送ると天下は口元に手を当てた。

「別れる時は頬に、でしたっけ？」

脱線話もしっかり耳に入れていたようだ。さすが優等生、授業態度も良い。ついでに休み時間も優等生らしく振舞ってほしかった。

「ここは日本です」

「国際化に乗り遅れますよ」

「自国の文化を守るのも大切です。何でもかんでも海外のものに飛びつくのは感心しないな。その前にここは日本であり教室です。授業をする場所です」

「佐久間は？」

「『先生』を付けなさい。あれはイレギュラーです」

納得がいかないらしく、天下は首を捻った。時計を見れば六限が五分後に迫っている。こんなところで無駄話をしている場合じゃない。

「早く教室に帰りなさい」

「模試で高位になろうと、授業は免除されねえのな」

戯けたことをぬかす頭をプリントの束ではたいた。天下は恨みがましげな視線を寄こす。

「……外野に騒がれても嬉しくねえよ」

そう言われてしまうと涼は強く出られなかった。天下をたきつけたのは自分だった。だから天下は努力を重ね、全国三十四位ならんでもない結果を弾き出したのだ。彼を一番ねぎらうべきなのは誰なのか。指摘されるまでもなく、わかっていた。

（どうしろって言うんだ）

(その六) 流されるのも一つの手です

どれだけ天下が努力に努力を重ねようと、涼は彼の想いには応じられない。天下が問題なのではない。涼が問題なのだ。教師と生徒との恋愛のリスクを思う。それを差し引いても、自分を考える。不釣り合いだ。天下に応じるだけの価値が、自分にあるとは思えなかった。カップラーメンは所詮、カップラーメンなのだ。

でも 涼は不意に、琴音の声を聞いたような気がした。

私は好きよ、カップラーメン。

価値は人それぞれだ。故に芸術が成り立つ。たとえ自分が価値を見い出せなくても、他人が価値あるものと見ているものを否定することはできない。それは、ただの独断だ。

だから、涼自身が価値を見い出せなくても、天下にとっては違うのかもしれない。

渋々去ろうとした天下の右腕を涼は掴んだ。怪訝そうな顔をする天下。無視して涼は手を取った。歳下とはいえ男だ。筋張った手は涼のものより大きかった。

「先生？」

ボランテアだと思え。そう、大した意味はない。意味とか考えるな。事務的に。借りを返すだけだ。

「……どうした」

天下だつて言っていたではないか「大したことじゃない」と。彼がしたことに比べればこれくらいどうというものではない。社交界では挨拶だ。

「俺の手に何かついてんのか？」

イタリア人よ、プッチーニよ、プラシド・ドミンゴよ、今だけ私に力を。

「おい、せんせ」

涼は手の甲に唇を押しつけた。暖房の利いた部屋にいるにもかか

わらず、触れた彼の手は冷たかった。つまり、自分はそれなりに熱いということだろう。

口を離して見上げれば、間の抜けた顔をしている天下と目がかち合う。

「……え……………あ、」

大きく見開かれた切れ長の眼。掠れた声が薄い唇から出る。

「先生、今」

そこまでが限界だった。涼は教卓の上に置いたアライグマ印の消毒液を三回押して、天下の手にすりつけた。

「ちよつ、待て！ どういうこつたあつ！」

慌てて引こうとする天下だが、涼は逃さなかった。しっかりと掴んで消毒完了。用済みとなった手を解放する。

消毒液まみれになった自身の右手を穴が開くほど凝視して、天下は悲痛な声を上げた。

「何だ今の……………っ！」

「消毒です。雑菌がつくといけませんから」

「どこの世界にキスした直後に丹念に消毒する奴がいんだよっ！」

「二週間前に同じようなことをした馬鹿を私は知っているが？」

冷静に切り返せば天下は拳を震わせて頂垂れた。

「……………天国から一気に地獄に突き落とされた気分だ」

お気に召さなかったようだ。が、残り時間はあと三分。涼は天下の背中を押した。

「さあ満足したろう。帰れ」

「むしろ不満しか残らねえよ」

未練がましげに天下は右手をじーっと見つめていた。しかし消毒液の匂いしかない。幸いなことに涼は基本的にリップクリームで、口紅をしていなかった。

「全国模試で一位でも、もうやらない。二度とやらない」

全ての希望を断ち切るように涼は言っただけだ。

「先生」

それでもまだ諦めがつかないのか、扉をくぐっても天下は振り返った。眉間に皺を寄せ、自身の唇を指差す。

「後生ですから、こっちにしてくださいませんか？」

「帰れ」

涼は思いつき扉を閉めた。

(その七) 生徒も悪くはないかもしれません

ガキめ。調子付きおつて。涼は早くも己の軽率な行動を後悔した。天下の譲歩ぶりに呆れを通り越して憐れみを抱いたのがそもその間違っていたのだ。

数分も経たないうちにノック音。扉ではなく、窓の方だ。この時点で犯人は誰だか予想はついたが、涼は仕方なく応じてやることにした。早々に追っ払わねば。

勢いよくカーテンを開く。

窓の向こうには仏頂面をした天下がいた。中庭まで回り込んできたようだ。上履きのままで外に出たことはこの際指摘しないでおこう。

とりあえず、涼は手で追い払う仕草をした。

ますます天下の眉間の皺が深くなる。睨んでいるようにも見えないでもない。が、その目元が急に緩んだ。口端をつり上げ、目を輝かせる。悪戯を思いついた子供のような仕草に、涼が小首を傾げたその時だった。

天下は右手の甲に口付けた。

緩慢な動作にしかし、涼は成すすべもなく立ち竦んだ。挑発的な笑みを残して天下は身を翻した。渡り廊下に上がり、そのまま教室棟へ。その間も涼は微動だにできなかった。

天下の背が見えなくなつてようやく息を吐く。息が止まっていたことにすら気付かなかったのだ。

「……なんてベタな」

口元を抑えて呟く。触れた顔は熱かった。

鑑賞室から初めて見る学校は、平穩そのものだった。二階の廊下を足早で歩く教師や生徒。廊下の窓際にもたれかかつて談笑する力

ツプルと思しき姿も見えた。遠目に見えるグラウンドではサッカーの試合が行われていた。

中には気付かなかったであろう眩しい光景がそこに広がっていた。二年近くいるのに、一度もカーテンを開けなかったことを涼は今更ながら悔やんだ。馬鹿げていて、平凡で、単調で、でも悪くないじゃないか。

涼の上で六限の始まりを告げるチャイムが鳴った。

(その七) 生徒も悪くはないかもしれませんが(後書き)

明日の更新で第一部完結です。お時間ございましたら最後までお付き合いただければ幸いです。

その後ですが、番外編を一つ挙げて長期休止となります。ご了承くださいませ。詳しい釈明、休止期間、言い訳等は明日申し上げます。

(その八)でもやっぱり生徒は対象外です。

『それで、結局どうしたのよ』

素っ気ない態度を取っておきながらも気にはしていたらしい。琴音の方から電話がかかってきた。心配を掛けた手前、涼としても言わないわけにはいかない。五限と六限の間にやらかした失敗は除いて一部始終を報告した。

『心広いわね』

それが琴音の第一声だった。

「心が広い？」

『だって涼ちゃんの駄々にもにっこり笑顔で応じたんでしょ？』

「駄々？」

不適切な単語に自身の頬がひきつるのがわかった。どんな解釈をしたらそうなる。

『危機を救って、無理難題も見事叶えて、それでも待ちます。あなたが私を好きになってくれるまで、でしょ？』

まあ素敵『トゥーランドット』みたい。琴音は完全に小馬鹿にした口調で言つてのけた。あまつさえカラフ王子のARIA『誰も眠つてはならぬ』のサビを熱唱するものだから(しかもやたらと上手かった。プラシド・ドミンゴには遠く及ばないが)涼は受話器を放り投げそうになった。

「からかわないでくれ」

『トゥーランドット姫はおかんむり〜』

「琴音っ！」

一括してもどこ吹く風、琴音は陽気に笑った。

『でも気を付けなさいよ。うっかり絆されてキスとかして気付いたら食われている危険性が無きにしも非ず。あんた、流されやすいから尚更心配だわ』

冗談混じりに琴音は続けた。

『なんか可哀想だからキスしてあげて、なんか哀れだから喰われてやろう、って事にだけはならなようにね。前にも言っただけど「喰われない」って思ったらオシマイなんだから』

「まさか」

言いかけて涼は絶句した。公園で人目もはばからず天下を抱きしめた時、彼（の手の甲）にキスした時、自分は一体何を思った。自身はそつちのけで他人を甘やかす天下に、憐憫に似たものを抱いて「仕方なく」我儘を叶えてやったのだ。

『涼？』

琴音の声が遠く聞こえる。涼は受話器を耳にあてたまま茫然とした。

氷の姫トウーランドット。「わたしは誰のものにもならぬ」と求婚を突っぱね続けた我儘姫。彼女は結局どうなっただろうか。寛大なるカラフ王子に甘やかされて、執拗なる求愛に絆されて

カラフ王子の名を突き止めたトウーランドットには王子の求婚を撥ね退けることができた。約束通り、その命を奪うことも。名前さえ言ってしまうれば彼と結婚することは回避できた。

しかし、トウーランドットは彼の名を言わなかったのだ。

(その八)でもやっぱり生徒は対象外です。(後書き)

これにて『生徒は対象外です。』第一部完結です。長々ならだと続く拙作をお読み下さった方に心から感謝を申し上げます。私め初めての恋愛小説にございます。至らぬ点多々あったかと思われます。それでも最後までお付き合いくださいまして、本当にありがとうございます。

さて、今後について申し上げます。

以前活動報告でも書かせていただきましたが、私め、分不相応にも作家デビューへ向けて執筆を開始しております。上手くいけばデビューできるかもしれない程度なので、どうなるかはわかりませんが、全力を尽くします。奇跡が起きて出版化された暁には、活動報告で発表させていただきます。三月末まではそちらに専念いたしますので、『生徒は対象外です。』第二部の更新は三月末以降となる予定でございます。予定は未定ですので、早くなるかもしれませんが、遅くなるかもしれません。目安として考えていただけると幸いです。

しかしながら、こちらもちよこちよこと覗かせていただきます。たまには活動報告もさせていただきたいなあ、とも思っております。あくまで『執筆はしない』ということです。ご感想、ご批評、ご連絡等も受け付けております。大歓迎です。

そして置き土産として、明日からは番外編を挙げさせていただきます。現在執筆中の拙作の一部でも公開できればと思つたのですが、万が一出版された際に面ど……じゃなくて問題になったりしてはよろしくないの、控えさせていただきます。

その代わりといたしまして『生徒は対象外です。』と、とある拙作のコロナボで番外編を書かせていただきます。長くなりますのでど

ういう拙作かの説明は活動報告にて。二月いっぱいまで一区切りを付ける予定です。

では長々と失礼いたしました。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（起）（前書き）

【いきなり警告】この番外編には少々怪しい展開が予想されます。近親……の後に続く単語が代表するような雰囲気です。あくまで雰囲気ですが、そういうのは受け付けない、という方はお願いです。健全な精神育成のため、どうかお読みにならないでください。読むと後悔なさるでしょう。

そんなものに臆せぬわっ！ という勇猛果敢な方は自己責任で視線を下にやっってくださいませ。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（起）

『鬼才ピアニスト、吉良醒時帰国』

新聞の芸能欄を独占する記事を琴音は丁寧に切り取った。聞けばスクラップを作っているらしい。もはや彼女のブラコンぶりを咎める者など、この部屋にはいなかった。少なくとも、涼は完全に諦めているように見えた。琴音そっちのけでプラシド・ドミンゴのDVDを鑑賞している。非常に不愉快なことだ。

カラー写真の兄を眺める琴音の目はもう蕩けるばかりで、至福の二文字を体現していると言っても過言ではない。天下はなんだか危険な匂いを嗅ぎ取ったが、あえて指摘しないことにした。

しかし、琴音の気持ちも理解できなくもなかった。

新聞の写真を見て天下はきっかり十秒固まった。吉良醒時は格好いいだのそんな次元ではなかった。同じ世界にいることが不思議に思えるほどの美貌の持ち主だったのだ。白晳で鋭角的な顔立ちは日本人にしては彫りが深く、栗色の髪に百八十を優に超えた長身痩躯ということもあり、外国人かと思える。男色の気など微塵もない天下でさえも、息を呑むほどの秀麗な容姿だった。

琴音には大変失礼だが、血の繋がりを疑った。いや、彼女の容姿も十分魅力的なのだが、吉良醒時があまりにも人間離れしていて、兄妹とは思えないのだ。

「吉良？」

見出しを読んで、天下は呟いた。琴音の苗字は「榊」だったはず。

「母が違うの」

察しがいい琴音は的確に答えた。

「ついでに言うとお父もね。再婚同士で、私は母の連れ子」

半分でもいいから同じ血が欲しかったわ、と冗談混じりで琴音は言った。意外に複雑な家庭らしい。

「結婚しているんですよね？」

「高校時代の後輩とね」

普通に高校生活を送っている吉良醒時を思い描こうとして、天下は断念した。無理だ。こんなのが教室にいる状態で、どうやって気にせずに授業をしたのだろうか。

「なんか、想像できません」

「みんなそう言うんだけどね。慣れれば平気よ。証拠見せてあげる」  
琴音の手招きに応じて寝室に入れば、彼女は引き出しから何かを取り出そうとしていた。ベッドに机にタンス。意外に必要な最低限なものしかない部屋だった。何の気なしに天下は整理された机の上に目をやり、立てかけてある写真を発見した。

吉良醒時のブロマイド。どこそのコンクールで優勝した時のものだろう。名前の通り醒めた表情でトロフィーを持っている。顔が整っているからこそ、より一層冷たい印象を受けた。

天下は眉を寄せた。

写真のアングルがズレているように思えた。吉良醒時の左手が不自然に途切れている。撮影ミスだとも推察できるし、通常の写真よりも半分のサイズなので何かの切り抜きとも思えた。が、こんな失敗写真を妹である琴音が飾っておくことが不自然に思われた。琴音自身とのツーショットでもいい。あれだけ兄に関するものを集めているのなら、もっと出来のいい写真だって持っているはずだ。

「あ、これこれ」

琴音の弾んだ声に天下の思考は途切れた。高校の卒業写真集を開き、その一ページ 各クラスの写真を示す。今よりもいくぶん若い吉良醒時がやはり無表情で映っていた。たしかに、制服を着ていた。

「お義姉さまは一つ下だから個別写真はないんだけど……」

琴音はページをめくった。様々な写真を集めて貼った中で、音楽祭のものがあつた。オーケストラの演奏写真。ピアノコンチェルトを行った時のものらしい。もちろん、ソリストを務めたのは吉良醒時。彼の演奏姿にピントは当てられているが、その傍らで演奏して

いた第一ヴァイオリンも少しだけ枠内に収められていた。

「これがお義姉さま」

吉良醒時の後ろでヴァイオリンを構えている少年　だと最初は思った。高校生にしては小柄で目も大きい。中性的な顔立ちも相まって可愛らしく見えた。

「可愛い人ですね。俺の弟と少し似てます」

今でこそ生意気だが、小学校の頃はこれくらいの可愛げがあったと思う。忌憚のない感想を言うと、琴音は顔を曇らせた。

「あ……すみません」

女性と弟を比べる失礼を天下は詫びた。

「え？　あ……あの、違うの。ごめんね。ただ、懐かしくて……」

琴音は取り繕うように笑みを浮かべた。

「そうそう天下君、来週の火曜日は時間ある？」

平日だが授業さえ終えれば問題はなかった。部活は既に引退している。

「放課後なら大丈夫ですよ」

「二人が来るのよ。一緒に食事しないかって」

高級マンションを惜しげもなく妹に与え、おまけに高校時代はスタンウェイのピアノを弾きこなしていた世界的ピアニストとの食事　天下はあらゆる意味で気圧された。

「いや、俺は面識ありませんし、家族水入らずのところを邪魔するもの」

「でも涼も来るわよ」

「行きますぜひお願いします」

相変わらずねえ、と琴音は笑った。気恥ずかしかったが背に腹は代えられない。こうして琴音の家ならば一緒にいても許してくれるが、自宅に上げてもらったのは数えるくらい。学校なんて論外だ。ますます涼は素っ気なくもとい用心深くなっていた。

最近、天下は媒体が何であれ教師と生徒の恋愛ものは全て虚偽で塗り固めてあることを悟った。禁断の恋だの背徳感だのに悩むなん

て嘘だ。そこまで進めるだけ感謝しろ。

不本意極まることだが、天下と涼に後ろめたいことは全くと言っていいほどなかった。

かれこれ一年以上が経過しているというのに、まともに手を繋いだことすらないとは一体どういうことだろう。手の甲にキスしてくれたことなんて今では夢のよう。それもすぐに消毒されたが。

（向こうが歩み寄らねえなら、こっちが動くしかねえよな）

というわけで、天下は燃えていたのであった。だから琴音の笑顔に陰があることにも気付かなかった。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（起）（後書き）

全七話、二月中に挙げます。時間が飛んでますが、だいたい天下の三年秋頃です。最後までお付き合いいただけたら恐悦至極に存じます。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（承1）

眉の一つでも寄せるかと思いきや、涼は「ふーん」の一言で特に反対も賛成もしなかった。自分に興味がなくなっただのかと一瞬不安に駆られたが天下は深く考えないことにした。

そうして迎えた火曜日の放課後、カジュアルでいいとお言葉に甘えてタートルネックのシャツに黒のシャープのパンツ。ショートブーツを履けば体裁は整うと天下は判断した。涼や自分を誘った手前、よもや高級レストランになんぞ行ったりしないだろう。

待ち合わせ場所は都内の駅構内。指定はそれだけだった。琴音曰く「駅の改札口を通ればすぐにわかる」。やたらと自信たっぷりに断言するのでとりあえず言う通りにした。

本当に一目でわかった。

実物で見る吉良醒時の迫力は段違いだったのだ。

百八十を優に超えた背にすらりと伸びた手足。人通りの激しい駅構内であっても頭一つ分は出ている上に、彼の周囲は水を引いたかのように誰もいなかった。あまりにも美しいものを前にすると人は敬遠してしまうのだと天下は学んだ。

道行く人々の十人に八人は振り向いている。残りの二人は目を閉じているに違いない。視界の端にでも入れば嫌でも目をやってしまう。周囲の視線をくぎ付けにする張本人は、もう慣れているらしく平然と堂々と腕を組んでいた。

しばし惚けていると吉良醒時の傍らにいた涼がこちらに気づき、手招きした。

「迷わなかったか？」

「無理だろ」

天下は醒時を盗み見た。硬く引き結んだ唇も絶妙なバランスを描いている。無造作に立っているだけで絵になる男は、確かに絶好の目印になった。

顔が売れているのだから話しかけてくる者がいてもおかしくはないが、吉良醒時に限っては孤高である方が自然に思えた。おいそれと傍に寄れば切られてしまうかのような張りつめた空気が彼にはあった。相も変わらず視線を感じるものの、近づいてくる者は皆無。ケータイを向ける猛者を時折見かけたが、醒時が一瞥しただけで委縮し、写メを諦める。

自分よりも頭三つ分は低い小柄な女性、もしかしなくとも妻だろう。言葉と言葉を交わしていた醒時は視線に気づいたのか、天下の方を向いた。無意識のうちに天下は顔が強張るのを感じた。彼の眼光は心の奥底を射抜くほど鋭かった。

「彼が、さつき話してた鬼島君かい？」

助け船を出したのは隣にいた奥様、つまり琴音の義理の姉だった。女性にしてはやや低めの声で、口調も相まって少年のようだと思った。三十過ぎにはとても見えない。高校生、どんなに頑張っても大学生だ。

涼に背を軽く叩かれ、天下は慌てて頭を下げた。

「鬼島天下です」

「吉良零だ。学校きつての優等生なんだって？」

零の言葉に嫌味な響きはしなかった。天下は頬が緩んだ。涼が自分のことを他人の前で褒めたことが気恥ずかしくも嬉しかった。

「忙しいのにごめんな。あ、これが琴音ちゃんの兄でオレの」  
言いかけて零は口をつぐんだ。何うように醒時を見上げる。彼は諦めたように半眼になった。目は口ほどにもものを言うとはよくぞ言ったものだ。

「ワタクシの旦那の吉良醒時でございます」

「無理に直さなくても」

涼がフオローを入れた。

どうやらこの小さな奥様はずいぶん勇ましい方らしい。一人称がオレ。それを旦那様はお気に召していない模様。たったこれだけのやりとりで天下はおおよそを察した。

醒時は切れ長の目を眇めた。

「琴音がいつも世話になつている」

と、これまた低いが玲瓏たる声音で言つたのであつた。

その隣でにこやかに微笑む奥様、零は涼やかで中性的な顔をしていた。しかし間近で見るとやはり女性だ。どこことなく女性特有の儂さがあつた。自分とは十五も年上だというのに可愛いと天下は思つた。弟が二人いるせい、天下は小さいものを見ると庇護欲を掻き立てられる。

しかし「きらせいじ」に「きらぜろ」夫婦揃つてなんとも威

圧感のある名前だ。口にこそ出さなかつたが、天下は自分の名前は棚に上げてそんなことを考えた。

「おまたせしました」

小走りに寄つてきた琴音を、零は満面の笑顔で迎えた。

「久しぶり、琴音ちゃん。大きくなつたなあ」

「お久しぶりです。お変わりないですね」

如才なく応じる琴音。が、どこことなくきちなさを感じた。部外者に等しい天下が感じたのだから気付かないはずがないのだが、零も醒時も、涼でさえも何も言わなかつた。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（承1）（後書き）

長くなりましたので、本日の昼頃にもう一話挙げます。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（承2）

無事集合してどこのレストランに入るのかと思いきや、いきなり三十分近く歩く羽目になった。行き先も説明されず、延々と。

吉良醒時は寡黙だった。天下もまた饒舌な方ではないので、最初に挨拶をした程度で終わった。それを補うかのように零は気さくだった。義理の妹である琴音にも積極的に話しかけている。身長といい、態度といい。この二人は足して二で割ったら丁度良くなるのではないかと天下は失礼なことを考えた。

前を歩く三人をしり目に、天下は涼に訊ねた。

「穴場の店ですか？」

「ラーメンだよ、毎週火曜日公園に来るんだってさ」

天下は数秒、その意味を考えた。屋台のラーメン。世界的ピアニストと財閥のお嬢様の兄妹が六年ぶりに再会し、親睦を深めるために選んだ店が、寒風吹きすさぶ中公園に鎮座する屋台の、ラーメン。

「まさか三ツ星レストランで優雅に食事でもすると思ったのか？」

「なら、まずは服装をなんとかするべきだね。ドレスコードに引つかかる」

「いや、でも、六年ぶりの再会ですよね？」

そんなにラーメンが好きなのか。だとしても屋台はない。もっと相応しい店があるはずだ。しかし、涼は興味無さそうに後ろ首を掻いた。

「最後に会ったのは、うちの大学の創立記念演奏会で吉良氏がゲストとして招かれた時だから……まあ、だいたい六年になるね」

「ゲスト？」

「一曲演奏してくれて。日本人初のショパンコンクール優勝者が来ればそりゃあ盛り上がるものだ。吉良氏も本当は大学主催の演奏会なんてチマッコいものに出たかなかつたろうけど、愛しの妹が世

話になつてゐる以上、無下にも出来ない」

「それじゃあまるで、私のせいでお兄様が客寄せパンダになつたみたいじゃない」

一行の真ん中を歩いてゐた琴音が振り返る。

「そこまでは言つてない。麗しい兄妹愛に感動しただけだ」

「嫌味にしか聞こえないんですけど」

神経質そうに琴音は細い眉を跳ね上げた。いつになく不機嫌だ。

普段の琴音ならば冗談で済ますはずのことに噛みついてゐる。ブラコンだとしてもいき過ぎだ。

「だいたい、私が頼んだわけじゃ」

言いかけて琴音は口をつぐんだ。明らかにそれは失言だった。仮に優秀過ぎる兄にコンプレックスを抱いていたとしても、本人の前で言つべき言葉ではなかった。琴音もそれに気づいたので皆まで言わなかったが、既に遅かった。

怒気こそ感じないものの、醒時からは威圧感が漂つており、肝心の表情からは内心が伺えなかった。なんとも名目し難い気まずさが後に残る。

醒時の視線に耐えかねたように琴音は俯き、

「……ごめ」

「そうだ。こんなデカいくせに可愛くない奴が客寄せになるもんか。パンダを呼んだ方がまだマシだ」

なんとという喧嘩腰。これはにはさすがの醒時も絶句した。

「どつという意味だ、零」

「笹の葉でも食つてろという意味だ」

剣呑な眼差しもなんのその。自分よりも三十センチ以上は高い醒時に対して零は一步も退かなかつた。

「まさか貴様、今朝のことをまだ根に持つてゐるのか」

「子供扱いも大概にしるよ。名前を書いておいたゴディバの最後の一粒を食べられようが、留守録しておいた特番をまだ観てもいないのに消されようが、まあお前だから仕方ないかな、とか思つたりも

する。オレ、じゃなくてワタクシはそこまでみみっちくはない」

拳を振り上げ零は力説した。

「でもな、漬物樽からタツパーに移したばかりのタクアンを一つ残らず腹の中に納めておいて『漬かりが足りん。未熟者めが』はないだろ。オレだつて食べたかつたんだ！ でももう一晩待った方がきつと美味しくなると思つて……だから、我慢したのに……うう、あんまりだ」

なにやら込み上げてくるものがあるらしく目頭を抑える。意外に庶民派らしい。

「お兄様、さすがにそれは酷いんじゃないやありません？ ちゃんと謝つたの？」

よしよし、と頭と背中を撫でさする琴音。どちらが義姉かわかつたものではない。零は大きく鼻をすすつた。

「今度やつたら離婚してやる」

高級チヨコレートとテレビ番組とタクアンで離婚する夫婦つてどんなだ。天下は半開きにした口が塞がらなかつた。

「わかつた。何が望みだ。言え」

呆れ返つた口調で醒時は腕を組んだ。完全に諦めモードである。

「誠意ある謝罪を要求する」

「タクアン一つのために頭を下げると言うのか」

「跪いて靴を舐めると言いたいところだが、ここは日本だ。勘弁してやる」

この男にこの妻あり、と言うべきか。世界的ピアニストと連れ添うだけあつて零もなかなかの大物だつた。醒時の愁眉が寄せられる。

「大して漬かつてもないタクアンを処理してやって悪かつた」

これほど尊大な謝罪も珍しかつた。無論納得のいかない零が抗議しようとして口を開く。が、声を発するよりも先に醒時は零の首根っこを掴んで引きずつた。

「あれで、夫婦ですか」

「昔からあんな調子よ。傍から見たら男友達みたいでしょ？」

琴音は苦笑した。剣呑な雰囲気はもうない。慌てて吉良夫妻を追いかける。それについて行こうとして天下は、不意に足を止めた。涼が小さくため息をついたからだ。

「どうかしたんですか？」

「いや」

言いかけて、涼は困ったように微笑んだ。

「いい人だなんて」

誰を指しているのかは天下にはわからなかった。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（転1）

珍道中ではあつたが当初の堅苦しさは抜けて、それなりに心地よいものだった。目的の公園では既に屋台が到着しており提灯が赤々と灯っていた。小走りで駆け寄つた零が屋台の親父と何やら話をし、次にこちらを手招きした。

「貸し切りだつてさ」

五人がけの席なのだから当然だ。それをさも嬉しそうに報告するものだから指摘する者はいなかった。冬も近い夕暮れは風もそれなりに冷たい。さり気なく醒時が右端の席についたので、天下は左端に腰かけた。せめてもの風除けだ。醒時の隣には当然の如く零が座り、天下の隣には涼ではなく、何故か琴音が座つた。

「ごめんね」

「いいや、別に……」

てつきり共通の知人である琴音が真ん中に座るものだと思つていたが、涼がその座についた。不満を抱くほど幼くはないが、不思議ではあつた。六年ぶりの兄妹再会ではなかつたのか。

口に出したらマズいような気がして天下は指摘せず、品書きを見た。よくよく考えれば、誰かと外食なんて久しぶりだった。

「ここ、二人でよく来た店なんだつて。私は初めてだけど」

何気ない風を装つてはいるが琴音は寂しげだった。

「羨ましいですよ、俺なんか二人で食事に行ったことすらありませんから」

琴音の隣に座る涼はどこまでも素っ気なかつた。品書きを睨みつけて何をしているのかと思いきや、零に激辛ラーメン「くれない」を勧められて悩んでいる模様。端にいる醒時は既に注文を終えており、カウンターに左肘を立てている。その視線の先は 琴音だ。

天下は目を瞬いた。

醒時の眼差しに気づかないはずがない。現に琴音は時折、物言いたげに右側を伺っていた。二人の目が合うことも何回か。その度に琴音は弾かれたように視線をそらす。

(なんだこの兄妹)

アイコンタクトか。それにしてはぎこちなかった。

そうこうしているうちに、天下は涼と視線がかち合った。不審な兄妹の様子なんぞ気づいていないかのように涼はいつも通りだった。

「注文、決まったか」

「あ……はい」

とりあえず天下は『くれない』を注文した。手持無沙汰になり醒時を盗み見ることにした。ピアノストラしく、すらりと整った指をしている。手入れが行き届いているのだろう。

「指輪してませんね」

独り言だったのだが、琴音は耳聴かった。

「二人ともあんな感じでしょ？ 指輪とか大仰なものはあんまり好きじゃないのよ。お兄様なんてほら、ピアノ弾く時に指に何かつけていたら楽器を傷つける恐れもあるわけだし」

もしかして結婚式もしていないのか。天下が呟くと琴音は数拍のちに「そうなの」と肯定した。六年ぶりの兄との再会に緊張していることを差し引いても、琴音の態度はおかしかった。今日は、ずっとそうだ。

醒時達の方を物言いたげに見てはそらすの繰り返し。その視線がまた必死そのもので、見ているこちらの胸が詰まるほどだ。琴音の頬が紅潮しているのは、寒さのせいだけではないと天下は思った。

(まさか……)

好きなのか。

自分の思いつきに天下は愕然とした。しかし、そう仮定すると琴音の行動すべてに説明が付くのだ。血の繋がりのない兄妹。兄を溺愛していながらも六年間も会わなかった妹。それは、自分の恋心を抑えるためだったのでは？ そして再会した今日、消えかけていた

恋心が再び燻り出しているのでは　　おいおい。

(だから俺や先生を呼んだのか)

琴音は距離を置こうとしているのだ。が、どうしても目は想い人の方へ向いてしまう。

「ほれ」

零が自分の味付き卵を琴音に差し出した。無論、涼を通してだ。きよとんとする琴音。零は頬を緩めて笑った。

「好きだったろ？　温泉卵」

しばし味付き卵と零の顔を交互に見た琴音だが、やがて泣き出しそうな顔で受け取った。

「ありがとうございます……お義姉さま」

「初めてだな、そう呼んでもらえるの」

零の声は弾んでいた。ラーメンの湯気に紛れて彼女には見えなかったのか。だが、すぐ隣にいた天下も涼も琴音が涙ぐんでいるのは気づいた。それでも見て見ぬふりをした。気づくべきではなかったと天下は後悔した。

六年ぶりの再会。仲睦まじい二人。思い出の屋台で食べるラーメン。その一つ一つが琴音の胸をしめつけるのだ。

箸を割り、麺をすする。ほどよく辛みのあるラーメンは、確かに美味しかった。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（転1）（後書き）

本日も二回更新です。十四時過ぎを予定しております。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（転2）

ラーメン食べて談笑もしたし、さてそろそろお開きだ。駅構内の時計を見ると時刻は七時前を指していた。それぞれの内情はどうであれ琴音達は家族で積もる話もあるだろうし、必然的に涼と天下は二人で帰ることになる。二人きり、というシチュエーションに心が躍らなかったと言えば嘘になる。が、琴音の事が危惧されるのも事実だった。

「なあ醒時、今日は琴音ちゃんの部屋に泊めてもらったらどうだ？」  
のほほんとした声で零が提案した。

「兄妹水入らずで一晩過ごすのも悪くないと思うんだが」  
とんでもない発言に天下は顔が引きつるのを感じた。やめる焼けボツクイに火がつくぞ。その前に琴音の気持ちを十分の一でもいい、汲んでやれ。

首を横に振るかと思いきや、醒時は何も言わずに自分の妹を一瞥した。特に異論はないらしい。判断を委ねられた琴音は勢いよく手を横に振って後ずさった。

「いえ、それよりもお兄様は久しぶりの帰国でしょう？ 夫婦水入らずでどうぞ」

「いやいやここは六年ぶりに兄妹の親睦を深めるべきだ。正直言うところいつの顔は一晩見れば飽きる。もういい」

酷い言われようだ。しかし、醒時は微かに眉を寄せただけで言及はしなかった。

「いいえ、お気遣いなく。部屋も散らかっていますし、とてもお兄様をお迎えできるような」

「そう言えば今日、部屋の掃除してて遅れたんだっけ？」

さぞかし散らかっているだろうなあ、と涼が独り言を装って言った。余計なひと言に琴音は涼を恨みがましげに睨んだ。

「課題もありますし」

「忙しいみたいですよ、昨日も寝ていた私を電話で叩き起こした後、二時間も延々と明日はどうしようかと相談してくるくらいですから」  
目を抑えて涼は寝不足を主張した。後押しされるように零は満面の笑顔で確認した。

「じゃあいいよな」

「よくありません。いくら兄妹とはいえ、一つ屋根の下に殿方と女性が二人つきりなんて」

「その言い方、醒時にそっくりだ。やっぱり兄妹なんだな」

嬉しそうに言われて、琴音は口ごもった。途方に暮れた顔で俯く。何の苛めかと天下は思った。これでは琴音があまりにも可哀想だ。

部外者だが助け舟でも出そうかと口を開きかけた天下を、涼が手で止めた。

「いい加減にしろ」

黙って様子を見ていた醒時がため息をついた。

「オレの妹を困らせて何が面白い」

そして琴音の方を向いて「嫌か」と一言訊ねた。

「え？」

「オレと一晩過ごすのは嫌か」

「だ、だから嫌とかではなくて、あまりよろしくないかと……」

「嫌かどうかを訊いている」

責める口調ではなかった。しかし琴音は委縮して視線を彷徨わせた。

「だって、兄妹と言っても血も繋がっていませんし、ほとんど、絶縁状態……です、し」

言葉が尻すぼみになる。堪え切れなくなった琴音は両の手を握った。前髪に隠れて表情は何えなかったが、細い肩は震えていた。

「……私、お兄様の妹なんかじゃありません」

絞り出すかのように発せられた声は、すぐさま喧騒に消えてしまふほど頼りなく、儂かった。こんなに弱い琴音を見たのは初めてだった。

「こんな、私……どうして、」

「姓が違つ血も繋がっていない。それでもお前はオレのことを兄と呼ぶ。だからオレも眞実お前の兄になりたいと願つた」

嗚咽でまともに喋ることができない琴音の頭に、醒時は手を置いた。

「オレは、お前に呼ばれるに相応しい兄になれたか？」

身を屈めて覗き込む。その仕草は殊更丁寧で優しかった。絵画のような美しさとは無縁ではあつたが、穏やかなものだった。立ち姿、演奏姿、これ以上ないくらい吉良醒時の玲瓏たる美貌を見てきたが、この時に比べれば全てが色褪せて見えた。

「そん、なこと……っ」

しゃくりあげる琴音。躊躇いがちに醒時の胸元に顔を埋める光景を見ていたら、肩を叩かれた。涼だ。

「帰ろう」

その隣では零が肩を竦めていた。手間のかかる子供に向けるような微笑を湛えた顔で。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（転2）（後書き）

遅れてすみません……。。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（結1）

「今日はありがとう。こんなことを言ったら怒るかもしれないけど前置きをしてから零は軽く頭を下げた。

「これからも琴音ちゃんをよろしくお願いします」

「今度うちの学校でヴァイオリン弾いてくれるなら、いいですよ」

涼には珍しく冗談めかした返答だった。悪戯を思いつた子供のように零は目を輝かす。

「みんなでクイントでもやるか？」

「俺は楽器できませんよ」

「歌え。それくらいは教えた」

「冗談ではない。授業中、涼の前で歌うことすら恥ずかしかったというのに。天下が口をへの字にすると零が爽やかに笑った。

「じゃあお二人さん、仲良くなー」

「え、いや、そうではなくて……」

涼が否定するよりも早く、零は手を振って電車に飛び乗った。行動的で活発。幼い子供を彷彿とさせるが、悪い気はしなかった。零自身には。問題は、彼女達の関係だ。

「いいんですか」

駅のホームで電車を待つ間に天下は訊ねた。もう人目を憚ることもない。今さらなのだが、それでも醒時と琴音を置いて行ったことが気にかかった。

「何が？」

「あの二人。ただの兄妹に見えんのか」

「まあ、あんなのがうじゃうじゃ街中を平然と歩かれたら困った世の中になりそうだが」

「そうじゃねえよ。だから、」

言いかけて天下は言葉を探した。安易に口に出してはいけないよ

うな気がした。

「……琴音さん、なんか様子おかしかったし、兄貴なのに態度もよそよそしかったのに」

「六年ぶりの上に、あの兄だ。気圧されもするさ」

「ラーメン食ってる時、泣いてた」

擦り合わせていた涼の手が止まった。

「ずっと兄貴の方を見てた。なんか、すげえ必死そうに」

捨てられた子犬のようだった。待って、行かないでと願っているのに、鳴くことすらできない。縋りつくように切羽詰まった眼差し。引き留めたいのに、引き留める術を持たず途方に暮れている。

「結婚式な」

涼の吐いた息が白く映えた。

「本当は挙げる予定だったらしい。親族だけでこじんまりと」

主語が欠けていたが誰の事を指しているのかは明白だった。屋台で琴音と天下が交わした会話を涼は聞いていたようだ。

「なんで、やめたんですか」

「琴音が反対したから」

一番賛成しそうな人なのに。天下には意外に思えた。

「式を行うのを？」

「二人の結婚そのものに猛反対」

天下は二の句を繋げられなかった。溺愛しているとは思っていたが、まさかそこまで。なおさら醒時と琴音を二人きりにしては問題ではないか。

「君、絶対勘違いしてるだろ」

軽く笑みを含んで涼は言った。

「琴音はたしかにブラコンだよ。でも意味もなく人の幸せぶち壊すほど、自分勝手じゃない。あの二人はあくまでも兄妹だ」

吉良氏じゃない、と涼は首を横に振った。

「琴音は、零さんが好きだったんだ」

今度こそ、天下は言葉を失った。想像だにしていなかった。だっ

て、口調こそ男性のようだが零は間違いなく女性で、琴音もそのはずだ。

「最初に零さんを見た印象は？」

「ちっせえ」

「その次」

「可愛い」

「男にしては、が前に付くだろ？」

涼の指摘通りだった。写真で見た時、目も大きく中性的な容姿をしているとは思った。吉良醒時と並ぶと余計に童顔と小柄さが際立つて可愛いとも思った。が、全て男性を基準にしてのことだった。

「まさか」

「そのまさかだよ」

琴音も同じことを思ったらしい。

「ああ見えても吉良氏と琴音は八年離れてるからな。初めて会ったのは琴音が小学生の時、愛しのお兄様とよく一緒にいる同性の友人だと信じて疑ってなかった。もともと吉良氏は滅多に実家には顔を出さなかったから、会う機会も少なかったんだ。琴音は勘違いをしたまま、お兄様のマンションに行く度に会える零さんに恋をした。吉良氏もまさか自分の妹がずっと勘違いをしているとは思わなくて数年過ぎた」

他人が見れば幸せな光景だったろう。当人にしてもそうだ。琴音からすれば愛するお兄様と密かに慕う人。醒時にしては自分の想いを妹が慕っている。零にしてみれば好きな人の妹が自分を受け入れてくれている。それぞれに幸福な絵図を描いていた。

しかし、琴音の描くものだけが違っていたのだ。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（結1）（後書き）

次回の更新で休止となります。本日の昼頃（もう時間指定は控えま  
す）を予定しております。夕方までには……なんとか。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（結2）

「吉良氏の大学卒業も決まった頃に結婚する旨を実家に報告しに行つたんだ。そこで中学生で恋する乙女だった琴音は家族全員の前で猛反対。ふざけているだの、お兄様は正気なのだの、罵詈雑言を浴びせたそうだ」

天下には想像ができなかった。あれだけお兄様お兄様と慕っている琴音が、愛しのお兄様を責め立てる姿　無理だ。それだけに琴音の動揺が伺えた。

「最終的には泣き喚いて暴れた琴音に一同は茫然。途方に暮れた中、零さんは琴音を別室に連れて行って自分が女性であることを証明したらしい。まあ、それで誤解は解けたんだが……」

涼は口ごもった。

その先は天下にも察せられた。五年も勘違いを続けていたのもあるが、家族とはいえ大勢の前で兄と好きな人を面罵。いたたまれないだろう。恥ずかしくて、申し訳なくて、消えてしまいたくなくなつてもおかしくはない。

「部屋に閉じこもつて、数日後に家出」

警察沙汰にこそならなかったが、一歩手前ではあつたらしい、と涼は言う。

「で、吉良氏が琴音を捜し出して、自分が住んでいたマンションの一部屋をまるごと譲つたんだつてさ。あれだけ騒いだ手前、琴音が家族に会わず顔がないのを察して。吉良氏はすぐに海外へ演奏旅行。琴音はそこから高校と大学に通つたつてわけだ」

おしまい。涼は両の手を軽く合わせた。

「笑えるだろ？」

「全然、笑えねえ」

「私も笑えなかった。でも奴は笑えと言つた。笑い話にでもしなきゃ惨めなんだつてさ」

以来、琴音は実家へ帰るのはおろか、醒時とも零とも会っていない。六年前の創立記念演奏会だって醒時と顔を合わせただけで琴音が耐えきれなくなって逃げ出したのだ。

何よりも不幸だったのは、醒時と琴音の間に血縁がないことだ。二人を繋ぐのはお互いが「兄妹」だと思っただけ。認識が途切れてしまえばどうすることもできない。一方が家族ではないと断じてしまえば、それでおしまい。二人を繋ぐ絆とはそれくらい脆いものだったのだ。

琴音は謝りたいと願っていたながらも言いだせずにいた。万一拒絶されては彼女には絶る血の繋がりが無い。電話でのやりとりも去年ぐらいまではぎこちなかった。が、いつまでもしこりを残しておくわけにはいかない。

今日のラーメンの会を企画したのは零だと、涼は言った。無論、琴音の心情も察して部外者とも言うべき涼と天下の参加も快く受け入れた。どこか、そもそも零が友人を誘うよう勧めたらしい。「な？ いい人だろ？」

同感だ。勘違いをした琴音が惚れるのも無理はない。思えば零は始終琴音と醒時の間に立っていた。場の空気が澱む度に明るく振舞っていた。全ては義理の妹と旦那ためだ。壊れてしまったものをもう一度、築き上げようとしたのだろう。

生まれた時から家族が完成しているわけではないのだと天下は思う。血の繋がりがあっても何かのきっかけでたやすく離れてしまう。所詮は思考も違う他人なのだ。何もかもわかるはずがない。それでも積み重ねていく。理解しようとする。互いに歩み寄る。手探りで、少しずつ、ゆっくりと。家族になろうとする。その想いにこそ意義があるのだと信じたかった。

(連絡するか)

ここのご無沙汰だった兄弟の顔を思い浮かべ、天下は苦笑した。

電車の到着予定時間を告げるアナウンスが流れた。涼が首を少し

傾けた。

「琴音の机に吉良氏の写真があるの、見たか？」

天下は頷いた。あまり出来のよくない肖像写真をフォトフレームに入れて飾っていた。

「あれ、隣に零さんが映っているんだ」

余計に天下は笑えなくなった。写真を手折って隠して後生大事にしていた琴音を思うと、どうしてもくだらないと断じることができなかった。傍から聞けば間の抜けた話かもしれない。だが本人は真剣だったのだ。最初に勘違いをしたまま純粹に、想いを募らせていたのだ。

「本気で、好きだったんだな」

「だろうね」

ホームに滑り込む電車に気を取られた涼の手を天下は掴んだ。擦り合わせたり、息を吹きかけたり、努力も虚しく彼女の手は冷たかった。

「冷えてんな」

涼は答えなかった。振り払うこともしなかった。

「付き合ってくれてありがとう」

「大して役に立ってねえけどな」

「クツション役だよ。いきなり当人と真っ向からぶつかったら琴音だって逃げ出す。何も知らない部外者がいてくれたおかげで、あいつもいつも通りに振舞えたんだ」

涼は薄く笑った。

「それに、カイロ代わりにもなる」

繋いだままの手はその礼か。理由がなければ手を繋ぐことすら許さない涼の不器用さが天下には齒痒かった。もどかしい。でも、悪くはなかった。厳しく律する涼だから、甘やかしたくなるのだ。

指を絡ませてやろうかと思っただが、恋人繋ぎはさすがにできなかった。やらかしたら最後、振り払われるのは目に見えていた。涼は慌てて掛け違えることを恐れている。間違っただま進むことを恐れ

ている。臆病に近いそれが悪いとは一概には言いきれない。

まだ、なのだ。涼と自分もきつと。ゆっくりと慎重に積み重ねていくしかない。

「そういうことにしておきますよ、今日は」

その夜、兄妹の間でどのような会話がなされたのかは結局わからなかった。

ただ琴音のスクラップ集めはますます熱の入ったものになり、フイルの数が二ケタに達しようとしていた。本棚に納められた膨大な「お兄様コレクション」に苦笑したその折、天下は琴音の机の上を立てかけてある写真を目に留めた。

折り目の入った写真には、吉良醒時の他に朗らかに笑う零がいた。そして二人の間には、照れたようにはかむ少女の姿があった。

【番外編】恋せよ妹、密やかに（結2）（後書き）

これにて番外編も終了です。最後までお読みくださり、ありがとうございます。

大変申し訳ないのですが、拙作の次回更新は三月末を予定しております（予定は未定です）。いわゆる休止というものでございます。変更の可能性は大いにございますのでその都度活動報告などで報告させていただきます。

それでは皆様、（私めが一方的に）名残惜しいのですが、しばしのお別れでございます。

このような拙作に根気よくお付き合いくださったことに感謝申し上げます。

## 【期間終了】課外授業跡地

皆様、大つつ変長らくお待たせいたしました。  
忘れ去られている可能性大の錨晋太郎です。

おかげ様で入稿が完了いたしました。当初の予定を遙かにぶつちぎって延長した執筆期間……断言できます、あれは地獄です。私め風情では踏み込めない超人の領域です。世の作家様はこんなプレッシャーに耐えながらも素晴らしい作品を送り出しているのだと思うと、ブックオフにおいてある本も書店で買ってしまおうわけです。印税入りませんかからね。

話がそれました。書き終えたとはいえ、まだまだこれからです。道のりは長く険しいのです。あまり考えたくないのですが、出版化を逃した場合ならう様で掲載させていただきませう。お蔵入りするには労力をかけ過ぎているもので。

何はともあれ、やはり執筆は楽しくなければ、と初心に戻ってより一層精進していく所存です。

さて、ではこれから再開させていただきます。生徒は対象外です。『の第二部について少々。ちなみに（勝手につけた）第二部のタイトルは『いいえ、生徒は対象内です。』となっております。

全くもって進展しない二人をどうくつつけるのかを課題に話を進めさせていただきます。プロットを読んだ友人の感想が「昼ドラっぽい」なので、それを踏まえてお読みくださいませ。リアリティもへったくれもない完全に私めの自己満足です。

そして一番重要なことを、

毎日更新はおそらく無理です。

拙作唯一の取り得がなくなっただんですね、わかります。

毎日楽しみにしてますとお優しい励ましに対する態度がこれかよ、と自分でも呆れておりますが、諸事情により無理だという結論に達しました。この点に関しましては深くお詫び申し上げます。

それでもいいよ、と仰ってくださいる慈悲深い方、どうかこれから  
もよろしく願っています。

では、乱文失礼いたしました。

## 入学式（その一）基本はてるてる坊主です

三月になると普段以上に天気予報を注視する。雨降って地固まるとか適当に言葉を取り繕ってもやはり、一生に一度の日には晴天であってほしいと願うのが人情というものだ。

せめて桜はもってほしい。散るな雨よ降るな後生ですから。

教職員一同の願いが天に届いたのかどうかはわからないが、今年の入学式は満開の桜の中で執り行われることになった。

目玉である管弦学部の演奏と合唱部による校歌合唱　斉唱でないところが音楽科のプライドと言うべきか。見事な三部合唱を披露して早くも新入生勧誘の一役を担った。

その合唱部の副顧問である渡辺涼はというと、去年と同じく裏方の仕事に専念していた。音楽教師とはいえ、体育館の舞台上上がったことなど数えるほどしかなかった。ましてや、合唱部の指揮など練習代理の時しかやったことがない。

不満に思ったことはない。それが自分の分だと思っている。

「リヨウ先生、今後の進行ですが……」

呼び止めてきた同僚の教師と確認。予想の範疇だが、十分ほど遅れが生じている。一年生の教科書は書店に出張販売してもらったことになっている。体操着も上履きも同様だ。他の業者への連絡は密に行う　今後のためにも。

「それと校門付近に新入部員勧誘のために生徒がたむろしています」

「入学式当日は関係者以外立ち入り禁止のはずでは？」

連絡不足を責めると、教師は気まり悪げに言った。

「それが『体育館の立ち入り禁止』とありますけど、校内とは書いていないもので」

涼は額に手を当てた。誰だ、そんな小賢しい理屈をこねまわしたのは。

「どこの部ですか？」

「柔道部と剣道部、サッカーにバスケット、テニス、陸上、野球、バレー、バトミントン、」

「つまり、運動部全般ですか」

「あ……でも、弓道部はいませんでしたね」

この時点で涼は黒幕に察しがついた。先日「入学式大変でしょうけど頑張ってください」などと言っておきながら白々しい。なんか変だとは思っていたのだ。

「私が行ってきます。遅れが生じた際、各業者への連絡だけはしっかり行ってください。毎年のことですから、向こうも多少遅れることぐらいわかっているはずですよ」

後を任せると涼は昇降口へ向かった。

もう雨でも何でも降ってしまえ。

(その二) 権利の主張だけでは押し通せません

「不公平です」

運動部一同を代表する形で、石川香織は涼と対峙した。女子バスケット部の部長なだけあって引き締まった身体をしている。少し日に焼けた肌も健康的だ。

「合唱部、管弦楽部は入学式参加が許されているのに他の部は出入り禁止なんて横暴です」

後押しするように背後では運動部一同が「おーぼー」だの「音楽科のいんぼー」だの不平不満を大合唱。無論、揃っていない騒音だ。せめて斉唱にしてほしかった。何を言っているのか聞き取れない。

「音楽関係の部を優遇しているわけではありません。現に放送部だって体育館に出入りしてますし式にも参加しています。あくまでも入学式の手伝いのために駆り出されているんです」

「でもまたとない部のアピールの場ですよ。機会は平等に設けられるべきではありませんか？　いくらこの学校に音楽科があるとしても、普通科だってあるんです。私たちだって真面目に活動をしています。なのに勧誘さえ満足にさせてもらえないなんて、えこ贔屓だと言われても仕方ないと思います」

四月下旬から勧誘期間があるだろうが。それまで待てよ、と涼は言っただけでなかったが、連中が聞く耳を持つとは思えなかった。

入学式は口実に過ぎないのだ。彼らの不満はもつと根深い。何しろこの学校、他校に比べて、音楽系の部は優遇されている。全ては一学年に四十人しかない音楽科生徒のためだ。

身も蓋もない言い方をすれば、甲子園地区予選一回戦で敗退するような野球部に金を費やすくらいなら、合唱コンクール全国大会で銀賞を取る合唱部に予算を投じた方が有意義。そういうことだ。炎天下で汗水たらして練習に励んでいる運動部に見れば、冷房の

利いた音楽室で練習している連中なんぞ苦労知らずのお嬢様にしか映らないのだろう。気持ちはわからなくもない。

しかし、管弦楽部も合唱部も投じた分の成果は果たしている。それもまた事実だった。

運動部の生徒達が訴えていることは的外れと言わざるを得ない。待遇を良くしてほしいのなら、それに見合う成果をまず提示するべきだ。もしくは、もっと運動部を優遇する学校に入ればいい。少なくとも、学校行事の際に騒ぎを起こすよりは現実的な手段だ。

「皆さんがマイクその他音響の準備をしたり、体育館にビニールを敷いたり、五百以上のパイプいすを並べて下さるんですか？ 入退場曲を演奏して下さるんですか？ 校歌の合唱をしたり、伴奏をして下さるんですか？ 合唱部も管弦楽部も放送部も生徒会も本来の活動時間を割いて入学式に協力してくれているんです。入学式終了後も後片付けをやりませぬ。他の部が学校のためにボランティアしている間に、あなた達は新入生を自分達の部に勧誘するんですか？」

口々に喚き立てていた連中がぴたりと押し黙る。涼はこれみよがしにため息をついた。

「だとすれば、他の部から非難されても甘んじて受けるしかありませんね。自分達は何一つ協力もせずに、いいとこ取りをするわけですから。運動部なのにスポーツマンシップの欠片もない卑怯者だと言われても仕方ありませんね」

涼は時計を確認した。入学式終了予定時刻は既に過ぎている。今頃、新入生達はそれぞれの教室へ向かって最初のHRを受けているはずだ。

「早ければ三十分後には新入生達がここを通るはずですよ。それまでにどうするか決めなさい。くれぐれも帰宅の妨害をしないように」

言いたいことだけを言っただけを返す。背後から「何アレ」「ム力つく」「だから音楽科って嫌なんだ」だの文句の言葉はよく聞こえたが「卑怯上等！ 新入生を勧誘しようぜ」という威勢のいい発言は一つも出なかつた。五分もすれば解散するだろう。

生徒に嫌われようが涼にはどうでもよかった。もともと文化部と運動部は相容れない存在なのだ。

(その三) 権利には義務が伴います

職員用玄関で靴を履き替えようとして、涼は顔を上げた。

「関係者以外立ち入り禁止です」

「体育館は、な」

鬼島天下は細かい点を指摘した。

「やはり君か」

去年まで教職員が誰も気づかなかった文章の欠けを突くなど、よほど注意力のある奴しかできない芸当だ。

「人聞きの悪いこと言うんじゃないやねえ。俺はただ『体育館以外なら立ち入ってもいいんじゃないやねえのか？ 入試じゃあるめえし』ってばやただけだ。それを運動部の連中が盛り上がりやがって……おかげで練習になりやしねえよ」

そう吐き捨てる天下は制服姿だった。彼は弓道部副部長だ。せめて自分の部だけは馬鹿騒ぎに参加しないよう戒めたのだろう。その統率力は大したものだが、周囲がこれだけ騒がしくなれば練習どころではなくなる。練習を諦めて解散。制服に着替えた後で様子を見に来た　といったところだろう。

「どうせバレー部とかバスケット部の連中が喚いてんだろ？」

たしかに中心となっているのはその部だった。

「よくわかったな」

「あいつら、体育館分けて練習してるからな。他の運動部だって満足な練習場があるわけじゃねえ。グラウンドだって曜日ごとに使用する部が変わるし、雨降ったらどうしようもねえし。そういう運動部から見たら、文化部は恵まれてんだよ」

「特に、音楽科が？」

天下は小さく頷いた。

音楽科があるだけに音楽設備は半端ではない。必然的に合唱部、管弦楽部は冷暖房完備の部屋で練習。それを不公平と言われてはど

うしようもない。しかしあくまでも楽器のためだ。そんなことを言っていたら家庭科部は調理室を占拠して冷蔵庫もガスもオーブンも全て使いたい放題ではないか。

「やっかみだ。あんたが気にすることじゃねえよ」

「そもそも、君が妙な入れ知恵をしなければこんな事にはならなかった」

「『体育館立ち入り禁止』なんて書いた奴が悪い」

天下は悪びれる様子もなかった。三年になると、身長ばかりが伸びて中身に変化は見受けられない。涼は自分のよりもやや上に位置する天下の頭を見上げ、ため息をついた。

「言葉尻を捕らえてないで、さっさと帰れ」

「でも俺は」

「関係者以外立ち入り禁止だと何回言わせるつもりだ」

「いや、だから俺も関係者だって」

弓道部に手伝いを頼んだ記憶はない。涼は胡乱な眼差しを送った。「弟の晴れ姿を一目見ておこつかと思って」

そう言えば、今年の新入生名簿に鬼島統の名があった。

(その四) 劇的な変化を期待してはいけません

四百を超える新入生の中で涼がその名を見つけたことに深い意味はない。単に、鬼島統が芸術選択科目で音楽を選んでいたからだ。今年の普通科一年の音楽を担当するのは涼だ。だから知っていた。それだけのこと。決して鬼島という苗字に気を取られたわけではない。

「じゃあ会いに行け。こんなところで油を売るな」

「そのつもりだったんだがな」

天下は薄く微笑んだ。困ったように肩を竦める。

「お袋も来てた」

その一言で察するには十分だった。鬼島家の複雑な家庭事情。自分のことを覚えていない母親の前に顔を出すのはさぞかし辛いことだろう。間に挟まれることになるであろう弟の心情も察して、天下は身を引いたのだ。

家庭に関して天下が異様に物わかりが良いのも、相変わらずだった。だからだろう、彼を突き放すことができないのは。

憐憫でも同情でもない。涼の中で天下にある種の同族意識が芽生えていた。後ろめたいことなんて自分にはないのに、家族に対して二歩も三歩も引いてしまう。複雑な家庭事情を抱えているのは涼も同じだった。

だからこそ、今の天下を見ているとたまらなくなる。一生、こんな生き方を通すつもりなのか。やめる。碌なものじゃない。人生の先輩として忠告してやりたかった。しかし、身を引く以外にどうすれば良いのかは、涼にもわからなかった。自分のことでさえわからないのだ。天下に進言などできるはずもなかった。

「なあ先生、今度の土曜は暇か？」

沈んだ空気を払拭するつもりなのだろう。天下は明るく言った。

「先生のい」

「君は新学期早々私を懲戒免職にしたいのか」

「バレやしねえって」

「バレるバレないの問題じゃない。男子生徒を自宅に上げた時点で教師失格だ」

変なことに対して諦めが悪いのも、相変わらずと言えば相変わらずだった。

不満顔の天下はさておき、涼には仕事が山のようにある。順調に進んでいることをひたすらに願った。

(その五) 親の心子知らずなのです。

祈りが届いたのか体育館では保護者説明会が行われていた。新入生の姿はない。教室でHRを受けているのだろう。

説明会も終わりに近づいていた。最後の質問受け付けで母親の一人が挙手。校則に文句を言っていた。質問の形式をとってはいるが、涼に言わせればいちゃもんだ。笑わせてくれる。校則ではローファは黒のみを認めるとあるが、うちは先日茶色の革靴を購入してしまった。どうしても黒でなくては駄目なのか。

駄目なんですよ、お母さん。

不条理だろうと何だろうと、それを知って入学したはずだ。校則に意味を求める方がおかしい。だいたい座っている位置からしてあんな音楽科生徒の母親だろ。革靴一つで愚痴っていたら、これから先どうやって進学費用をまかなうというのだ。半端じゃないぞ。音楽って特に。

学校側はやや呆れつつも決然と「校則ですから。例外を認めるわけにはいきません」と譲らなかつた。渋々顔で母親も引き下がる。

(ああいうものなのか)  
母親って。

教師という職業柄、保護者(最近はその呼ばないと差別と受け止められる)に遭遇する機会は結構ある。理不尽な要求を突き付けてくる母親もいたし、進学のことだと思いつめた顔して相談してくる母親もいた。時折父親もあるが。

しかしそのどれも共通していたのは、子供の状況を自分のことのように怒り、もしくは不安になり、あるいは喜ぶことだ。放任主義を貫く家庭でもその傾向はあった。

その様子を傍で目にする度に涼は不思議な気持ちになる。羨ましいわけでも、哀しいわけでもない。ただ、珍しいものを見たような感覚。時には感心さえ覚える。よくもそこまで。

娘、息子といえども違う意思を持った他者に過ぎない。よくもそこまで思いを込めることができるものだ。

そんなことを考える自分は、おそらく何か欠けているのだろう。質問が終わり、保護者達はまばらに立ち上がる。そろそろHRも終わっている頃だ。丁度いい。生徒と合流すべく保護者らは体育館の出口へと。涼は廊下の端に寄って道を譲った。

目の前を通り過ぎていく方々は同じ保護者とお喋りに熱心だ。去年と何ら変わらない光景だった。涼は壁と同化しているつもりになって、この行列が過ぎ去るのをひたすらに待った。

特に意識を向けていたわけではなかった。ただ、この大群の中に天下の母親がいるのかとなんとなく、眺めていただけだ。この人数では見過ごすだろうと諦めてもいたし、見つけたところで挨拶を交わすほどの間柄でもない。

その折だった。

視界の端に、女性が入った。グレーのスーツを品良く着こなした保護者。いや、母親だ。誰の母かなどとは訊ねるまでもない。この場にいる以上、わかりきったことだ。

しかし、涼の思考は一瞬にして止まった。

保護者の一団が通り過ぎて、その騒ぎ声すらも遠くなつてなお、涼は動くことができなかった。半開きのまま閉じることを忘れた口に手を当てる。唇に触れた指は微かに震えていた。

「……まさか」

涼は鼻で笑った。最近、いろいろあり過ぎて意識過剰になっているのだろう。それにしても性質の悪い幻を見たものだ。

自分を生んだ女性がこの学校に来ているなんて。

悪夢としか言いようがない。

(その五) 親の心子知らずなのです。(後書き)

これにて導入は終了です。お付き合いありがとうございます。

まあ……この時点で今後の展開の予想がつく方はいらっしやるとは思いますが、ひたすら王道に突っ走ろうかと思う次第です。

## 一 限目（その一）前途多難です

予想通りではあったが期待外れだ。

天下は配られた時間割表を睨んだ。三年ともなると大学受験を視野に入れた科目の割合が増える。当然、削られる科目というものもあるわけだ。週に一度に減らされた総合学習はテストの成績順でクラス分けされる英語強化訓練の時間と化していた。もはや総合ではない。学習ですらない。洗脳だ。

たった一人でいい、とにかく有名大学に生徒を入れよう、という普通科教師陣の魂胆が見え見えだった。

何しろこの学校の進学実績で誇れるのは、毎年二、三名が芸大への切符を手に入れていることぐらいだった。それも音楽科の優秀性を示すものであって、普通科はハッキリ言って関係ない。

特に普通科の偏差値が低いわけではない。むしろ高い方だ。ただ、のんびりした校風が、良くも悪くも学生達に余裕を持たせていた。有名大学に進学するよりも、それなりの大学で収まるうとする生徒が圧倒的多数を占める。やる気があるのは教師達、それもごく一部だけだ。

「Sクラス？」

後ろに座るクラスメートが手元の時間割を覗き込んできた。

「ぜってえスパルタだな。頑張れよ」

「ご愁傷様、と言わんばかりの軽々しさだった。天下は早くも実力試験に真面目に取り組んだことを後悔した。学年一位なんて取るものじゃない。Sクラス。英語のエリートが集うクラス。嬉々として英語を教えるであろう、お受験命の熱血教師。想像しただけで帰りたくなる。」

天下は深々とため息をついた。

「おいおい、そんなにSクラス嫌かよ」

違う。Sクラスは確かに嫌だ。しかし、たかが週に一回だ。五十

分適當に過ごせばいい。

問題なのは、そのたかが五十分すらないことだ。天下は時間割表を握り締めた。

(なんで音楽ねえんだよ……っ！)

不満はこの一点に尽きる。普通科の教室棟に向かい合うように位置する特別棟は、音楽科の領域だ。よっぽどのがない限り、普通科生徒は立ち入らない。例えば、音楽の授業を鑑賞室で行うとかだ。

つまり、唯一特別棟に立ち入る正当な理由が奪われたのだ。あまりの理不尽さに天下は言葉もなかった。

「あ、鬼島くんもSなんだ」

よし、落ち着け。まずは状況を把握しよう。

「私もSクラス。他にはいないみたいね」

タイムリミットは来年の三月。卒業式までだ。それまでに自分はベルリンの壁よりも強固な意志を持ち、キリマンジャロの吹雪よりも容赦がない渡辺涼をなんとか懐柔せねばならない。敵は強大かつ狡猾だ。

そのためには、まず綻びを見つける必要がある。鉄壁かと思われたベルリンの壁だって崩壊したのだ。渡辺涼にも隙があるはずだ。(……で、どうやって探すんだ?)

思考は巡り巡って結局、最初の問題に行き着く。すなわち、普通科と音楽科、いかにして垣根を越えて接触するか。

「なんか難しそうだけど、よろしく」

そつだ。難解にも程がある。しかしやらねばならない  
「あ?」

そこにきてようやく、天下は顔を上げた。覗き込んでいた勝ち気な瞳と遭遇する。クラス替えをしたばかりで顔と名前が一致しないクラスメートが多い中、見覚えのある女子だった。たしか、バレエだかバスケットだかの部長だったような気がする。

天下は胸元の名札を一瞥した。石川。同じ運動部とはいえ、全て

の部長副部長を知っているわけではない。しかし、予算会議等の折に何度か言葉を交わした記憶が微かに。同じクラスになったのはこれが初めてだ。

「……まあ、よろしく」

言葉を濁した天下だったが、彼女はそれで満足したらしい。黒板前でたむろしていた女子数名が「かおりー、英語何クラスだった？」と呼びかける声に応じてそちらへ向かう。

天下は目を眇めた。石川香織。思い出した。女子バスケットの部長だ。

記憶が一致した時点で天下は満足した。すぐさま思考は失った機会へと戻る。音楽の授業があるなら英語特訓コースが毎日あったも構わなかった。

(その二) それでも少しは進歩したいものです

新学期早々、渡辺涼は頭を抱えなくなつた。

一年の合同クラス。今年度、普通科で音楽を選んだ生徒は四十人余り。例年通りだ。

ホワイトボードに「渡辺涼」と書き、生徒に向かっておざなりに「渡辺です。一年間よろしく」とだけ挨拶。去年と同じだ。

早速発声の練習を始めた涼に生徒達が不満の声を上げたのも、無視して進めたら渋々口を開いたのも、いつものことだった。

しかし、ここでかつてない問題が浮上した。  
歌わない生徒がいたのだ。

自分で選択しておきながら真面目にやろうとしない生徒は別段珍しくもない。口パクで誤魔化せると本気で思っている生徒だっている。教師としてできることはさり気なくバレている旨を告知し、授業態度の欄にゼロをつけるくらいだ。やる気のない生徒にやる気を出させる程、涼は意欲のある教師ではなかった。

しかし、だ。最前列で真剣な顔して口を閉ざされでもしたら、さすがに戸惑いもする。

初日から恨まれるようなことをしただろうか。素知らぬ顔で授業を進めつつ、涼は記憶を探った。特に覚えはない。しかし唇を真一文字に引き結んだむっつり顔を盗み見る。ざんばらだが艶やかな黒髪、鋭い双眸、面影は嫌という程あった。名簿を確認するまでもない。

この生徒が、鬼島統だ。

兄弟そろって何とも面倒な。涼は己の自意識過剰であることを祈りつつ、今回は目を瞑った。初日だ。喉を痛めたりしたとかで、調子が悪いのかもしれない。可能な限り好意的に解釈することにした。さすがに次も同じことをされたら黙っているわけにもいかないが。

やたらと長く感じる五十分を終えると、次の授業に向けて生徒達は足早に鑑賞室を去っていく。スタンウェイのピアノを丁寧に拭いていた涼ははたと手を止めた。

一人だけ、席から離れない生徒がいた。

訴えかけるかのように真摯な眼差しをこちらに向け、そのくせ口は固く閉ざしている。

生徒の一団が扉を閉める音がどこか遠くのことのように聞こえた。人気のない鑑賞室で二人つきり。涼は天井を仰いだ。

この状況、前にもなかつたっけ？

(その三) 前を向くのは悪くありません

「私に何か？」

やや高圧的な物言いになってしまったのは、あの鬼島天下の弟であるからだ。理不尽かもしれないがこればかりは諦めてもらうしかない。恨むなら見境のない兄を恨め。

鬼島統は首を捻って、涼を視界に入れる。凝視とは違う目つきだった。感情がこもっていない。何か動く気配を感じ取った。だから目をやった。それだけ。眺めている、と言った方が適切だ。

これはまた、天下とは対照的なだんまりだった。

拗ねている時であれ機嫌がいい時であれ、天下は黙る代わりに視線で主張する。故に、何らかの意思が彼の眼差しから感じ取れた。しかし統にはそれが全くと言っていいほどなかった。涼に対して不快な感情を抱いているのかも、戸惑っているのかもわからない。

「……そろそろ、この教室を閉めたいんだけど？」

聞こえないわけではなさそうだ。統はあっさりと教科書を手に、涼の後に続いた。明りを消して、鍵をかける。一連の作業も傍らで静観。観察されているような居心地の悪さに、涼はこめかみを指で搔いた。

「あのね、鬼島」

「統」

弾かれたように能面少年は顔を上げた。声こそ出さなかったものの、目を二、三瞬いて自分呼んだ人物を見る様は、実に人間らしい反応だった。

「よう、奇遇だな。授業終わったのか？」

突如現れた兄 天下の問いに統は小さく頷いた。

「少しは慣れたか？」

こっくり。

「そりゃあ良かった。クラスの連中とは？」

可否では答えようのない質問にどうするのかと、涼が様子を見れば、統は口を開いた。

「……隣」

無機質な声音。初めて耳にした統の声は、天下の声に似て低かった。

「多少は我慢しろよ。皆が皆おめえみたいに無口なわけじゃねえ」

「図書」

「適当にやっとけ。どうせ月に一回程度しか集まらねえよ。それより部活はどうすんだ」

口を閉ざす統。天下は呆れたようにため息をついた。

「俺のこと気にしてどーすんだよ。来週から勧誘期間だから、一回くらいは顔出せ」

俯きがちな統は少し顔を上げた。心なしか、表情が晴れている、ように見えなくもない、涼の見間違いでなければ。

「あの……兄弟の談笑中に申し訳ないんですが」

遠慮がちに口を挟む。天下は完璧なまでの優等生スマイルで頭を下げた。

「渡辺先生、弟をこれからよろしくお願いします」

「いえいえこちらこそ　じゃなくてだな。今の会話は一体何だ。

キヤッチボールが交わされているようにはとも見えない」

天下と統は揃って首を傾げた。その表情は兄弟らしく非常に酷似していた。

(その四) しかし、前だけ向けばいいものではありません

涼はため息混じりに訊ねた。

「隣というのは？」

「ああ、それか」

そこでようやく天下は合点のいった顔になる。

「隣に座る奴がうるさいんだってさ。音楽の時もなんか落ち着かなかつたらしい」

「図書？」

「委員決めで押し付けられたんだよな？」

統は首肯した。

「じゃあ部活っていうのは」

「こいつ、弓道に興味があるくせに俺が副部長やってるからって、見学にも行かねえつもりだったんだよ」

あの単語のどこにそこまでの意味が込められる。涼は額に手を当てた。一卵性双生児だってここまで心通わせたりはしない。テレパシーか。

その前に、だ。鬼島統は一体どんな妙技を用いてこの学校に入学したのだろうか。面接は必須だったはず。通訳がいなくては会話一つ成立させられない生徒が、面接試験で饒舌に自己紹介と志望動機を語る姿を思い浮かべようとして 涼は無理だと断じた。想像できない。

涼があれこれ考えている間に、天下は統を教室へ帰していた。先ほどよりも状況が悪化していることに気付いた時は既に遅かった。

「では私はこの辺で」

「逃げんな」

全力で回避したいところだ。しかし相手は聞きわけが悪かった。

「よし、落ち着いて状況を冷静に分析しようじゃないか」

涼は腹を括って、天下に向き直った。

「ここは特別棟だ。鑑賞室前だ。音楽科の陣地だ。普通科の、今は  
勉強に勤しんでいるはず生徒である君が何故ここにいる」

「渡り廊下を歩いていたら弟が見えたもので、何か揉めているのか  
と思ひまして」

「それはどうもありがとうございます。通訳お疲れ様」

「いえいえ」

如才のない受け答え。丁寧な口調も礼儀正しい態度も何もかも、  
全てがとにかく白々しかった。今度は一体何を企んでいるのかと腹  
の内を探ってしまう。

「今は用済みだ。教室に帰れ」

「それはないでしょう。助けてもらっておいて」

「助けてくれと頼んだ覚えはない。それしきの度量では先が思いや  
られるぞ」

「恩知らずなものかどうかと思いますが」

涼は頭一つ分上にある天下の澄まし顔を睨みつけた。

「……何かあったのか」

(その五) 見落としてしまいます

「何がですか？」

「ここ最近の君はいつになく、しつこいような気がする」

入学式の辺りからだ。積極的と表現するべきかどうかはわからないが、押しが強くなった。しかも、涼が冷たく突っぱねても、めない拗ねない怒らない。不安混じりに、しかし図々しく。機嫌が悪いとはまた違う、落ち着かない感じだ。

「あ……………」

天下は言葉を濁して明後日の方を向いた。自覚はあるようだ。

「色々あるんです、それなりに」

似非優等生にしては珍しく、適当な誤魔化し方だった。もう少し踏み込めば白状しそうな気さえした。危うく追及しかけた口を閉じ、代わりに天下の背中を押した。

「なら、こんな所で油を売っている場合じゃないだろ。さっさと教室に戻りなさい」

「訊けよ、理由くらい」

地の声で天下が呟く。どうやら構ってほしかったらしい。なんとも面倒な奴だ。

「進路相談なら職員室の隣だ。君の名前で予約しておこう」

「先生が相談相手なら行きますけど？」

「いや、今日はたしか佐久間先生だ。良かったな前の担任だぞ」  
棒読みになつてしまうのは仕方ない。涼とて頭痛の種に相談するなんて願ひ下げだ。

案の定、天下は心の底から嫌そうに顔を顰めた。歪めたと云ってもいい。思わず佐久間を憐れんでしまう程、あからさまな嫌悪の表情だった。

「…………生徒にうだうだ言う前にてめえの面倒をてめえで見ろ」

「ごもつとも。しかし相手は教師だ。歳甲斐もなく生徒と恋愛ごっ

こをし、散々他人を巻き込み、それでもなお全く改善する気配がなく、現在進行形で恋愛を続けている 救いようがない馬鹿野郎だとしても、佐久間は、教師だった。

「言葉を慎みなさい」

「担任が変わって恐悦至極に存じます」

言葉とは裏腹に天下は非常に不機嫌そうだった。チャイムの音に背を押される形で去る際も、口を尖らせ捨て台詞。

「あんた、いつまであいつの肩持ってたんだよ」

(その六) 周囲にも気を配りましょう

愛用しているかはともかく、赴任時から使用しているティーカップに涼は紅茶を淹れた。

うらかな放課後の一時。教師は涼一人しかいない音楽科職員室。喉を潤すアールグレイ。それは静かで平和で穏やか　とは言い難かった。

「ちよつとアンタ、言いたいことがあるならハッキリ言ったら？」

「……ない」

「あ、そう。じゃ出てっつてよ。用はないんでしょ？」

来客用の椅子に我が物顔で座る矢沢遙香。女性にしてはややつり気味の目は剣呑さを帯びていた。

そんな敵意剥き出しの眼差しを、真つ向から受けとめているのか気付いてないのか、はたまた受け流しているのか、鬼島統はものともしない。だんまりを決め込んで、涼の方を凝視もとい観察している。

「なにコイツ？ リヨウ先生も何か言っつてやってよ」

「二人とも出て行きなさい。こんなところで時間を潰すな」

遙香は不満顔だ。統と同じ扱いであることが癪に障ったのだろう。しかし、涼に言わせればどちらも招かれざる客だ。本日の授業を終えて一息ついていいる真つ最中に入らずかと入り込んできた迷惑二人。自覚がないので余計に性質が悪い。

涼はカップを二つ取り出し、紅茶を淹れた。自分もずいぶん甘くなつたと思いつつも二人の前に置く。

「飲んだら帰りなさい」

「ちよつと聞いてよ先生」

まずお前が他人の話を聞け。涼の心中を余所に遙香は不満をぶちまける。やれ佐久間が最近つれないだの、クラスの顔ぶれが最悪だ

の、ありがちな愚痴だ。

「だいたい英語だけなんで成績でクラス分けしてんの？ 差別じゃん」

今年もやるのか英語選抜。懲りずにまた。意気込んでいた去年は結局、一人として名門大学に入ることができなかった。

ちなみに同年、音楽科では例年通り三名の学生が芸大に現役合格した。公立校にしてはなかなかの成績だ。無論、芸大だけが音楽家の目指す道ではないことは重々承知している。

だが、音楽科ばかり優遇されるにはされるだけの理由がある。

「Sクラスの連中は偉そうだし、マジム力つく」

「至って平凡な悩みで先生は安心したよ」

「他人事みたいに言わないでよ。ホント腹立つんだから。特にあのバスケ女！ 自分はスポーツも勉強もできまーす。人望もあってみんなに好かれてまーす。凡人とは違うんでーす、みたいな顔して！」

遙香は一気に紅茶を飲み干した。精神の安定。涼としては紅茶の効能が至急現れることを願うばかりだ。

「あーあ、あたし音楽科に入れば良かった」

「まず楽譜を読むようになってから、そういう発言をするといい」  
それでも遙香の音楽の成績に、涼は「五」を入れた。授業態度と歌の試験から公正に判断した結果だ。才能があるのか遙香は、二年の三学期に巻き舌を習得したのだ。クラスではただ一人。さらに最終試験課題はイタリアの恋歌だった。恋愛の前に分別を無くし、とにかく情熱的に暴走する歌。天はあくまでも遙香の味方だった。

(その七) 気を配り過ぎてもしけません

しかし、いくら巻き舌ができて多少歌唱力があっても、本格的に音楽の道に入るには到底及ばない。

「どうしても入りたいと言つのなら、まず親御さんに相談しなさい。言っておくが、ものすごく金かかるぞ。金を掛けたところで成功する保証はどこにもない。才能があつても一生理もれたままの音楽家だつて珍しくない業界だ」

「それつて反対つてこと？」

「私は止めやしないよ。君の人生だ。私には責任もなければ金を出してやる義務もない。君が説得すべきなのは親御さんだ。『数百万円をドブに捨てる覚悟で私に投資してください』と頭を下げるんだね」

突き放した物言いに遙香は眉を寄せた。

「……先生だつて、どーせ親から金出してもらつたんでしょ」

音楽科に限らず世の大半の大学生は親の金で大学に通っている。

それが普通なのだ。投資者がいなければ諦めて就職するしかない。

「いや、私は」

反射的に言いかけて涼は我に返つた。生徒相手に何を言つつもりなのだろうか自分は。

「何よ？」

「無利息で借金して通つたよ。就職したら分割払いで返す約束で」

「えー、じゃあ毎月親に金払つてんの？」

親じゃないけどな。涼はあえて訂正しなかった。わざわざ不幸自慢をする必要はない。

「借りたものを返さなければ、ただの泥棒です」

「娘から金取るの？ うつわ、ケチだねー」

遙香はそう言うが、太っ腹な方だと涼は思う。いきなり現れた娘の手に三百万円を押しつける父親だ。しかも向こうは、返さなくて

いい、とにかく懐に納めて帰ってくれ、とまで言ってくれた。

涼は顔を顰めた。我ながら嫌なことを思い出したものだ。

「そろそろ面談の時間も終わるよ。帰りなさい」

「あ、ほんとだ」

時計を確認するなり、遙香はあっさりと席を立った。おざなりに

「ご馳走様」とだけ言って退室。相も変わらず台風のような女だ。

涼は一人分のカップを片付けた。

「で、君は何の用だ。暇潰しじゃないんだろ？」

紅茶と睨めっこしていた統が顔を上げる。感情の読めない表情だが、さすがに涼は察した。彼は、最初から二人きりになるのを待っていたのだ。

(その七) 気を配り過ぎてもいけません(後書き)

拙作をお読みくださりありがとうございます。

おかげ様でどういふわけか総合評価が1000ポイントを突破いたしました。その記念にただ今アンケートを実施しております。よろしければワンクリック。よろしくなくてもワンクリックしていただけると大変嬉しいです。

何はともあれ、今後ともよろしくお願いいたします。

(その八) 自分が動けなくなります

「たしかに私は君の兄上殿と面識はある。仮にも一年間担当した生徒だからね。でもそれだけだ」

言い訳めいている。涼は我ながら不思議に思った。何故統に弁解しているのだろうか。後ろめたいことなど、何一つとしてないはずなのに。

統はおもむろに口を開いた。

「来週、誕生日」

「君の？」

返答は首を横に振る動作だった。涼は卓上カレンダーに目をやった。

「来週のいつに誰が誕生日を迎えるんだって？」

「土曜、兄貴、十八になる」

なんだ。ちゃんと意志疎通ができるじゃないか。

妙な達成感が過ぎ去れば、後に残るのはその意味。統の兄が来週の土曜に十八歳の誕生日を迎える。鬼島統の兄が。彼は三兄弟の次男。つまり長男

「さようでございますか」

涼はそう言う他なかった。鬼島天下が誕生日を迎えようと、十八になるのと一介の音楽教師に過ぎない涼には関係がない。

「親父、呼んだ。五人で、誕生日。でも兄貴、断った」

涼は軽く目を見開いた。天下の父　鬼島氏は事なかれ主義だと思っていた。記憶を失った妻にこれから先も付き合い続けるものとばかり。現に彼は二年以上も現状維持を貫いていた。それが一体どういう風の吹き回しだろう。

五人で誕生日を祝うからには、細君に天下のことを話さなければならぬ。全く記憶にない息子のことを。天下の性格なら断るのも当然だ。内情はどうであれ、平穏な家庭に余計な波風を立てること

になる。

しかし逆を言えば、一波乱起こるのを知りつつも鬼島氏は天下を呼んだということだ。そこに以前とは違う鬼島氏の決意を涼は感じた。

「おおよその事情はわかった。でも、そこでどうして私が出てくるんだ？」

統は首を小さく傾けた。

「親父、言ってた。兄貴、先生、好き」

涼は危うくマグカップを落としそうになった。動揺を悟られまいと強く握る。潤したばかりの喉が急速に渴いていくのを感じた。

「……君の兄上が、私のことを？」

やっとの思いで絞り出した声はかすれていた。心臓が一際大きく鼓動を刻んでいる。統は平然と頷いた。

「いい先生、だって」

冷水を浴びせられた気分だ。一気に冷えて、反動で熱くなる。何を勘違いしていたのだろう。自分が恥ずかしかった。

自分は教師で六歳年上なのだ。

高校生が恋情を抱く対象であるなんて夢にも思われない。

現実に立ち返った瞬間、涼は冷静になった。微笑さえ浮かべて肩を竦めて見せる。

「なるほど。他力本願なところは相変わらずみたいだね」

こちらを伺う統に紅茶のお代わりを訊ねた。それが相談に乗るという了承の意を示していることを、彼は的確に察したようだ。能面のような顔に僅かだが安堵の色が浮かんだ。

その表情に天下の面影を見出し、涼は目を逸らした。

(その八) 自分が動けなくなります(後書き)

ただ今やらせていただいております1000ポイント御礼アンケートですが、六月で×切らせていただきます。一位は無論、二位…できれば三位までは、なんとか書かせていただこうかと思っております。

(その九) 白ヤギさんからお届けものです

久しぶりに教師らしく生徒の話聞き、教師風アドバイスを伝授し、最後は教師っぽく鬼島統を見送った翌日。

出勤早々、涼は卒倒しそうになった。

音楽科準備室の一角にある渡辺涼専用机。洗った後、伏せておいた涼専用カップ。その隣にあるマグカップを穴が開くほど凝視する。黒一色の飾り気皆無なマグカップは、涼のものではなかった。来客用の予備カップとも違う。見覚えすらない。

しかし、こんな馬鹿げた真似をする人物に心辺りはあった。ついでに、その意図も。

(最近は大人数しくしてると思ってたら……っ！)

マグカップを掴む手が小刻みに震える。油断大敵とはこのことだ。奴は、鬼島統の兄だ。よもや誕生日の件は口には出すまいが、統なら昨日紅茶をご馳走になったことぐらいなら言うだろう。もしくは遙香から聞いたのかもしれない。

いずれにせよ、鬼島天下は自分が一度も出されたことのない紅茶を、他の生徒が飲んだことを知って、黙っているような奴ではなかった。それはこの半年で身に染みてわかっている。

だからといってここまでやるか、普通。

涼は黒のマグカップを前に頭を抱え込んだ。

久しぶりに兄貴らしく弟と下校し、兄貴風を吹かして学校生活のアドバイスを授け、最後は兄貴っぽく爽やかに別れた翌日。

登校早々、天下は朝練の前に音楽科職員室に立ち寄った。

午前七時前。しかし音楽科の生徒は既に限りあるレッスンルームを予約し、練習に励んでいる。そのため、監督する立場にある音楽科教師も学校に来ている。もしかしくとも登校時刻が一番早い

は音楽科だ。

一昨年普通科の音楽を担当していた音楽科主任に挨拶。当たり前障りのない話をし、目が離れた隙に涼の机にコップを置く。

ささやかな達成感に浸りながら弓道場へ足を運ぶ。七時十五分を過ぎた時点で練習を始めていたのは天下ただ一人。それが部活動と専攻生の差だった。

八時二十分に練習を終えて弓道場を後にする。

中庭を通る際に鑑賞室を覗き込んだが、涼はいなかった。職員会議にでも出ているのだろう。階段を上り三年一組の教室へ。クラスメートには軽く手を上げて挨拶。廊下側一番後ろの机に鞆を置くこうとして気付く。

今朝、準備室に置いてきたばかりのマグカップが返却されていたのだ。早々にバレたようだ。涼の性格ならば容赦なく突っ返して行くことも、天下が受け取らないことを見越していない間に机に置くことも、予想の範囲内だった。それで天下には十分だったのだ。

机に置かれた黒のマグカップは、音楽科教師の涼がわざわざ普通科の教室に立ち寄り、天下の机を探してくれた証だった。

子供染みているのは重々承知だ。それでも、天下は嬉しかった。母親に構ってほしいがためにわざと困らせる子供の心境に似ている。マグカップを持ち上げ、その下に挟んであった紙を手取る。青いメモには滑らかな文字が書かれていた。間違いなく涼の筆跡で「*sciocco*」と。

英語ではない。では何語だろう。クラシック音楽に関わる外国語は多過ぎる。大まかに分類するだけでも三つ。クラシック演奏家の本場はドイツ。歌劇ならイタリア。理論ならフランス。こんな具合だ。

しかし、どんなに難解であろうとも涼からの課題だ。それと、初めてもらった手紙でもある。天下は機嫌よくポケットに入れた。

「おはよう鬼島君」

挨拶を返そうと口を開き、天下はふと香織の手にある電子辞書に

目を留めた。今日は一限目から英語講読だ。クラス全員の前で読まれる可能性を考えれば予習は当然。最低でも辞書で発音を確認しておくのが学生というものだ。

そして英語Sクラスの香織ならば当日に慌てて予習をする必要はあまりない。

「なあ、それ借りてもいいか？」

香織が差し出した電子辞書を受け取り、開く。やはり最新式電子辞書。一般高校生には必要のない機能まで備わっている。その余計な機能に天下は感謝した。

ドイツ、イタリア、スペイン、フランス。よりどりみどりでないか。手早く調べれば意外にあっさりと解読できた。解答はともかく、涼らしい言葉に天下は苦笑した。

「どうしたの？」

「ちよつとな。ありがとな。助かった」

礼を言って返す。香織は小首を傾げながらも深くは追及してこなかった。その前に担任が教室に入ってきたからだ。生徒達は慌てて着席。日直が号令をする。

HRの真つ最中、天下はこの手紙になんと返すべきか、それは幸せな気分を考えていた。

(その十) 黒ヤギさんはすっかりいただきました

「生徒に向かつて『馬鹿』はないと思います」

と書かれたノートの切れ端を、涼は手の中で握り潰した。

今朝返却したはずのマグカップは涼の机に舞い戻っていた。無論、この状況を予測できなかったわけではない。そもそも天下が一、二度冷たくあしらう程度で追い払えるような奴なら話は早いのだ。

しかし実際は、マグカップを突っ返されてもめげないどころか、嬉々として返信してくる始末。こうなってしまうと涼も退けなくなる。何が何でもマグカップを返却し、天下の淡い期待を打ち砕かなくては。

涼は机に置いたメモの束から一枚引き抜き、ボールペンを手に取った。イタリア語では甘かったか。

「新しいコップですね。買ったんですか？」

「いいえ」

手元を覗き込んできた同僚に即答。

「忘れ物です」

「Narr」

と書かれたメモを天下は摘んだ。あまりにも予想通りで頬が緩む。嫌なら無視すればいいのに。律儀に返信してくるのはもはや性根と言っている。天下は涼の性格を理解していた。

押せば押し返す。引けば引き返す。無かったことにして流すことができないのだ。そのくせ、酷く臆病で自分から動くこともできない。

残念ながら生徒と恋愛する程後先考えない人ではないが、こちらがアプローチする度に毎回突っぱねてくる。毅然と拒むのだから意思は強い方と言っている。しかし恋愛の場合は、無関心であること

が一番効果的に拒む手段なのだ。こうしてマグカップを返したりせずに捨ててしまえばいい。涼にはそれができなかった。

拒絶であれ一々反応を示すからかえって天下は煽られるのだ。少しでも関心を引きたくて、こっちを見てほしくて、んでもって思惑通り向いてくれたら嬉しくて。

馬鹿だなあ。まさに涼の言う通りだ。子供染みて、馬鹿みたいだ。涼も、自分も。

でも、悪くはなかった。

「何それ。課題？」

「いや」

手元を覗き込む香織。咄嗟に天下は青いメモを裏返した。

「手紙、みたいなもん」

(その十一) エンドレスなのです

不毛さに気付いたのは土曜の朝になってからだだった。

いつもの通りいつの間にか専用机に鎮座していたマグカップと「減るわけでもないし、置いとけよ」と綴られた手紙。怒りにまかせてメモを取り「Che pale!」と書きなぐった時にふと涼は我に返った。

おかしくないか。

何故音楽科教師である自分が他学科の六歳下の生徒相手に、イタリア語で「いい加減にしろ」などと書かねばならないのだ。そもそも、だ。

(これじゃあまるで文通……っ！)

素っ気なく突き放すつもりが、手紙のやり取りをしているではないか。まったくもって意味がなかった。

涼は書きかけのメモをゴミ箱に放った。今考えるべき事はこのマグカップを返却する術ではない。いかにして天下に実家へ帰らせるか、だ。彼の誕生日は今日だ。本人にアプローチをかけることなく当日を迎える羽目になっている。この件に関して逃げ腰になっているのは否めなかった。涼は深々とため息をついた。

苦手意識を持っているのは、何も鬼島天下という生徒に対してだけではない。

(だから嫌なんだ)

涼は卓上カレンダーを睨み、楽譜を手にとった。弓道部の練習は今日の午前中。合唱部も同じく。終わるのはたぶん、合唱部の方が先だ。

(なんで私がこんなことを)

内心では愚痴のオンパレード。それでも頭は冷静に、嫌になるくらい計算高く策を練っている。簡単なことだ。帰らざるを得ない状況を作り出せばいいのだ。突き放している振りをしつつも家族想い

彼なら、ついている隙はいくらでもあった。正確には、涼には思いつくことができた。現に天下を帰らせる案は既に出来上がっていた。そんな自分が、どうしても好きになれなかった。

可哀想に。

春の訪れと共に去った教師の声が耳に残る。仮にあれを勝負として考えるのならば、敗者は彼女であつたはず。しかし、彼女は満足そうに微笑んだ。微塵の悔しさも感じさせずに言つて、無責任に去つた。憐れむように、どこか優越感も含んで。

可哀想に。自分を守るために他人を攻撃せずにはいられない。これから先、あなたはずっとそうやって生きていくんですね。

数ヶ月が経過した今なお、涼はその言葉を否定することも認めること出来なかった。

(その十二) 際限がないのです

待ち伏せする必要はなかった。招かれざる客は練習が終わるなり当然の如く音楽科準備室に来訪し、紅茶をせびつてきたのだ。いつにない図々しさは今日が誕生日であるが故のものだろう。特別な日だから多少の我儘も通るのではないかとどこか期待している。その気持ちは理解できなくもなかった。

わからなくもない。しかし、だ。

許可なく入室するなり「おい俺のカップはどこだよ」は許容できるものではなかった。涼は読みかけの音楽理論書を閉じた。

「色々言いたいことはあるけど、とりあえず敬語を使いなさい用もないのに入ってくるな帰りなさい」

「俺のマグカップはどちらにございますか？」

とりあえず最初の項目だけは従ったらしい。天下は残りの勧告を無視して、来客用の椅子に腰かけた。制服を程良く着崩した様相は三年生なればこそそのものだ。涼は時の経過を感じずにはいられなかった。

もう十八なのだ。

自分の行く末を考え始め、漠然とだが方角を決めて歩むべき道を選ぶ。後ろを振り返る暇もなく、ただひたすらに進む。そんな歳に彼はなった。

いつの間にか大人びてきた天下の横顔から涼は目を逸らした。

「捨てたよ。一週間経っても持ち主が現れなかったから仕方ない」

余所に追いやられたマグカップ。どこにも行く宛てのないもの。同じなのかもしれない。結局、自分は引き取り手のつかないまま十人を迎えた。置いてかれて、そのままだ。

「減るもんでもねえのに」

さほど気落ちした素振りも見せず、天下は不満を口にした。

「まさかそれ、本気で言っていないよね？」

教師の個人机に生徒のマイカップ。そんなものを目にした人間が何を思うか。想像できないのなら佐久間と同レベルだ。

「先生つて結構神経質だよな」

「用心深いんだ。特に君に対しては」

「なるほど俺は特別か。光栄だな」

涼は鈍痛のする額に右手を当てた。いかん。生徒に振り回されてどうする。

「用がそれだけなら帰りなさい。学校から徒歩十分のご実家に」

ああまたストレートに言ってしまった。後悔しても遅かった。だらしく背もたれに寄り掛かっていた天下が身を起こした。

「……統が言ったのか？」

流石に全国模試三十四位は鋭かった。涼は誤魔化すという選択肢を捨てた。捻りを利かすなど、そもそも自分には無理な話だったのだ。

「年に一回の誕生日くらい家に帰ったらどうだ」

「あんたじゃなかったら『余計な世話だ』の一言で済ますところだな」

天下は首の関節を鳴らした。不機嫌な時にする癖だ。それも、いつになく不快に思っている時に。佐久間の話が出ると大概この癖が現れるのを涼は知っていた。つまり、家族のことは天下にとって他人においそれと触れられて許せるものではない、ということだ。

(その十三)どこかで区切りはつけましょう

「今更帰ってどうすんだよ。お互い気まずいだけだろ」

彼の母の記憶は戻っていない。鬼島氏が細君にどんな説得をしたのかは分からないが、彼女にしてみれば天下は突如として現れた自分の息子だ。戸惑うのは必至。だからこそ、三年近くも鬼島家では天下の存在は抹消されていたのだ。

「家族サービスだと思え。年に一度の誕生日じゃないか」

「年に一度の誕生日くらい好き勝手にやらせるよ」

普段から好き勝手にやってる奴が投げやりに言い放った。だが、三年近くも放置されていたのは天下だ。今更という気持ちは理解できなくもない。歩み寄るのなら、最初からそうするべきだったのだ。なまじ瘡蓋が出来始めている頃になって、袂り返そうとするから傷も悪化する。中途半端。涼が最も嫌うものだ。

「そうはいかない。鬼島統君は君の帰りを今や遅しと待ちわびている」

「知るかよ」

「自宅傍の公園で」

髪を掻きあげた状態のまま、天下は硬直した。外は雨。時計を見やれば昼の一時を回ろうとしていた。

「いつから?」

「十一時。ちなみに傘は差さないように言っておいた」

天下は顔を顰めてケータイを取り出した。

「電源は切っておけとアドバイスもした」

涼の言葉に盛大な舌打ちをしてケータイをしまう。怒りを通り越して呆れ声で「そこまでやるか」と呟いた。統の性格を天下は熟知している。頭は悪くはないが愚直なほど素直。雨が降ろうと風が吹こうと兄が来ると信じて一日くらいなら平然と待ち続ける。それはまるで忠犬八子公の如く。

「いいのか。君が行かないと弟君はあの公園の銅像になりかねないぞ」

天下の反応はない。涼は深々とため息をついた。

「別に今日から一緒に住めとまでは言っていない。たったの数時間だ。一緒に食事して優等生面してご機嫌を取ればいい。それくらいできるだろ？」

自分で言っておきながら理不尽な話だと涼は思った。似非優等生の天下ならばできないことではない。だが、この上もなく面倒だ。鬼島氏が三年前に生まれた歪みから目を背けた代償の大半を、天下が担おうとしている。

「俺はこのままでも困らねえよ」

「高校に通わせてもらっている。一人暮らしの費用も、月々の小遣いも貰っている。それでも自分は鬼島家とは関係ない？」

天下はやや恨みがまじげな眼差しを返してきた。大人の庇護を受けずに学校に通い生活を成り立たせるなんて未成年である以上、難しいことだ。

「十八だろ？ 大人になれ」

「散々ガキ扱いしてきたあんたに言われてもな」

「そうやっていちいち拗ねる所が子供なんだ」

「じゃあ俺が大人になったら、先生も少しは変えるよ」

(その十四) 時には譲歩も必要です。

何故そうなる。涼に反論の余地を与える間もなく、天下は言い募った。

「俺がガキで生徒だから相手にしないんだろ？俺は十八になる。自動車免許だつて取れるし、結婚だつてできる歳だ」

「相変わらず学生だけどね」

「でもセミ・アダルトではあるわけだ。それなりの対応があるんじゃないのか？」

転んでもタダでは起きないその精神、尊敬に値する。が、当事者としては迷惑なだけだ。そもそも鬼島家の問題なのに何故自分が改善を求められているのだろうか。

「具体的には？」

「先生の家に行きたい」

論外だ。黙りこくった涼の心情を察したのか、天下は肩を竦めた。「琴音さんも一緒にいい。俺としては二人つきりで会いたいけど、いきなりそれはマズイだろ。少しずつ手順を踏んでだな。とりあえず最初は控えめにするべきだ」

手順も何もねえよ。生徒と教師で終わりだ。喉まで出かかった言葉は涼は辛うじて飲み込んだ。琴音は天下のことを気に入っているようだし、仮に誰かに見られても「琴音という共通の友人がいる」で言い訳は立つ。

なんか最近危機察知能力が低下しているような気もしくもなくもないが、問題は見当たらなかった。あくまでも、交換条件ということにしておけばいい。

「まあ、考えておくよ」

「約束だからな」

目を輝かせる天下の顔が直視できなかった。なけなしの良心を痛ませている涼を余所に天下は重い腰を上げた。

「じゃ、言ってくるなあ」

立ち上がって何を思ったのか、涼に視線を寄こす。期待に満ちたその眼差しに耐えきれず、涼は「今度は何だ」と訊ねた。

「今日、俺の誕生日なんだけど」

「私からプレゼントなんて期待する方が間違ってる」

「ンなことはわかってる」

それでも天下は涼をじっと見つめている。涼は最大限の譲歩をした。厄日か今日は。

「……お誕生日おめでとう」

おざなりな、社交辞令にもなりえない言葉にしかし、天下は頬を緩ませた。涼の思惑通りに動いている事を知りながら、部屋を出ていく足取りも軽かった。

逆に、一人準備室に取り残された涼の胸は重かった。誕生日すらち喜ぶべきものと信じて疑わない呑気さが少し、腹立たしい。

ほれみる。涼は優越感とも劣等感ともどちらともとれない感情を抱いた。全国模試三十四位でさえ知らないことだってあるのだ。思い至らないのだろう。天下にとって十八歳になるということは新しい世界が広がることなのだ。しかし涼は違った。

涼にとっての十八は、児童養護施設を出ていく歳だ。たった一人で社会に放り出される歳だった。

**（その十四）時には譲歩も必要です。（後書き）**

ようやく一章終了です。このペースだと完結するのいつなのでしよう？ 当人にもわかりません。

またまた長期（約一ヶ月）更新停止の後、リクエストいただきました番外編を公開。そして二章突入……する予定です（予定は未定）。  
カタツムリ更新ですみません。

【番外編】恋せよ大人、それなりに（そのいち）（前書き）

アンケート一位『そういえば修学旅行はどうなった？』  
大変大変遅くなりましたが、更新を開始致します。とはいえ、  
カタツムリ更新ですので気長にお待ちくださいませ。

【番外編】恋せよ大人、それなりに（そのいち）

二日目までは良かったのだ。

初日は他学科とは別行動で異人館の見学。西洋文化を掠めただけで音楽にどう影響を及ぼすことができるのかは甚だ疑問だが、普通科と別行動という点に於いては万々歳だった。二日目の有名テーマパークの見学だって、まあ悪くはなかった。学校行事特有の制約をかいくぐり、生徒たちは思い思いに（班行動など無視して）楽しんでいるように見えた。

そして迎えた三日目は、古の都を班別に見学。涼は緊急要因として宿泊先のホテルに待機していた。はぐれたとしても日本語圏内、高校生ならばケータイで連絡を取り合うなり、道行く人に訊ねるなり対処の仕様はいくらでもあった。普通科の女子生徒が一人、気分が悪くなったとかでホテルで休んだ件以外特にトラブルもなく、つつがなく終了。ホテルで食事を取り、班ごとに割り振った部屋の鍵を渡せば、あとは十時に点呼を取るだけだった。そう、ここまでは良かったのだ。

不穏な空気を感じ取ったのは食事中だった。普通科の教師陣がどうもよそよそしい、というより怪しかった。始終こちらを伺っては忍び笑いを漏らす。

涼は箸を揃えて戻した。隣で茶をすすっていた百瀬恵理に何の気なしに訊ねる。

「百瀬先生、何かあったんですかね？」

「え！？」

大仰なりアクション。恵理は激しく首を横に振った。

「いえ何でもありません何にもありません！ ええ本当につ！」

涼は目を眇めた。絶対何かある。が、生徒たちもいる手前、事を荒立てるのは好ましくない。

「先に部屋行きます。二〇九号室ですよね？」

「え、あ……はい」

追及は後にしよう。涼は席を立って部屋に向かった。しかし、この時既に手遅れだったのだ。

涼はただっ広い部屋の玄関で立ち尽くした。部屋番号を確認。二〇九号室。渡された鍵と同じだ。だからここは、涼と恵理が泊まる部屋のはずである。

「なんで？」

と、ベッドの上でくつろいでいた矢沢遥香が呆然と呟く。

「なんで先生がここにくるんですか？」

同感だ。涼は遥香の隣に腰掛けている佐久間に冷たい一瞥を寄せた。食事中に見かけないと思いきや、性懲りもなく。

「わ、私は、ここに泊まるようにと言われたんですけど」

佐久間はしどろもどろで弁明。スペアキーを証拠として提出してきた。二〇九。逆さまにしても裏返しても二〇九。この部屋で間違いない。

どうということだろう。

涼は腕を組んで天井を仰いだ。

何故迷惑カツプルが自分の泊まるべき部屋を占拠しているのだろうか。だいたいどうして京都に来てまでこの連中に振り回されなければならんだ。やっぱり神社なんかでお祓いでもしてもらおうか。よく考えたらここ本場だしな。

「あの……リヨウ先生？」

あーでも、明日は帰るだけだ。お祓いどころか神社仏閣に参拝する時間的余裕さえ、あるかどうか怪しい。

「先生は、どうしてここに？」

困惑を露わにする佐久間。その呑気な面に拳を叩き込んでやりたい衝動を涼は辛うじて押し止めた。何故こんな展開になったのかが判明しただけに苛立ちはひとしおだった。

(……ハメられた)

つまりは、そういうことだった。おそらく教師陣に悪意はない。面白がってはいただろうが、あくまでも善意でやったことなのだろう。職場恋愛にもかかわらず担当する教科が全く違うために普段接点を持たないカップル 誰と誰のことだかはあえて言いたくはなかった。屈辱的にも程がある に、修学旅行先でのちょっとしたサプライズ。題をつけるならさしずめ「あらびっくり、最終日にらぶらぶ同室大作戦」といったところだろう。

「あの……」

まだ何事かをほざこうとする佐久間の顔面に涼は枕を投げつけた。「すみませんが、しばらく口を開かないでいただけませんか？ 今、あなたの声ほど私を不快にさせるものはないので」

「ちよつと何よ、それ！」

「うるさいやかましいとにかく喋るな」

いきり立った遙香をも黙らせてから涼は部屋を見渡し ツインのベッドが完全にくつついているのが視界に入るなり、とてつもない脱力感に襲われた。

小さな親切、大きな迷惑。

(最悪だ)

涼は深々と、三日間で一番大きいため息を吐いた。

【番外編】恋せよ大人、それなりに（そのに）

普段の職場である学校を離れ、生徒達や一部の教師陣が羽目を外していても、あの人は全く変わらぬ。黒のスーツにネクタイ。いつもの教師スタイル。そっぴりや私服姿を見たことねえな、と今更ながら気づく。スカートもだ。惜しいと思うのと同時に実にあの人らしいとも思った。

渡辺リヨウ先生もとい渡辺涼の第一印象を端的に表すのなら「性を感じさせない」だ。

男性的な乱暴さがなく、かといって女性的な感受性にも乏しい。化粧つきの顔。おそらく一度も染めたことのないであろう黒髪。当たり前のように毎日身にまとうパンツスーツ。事務的に、ひたすらに淡々と授業を行う様子は、やる気がないと言うよりも、機械的と言った方が適当かもしれない。

券売機の音声ガイドに愛想がないのと同じことだ。悪意があるわけでも怠惰なわけでもなく、ただそういう風にできているだけのこと。悪いことではない。社会という共同体の中では生きにくい性格だとは思つが。

音楽科の一教師に意識を向けた発端は、そんな程度の興味からだろう。

しかし、注視すればおのずと見えてくるものがある。早朝から授業のリハーサルを行う丁寧さとか。それでも本番にはあんちよこノートに目をやってしまう自信の無さとか。厳重に管理しているはずのスタンウェイのピアノを使っている練習中、不意に人差し指だけで適当に曲（しかも、なんのオペラかと思つてよくよく聴いてみれば『刑事コロンボ』のテーマだ。気づいた時には吹き出しそうになった）を弾く遊び心とか。

鉄面皮から時折零れ落ちる「女性らしさ」の一つ一つが、たまらなかつた。

渡辺涼自身が自分の女性性に気づいていないことが、さらなる拍車をかけた。悪く言えば油断しているのだ。自分が異性にそういう対象として見られることはないと思いつけている。

だから生徒から好かれるなんて夢にも思っていない。実際に告白されても本気だと思わない。同情だけで、告白した生徒を慰めるような真似ができるのだ。

（甘いんだよ、先生）

知らないだろうが、あなたは自分が思っている以上に女で、子供としか思っていない「可愛い生徒」は、それでも男なんだ。六年上の教師にだって一丁前に想いを寄せる男なんだ。頼むから気づけよ、いい加減。

人気がないロビーで、置き去りにされたガキみたいにソファに座るな。取り繕っているつもりだろうが、気落ちしているのが顔に出てる。いかにも何かありましたってのがバレバレだ。隙を見せるな。

（俺はちゃんと言ったからな）

警告はした。覚悟しろとの意味合いも込めて「逃げんなよ」とも言った。なのにたった二日間、普通科と音楽科で全く行動が違ったからといって油断するなんて、不注意にも程がある。ちゃんと警戒しろよ。こっちはずっと隙を伺ってた。付け込まれるぞ。

（あんたが悪い）

責任転嫁をしつつ、元「可愛い生徒」もとい鬼島天下は渡辺涼の隣に腰を下ろした。

二 限目（その一）お久しぶりなのです

只今電話に出ることができません。ピーという音が鳴りましたら、お名前とご用件をお話してください。

『やつほー。涼ちゃん元気？』

うららかな日曜日の昼下がりをぶち壊す声に、涼は皿をゆすいでいた手を止めた。着歴を見るまでもない。この底無しに明るい声の心当たりはたった一人。

『いるんでしょ？ 電話出てよ』

三月に電話して以来だから、かれこれ二ヶ月近く会話していない。特に用もなかったから。

『すーずーちゃん』

間延びした呼び方をするな。文句は内心に留めて涼は洗い物を再開した。

『居留守はないでしょー』

正確に言えば居留守ではない。只今電話に出ることができないだけだ。

『リヨウちゃん、渡辺リヨウせん、ブツツ。』

小馬鹿にした呼称を言っている真っ最中に容赦なく録音は終了した。余韻代わりにプー、プー、プー、となんとも間の抜けた音を、打ち消すかのように間髪入れず再びコール音。無視を決め込んでいたら、これもまた留守電に切り替わる。

『ちよつと！ 録音時間が短いじゃないっ！』

「いや私に言われても」

すすいだ皿は他の食器と一緒に自然乾燥を待つ。ついでに布巾も洗っておこうかとのんきに考えていると、琴音の方も何か企んだようだ。

『いーわよ。涼がそのつもりならこっちだって考えつてもんがあるわ』

「あーはいはい」

『歌ってやるわ。熱唱してやる。院生の実力ナメないでよ。教授にだってこの前「感情表現が豊かだ」って誉められたんだから』

「ふーん」

『聞いて驚きなさい。「魔笛」よ、しかも夜の女王』

「げ……っ！」

涼は思わず喉を潰したような声を上げた。

モーツァルト作曲『魔笛』、しかも夜の女王。甲高い声が紡ぐドイツ語のアリアはあまりにも有名で、それはもう……ホールで聴くなら魅力的だが、近くで聞いたら耳を塞ぎたくなるようなシロモノだ。なにぶん高音域のアリアなのだ。

手早く洗い物を終えて渋々受話器を持ち上げる。

「やめてそれだけは」

『あ、やつぱりいた』

榊琴音は責め口調だった。

『なんで出なかったのよ』

「どうして電話してくるんだ」

電話の向こうで琴音が鼻白んだのが、気配でわかった。

『どうして……涼に用があるからに決まってるじゃない』

「しかし私は君に用はなかった。だから出なかった」

『冷たいわね。それが親友に言う台詞？』

「私の薄情さを責める前に、用件を切り出すべきだと思つよ  
否定するのも億劫なので、涼は話を促した。

『用件は単純明快。今から遊びに行ってもいいかなってこと』

別に、急いでやらなければならぬ仕事があるわけではない。合

唱部の練習だつてない。月曜からの授業の準備も終わっている。特に予定のない、久しぶりの休日　とくれば涼の返答は決まっている。

「よくない」

「なんでよ。どうせ暇なんですよ」

「煩わしいのは平日だけで十分だ」

「あら涼ちゃん、良かったわねー、相手が私で。普通の人だったら今の発言で友人やめるわよ」

言外に邪魔だと告げられてもめげない辺り、琴音もふてぶてしい。どうして自分の周りはこのよう人間ばかりなのだろう、と内心呟いてから、涼は気づいた。なんのことはない。琴音のように凶太い人間でなければ、自分とは付き合えないからだ。

「それにね、涼ちゃん」

タイミングを見計らったかのように軽やかなインターホンが鳴った。

「悪い、」

来客を理由に切電しようとした涼の耳に、わざとらしく甘えた声が囁いた。

「もう来ちゃった」

涼は何も言わずに受話器を叩きつけた。少しでもいい、電話の向こう側にいる　いや、今は扉の向こう側にいる琴音に一矢報いることができればそれでよかった。耳に悪いだの知ったことか。

執拗に鳴り続けるインターホンに、涼は頭を抱えなくなつた。

そして諦めて開けた扉の外で待っていたのが琴音一人ではなかつたことに、本当に頭を抱える羽目になつた。

## 二 限目（その一）お久しぶりなのです（後書き）

大変お久しぶりでございます。色々諸事情が重なりまして約三ヶ月半放置。いやはや申し訳ないの一言につきます。

更新頻度は相変わらずではありますが、何はともあれまずは本編。次に本編。とにかく本編を進めよう、ということ、とりあえず二章です。

番外編は章終了毎に更新予定です。

(その二)でも変わってないのです

「お久しぶりです、先生」

鬼島天下は優等生スマイルを炸裂させて挨拶した。いや、昨日会ったばかりだし、ここは学校じゃないし私の家だし、その前に実家はどうした君は昨日強制的に里帰りさせたはずだろ弟はどこいった。指摘すべき点が頭の中を右から左へとよぎった。

「まあまあ積もる話は中だね」

硬直していた涼の脇を至極自然な動作で琴音が横切る。

「狭くてピアノ一つない部屋だけど、くつろいでちょうだい。来客もないからスリッパもないのよ。ごめんなさいね。友達少ないから勝手知ったる我が家のごとく琴音は中へ踏み込み、天下に勧めた。天下も天下で「あ、お邪魔します」とか行儀良く言いながらも上がり込む。

「先生、扉閉めますよ」

涼は腕を引かれるまま自宅へ戻った。パタンと扉が閉まり、靴を脱いだ天下がりビングまでずかずかと進み、ちゃぶ台の前に座る。

「ほら涼も突っ立ってないで座って座って」

いつの間にか台所で茶を淹れた琴音が、三人分の湯呑みをちゃぶ台に置いた。涼は促されるまま天下の隣に腰を下ろし、茶を一すすり。

「ちよつと待て」

涼は湯呑みを置いた。

「なんで休日に二人揃って我が家に押し掛けてくるんだ」

「暇だから」

「約束しましたから」

すかさず琴音と天下が返答。二人揃って茶をすすり、まったりとくつろいだ。平穏な空気がこちらにまで漂ってきて流される。ともすれば、お茶請けのせんべいをかじりそうになって、涼は我に返っ

た。

「だからって昨日の今日で来るか普通？ 相手の都合ってものを考  
える」

「先生の都合に付き合ってたら百年経っても家には行けません」  
天下は見透かしたように目を眇めた。

「どうせ教師としての立場だの体面だの、いろいろ理屈こねあわせ  
て断るに決まってますから」

傍らの琴音がしきりに頷く。

「涼ちゃん、生徒との約束は守らなきゃ駄目よ」

「誰も守らないとは言っていない。私は『考える』と言ったんだ」

「やっぱりそうじゃねーか。どうせ明日俺が話を切り出したら『考  
えた結果やっぱり無理』とか言ってる断んだろ。見え見えなんだよ」

早々に優等生口調をかなぐり捨てて天下は悪態をついた。

「ほら見なさい。涼ちゃんのせいで、生徒が人間不信に陥った」

「なんで最終的に私が悪いことになるんだ」

涼は呟き、不意に手元の湯呑みを覗き込んだ。薄緑の鮮やかな色  
合い、豊潤な薫り。間違いない。戸棚の奥にしまっておいた銘茶だ。  
修学旅行の際に奮発して買った、百グラム千円の。

「へえ、涼にしてはまあまあ良いお茶持つてるじゃない」

勝手に淹れた上、神経を逆撫でする発言をかました張本人に、涼  
はとりあえず拳骨を一発喰らわせた。

「あんたらは一体何しに来たんだっ!？」

(その三) お構いなく、は社交辞令です

涙目で頭を押さえる琴音と、せんべいをかじっている天下は一樣にキョトンとした。

「何って……」

これまた二人揃って困惑気味に顔を見合わせる。

「初めてのお宅訪問」

「その付き添い」

涼は怒る気さえ湧かなくなった。堂々巡りだ。元より、一對二では分が悪い。

「先生、大丈夫か？」

頭痛の種に心配され、あまつさえ肩を軽く叩かれる。いつになく馴れ馴れしい仕草に対しても、曲がりなりにも一度約束してしまった手前、涼は文句を言えなかった。

「で、結局昨日はどうしたんだ」

「約束通り帰った。いたのは二、三時間くらいだが食事もしたし、思い出話もした。それなりに親睦は深めたんじゃないかねえのか？」

やや投げやりに言ってから、天下は何気なく付け足した。

「毎週日曜は向こうに泊まることになった。月曜の朝は自主練してっから」

涼は軽く目を見張った。学校に徒歩で通える距離に位置する実家から通った方が便利なのは間違いない。合理的で非常に天下らしい『名目』と言えた。全く交流のなかった三年を思えば、画期的な進歩であることに変わりはない。

「それは、」

良かったな。

反射的に口にした言葉が止まった。果たしてこれは天下にとって良いことなのか、涼には判断がつかなかった。天下は気ままな一人暮らしをそれなりに楽しんでいるようにも見えた。もともと自

立心のある学生だ。ある程度ならば自分の面倒を自分でみることのできる人間ならば、家族との同棲なんて煩わしいだけなのかも知れない。

「……お疲れ様」

「大したことねえよ」

天下はせんべいのかけらを口の中に放り込んだ。咀嚼すること僅か。不意に、思いついたように言った。

「一年の音楽の授業は月曜だったよな？」

「月曜の三、四限だ」

「ん。ならいい」

天下はこくと頷いた。どことなく満足げな表情だった。

「それがどうかしたか？」

「いや、別に」

明らかに何かありそうな様子を感じ取っていても、本人に否定されてしまえばそれ以上の追及はできなかった。傍から生温かい視線を送ってくる琴音に不快感を覚えていても、だ。

「どうせなら今日も家族団欒すればいいものを」

「冗談だろ。息が詰まる」

煩わしそうに首の後ろに手をやる天下。その態度も涼の気に障った。

「猫かぶりはお得意だろ？ 似非優等生」

言ってしまったから険があると思った。いきなり押し掛けられたことを差し引いても今のは失言だった。天下が軽く目を見張り、勝手に音楽雑誌を読んでいた琴音も顔を上げる。涼は二人と顔を合わせる事ができなかった。

いつになく神経質になっている自分を涼は自覚した。その原因が本当にしようもないことであることも。我ながら理不尽だ。よりもよって何も知らない、無関係な天下に八つ当たりするなんて。

「得意ですよ」

軽く笑みさえ含んで天下は涼の顔を覗き込んできた。

「でも落ち着かねえんだ。先生と一緒にの時とは違って」

大人顔負けの穏やかな表情を浮かべる天下に、涼は途方に暮れた。これではまるで自分が駄々をこねているみたいではないか。事実、子供なのは涼の方なのだ。

「はい、涼の負けー」

「だからなんで勝負になっっているんだ」

琴音の手から音楽雑誌を取り上げて、涼は立ち上がった。

「昼飯、もう食べた？」

半ば自棄気味に訊ねれば、目に見えて天下は顔を輝かせた。どこが大人だ。まだまだ子供じゃないか。

「私、鯖寿司がいいな」

「一人で銀座でも行つてなさい」

唇を尖らせる琴音は無視して、台所へ立つ。スパゲッティなら茹でるだけでいい。軽食程度で十分だと判断し、鍋に水を入れた。

やけに　そう、非常に嬉しそうに待つ天下の方はなるべく見ないようにした。

(その四) 三人だとよくこうなります

適当に作った昼食を三人でつついて、とりとめのない話を少々もつぱら近況報告だ。

天下は元よりお喋り好きというわけではないので、言葉少なではあったが、話を振れば英語強化クラスの件や、今月末に行く予定の球技大会のことをぼつぼつと語った。琴音はしきりに羨ましがり、高校時代を懐かしがってはいたが、涼はいまいち共感が出来なかった。高校時代の思い出が涼にはあまりなかった。普通に学校に通って、授業を受けて、放課後は音楽室でピアノを弾いたり、一人歌の練習していた。単調な生活の繰り返しだ。修学旅行も体育祭も文化祭も、涼にとってはただの面倒なイベントだった。記憶になんぞ残るわけがない。

(何考えてたっけ)

当時の自分が思い出せない。そもそも覚えていないのだから当然と言えば当然ではあったが。同じように高校生という時代を過ごしたはずなのに涼だけ希薄だった。そこに言いようのない隔たりを感じずにはいらなかった。

琴音の話題は主に教授の供として一ヶ月近くイタリアに滞在していたこと。土産のパルメザンチーズの塊を涼に渡しつつ、スカラ座の素晴らしさについて力説した。どうやら帰国の報告ついでに、わざわざ天下にメールを寄こして誘ったらしい。無論、渡りに船の状況に乗らない天下ではない。

「いつの間にそんな仲良くなっていたんだ」

呆れ口調で呟けば、琴音は意地悪く微笑んだ。

「あら、焼きもち？ 涼も意地張らないでメルアド交換すればいいじゃない」

「仲が良いのはいいことだ。どうかそのまま続けてください、二人で勝手に」

実際、天下と琴音は友好的な関係を築いているように見えた。二人で連絡を取り合って計画を立てて、最寄駅で待ち合わせして、涼の家に押し掛けてきた。茶を飲みながら、高校生活という共通の話題で盛り上がる。傍から見て仲が良いのはどちらか。考えるまでもなかった。きつかけは共通の知人。涼かもしれないが、今は天下と琴音だけで十分成り立っていた。

そう、仮に今ここで、自分が席を立つて離れたとしても、なんら支障のないくらい。

(馬鹿馬鹿しい)

涼は脳裏に浮かんだ負の感情を一蹴した。二人が仲良くしているからなんだというのだ。今日のように共謀されるのは正直困るが、それ以外の点においては自分が関知することではなかった。

気を取り直すつもりで食べ終わった皿を重ねた。当然の如く手を貸そうとする天下にそのまま座っているように促す。

「食うだけ食って放置、つてわけにもいかねえだろ」

「だからって私が出したものを片付けさせるわけにもいかないでしょうが。客らしく寛いでなさい」

やんわりと断わって、台所へ食器を運ぶ。なおも釈然としない天下に、涼は台布巾を絞って渡した。急に押し掛けてきた上にご馳走になった負い目を拭う程度の手伝いは、させてやる。何よりも、こちらの個人的事情により、天下を台所に立ち入らせたくはなかった。涼の思惑通り、手持無沙汰にならずに済んだ天下はちゃぶ台を拭き始めた。琴音も空になったせんべいの袋を捨てたりとささやかに手伝う。

不意に、涼はスポンジを泡立てる手を止めた。「この雑誌は……」

「あ、それ、このラックに入れとけばいいから」「そうですか」他愛のない会話を交わしつつ片付けをする二人がいるリビングと台所が酷く遠く感じた。

(その五) 思い描けることなら叶えられます

「あんまり褒められた態度じゃないわね」

と、琴音が柔らかく苦言を口にしたのは、天下が帰った後だった。解説書に目をやったまま涼は「何が」と気のない返事をした。

「突如襲撃してきた連中に茶を出してスパゲッティをご馳走してやったこと?」

「違うわよ」

「調子に乗った生徒が帰り際に『また来ます』なんて言うのを容認しろってことか。残念ながら立場上、それはできない」

「違うって」

「君のおかげで私の住所がバレた。もしかしたら、もう一度引越しをしなければならぬかもしれないね。人目を避けて、こそこそと」

「鬼島君はそんな馬鹿なことはいわよ」

薄く浮かべた笑みを琴音はすぐさま引つ込めた。涼が解説書をちやぶ台に叩きつけたからだ。無造作に、しかし明確な意思を込めて「教師に向かつて好きだと言ったり交際迫ったり、休日に家まで押し掛けてくるのは馬鹿げてないのか」

打って変わって神妙な顔になる琴音を、涼は睥睨した。苛立つているのは何も天下にだけではない。琴音が、子どもの暴走を止める立場にあるはずの大人が、一緒になって調子に乗っていることが許せなかった。

「……ちよつとはしゃいだのは認めるわ。ごめん」

琴音は素直に頭を下げた。が「でも」と言葉をつづけた。

「涼の態度もいけなかったと思うよ」

「だから私は」

「立場はわかってるよ。涼が自分の職に対して真剣に向き合っていることも、鬼島君のアプローチにほいほい応じられないことも、わ

かってるよ。でも、それにしても酷いと思う。期待させるだけさせておいて、いざとなったら一線を引くなんて」

「私はちゃんと断っているつもりだけど？」

どこぞの身勝手バカツプルと同じ轍を踏む気はなかった。だから天下に何度も何度も、それこそ言っている涼の耳にもタコができるくらい言った。自分は教師で、彼は生徒。そして生徒は対象外だと「今日だってあいつを家に上げるつもりなんてなかった。それを邪魔した張本人がどうして私を責めるんだ」

「そうね。私が間に入りさえしなければ、今日は絶対に鬼島君を入れなかったでしょうね」

琴音は伏目がちだった顔を上げて真っ直ぐにこちらを見た。

「でも来年だったら、どうしてた？」

咄嗟に涼は答えることができなかった。それが唐突な質問だったからか、答えにくい質問だったからか　おそらく両方だ。一ヶ月先のことすら思いやられるのに、一年先のことなんて、気の遠くなる遙か彼方。涼にできたことは馬鹿みたいに訊ね返すだけだ。

「来年？」

「今、高校三年生なんですってね。来年の今頃は立派な大学生よ。もう高校生でもなければ庇護すべき生徒でもなくなる。それで同じようにここにやってきたら、涼はどうするの？　もう対象外じゃなくなるのよ」

教師と生徒ではなくなる。考えたこともなかった。いや、あまりにも当然の結末だと涼が思い込んでいた為に、その先にまで考えが至らなかった。天下が卒業したら、もう高校に来なくなる。顔を合わせることもなくなる。自然にこの関係も断ち切られて終わると思つて疑つていなかった。

「私が酷いつて言ってるのはそういうことよ。自分の立場を盾にして、ていよくあしらうことが残酷以外の何だって言うの？　涼がそうだから、鬼島君は期待しちゃうんじゃない。実際に生徒と教師じゃなくなつた時、あなたなんて言うの？」

無論、涼の中に応じるといふ選択肢はなかった。仮に、天下が涼と同じ年で同じ教職に就く者だったとしても変わらないだろう。天下に落ち度がなくとも、涼にはどうしようもないくらいの負い目があるからだ。

仕方のないことだった。天下には曲がりなりに家族がいて、帰りを待つ人がいることも、対する涼には何もないことも。仕方のないことだと知っていても、虚無感や劣等感は広がるばかりだ。無理だった。どう考えても。

誰かの唯一になる自分が涼には思い描けなかった。

「さあね」

涼に限らず教師にとって、卒業は生徒との別れと終わりを意味する。だが、天下にとっては違ったのだ。近頃彼の態度が変わっていったのは受験生になったからでも自分の誕生日が近づいていたからでもない、短期決戦から長期戦へと切り替えたからだ。

涼は二月の出来事を思い出した。改めて交際の申し込みを断った時の天下。不敵で少しあくどい笑み。これから勝負を挑むかのように「諦めねえ」と言った時の表情を。

あの時から彼は腹を括っていたのかもしれない。

(その六)つまり、思い描けないことは叶えられないのです

どれだけ気分が最低でも月曜の朝は平等にやってくる。涼はいつも通り五時に起床し、身支度を整えて学校へ向かった。音楽室は既に朝の練習に励む音楽科の生徒達が占領。涼は教師の特権を最大限に活用して鑑賞室を貸し切りにした。

ピアノの練習も兼ねて、今日の三、四限で教える予定の歌の予行を少々。音楽科ならいざ知らず、普通科の生徒に教えるためにわざわざ練習までしているのは、涼くらいのもだった。

普通科にとつての音楽は、生活に彩りを添える教養程度に過ぎない。適当に、肩の力を抜いてやればいい、と新任の際に音楽科主任に言われたことが脳裏をよぎった。なるほど音楽科にしてみれば普通科の授業など「お遊び」に過ぎないのだろう。一つの見解ではあると涼も思う。

練習を終えたら朝の職員会議に出席。部活動誘期間の終了等の連絡事項が少々。中間試験とその後に行う三年生の三者面談。六月の中旬に行う球技大会。関係あるものからそうでないものまで議題は多かった。

「あの……渡辺先生」

ようやく解放されて音楽科準備室に戻ろうとしたところで涼は呼び止められた。

「先生のご専門は声楽ですよね？」

と、確認するのは体育教師の桜井美幸だった。今年是一年のクラスを受け持っている記憶している。歳は涼より少し上だが、まだ若手と呼べる部類には入るだろう。女子バスケット部の顧問だけはあって、すらりと背は高く、引き締まった身体つきをしていた。

「ええ、声楽のソプラノですが。それが何か？」

「ちよつとご相談がありました……」

美幸は人目を憚るように言葉を濁した。職員室では言いにくい話

まさかこの人まで生徒と恋愛してんじゃないだろうな、と涼はとんでもなく失礼な事を一瞬想像した。

「今日の二限なら担当授業はありませんが」

「じゃあ、すみませんが体育準備室まで来てくださいます？」

おざなりに「すみません」と付け足してはいるが、美幸の口ぶりは相談に乗る側の涼が棟の違う体育館まで足を運ぶのが当然と言わんばかりだった。些細なことではあるが、それだけでも涼のやる気は削がれていた。

「わかりました。では、また後で」

自分のことですら面倒を見切れないのに、なにゆえ他人の相談にまで乗らなければならぬのか。どいつもこいつも他力本願だ。

音楽科準備室に戻る間に、面倒事のない平穩無事な教師生活を思い描こうとして、やはりできなかった。夢想することさえ、涼にはできなかった。

(その七) 多感なお年頃なのです

体育館の隅に位置する準備室に足を踏み入れた瞬間、涼は来る場所を間違えたことを悟った。

準備室はその科を如実に表す。バスケットボールにテニスラケット、剥き出しのスコア表にホワイトボード。器具倉庫に近い部屋の中央には、申し訳程度にテーブルとパイプいすが設置されている。その、ろくに拭いてもいないテーブルを挟むようにして桜井美幸と向き合っていた生徒が、振り返った。

勝ち気な瞳とぶつかる。顧問と練習メニューが何かで相談していたのだらう。ちょうど桜井美幸と話していたバスケット部部长の石川香織は、突如乱入してきた涼に対して不快感を露わにしていた。

「何かご用ですか？」

この様子だと今年はまだ新人部員を獲得できなかったようだ。もともと、入学式後に勧誘活動ができたかできなかったかで部員数に変動が起きるかは甚だ怪しいところではあるが。

いずれにせよ、涼には関係のないことだった。

「お取り込み中でしたら出直しますが？」

香織の剣呑な質問は流して、涼は美幸に訊ねた。

「大丈夫です。ちょっと待っていただけますか？」

何も知らない美幸は快活に答える。そして香織からプリントを受け取り、

「確認しておくわ。ありがとう」

と、会話の終了を示した。役目もといこの場に居座る理由を失った香織は、心中はともかく 表面上は大人しく引き下がる。そうする他ない。

「では部活の時に」

「ええ、よろしく」

気分を害した部長に気づくこともなく、顧問は見送った。傍から

見れば何の変哲もない日常の一コマ。事情を知っていなければ。

涼は入学式の一件以来、自分が普通科 特に、運動部の生徒に嫌われていることを知っていた。そもそも普通科にとって、接点がありません。上に何をやっているのかよくわからないお坊ちゃんお嬢様連中がたむろする音楽科は、なんとなく敬遠する科ではあった。なまじ実情を知らないが故に、外部から講師を呼び、高価な楽器を使用する音楽科に比べ、普通科の扱いは不当なものであると不満は溜まる。それが露呈したのがあの勧誘騒動だと涼は考えている。

自分たちよりも優遇されている科を担当する鼻持ちならない教師。渡辺涼という教師に対する心証はさしずめそんな感じだろう。変に根深いため、連中の勘違いを正してやる気にもならない。勝手に誤解したまま卒業してくれ。どうせあと一年もない。

（頼まれたんだよ）

桜井先生だつて、別に部長の君を軽んじたわけじゃない。ただ面倒事を後輩教師に押し付けるところを生徒に見られたくないわけであつて。責めるべきは桜井美幸顧問であつて、自分じゃない。私は呼ばれたから来ただけだ。感謝されても疎まれる筋合いはない。

やたらと恨みがましげな視線に対して、山ほど弁明したいことはあつたが、全て声にはならなかった。あまりにも億劫で。

(その八) 意外に繊細なのです

美幸の言う「ご相談」とは、つまるところ生徒の進路相談だった。彼女の担当クラス　一年三組の上原直樹。名前に覚えがあるのは芸術科目で音楽を選択していたからだ。少なくとも音楽の授業は、真面目に受けていたと記憶している。特筆すべきことのない、良くも悪くも普通の男子生徒だ。

「その上原がどうかしたのですか？」

返答の代わりに美幸は涼の前にプリントを差し出した。進路希望アンケート。高校入学早々に志望大学を決めろという、なんとも理不尽なプリントだった。とはいえ、学校側もさほどこの回答に期待はしていない。所詮、高校生になって浮かれ気分最高潮の学生の世迷い言だ。ゴールデンウィーク明けに行う三者面談の参考になれば儲けもの。その程度のアンケートだったはずだ。深く受け止める必要はない。

たとえ、希望職種の欄に「ボーカル」と記入されていようと。

「どう思われますか？」

「男子高校生にしては綺麗ですね」

「そうですね」

美幸はにこりとみせずにも同意した。

「しかし字の達筆さはこの際関係ありません。書道ではないので。上原直樹が渡辺先生と似た癖を持っていようがさしたる意味を持たないのです」

なるほど。言われてみれば、字が全体的に固く、几帳面な印象を受ける。自分と同じだ。ああ見えて実はかなり気難しい学生なのだろうか。

「問題は内容です」

「悪魔と書くよりはまともな回答かと」

「茶化さないでください」

美幸はため息をついた。早くも涼に頼んだことを後悔している顔だった。

「担任としては諸手を上げて応援できる進路ではない、ということですよ」

「応援できなくとも、邪魔をしなければそれで良いのでは？ 夢を語るのには勝手です。高校に入ったばかりなのですし、何でもできそうな気になることだってあります。情熱だけで突っ走る、賢くない期間を経て知恵と分別を身に付けるものだとは私は考えますが」

「入学早々の実力試験を白紙で出されてもですか？」

三年も教師をやっていたいれば白紙回答なんて何度かは遭遇する。珍しいことではない。が、厄介なことではあった。特に、学校生活や将来になんらかの不満を抱き始める二、三年生ならまだしも、入学早々というのは前例がない。

「なかなか大胆な生徒ですね」

他人事のように呑気なコメントをすれば、美幸は唇を尖らせた。

「話が進まない判断したのかあえて咎めはしなかった。

「要するに意趣返しなんです。ボーカルの夢を理解してくれない親へのあてつけで」

「なら話は簡単です」

涼は進路希望アンケートを美幸に差し戻した。

「彼の親に報告すれば桜井先生の仕事は終わり」

途端、美幸はまるで異星人を見るかのような眼差しを涼に向けた。我が耳を疑うと言いたいのだろう。目は口ほどにものを言った。

「上原直樹は別に、学校に対して不満を持っているのではないんですよね？ 彼はあくまでも親の無理解を責めたいのであって、桜井先生を困らせたいわけではない。これは親子間で解決すべき問題かと」

「問題を抱えた生徒を導いてこそ、教師だと思いますが？」

「ご立派なことだ。言い訳めいた自分の台詞とは雲泥の差がある。その理想論をご自分一人で成し遂げてくだされば、文句はないのに。」  
「それで渡辺先生にお願いがあるのです」  
ああやっぱりそうなるのね。涼は内心で力無く笑う他なかった。

(その九) 当事者でないとわからないのです

体育準備室を出る頃には涼の気分は最低に落ち込んでいた。さらに深刻なのは特別棟　音楽科の領域に戻った後もその状態が続いたことだった。

三、四限で行われた普通科の音楽の授業ではまあ、何事もないように振る舞えたと思う。伴奏ではややミスタッチが多かったり、諸悪の根源である上原直樹を睨みつけたりしないよう、不自然ではない程度に極力女子側を見て進めたりもしたが問題は無い、はずだ。授業後に、おそらく先日の礼を言いたいのであるう、涼に頭を下げた鬼島統に「わかった何も言うな今日はこれ以上厄介事を持ち込むな頼むから」と一息にまくし立てて早々に追い出したりもしたが、たぶん問題はない、と涼は信じたかった。

昼休みは音楽科準備室で弁当をつつきつつ音楽科主任らと校内演奏会の打ち合わせ。最近、聴衆が減っていることに音楽科教師一同が頭を悩ませている間も、涼の中では放課後に控える面談が重くのしかかり、テンションは下がる一方。

「特に問題なのは校外から訪れる方が減っていることですよね」

「魅力的なエキストラでも呼べればいいのですが……」

「この予算で？」

音楽科教師一同のため息が合わさる。意味合いは全く違うが涼も同じく。

「出身音大のツテか何かで探してみますか？　ちょっと値が張るかもしれませんが……」

「ええ、まあ。当たってはみますが」

「頑張りましょうよ。ドミンゴは無理でも、それなりの人は呼べるかも」

ツテだけで来てくれるような『それなりの音楽家』をダシに人集め。蛭で鯛を釣る方がまだ現実的だ。早々にやる気を失った涼に、

百瀬理恵は微笑みかけた。

「そういえば、どうでした？ 桜井先生の件は」

大変面倒なことになりました、と答えそうになって涼は首を捻った。

「何故そのことを？」

「歌に詳しい先生はいなかったって訊かれたので、つい渡辺先生を」

「百瀬先生ご自身は？」

「私あんまり桜井先生好きじゃないので」

と、悪意の欠片もない笑顔でのたまう理恵は間違いなく大物だった。科は違うけどたしかアンタ桜井先生と同期だったよな。文句を言う気すら起こらない。同期でありながら理恵が声楽専攻で、しかも合唱部の顧問であることすら知らない美幸にも非はある。

「だって部活の話になる度に嫌味言うんですもん」

その気持ちはわからなくもなかった。

交流が無いに等しいので当然だが、音楽科に対して偏見を持つ人は多い。

美幸にしても同じことだった。こともあろうにあの教師は上原直樹との面談会場で個別練習室を指定してきやがったのだ。曰わく「音楽の話をするのだから、それに相応しい場を」なのだが、涼からしてみれば言語道断だった。

個別練習室、別名レッスンルームはピアノが設置された冷暖房完備の個室だ。この学校の特別棟にはそのレッスンルームが計十八ある。そこで、十八の内一つくらい普通科に提供してもいいのではなにか。普段は音楽科が独占しているのだから、という主張ができるのは実情を知らない連中だけだ。

三学年合わせて音楽科生徒数は約百二十人。それに対し、ピアノが使用できる個室は十八しかないのだ。専科にせよ副科にせよピアノは必須科目にもかかわらず、だ。笑ってしまうくらいの待遇だ。

故に、一人の生徒が一日にレッスンルームが使用できる時間は二時間と定められている。数少ない練習室の予約を取りたいがために

朝六時に登校する生徒も珍しくはない。

争奪戦に敗れた生徒、もっと練習がしたい生徒は音楽室で各自好きな場所を陣取って練習。当然ながら皆、自主練習だ。ヴァイオリン専科が優雅に『愛の挨拶』を弾いている傍らで、ピアノ専科が陰鬱な『葬送行進曲』を奏でていることなんてざらにある風景。帰宅してから練習しようにも近所迷惑を考えたら七時、遅くとも八時にはもう楽器の演奏はできなくなる。音を小さくしにくい金管、木管楽器に至っては自宅では練習できない者もいる。隣がどんなにやましかろうと不快な和音を奏でていようと音楽室で練習するしかないのだ。

音楽科生徒からの文句は絶えないが音楽室から楽器の音が絶えることもなかった。不平不満を言いつつも彼らは腹を括って練習に励む。

そんな現状で、だ。入学早々に試験を放棄した普通科学生一人のために、朝六時から並んでようやく予約できたレスンスルームを快く提供してくれる聖母のような学生が果たして存在するのか。少なくとも音楽科にはいなかった。

練習環境が恵まれていると思いつくのは勝手だが、それで音楽科を嫉むのはお門違いだ。安請け合いをした自分の軽率さを涼は恨んだ。

(その十)なので説得には根気を要します

互いの思惑とか生徒のプライベートとか諸々の事情を考慮した結果、放課後の一年三組の教室が、三者面談の会場として選ばれた。運悪くその日は合唱部の選曲を兼ねた部活会議があるので、涼は難色を示したのだが、「上原君の所属している部活は水曜日しか休みじゃないので」の一言で引き下がらざるを得なかった。学校においては生徒が優先だった。

そのこと自体に不満はない。それで教師は給料を貰っているのだから。

(問題は)

涼は資料を手元に引き寄せた。机と椅子の三セットをとりあえず合わせただけの簡易面談場所。美幸が上原直樹を連行してくるまで、涼は完全に待ちぼうけだった。

(なんでそこで音楽料の私が駆り出されるのか、ということだ)

上原直樹の最近の動向は 親から聞いたのだろう、結構詳細に書かれていた。

将来の夢はバンドのボーカル。その為、運動部から帰宅した後は勉強もせずにひたすらギターの練習やら作詞作曲活動に勤しんでいる。当然、成績は落ちるが本人は大学に進学するつもりはないので気にしない。気にしているのは親と教師だけ。

数日前にひと悶着あったようだ。両親に叱られても彼は自分の意思を曲げず、むしろ息子の夢を認めようとしなない親に対して反発を強めた。貧乏でもいい、大変でもいいから自分の思う通りの道を進みたい、らしい。

美幸は大学に通いながらバンド活動することも勧めたようだが、本人は聞く耳持たず。大学なんぞに通っている暇があったら練習して腕を磨かなければチャンスを逃す、とのご立派なお言葉。

ここまでくると交渉の余地はなかった。自分が出る幕でもない

改めて思う。

「お待たせしてすみません」

前黒板側の扉を引いて、美幸が現れる。続くように上原直樹も。いきなり連れて来られたことへの不満をあらわにする様は年相応の子供っぽさを感じさせた。

涼はおざなりに「いいえ」と手を軽く挙げて応じた。向かいに直樹。隣に美幸。かくして奇妙な三者面談は始まった。

自己紹介は無用。互いに知った顔だし、時間が惜しかった。美幸は「専門家としてのご意見、アドバイス」を求めて会わせたようだが、涼の専門は声楽科。クラシック音楽の歌手だ。畑がまるで違う。何を言っても「ロックのことなんて何も知らないくせに」と反論されて終わりだ。

そんな涼の心中も知らずに美幸は直樹本人に確認しつつ、事情を改めて説明した。先ほど待っている間に読んだものと内容は変わらなかった。

「先生だって応援したいとは思ってるのよ」

と、先日「応援できる進路ではない」と涼の前で言い放った口が猫撫で声を出す。

「でもそんなに焦らなくても、いいんじゃないかしら？ せっかく高校に入学したんだから、通って勉強しながら練習をしたって、」

「それじゃあ遅いんですよ」

にべもなく直樹は美幸の提案を突っぱねた。

「学校に通うだけならまだしも、帰ってから勉強なんかしてたら練習なんてできない。プロを目指す人は一日に四時間、五時間も練習してるのに」

「四、五時間？」

美幸は複唱し、確認するように涼を見た。

「音楽科の生徒の練習時間も大体そのくらいですね」

「ですよ？ 本当ならボーカル教室とか専門学校に通いたいくらいなのに」

彼なりに譲歩しているつもりらしい。これでも。

「なんで反対するんですか？ この学校は音楽科だってあるじゃないですか。クラシックは良くてロックは駄目なんですか？」

(その十一) 生半可な覚悟ではいけないということです

オペラを語るならせめて『ニルンベルクのマイスタージンガー』を観てからにしろ。歌手の若者だって、靴を作りながら詩を作る。皮をなめしながら母音と子音を覚え、糸を紡ぎながら韻の踏み方を理解する。ニルンベルグの職人皆がそうやって仕事しながらマイスタージンガー 職匠歌手 を虎視眈々と狙ってるんだその忍耐力と覚悟がお前にあるかこんちくしょう。

あーオペラ観たい。『ニルンベルクのマイスタージンガー』なんて贅沢は言わない。あれ長いし。短いオペラでいい。プラシド<sup>II</sup> ドミンゴならばもつといい。

「 辺先生、渡辺リヨウ先生」

「はい？」

気の抜けた返答をしてしまった涼を、美幸は軽く睨んだ。何のためにあんたを呼んだと思っているんだ。さっさと諭せ。言葉にすればさしずめそんな感じだろう。

(阿呆らしい)

涼は向かいに座る上原直樹を改めて見た。やや長い前髪はコンサートの際に映えるからか。ボーカル(志望)なだけはあって美男子の部類には入るかもしれない。天下と比べればとっつきやすそうな生徒だ。だが全て、この場の第一印象でしかない。

「渡辺先生はどう思いますか？」

と訊ねられても涼には答えようがなかった。顔を見ただけで歌唱力がわかるのなら音楽科の入学試験は半分の時間で終わる。ましてや、この男子生徒の将来性などわかるはずもなかった。涼も美幸も母親も、本人でさえも。

ただ一つだけ、今までのやりとりでわかったことがある。

(仮にこの場で歌えと言ったら)

賭けてもいい、この生徒は絶対に歌わないと涼には確信ができた。

両親の理解、今後の学生生活、専門学校、全て環境の話ばかり。裏を返せば、環境が整っていないなければ歌えないということだ。靴を作りながら詩を作る並みの根性はあるまい。

「少々分野は違いますが、同じ歌を専門とする方として、どうですかね？」

無理だよ諦めて勉学に励め。どう言葉を取り繕っても結論はそこへ行きつく。ニルンベルクが誇る詩人ハンスIIザックスだって彼を育てることはできない。

「正直に申し上げて、彼の才能有無に関しては判断が付きません。聞いたことすらありませんし、仮に聴かせていただけたとしても私では難しいでしょう。オペラならばともかく彼が歌うのはポップスですよ？」

「ポップスじゃなくてロックです」

本人が訂正。違いがよくわからなかったが、涼は「ロック」と言い直した。既に気分はベックメツサーだ。歌試合にてライバルのヴァルターを乏す不公正な判定人。だがベックメツサーとは違い、涼には彼に恨みも何もなかった。ロックでもバンドでも好きにやればいい。

「そもそも今話すべき事は才能有無ではないかと思えます」  
ザックスじゃあるまいし、歌手の才能なんてどうせわからないのだから。

「つまるところ上原君はボーカリストになりたい。そのためには専門的に学びたい。専門学校に行きたい。勉強をするくらいなら歌っていたい、というわけだ」

「まあ……そうですね」

言い方が不服のようだが、直樹は僅かに頷いた。

「なるほど」

涼は額に片手を当てた。もっと良い言葉はないかと考える。適当な。はぐらかすだけでもいい、この場を上手く収めてとっと逃げ出してしまえるような、耳触りのいい言葉。そんなものはいくら探

「しつてもなかつた。  
それで？」

(その十二) 腹を括りましょう。

質問を投げかけておいて、涼は面倒になった。上手くまとめようとした数秒前の自分が馬鹿馬鹿しい。夢見がちな小僧と音楽科の生徒を一緒にするのが間違っている。

額から離れた手で自身の左腕を掴む。座り心地の悪い椅子に座り直す。涼が一連の動作を終えてもボーカリスト志望学生は何も言わなかった。不愉快げに眉根を寄せるだけ。

「君は要望を言った。勉強はしない。専門学校へ行きたい。貧乏でもいいからボーカリストになりたい。それは全て君の希望だ。しかし君の大切な将来を決めるには、もっと具体的に話をしなければならぬと思う」

「具体的？」

「希望を言うだけなら小学生にだってできる。具体的な案を提示して初めて交渉になる。養育費と生活費、専門学校の学費。後から返すにしても親には大金を出させるわけだから、それ相応の努力をする義務がある。君はそのボーカリストになるためにどれだけのことをし、どれだけのものを差し出すつもりなんだ？」

返答は最初から期待していなかったので、涼はたたみかけた。

「私はロックバンドについては良く知らないが、音楽科では毎日発声から初めて練習を重ねている。試験期間中だろうと夏休みだろうと年末年始だろうと練習は続ける。場所がなければ朝の五時から学校にやってきて音楽室で練習する生徒だっている。君は勉強する時間なんてないと言うが、部活動をしたりテレビを観たり友人と遊ぶ時間はあるはずだ。どうしてそれらの時間を減らさないで真っ先に勉強する時間をなくそうとするんだ？ 今の君は学生としてやるべきことは放り投げて、やりたいことをやりたいだけやっているだけだ。遊び呆けているのと変わりない」

「バンドを馬鹿にすんなよ！」

いきり立つ直樹。涼の言葉は彼のプライドをいたく傷つけたようだ。涼は腕を組んだ。

「オーディションを受けたことは？」

直樹は不貞腐れたように口をつぐんだ。呆れた奴だ。一体何を根拠に「今を逃したらボーカルになれなくなる」だの主張していたのか。

しきりに肩を叩く美幸の手を振り払い、涼は質問を重ねた。

「何回受けたんだ？」

「……まだ、受けてねえよ」

「どうして受けない？ 少し都心へ足を運べばオーディションをしている所なんていくらでもある」

「あ、あのー、渡辺せん、」

「まだ、だつて言ってるだろ？ まずちゃんと実力をつけてから」

「でも君がデビューするためにはまず、オーディションに合格するかレコード会社に売り込むしかないんじゃないのか？ ボーカリストの登竜門に一度も行かないで、とりあえず専門学校に行こうなんて軽率過ぎやしないか。視察もしないで未知の世界に飛び込むのは、ただの身投げだ」

そしてまた直樹はだんまりを決め込んだ。涼は呆れて、呆れて

心底馬鹿馬鹿しくなった。こんなことに割いている時間が惜しくなる。決めた。『ニルンベルクのマイスターズシンガー』を観よう。長大だろうと知ったことか。今のこのくだらないにも程がある時間よりも遥かにマシだ。

「君の一生を賭けるものなのに、どうして吟味しようとしなんだ。それでは短慮と言われても当然。親の無理解を責めることはできない。君自身が自分の将来について真面目に考えようとしていないのだから」

涼は席を立った。

「部活の練習がありますので失礼します。参考にならなくてすみません」

捨て台詞よろしく美幸に告げて退室。中央廊下を通って特別棟  
音楽科の領域に入ってしまったえば疲れがどっと押し寄せてきた。  
琴音の言う通りだ。やはり自分は教師に向いていない。

(その十二) 腹を括りましょう。(後書き)

今回でようやく二章は終了です。だから更新&展開にお付き合  
いくださって本当にありがとうございます。

次は長らく放置されている番外編の更新……を考えておりますが、  
諸事情により次回更新は最短でも7月9日以降を予定しております。

## 球技大会（選手選抜）好き嫌いが分かれやすいのです

バスケか、サッカーか。

天下にとつては球技で団体競技という時点で双方同じようなものだった。下手ではないが飛び抜けて上手いわけでもない。どちらでも構わなかった。所詮学校の球技大会。適当に楽しめればそれでいい。

そう考えている男子は意外と多いようで、盛り上がる女子をしり目につつがなく種目決めは終わった。希望を聞いて、人数に偏りがあつたらジャンケンしておしまい。

「ウノだろ、やっぱ」

と、早くも敗戦後の暇潰し方法を提案したのは、真山亮介だった。その一言でサッカー組はポジション決めもそつちのけで、カードゲームの話で盛り上がる。

「おい」

天下は出場者名簿に記入していた手を止めた。

「トランプも忘れんなよ」

「お。優等生君はまさかのポーカー派か？」

「いや、七並べ」

子供向けゲームの名を挙げれば周囲は笑う。追隨するように天下も微笑した。実際、天下は七並べに限らず、トランプゲームは得意だった。それを知っている数少ない同級生　亮介は意地の悪い笑みを浮かべて、こちらを見る。

「屋上の階段でいいよな？」

「だな。あそこなら見つかりにくい」

行事とはいえ仮にも授業。負けたチームは応援と観戦に回り、気分だけでも球技大会に参加し続けるのが、学校側が定めた規定だ。しかし学生側に見れば、自分達が心血を注いだわけでもない、にわかチームの応援するくらいだったら適当に遊んでた方がまだ生

産性があった。少なくとも同じゲームを楽しむことで団結力は強くなるだろう。

「優勝したってなんか貰えるわけでもねえし、かつたりいよな」  
亮介のぼやきに異論を唱える者はいなかった。普段は受験に向けて勉強勉強また勉強。それが球技大会になった途端、掌を返したように「学校行事です。真剣にやりましょう」だ。盛り上がるのは勝手だが、それを他人にまで押し付けるな。

「サッカーの名簿、できた？」

体育委員の香織が催促にやってきた。「かつたりー」だの「めんどくせー」だのとぐだぐだ言っていた男子は口を噤む。バスケ部の部長だけあって香織は球技大会に真面目に取り組んでいる。その彼女の前では無神経な発言を控える程度の分別は、やる気皆無のサッカー組とて持ち合わせていた。

天下は「悪い」と断ってから残り数人分の名を書いて渡した。

「たかが学校行事だけど高校生最後の球技大会なんだから、真面目にやりなさいよ」

先ほどまでの会話を見透かしたような香織の言葉に、一同は肩を竦めた。

(作戦会議) 嫌いな人だっているのです

「コンクールが近いんです」

今週では三人目。例の学校行事が本格的に近づいてから七人目となる『相談』は、音楽科職員室の応接スペースにて行われていた。

「バスケなんかして、突き指でもしたらどうするんですか？ 一日でもピアノ練習をサボったら、遅れを取り戻すのに何週間もかかるっていうのに」

またしても一年十組 音楽科の女子生徒だ。本人は正当で深刻な悩みを打ち明けているつもりなのだろうが、毎年毎年同じ『相談』を受けている教師側としては苦笑を禁じ得ない。それは百瀬理恵も同じらしく、

「じゃあ、サッカーにしたらどう？ キーパー以外なら手を使わないし」

と、にっこり笑顔で適当なアドバイスを授けた。途端、不機嫌になる悩める女子生徒。

「そういう問題じゃないんです  
じゃあどういふ問題なんだ。」

指摘する代わりに涼は布の切れ端に綿を詰めた。自身の机で応接スペースに背を向けてひたすら内職。糸で結ぶ手つきもだいぶ様になってきた。

「ここは音楽科のある学校ですよ？ だったらコンクール前の生徒は免除にするとかの配慮があってもいいと思うんですけど」

「球技大会はちょっと難しいわねえ」

「おかしいですよ。コンクールで結果、残せなくてもいいんですか？ 球技大会なんて三回もあるんですから、一回くらい休んだっていいじゃないですか」

シヨパンコンクールじゃあるまいし、大概の国内コンクールは年に一回だ。高校生の中に三回チャンスがある。球技大会と条件は同

じだ。

いくら説明しても納得はしない。どの生徒でも同じことだ。同様に、教師側の返答も変わることがない。

「私に何を言っても無駄よ。学校全体で決めたことだから、音楽科だけ不参加なんて認められません」

恵理が穏やかにだがはつきりと突っぱねたのと、涼が目を書き終えたのはほぼ同時だった。可愛いとは形容できないが、まあ悪くない出来だ。糸を結んでぶら下げるとますますそれらしくなる。効能は全く期待できないだろうが。

反論を与える暇を与えず、恵理は合唱部のパートリーダーに呼ばれて退室。

取り残される格好となった音楽科一年の女子生徒は何を思ったのか、我関せずを決め込んでいた涼に救いを求めるような視線を寄こしてきた。

「渡辺先生はどう思います。球技大会って、なんか横暴じゃありません？」

「反対賛成以前に、私には馴染みの薄い行事だよ。団体競技はあまり得意じゃないし、担当クラスもないから応援しようと思うチームもない」

少し、突き放し過ぎたか。涼はイスを回して、身体ごと女子生徒の方へ向けた。

「好きか嫌いかを問われたら、好きではないと答えるね。でも、一教師や生徒の好き嫌いで左右されるような行事じゃないと思うよ。」

こんな音楽科準備室の隅っこで不満たらたら言っている暇があるなら、もっと生産性のあることをするべきだ」

「学校に脅迫文を送りつけてやるとか、ですか？」

「個性的なアイデアだね。でもバレた時のリスクが大きい。もっと未成年らしく、穏やかで笑って済ませられる程度の事にしておいた方がいい。いざとなったら体育の成績を捨てるつもりで休めば解決することなのだから」

完成した手のひらサイズの人形を譲る。

「個人的にオススメなのは、これ」

突如渡された『それ』の扱いに困る女子生徒に涼は説明した。

「当日雨が降ればサッカーは卓球に変更だ。本格的にやっているならまだしも、大抵の女子生徒は温泉卓球レベルだ。怪我する可能性は格段に低くなる」

「……で、これを逆さまに吊るすわけですか」

胡乱な眼差しを注いで一言。子供騙しもいいところではあるが、安っぽい造りの人形を見ている内に女子生徒も思うところがあったのだろう。ムキになっていたのが馬鹿馬鹿しいと思っただのかも知れない。何にせよ、先ほどよりも余裕が生まれたのは事実だ。

「変なてるてる坊主」

妙にキリツとした顔つきのてるてる坊主は頼りなく揺れていた。

「ただ、一つ忠告するのなら」

どんなに生意気でも生徒は可愛かった。特に、同じ音楽という分野に足を踏み入れた生徒となれば、説教臭くもなる。

「見学も休むのも君の自由だ。でも、君の無関心を周りに撒き散らすのはやめておいた方がいい。たかが球技大会でもそれなりに真剣に、それなりに楽しくやろうとしている子だっている。それに水を差すような真似はしちゃ駄目だ」

「マナーを守ってことですか？」

「平和な学校生活を送るための知恵だよ。君だってピアノコンクールを馬鹿にされたら腹立たしいし、他の出場者にやる気なかったら頑張っている自分が阿呆らしくなるだろ？」

「いいえ、むしろ嬉しいです」

女子生徒は悪戯っぽく微笑んだ。

「だって、皆やる気がなかったら優勝は私だもの」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5941i/>

---

生徒は対象外です。

2011年8月25日00時12分発行